

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2015年度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001226

国立国語研究所

年報

2015 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2015 年度）



オックスフォード大学人文科学部との学術交流協定
(2015年7月2日：於国語研)

国際シンポジウム "Grammaticalization in
Japanese and Across Languages"
(2015年7月3日～5日：於国語研)



国際シンポジウム "International Conference on
Phonetics and Phonology (ICPP 2015)"
(2015年9月25日～27日：於慶應義塾大学)



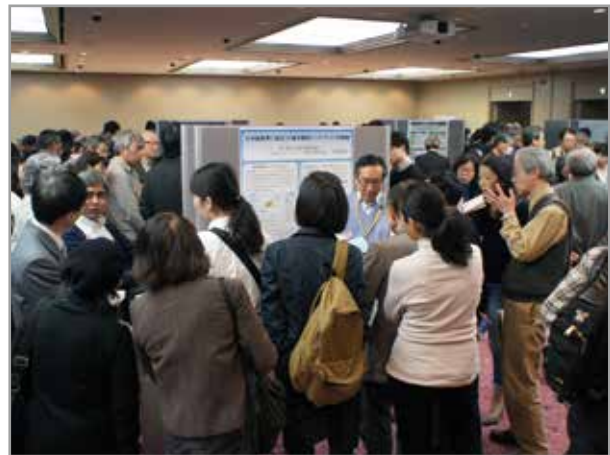
国際シンポジウム
「現場を支える日本語教育研究—学ぶ・教える・評価する—」
(2016年1月23日：於国語研)



人間文化研究機構 第5回日本研究功労賞
 受賞記念コロキウム（第64回 NINJAL コロキウム）
 （2015年12月8日：於国語研）



コーパス合同シンポジウム
 「正しい日本語」ってなに？
 —コーパスに見る日本語のバリエーション—
 （2015年9月3日：於国語研）



第9回 NINJAL フォーラム
 「ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」
 （2016年3月5日：於一橋大学一橋講堂）



「ニホンゴ探検 2015 —1 日研究员になろう！」
(2015年7月18日：於国語研)



「平成 27 年度 子ども霞が関見学デー」
(2015年7月29日～30日：於旧文部省庁舎)



「大学共同利用機関シンポジウム 2015」
(2015年11月29日：於アキバ・スクエア)



国立国語研究所 航空写真 (2015年10月撮影)



国立国語研究所周辺 (2015年10月撮影・手前側が北)

目 次

2015 年度年報の発刊にあたって	3
I. 概要	5
1. 国立国語研究所のめざすもの	6
2. 組織	8
(1) 組織構成図	8
(2) 運営組織	9
運営会議	9
外部評価委員会	9
所内委員会組織	10
(3) 構成員	11
研究教育職員・特任研究員	11
客員教員	12
名誉教授	13
プロジェクト PD フェロー	13
外来研究員	13
II. 共同研究と共同利用	15
1. 国語研の共同研究プロジェクト	16
2. 人間文化研究機構の連携研究等	33
3. 外部資金による研究	35
4. 刊行物	37
『国語研プロジェクトレビュー』	37
『国立国語研究所論集』	40
5. 2015 年度公開中のコーパス・データベース	41
6. 研究成果の発信と普及	45
A. 国際シンポジウム	45
B. 研究系の合同発表会	56
C. プロジェクトの発表会	61
D. NINJAL コロキウム	68
E. NINJAL サロン	69
F. その他	70
7. センター・研究図書室の活動	71
研究情報資料センター	71
コーパス開発センター	71
研究図書室	72
III. 国際的研究協力と社会貢献	73
1. 国際的研究協力	74
オックスフォード大学との提携	74
台湾・中央研究院語言學研究所との提携	74
北京日本学研究中心との提携	74

国際シンポジウム・国際会議の開催	74
日本語研究英文ハンドブック刊行計画	74
海外の研究者の招聘	75
2. 社会連携	76
消滅危機方言の調査・保存・分析	76
日本語コーパスの拡充	76
多文化共生社会における日本語教育研究	76
地方自治体との連携	76
訪問者の受入等	76
学会等の後援	77
一般向けイベント	77
児童・生徒向けイベント	79
3. 大学院教育と若手研究者育成	80
(1) 連携大学院	80
(2) 特別共同利用研究員制度	80
(3) NINJAL チュートリアル	80
(4) 優れたポストドクターの登用	81
IV. 教員の研究活動と成果	83
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 2015 年度の研究成果の概要, 研究業績 (著書・編書, 論文・ブックチャプター, データベース類, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 学会等の企画運営, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
V. 資料	169
1. 運営会議	170
2015 年度の開催状況	170
運営会議の下に置かれる専門委員会	171
(1) 所長候補者選考委員会	171
(2) 人事委員会	172
(3) 名誉教授候補者選考委員会	172
2. 評価体制	172
自己点検・評価委員会	173
外部評価委員会	173
共同研究プロジェクトの評価	174
3. 広報	174
4. 所長賞	174
5. 研究教育職員の異動	175
VI. 外部評価報告書	177
平成 27 年度業務の実績に関する外部評価報告書	179
1. 評価結果報告書	183
平成 27 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果	184
平成 27 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	219
第二期中期目標期間 (最終年度) の評価を終えて	230
2. 資料	231

2015 年度年報の発刊にあたって

1948年に創設された国立国語研究所は、独立行政法人整備合理化計画により、第1期中期目標・中期計画期間の最終年度途中（2009年10月1日）に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として再発足しました。それから6年半を経て、第2期中期目標・中期計画期間を無事乗り切ることができました。第2期最終年度の活動と成果をまとめた『国立国語研究所年報2015』をここに発行することは、新研究所の設置準備から実際の運営にまで携わった者として大きな喜びと感じています。

国立国語研究所（略称「国語研」）は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として国内外の大学・研究機関との協働により広範な共同研究プロジェクトを実施し、言語研究の観点から人間文化について理解と洞察を深めることを研究目的としています。研究所の名称は創設時から「国語」という名詞を用いていますが、大学共同利用機関になったときに英語名称を National Institute for Japanese Language and Linguistics（すなわち、日本語と言語学の国立研究所）と改めました。「国語」と“Japanese language”を併用することにより、本研究所の研究範囲を的確に表明しようとしています。すなわち、「国語」は日本社会におけるコミュニケーションの手段としての研究軸を、“Japanese language”は生物の中でも人類だけに備わった高度な資質である言語としての研究軸をそれぞれ反映し、前者はいわば「ウチ（国民）」から日本語を見る観点、後者は「ソト（世界）」から見る観点と言い換えることもできます。これら2つの観点を融合させ、日本語という言語の全体像を多角的・総合的に解明することこそが本研究所の特色です。このような複合的観点をとることにより初めて、大学共同利用機関にふさわしい、幅広い学術的・学際的パースペクティブを提供することができ、同時に、従来は日本国内に閉じこもりがちであった国語研究と世界の言語研究を結ぶ国際研究拠点としての機能を果たすことが可能になりました。

ウチの観点とソトの観点を融合させた本研究所の研究は多岐に亘りますが、なかでも、(1) コーパスやデータベースの構築・活用による日本語言語資源の将来への継承、(2) 日本語研究（および日本語そのもの）の国際的普及 [諸外国における日本語教育への貢献を含む]、(3) 国内の消滅危機言語・方言の保存・活性化による地方の活性化という3本柱が本研究所の強みとなります。この年報では、これら3本柱を中心として、2015年度における共同利用・共同研究の多様な成果をご報告いたします。大学研究者、一般社会、学術行政、産業界等、多方面のみなさまにこの年報をご覧いただき、本研究所への幅広いご支援をお願いする次第です。

2016年11月
国立国語研究所長
影山太郎



概 要

1 国立国語研究所のめざすもの

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が1948年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国語研は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国語研は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては研究所の英語名称に“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

とりわけ、第2期中期目標期間においては、「日本語研究の国際化」と「社会連携・社会貢献」を大きな目標として種々の活動を展開している。日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国語研の役割である。

2015年度の活動の概略

国語研では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて、各研究系・センターで研究テーマを定め、数々の共同研究プロジェクトを実施した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究中心、台湾・中央研究院語言學研究所との協定に加え、新たにオックスフォード大学人文科学部との学術交流協定を締結した。また、ドイツ・De Gruyter Mouton社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）については、3巻（心理言語学、レキシコン・語形成、応用言語学）を刊行し、既刊は5巻となった。

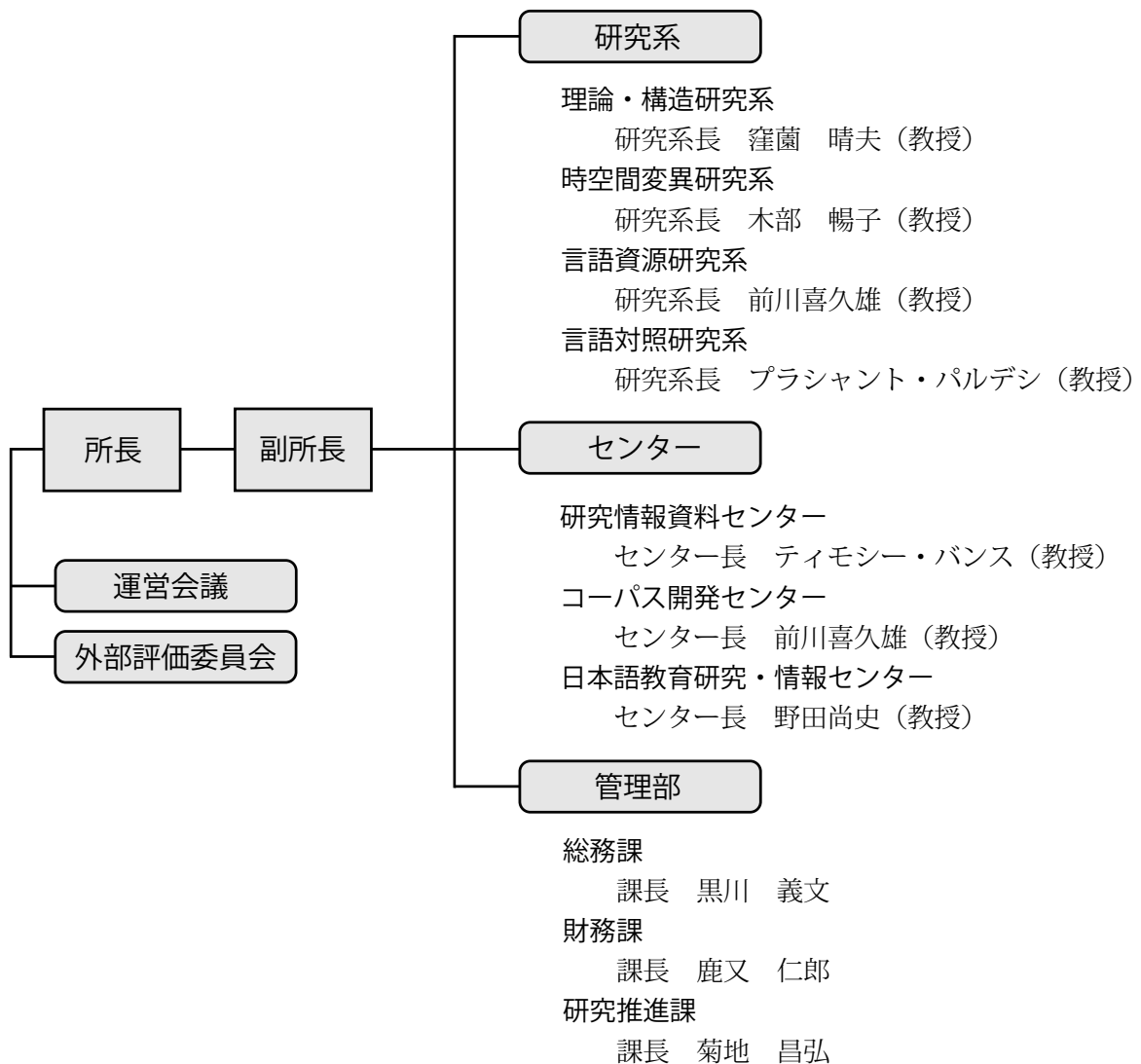
学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであるから、多くの成果物を電子化し、Webサイト上で無償提供している。専門家向けに『国語研プロジェクトレビュー』、『国立国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『NINJAL フォーラムシリーズ』などの冊子、研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語歴史コーパス』、『アイヌ語口承文芸コーパス —音声・グロスつき—』などのコーパス群、あるいは日本語教育者・学習者向けには『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』、『基本動詞ハンドブック』、『複合動詞レキシコン（国際版）』などのデータベース類と、多岐にわたる。さらに対象者別に、国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検など、種類の異なるイベントを多数開催した。特にNINJAL フォーラムについては、「ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」と銘打ち、大学共同利用機関となってからの6年間の歩みと研究成果を総合的に発信した。

活動・成果の詳細は各項目をご覧ください。

(1) 組織構成図

2015年度

所長 影山 太郎
 副所長 前川喜久雄
 木部 暢子
 管理部長 渡部 博靖



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

梶 茂樹 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

工藤真由美 大阪大学特任教授

斎藤 衛 南山大学人文学部教授

砂川有里子 筑波大学名誉教授

月本 雅幸 東京大学大学院人文社会系研究科教授

仁田 義雄 関西外国語大学外国語学部教授

日比谷潤子 国際基督教大学学長 / 教授

山本 誠一 同志社大学大学院理工学研究科博士後期課程教授

任期：2013年10月1日～2015年9月30日（2年間）

伊東 祐郎 東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授 / 留学生日本語教育センター長

上野 善道 東京大学名誉教授

呉人 恵 富山大学人文学部教授

近藤 泰弘 青山学院大学文学部教授

田窪 行則 京都大学大学院文学研究科教授

樋口 知之 統計数理研究所長 / 情報・システム研究機構理事

益岡 隆志 神戸市外国語大学総合文化コース教授

馬塚れい子 理化学研究所脳科学総合研究センター シニア・チームリーダー

任期：2015年10月1日～2017年9月30日（2年間）

(内部委員)

木部 暢子 副所長 / 時空間変異研究系長 / 教授

窪田 晴夫 理論・構造研究系長 / 教授

迫田久美子 日本語教育研究・情報センター教授（～2016年3月31日）

ティモシー・バンス 理論・構造研究系教授 / 研究情報資料センター長

野田 尚史 日本語教育研究・情報センター長 / 教授（2015年4月1日～）

プラシャント・パルデシ 言語対照研究系長 / 教授

前川喜久雄 副所長 / 言語資源研究系長 / 教授 / コーパス開発センター長

任期：2013年10月1日～2015年9月30日（2年間）

任期：2015年10月1日～2017年9月30日（2年間）

外部評価委員会

樺山 紘一 印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長

林 史典 聖徳大学言語文化研究所長 / 教授，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長

仁科喜久子 東京工業大学名誉教授

門倉 正美 横浜国立大学名誉教授

後藤 斉 東北大学大学院文学研究科教授

渋谷 勝己 大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員

早津恵美子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院長 / 教授

峰岸 真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

任期：2014年10月1日～2016年9月30日（2年間）

所内委員会組織

連絡調整会議（所長，副所長，研究系長，センター長，専任教授，管理部長，専門委員会委員長）
連絡調整会議のもとに，各種専門委員会を設置

<管理運営関係>

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会
- 将来計画委員会

<学術関係>

- プロジェクトレビュー編集委員会
- 論集編集委員会
- 研究図書室運営委員会
 - ・選書部会

<発信・普及関係>

- 広報委員会
- 研究情報資料センター運営委員会
- NINJAL プログラム委員会
 - ・NINJAL 国際シンポジウム
 - ・NINJAL コロキウム
 - ・NINJAL サロン
 - ・NINJAL チュートリアル
 - ・NINJAL フォーラム
 - ・人間文化研究機構公開シンポジウム
 - ・大学共同利用機関協議会関連事業

- 安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所長

影山 太郎 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論, 言語類型論

研究教育職員・特任研究員

○理論・構造研究系

教授

窪蘭 晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

ティモシー・バンス (Timothy Vance) 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

横山 詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学

准教授

小磯 花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

高田 智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

助教

三井 はるみ 日本語学, 社会言語学, 方言文法

特任助教

藤本 灯 日本語学, 文献学, 古辞書

船越 健志 言語学, 統語論, 生成文法

○時空間変異研究系

教授

木部 暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

相澤 正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

大西 拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学

准教授

朝日 祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学

井上 文子 方言学, 社会言語学

熊谷 康雄 言語学, 日本語学

新野 直哉 言語学, 日本語学

○言語資源研究系

教授

前川 喜久雄 音声学, 言語資源学

山崎 誠 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

准教授

浅原 正幸 自然言語処理

小木曾 智信 日本語学, 自然言語処理

柏野 和佳子 日本語学

丸山 岳彦 言語学, 日本語学, コーパス日本語学

山口 昌也 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

○言語対照研究系

教授

ブラシャント・パルデシ (Prashant Pardeshi) 言語学, 言語類型論, 対照言語学

ジョン・ホイットマン (John Whitman) 言語学, 歴史比較言語学, 言語類型論, 東洋言語学

特任准教授

アンナ・ブガエワ (Anna Bugaeva) 言語学, アイヌ語学, 言語類型論

○研究情報資料センター

教授 (兼任)

ティモシー・バンス (Timothy Vance)

特任助教

石本 祐一 音響音声学, 音声工学

籠宮 隆之 音声科学

○コーパス開発センター

教授 (兼任)

前川 喜久雄

○日本語教育研究・情報センター

教授

野田 尚史 日本語学, 日本語教育学

石黒 圭 日本語学, 日本語教育学

迫田 久美子 日本語教育学, 第二言語習得研究, 誤用分析, 日本語教授法

准教授

野山 広 応用言語学, 日本語教育学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育

研究員

福永 由佳 日本語教育学, 社会言語学, 識字, 個人・社会の多言語性

客員教員 (2015 年度在籍者)

客員教授

[理論・構造研究系]

伊藤 順子 カリフォルニア大学教授

岸本 秀樹 神戸大学教授

中山 峰治 オハイオ州立大学教授

宮川 繁 東京大学特任教授

[時空間変異研究系]

井上 史雄 東京外国語大学名誉教授

金水 敏 大阪大学教授

田窪 行則 京都大学教授

[言語資源研究系]

田中 牧郎 明治大学教授

伝 康晴 千葉大学教授

[言語対照研究系]

柴谷 方良 ライス大学教授
ハイコ・ナロック (Heiko Narrog) 東北大学教授
ピーター・フック (Peter Hook) ミシガン大学名誉教授
堀江 薫 名古屋大学教授
松本 曜 神戸大学教授

[日本語教育研究・情報センター]

白井 恭弘 ケース・ウェスタン・リザーブ大学教授
田中 真理 名古屋外国語大学教授
鳥飼 玖美子 順天堂大学特任教授
南 雅彦 サンフランシスコ州立大学教授
砂川 有里子 筑波大学名誉教授

客員准教授

[時空間変異研究系]

下地 理則 九州大学准教授

名誉教授

角田 太作 2012.4.1 称号授与

プロジェクトPDフェロー (2015年度在籍者)

黄 賢暲 理論・構造研究系
松井 真雪 理論・構造研究系
乙武 香里 時空間変異研究系
坂井 美日 時空間変異研究系
今村 泰也 言語対照研究系
長崎 郁 言語対照研究系
加藤 祥 コーパス開発センター
中北 美千子 日本語教育研究・情報センター

外来研究員

津田 智史 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員: 木部 暢子
「新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究」(2013.4-2015.9)
青井 隼人 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員: 木部 暢子
「関係性に着目した宮古語音韻構造の探求」(2014.4-2017.3)
尹 鎬淑 (サイバー韓国外国語大学校 (韓国) 教授) 受入教員: 迫田 久美子
「e-learning 教育における日本語の習得研究」(2014.9-2015.8)
大野 剛 (アルバータ大学 (カナダ) 教授) 受入教員: ティモシー・バンス
「日常会話における定型表現の体系的研究」(2014.9-2015.8)
南部 智史 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員: ジョン・ホイットマン
「言語変異に関する実験およびコーパスに基づく研究」(2015.4-2015.7)
島田 泰子 (二松學舎大学教授) 受入教員: 新野 直哉
「近現代日本語における言語変化の歴史的意義に関する研究」(2015.4-2016.3)

- Clemens Poppe (日本学術振興会外国人特別研究員) 受入教員：窪蘭 晴夫
「言語類型論から見た日本語諸方言におけるトーンと母音の相互作用」(2015.4-2017.3)
- 三樹 陽介 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員：木部 暢子
「消滅の危機に瀕する八丈語調査・記録と談話資料の作成・公開」(2015.4-2017.3)
- Armin Mester (カリフォルニア大学サンタクルズ校 (アメリカ) 教授) 受入教員：窪蘭 晴夫
「日本語外来語の促音化」(2015.6-2016.3)
- 王 麗莉 (長春師範大学 (中国) 准教授) 受入教員：石黒 圭
「逆説を表わす複文についての日中対照研究」(2015.8-2016.2)
- 鶴谷 千春 (グリフィス大学 (オーストラリア) 准教授) 受入教員：窪蘭 晴夫
「丁寧表現における日本語プロソディの研究 —より効率的なコミュニケーションのために—」
(2015.9-2016.2)
- Stephan Wright Horn (オックスフォード大学 (イギリス)) 受入教員：小木曾 智信
「近世以前の日本語の通時コーパスの統語情報付加：言語学研究の実用化に向けて」(2015.9-
2016.8)
- 吴 孟根格日乐 (赤峰学院外語教学部 (中国) 准教授) 受入教員：木部 暢子
「モンゴル語オルドス方言の変化・変遷とその趨勢についての調査研究」(2016.3-2016.8)
- Nguyen Bich Ha Thi (貿易大学日本語学部 (ベトナム) 言語学科長) 受入教員：柏野 和佳子
「論文形式文書作成のための日本語教育 —ベトナム人の文化的特性による語彙の選択と構
文—」(2016.3-2016.8)



共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構の連携研究等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として(4) 研究所からの刊行物、(5) 2015年度公開中の各種コーパス・データベース、および(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催しを掲げる。

1 国語研の共同研究プロジェクト

第2期中期計画における国語研全体の研究課題は「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」である。これを達成するため、4研究系と日本語教育研究・情報センターは、それぞれの総合研究テーマを定め、共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究系・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。

研究課題「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」

各研究系・センターの総合研究テーマ

理論・構造研究系	日本語レキシコンの総合的研究
時空間変異研究系	日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化
言語資源研究系	現代語および歴史コーパスの構築と応用
言語対照研究系	世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明
日本語教育研究・情報センター	日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

共同研究プロジェクトと主要な成果

共同研究プロジェクトとして、基幹型(16件)を実施した。

【基幹型】 16 件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。4 研究系と日本語教育研究・情報センターの専任教授および客員教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	所長	影山 太郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトは、語彙の仕組みを、辞書における静的な項目列挙としてではなく、意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え、日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため、理論的分析だけでなく、外国語との比較、心理実験、歴史的变化、方言、コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には、ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れるような現象として、(1) 動詞の自他交替と項の変化、(2) 動詞+動詞型の複合動詞の意味的・統語的特性、(3) 事象表現と属性表現の対比における語彙と文法の係わり、(4) 複雑な語における意味と形のミスマッチや統語構造における語形成など形態論と意味論・統語論の相互関係、という4つの事項に着目し、これらを解明することで、日本語から世界に発信できるような一般理論を開発する。</p> <p>・国語研の事業として実施するドイツ・De Gruyter Mouton 社の Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの一卷として、共同研究メンバーを主要な執筆者とする Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) <i>Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation</i> を企画し、同社と出版契約を結んだ(2012年4月)。この書物を2013年度以降に出版する。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <p>本年度は次のとおり成果の取りまとめと出版を行った。</p> <p>[共同研究, 成果発信, 国際化]</p> <p>①日本語語彙論に関する世界初の包括的論文集として, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) <i>Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation</i> (全19章, 706頁) を2016年1月に De Gruyter Mouton 社から出版した。</p> <p>②NINJAL 国際シンポジウム(2012)の成果をまとめた論文集として, Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) <i>Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond</i> (496頁) を執筆・編集し, 校正を終えた。De Gruyter Mouton 社から2016年7月に刊行予定。</p> <p>③NINJAL 国際シンポジウム(2013)の成果をまとめた論文集(Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) <i>Verb-Verb Complex in Asian Languages</i>) の出版契約を Oxford University Press と結び, 執筆・編集を進めた。</p> <p>④世界諸言語の動詞結合価に関するマックスプランク進化人類学研究所との連携研究の成果として, 論文 Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sakai “Valency classes in Japanese” を</p>			

Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) Valency Classes in the World's Languages, Vol. 1, pp.765-805 (Berlin: De Gruyter Mouton, 2015.9.) で刊行した。

⑤若手研究者育成のため、影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 7』において共同研究者の執筆による「日本語レキシコン入門Ⅱ」の特集を組み、出版した（ひつじ書房、2016年3月）。

〔共同利用〕

・[オンラインデータベース]昨年度に完成・更新したオンライン辞書「複合動詞レキシコン（国際版）」について、国内外の研究者（教育関係、情報学関係）からの要望を承け、本データベースを用いた共同利用を促進するため、オリジナルデータ（エクセルファイル）をWebサイトからダウンロードできるようにした（2015年11月）。

参加機関名	茨城大学，愛媛大学，岡山大学，九州大学，群馬大学，慶応義塾大学，甲南大学，神戸市外国語大学，神戸大学，大阪大学，筑波大学，東京大学，東北大学，同志社大学，富山大学，名古屋大学，北海道大学，北京外国語大学，インディアナ大学，ハーバード大学，ウォーリック大学
共同研究員数	31名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコンの音韻特性	理論・構造 研究系教授	窪 蘭 晴夫	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し、世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究者として参画してもらうことにより、通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で、時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し、また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが、本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより、日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを、音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域（音声学、音韻論、国語史、言語獲得、日本語教育）の専門家を集め共同研究を推進する。</p> <p>アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより、(i) 日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究、類型論研究にどのような知見を与えるか、(ii) 逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <p>1. 共同研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本音声学会第29回大会(2015年10月4日)において日本語アクセントに関するシンポジウム「日本語の三型アクセント —原理と歴史—」とワークショップ「三型アクセント研究の現在」を共同研究員の協力を得て企画した(参加者数60名余)。 ・2015年11月27日に名古屋大学にて研究成果発表会を開催し、研究発表3件(うち2件は若手研究者)と講演を企画した(参加者数27名)。 			

・共同研究および国際シンポジウムの成果を下記英文論文集にまとめ、編集作業を行った。

2. 国際化

- ・促音に関する国際ワークショップ GemCon2015 (2015年8月12日, イギリス・グラスゴー) を世界最大の音声学国際会議 (ICPhS2015) のサテライトワークショップとして企画した (参加者 18 か国, 76 名; 発表者 11 か国, 23 名)。
- ・国際シンポジウム ICPP2015 (International Conference on Phonetics and Phonology, 2015.9.25-27) を慶応義塾大学言語文化研究所と共催し, 国内外から 90 名 (3 日間でのべ 185 名) の参加を得た。
- ・下記英文論文集の編集作業を進めた。

3. 成果発信

- ・アクセント関係の英文論文集 *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton) の編集を進め, 合計 13 編の論文について再査読と英文校閲を行った (2016 年前半に入稿, 2017 年度初頭に刊行の予定)。
- ・促音関係の英文論文集 *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press) の編集を進め, 合計 14 編の論文について再査読と英文校閲を行った (2016 年 4 月に入稿, 2017 年 2 月に刊行予定)。
- ・2014 年に招致した実験音韻論国際会議 (LabPhon14) の成果を集めた論文集として *Laboratory Phonology* 特集号 (Special issue: Corpus-based approaches to the phonological analysis of speech, Guest editors: Haruo Kubozono, Kikuo Maekawa and Timothy J. Vance) の編集作業を行い, 2015 年 10 月に刊行した。

参加機関名	愛知学院大学, 青山学院大学, 大妻女子大学, 大阪大学, 大阪保健医療大学, 金沢大学, 京都産業大学, 京都大学, 九州大学, 熊本県立大学, 慶応義塾大学, 神戸市外国語大学, 神戸大学, 上智大学, 筑波大学, 東京大学, 同志社大学, 長崎外国語大学, 日本女子大学, 一橋大学, 広島大学, 福岡大学, 文京学院大学, 北海道大学, 北星学園大学, 松山大学, 室蘭工業大学, 法政大学, 立命館大学, 早稲田大学, 情報通信研究機構, 理化学研究所, カリフォルニア大学, 中央大学高校
共同研究員数	44 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコン 一連濁事典の編纂	理論・構造 研究系教授	Timothy J.VANCE	2010.11-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトの最終目的は, 連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は, (1) 連濁の由来と史的变化, (2) ライマンの法則, (3) 右枝条件, (4) 連濁と形態・意味構造, (5) 連濁と語彙層, (6) 他の音韻交替と連濁の相互作用, (7) アクセントと連濁の相互作用, (8) 連濁と表記法, (9) 連濁に関する心理言語学研究, (10) 方言の連濁, (11) 連濁と日本語学習, (12) 連濁研究史, 等々である。事典には, 包括的な参考文献一覧も含める。</p> <p>本共同研究は, 定期的で開催する研究発表会と国際シンポジウムを中心に推進する。研究発表の内容をそのまま事典に取り入れるわけではなく, スタイルの統一性を保証するために, プロジェク</p>			

トリーダーは各寄稿者と協力する。なるべく多くの言語学者に本プロジェクトの成果が利用できるように、日本語版と英語版に分割し、別々に出版する。ドイツの Mouton 社から英語版を出版する予備的合意書を取った。「Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds」と仮称されている。日本語版は後に出版する。

連濁研究に役立つ2つの複合語データベース（現代語および上代語）も作成し、公開する。

《2015年度の主要な成果》

- ・リーダーやプロジェクト共同研究員が執筆した、連濁に関する査読付き論文4本が2015年度に出版された。
- ・リーダーやプロジェクト共同研究員が、連濁に関する口頭発表2件およびポスター発表1件を2015年度に行った。
- ・ボルドー大学で開催されたフランス音韻論ネットワーク（French Phonology Network）の第13回年次大会の翌日（2015年7月2日）に「連濁研究ハンドブックの編纂」をテーマに特別ワークショップを行った。参加人数は、プロジェクトのリーダーと共同研究員4人を含めて25人であった。

参加機関名	大同大学, 千葉大学, 山形大学, 名古屋大学, 神戸市外国語大学, 山口大学, 金沢大学, 文京学院大学, 神田外国語大学, 国際教養大学, 千葉大学, 会津大学, 京都外国語大学, 慶応義塾大学, 愛知淑徳大学, 常葉大学, カリフォルニア大学, シェフィールド大学, ボルドー第3大学, モンタナ大学, マカオ大学
共同研究員数	26名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	理論・構造 研究系教授	横山 詔一	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語の文字表記について、文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には、(1) 新聞・雑誌・書籍、市販辞書、文字コード規格、各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること、(2) 文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること、の双方向のアプローチが必須である。そこでは、文字政策、歴史的背景、出現頻度、接触意識、なじみ、好み、文字使用など、さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば、人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって、その文字に対する「接触意識」が生じ、それが「なじみ」、ひいては「好み」を形成し、社会的な「出現頻度」に影響を与えると考えられる。さらに、それらの要素以外に、未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか、文字の規範意識によっても文字生活が影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は、日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか、日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また、言語行動・意識のデータを解析するための理論等について、統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り、言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

このような学術的挑戦は、文字論だけではなく、社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をも

たらし、既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

《2015年度の主要な成果》

〈共同研究の国際的な推進〉

1. 国際文字コードの標準化に関する国際会議において、変体仮名の国際文字コード化をプロジェクトの成果に基づいて提案し、受理された（規格名「ISO/IEC 10646」：高田ほか，2015）。
2. 米国，カナダのほか中央アジアのキルギス国立総合大学，台湾の国立台湾大学，韓国の大学とのネットワークを維持した（ガリーナ・横山ほか，2015）。
3. 海外の大学（国立台湾大学）においてNINJALセミナーを実施し，プロジェクトの成果を海外の大学院生に教授した（高田・阿部・横山，2015）。

〈共同研究の学際的な推進〉

1. 高田が行った共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」（漢字・漢文に関するもの），人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」（仮名・仮名文に関するもの），国際文字コード標準化運動（コンピュータの文字に関するもの）の成果を踏まえ，文献資料の共同利用を促進させるため，原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発をおこなった。このシステムは，米国議会図書館本『源氏物語』写本のほか，研究所貴重書の公開にも利用されている。
2. 学術交換用変体仮名のデータベースを構築・公開した（高田ほか，2015）。
<http://kana.ninjal.ac.jp/>
3. シンポジウム「[字体と漢字情報]—HNG 公開 10 周年記念—」を 11 月に開催し，日本語学・文献学だけでなく，歴史学・考古学・仏教学・心理学・情報学・日本語教育学など，分野横断的に字体と漢字情報について議論する場を提供した（高田・横山，2015）。

参加機関名	愛知教育大学, 愛媛大学, 帝塚山大学, 法政大学, 東京大学, 立命館大学, 富山大学, 専修大学, 大阪大学, 名古屋大学, 名古屋外国語大学, 統計数理研究所, 岐阜工業高等専門学校, 国際交流基金日本語国際センター, キルギス国立民族大学, 国立台湾大学, ペンシルバニア大学, ヴィクトリア大学, 韓国聖潔大学校
共同研究員数	27 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	時空間変異 研究系教授	木部 暢子	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年2月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性

の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行う。

《2015年度の主要な成果》

・調査

島根県隠岐の島方言を実施した（2015.11.8-11）。参加者 18 人，話者 21 人。

・研究発表会

①「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」を開催した（2015.8.21-23，国立国語研究所）。科研費基盤研究（A）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語」，基盤研究（C）「日本語の分裂自動詞性」と共催。参加者：21日 55人（若手 15人），22日 59人（若手 13人），23日 44人（若手 9人）。

②合同シンポジウム「『正しい日本語』ってなに？ —コーパスに見る日本語のバリエーション—」を開催した（2015.9.3，国立国語研究所）。国立国語研究所共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」，「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」，「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉研究の革新」，科研費基盤研究（A）「海外連携による日本語学習者コーパスの構築」，基盤研究（B）「方言話し言葉コーパスの構築」と共催。参加者約 90人。

・報告書

①『鹿児島県与論島方言・沖永良部島方言調査報告書』（国立国語研究所，2016.3）

②『島根県出雲方言調査報告書』（国立国語研究所，2016.3）

・社会貢献

①「日本の消滅危機言語・方言サミット（沖縄）」（2015.9.18，沖縄県立博物館・美術館講堂，主催：文化庁，沖縄県，琉球大学，後援：国立国語研究所）において，共同研究員の狩俣繁久（琉球大学）が全体の解説を，プロジェクト代表者の木部暢子が「危機度報告 八丈・岩手・甕島」（木部暢子）を発表した。参加者 110人。

②第2回地球研・国語研合同研究会「『方言』と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学 —「ことば」と「ことば」の接点—」（2015.7.30）を開催した。

・音声データの整備・公開

①「日本の危機言語・方言のデータ」（鹿児島県喜界島方言，鹿児島県与論島方言，東京都八丈島方言の基礎語彙データ（音声付））を整備し，研究所ホームページで公開した。

②「方言コーパス試作版」（47地点（各都道府県1地点）の談話テキストによるコーパス）を整備し，内部公開を行った。（木部）

参加機関名	岡山大学，金沢大学，九州大学，京都大学，首都大学東京，千葉大学，一橋大学，広島大学，別府大学，日本女子大学，琉球大学，東北大学，関西大学，大分大学，広島経済大学，安田女子大学，熊本県立大学，北星学園大学，オークランド大学，フランス国立科学研究所
共同研究員数	38名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	時空間変異 研究系教授	相澤 正夫	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>【目的】 20世紀前半から21世紀初頭(昭和戦前期から現在まで)の「現代日本語」,特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して,そこに見られる変異の実態,変化の方向性,すなわち「動態」を,従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明することを目的とする。あわせて,現代日本語の的確な動態把握に基づき,言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。</p> <p>【特色】 時空間変異研究系の基幹プロジェクトの一つとして,「時間的変異」と「社会的変異(空間的変異も含む)」の双方の観点からサブテーマを設定し,変化して止まない現代日本語の研究に,従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓することを最終目標として進める。そのため,近接領域で類似の言語現象を研究していながら,従来は一堂に会して議論をする機会の少なかった国語学,日本語学,言語学,社会言語学など様々な背景を持つ所内外の研究者に,情報交換や相互啓発のための「場」を提供する。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <p>共同研究の最終年次にあたり,次の(1)(2)に示す通り研究成果の取りまとめを行うとともに,(3)のような今後の研究にもつながっていく調査を企画・実施した。</p> <p>(1)「SP 盤貴重音源資料(音声+文字化テキスト)」をプロジェクト内で共有し,通算で第6回目の研究会を開催(2015年5月16日)した結果,論文集への執筆予定者12名全員の研究発表が完了した。</p> <p>(2)成果物として,相澤正夫・金澤裕之(編)『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』(全13章,299頁)を,笠間書院から2016年3月に刊行した。</p> <p>(3)今後の経年調査を見据えた「言語変化の先端現象」を捉える調査2件(①全国方言意識Web調査,②北海道富良野市・函館市面接調査)を委託により実施し,公開共同研究発表会(2016年1月24日)で中間報告をした。</p> <p>関連して,次の(4)(5)(6)に示すような成果の発信も積極的に行った。</p> <p>(4)「SP 盤貴重音源」の文字化テキストに基づき,金澤裕之・相澤正夫(編)『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料—』(全452頁)を,日外アソシエーツから2015年4月に刊行し,2015年5月末付けで日本図書館協会の選定図書に選ばれた。</p> <p>(5)「SP 盤貴重音源」の文字化テキストに基づき,金澤裕之・田中牧郎・相澤正夫(編)『アカデミックリソースシリーズ貴重音源コレクション岡田コレクションI』(全545頁)を,想隆社から2015年6月にオンデマンド版として刊行した。</p> <p>(6)「SP 盤貴重音源」の文字化テキストに基づき,「想隆社アカデミックリソースシリーズ貴重音源コレクション岡田コレクションI」(全165作品,18.5時間分のSPレコードデジタル音源+文字化テキスト)を,想隆社から2015年5月にWeb配信(有料)を開始した。</p> <p>2016年1月24日,「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」研究発表会を開催した。</p>			
参加機関名	日本大学,大阪大学,神戸松蔭女子学院大学,ノートルダム清心女子大学,横浜国立大学,立命館大学,東京外国語大学,明治大学,愛知教育大学,広島大学,千葉大学,愛知学院大学,統計数理研究所,NHK放送文化研究所,ユタ大学		
共同研究員数	19名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
方言の形成過程解明のための全国方言調査	時空間変異 研究系教授	大西拓一郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究は、日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に、全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては、言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を50年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方、大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は、中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり、現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する、世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。</p> <p>本研究においては、調査結果ならびに先行研究言語地図（書誌と項目）のデータベースを作成する。これらは、分布変動をとらえるための基盤データであるとともに21世紀初頭の日本全国の方言分布情報として、また、20世紀後半に世界的にも類を見ない大きな展開を示した日本の言語地理学の足跡の記録として大きな意義を有する。</p> <p>分布を分析した研究成果は論文集として出版する。このことで、伝統を礎としたかつ新たな言語地理学の展開をリードすることになる。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全国554地点の調査結果をデータベース化し、Webで広く公開した。 ・ 2015年6月7日、言語地理学フォーラム「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会を開催した。 ・ 2015年9月27日、言語地理学フォーラム「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会を開催した。 			
参加機関名	岩手県立大学、岡山大学、金沢大学、関西大学、共愛学園前橋国際大学、岐阜大学、熊本大学、群馬県立女子大学、県立広島大学、呉工業高等専門学校、実践女子大学、広島大学、弘前学院大学、甲南大学、高知大学、滋賀大学、鹿児島大学、秋田大学、松山東雲女子大学、信州大学、新潟県立大学、神戸女子大学、神田外語大学、椛山女学園大学、千葉大学、大阪大学、東北大学、徳島大学、日本大学、尾道市立大学、富山大学、福岡教育大学、福岡女学院大学、福島大学、文教大学、琉球大学、別府大学、仙台高等専門学校		
共同研究員数	50名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	時空間変異 研究系客員教授	井上 史雄	2012.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>【概要】 国語研では半世紀以上にわたり、山形県鶴岡市、愛知県岡崎市、北海道富良野市において、共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）を行ってきた。同一の調査内容を用いて同一の対象地域・対象者を長期間にわたって調査する、世界に類のないオリジナルな調査研究である。これにより、話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ、実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や、同一人物の加齢による変化なども知ることができる。ここから得られた共通語化や敬語変化の動向についての豊かな知見に基づき、言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行うことができる。本研究は、これらの大規模経年調査の多様なデータを総合的に分析することにより、実証的データに基づいて日本語の変化と日本語の将来を統計的に予測することのできる理論の構築を目指している。</p> <p>【研究目的】 鶴岡第4回調査は、2012年春に終了し、その電子化とデータベース化も、着実に進展している。一方国立国語研究所の以前の鶴岡・岡崎・富良野などの定点・経年調査による結果も、データベース化する必要がある。本研究の目的は、これらのデータベース・各種言語資料を高度学術利用することにより、現代日本の地域社会における言語使用・言語意識の実態を記述するとともに、言語の変化と将来予測に関する実証的な研究を行うことにある。また国際的発信、国内一般人への啓発にも配慮する。</p> <p>【研究の意義】 鶴岡・岡崎・富良野の経年調査は、同一の調査内容で、同一の対象地域・対象者に対する大規模な調査であり、世界に誇るべき成果である。話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができる。言語部門ではギネスブックものの、世界にまれな貴重な大規模データである。社会言語学研究史からいうと、欧米より早く、確実な統計手法を用いた大規模調査として位置付けられている。ことに鶴岡調査の価値は統計数理研究所でも認知されており、文系理系をつなぐ共同研究として、高く評価されており、社会言語学の国際的概説書にも引用されている。これらのデータの分析には長期間にわたる大勢の協力を必要とするため、未分析のまま保存されている貴重な資料も少なくない。これら未分析資料を公開して、研究の進展に寄与できる体制を、整える。また各地の調査項目には共通項目があるにも関わらず、これまで相互に結果を参照して比較することがなかった。これらの多様な調査を相互に関連づけて、報告書で扱われた以外の観点からの分析を行う必要がある。</p> <p>以上のような観点から、本研究では大規模経年調査のデータの整理、分析を行い、関連研究と結びつけ、その成果や国語研の所有するデータの価値について、国際的に公表、発信する。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2015年11月、「大規模経年調査資料集」の公開 ・2016年2月、「岡崎敬語調査のデータベース」の公開 ・2016年3月、『敬語表現の成人後採用 ―岡崎における半世紀の変化― 日本語の大規模経年調査に関する総合的研究』を刊行 			
参加機関名	宇都宮共和大学、大阪府立大学、京都工芸繊維大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子大学、滋賀大学、専修大学、徳島大学、日本大学、ノートルダム清心女子大学、福島大学、立命館大学、統計数理研究所		
共同研究員数	19名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	時空間変異 研究系客員教授	金水 敏	2013.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>時空間変異研究系では、空間的変異の研究は進んでいるが、時間的変化の研究は未だ十分でなかった。この点を鑑み、本研究では日本語を中心として時間的変異と空間的変化の両方をつなぐような研究プロジェクトの構築を目指す。そのために、疑問文という日本語研究の中でも必ずしもバランスのとれた研究が進んでいない領域を取り上げ、歴史的研究の充実を目指すとともに、空間的変異研究との連携の活性化をめざすものである。また疑問文にとって関連の深い名詞節の研究を取り上げている、言語対照研究系の「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」との連携も深めていく。</p> <p>具体的成果物としては、テーマに関わる論文集の刊行を目指す。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2015年6月6日～7日、プロジェクト研究発表会を開催した。 ・2015年12月19日～20日、プロジェクト研究発表会を開催した。 ・2015年9月5日～6日、国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び」を主催した。 ・「中世日本語疑問文・用例データベース」（『天草版平家物語』、『毛詩抄：詩経』、『虎明本狂言集・上中下巻』、『懺悔録』、『天草版伊曾保物語』）を更新した。 			
参加機関名	愛知教育大学、青山学院大学、お茶の水女子大学、大阪大学、大阪樟蔭女子大学、大阪府立大学、関西大学、九州国際大学、神戸松蔭女子学院大学、鶴見大学、南山大学、福井大学、福岡大学、琉球大学、龍谷大学、麗澤大学、オックスフォード大学、啓明大学校、デラウェア大学、ハワイ大学		
共同研究員数	26名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
コーパスアノテーションの基礎研究	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>共同利用研国立国語研究所においては、コーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが、そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。本研究では、コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行う。</p> <p>コーパスの価値は代表性とアノテーションの積として定まるが、日本語コーパスの場合、形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが、我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく、主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため、言語学の観点からすると、仕様に一貫性が欠けていたり、単位の斉一性に問題が生じていたりすることがあった。一方、言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて、現実の用例をどの</p>			

程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。

本研究の目的は、自然言語処理研究者と言語学者とが協力して、現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し、検討することにある。

《2015年度の主要な成果》

- ・2015年10月15日、プロジェクト研究会を開催した。
- ・データ公開のためにドキュメント整備を進めた。
- ・12種類のアノテーションデータを公開した。

参加機関名	東北大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 東京工業大学, 筑波大学, 岡山大学, 立命館大学, 慶應義塾大学, 京都大学, 山梨大学, 静岡大学, 統計数理研究所, 情報通信研究機構, グーグル(株), 文部科学省
共同研究員数	20名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
コーパス日本語学の創成	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は、『日本語話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが、一連のコーパスを徹底的に解析して、コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。本研究の目的は、各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得、それを学界に周知させることによって、日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり、一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第8回「コーパス日本語学ワークショップ」では35件の発表があり、うち21件が一般からの応募であった。本ワークショップでは毎回最後のセッションを指定討論（文法、語彙、音声などの領域ごとに指定討論者が当該ワークショップで発表された研究を講評する機会）と全体討論の機会を設け、参加者がコーパスを利用した言語研究の問題点を共有できるよう配慮している。 ・上記ワークショップと関連させて3件のサテライトを開催した。 ・朝倉書店から刊行を続けている「講座日本語コーパス」は、2015年12月に第4巻『コーパスと国語教育』、2016年3月に第5巻『コーパスと日本語教育』を刊行し、8巻中6巻まで刊行した。 ・『中納言』の検索技術に関する入門書（4名共著）5章中4章まで原稿を執筆した。 ・雑誌『日本語学』に連載「コーパス活用の勘所」（全22回）を連載し、完結させた。 			
参加機関名	愛知学院大学, 愛知淑徳大学, 大阪大学, お茶の水女子大学, 熊本大学, 甲南大学, 神戸大学, 埼玉大学, 上智大学, 湘南工科大学, 大東文化大学, 千葉大学, 筑波大学, 東京外国語大学, 東京学芸大学, 東京女子大学, 同志社大学, 同志社女子大学, 名古屋大学, 日本大学, 広島大学, 法政大学, 北海道教育大学, 明治大学, 山形大学, 立命館大学, 立正大学, 早稲田大学, 統計数理研究所, 理化学研究所, 天津大学, リュブリャーナ大学		
共同研究員数	47名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
通時コーパスの設計	言語資源研究系 客員教授	田中 牧郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>(1) 日本語の歴史の全体像をコーパスという形で公開することで、国立国語研究所の作成した従来のコーパスをさらに充実する。これにより、日本語に関心を持つ研究者・一般人にとって、欠かすことのできない公共的な言語資源とすることができる。</p> <p>(2) 2013年度までに、中間的なまとめとして、研究成果論集を出版する。また、日本語歴史コーパス平安時代和文篇（2013年度版）を公開する。これらの成果物により、通時型コーパスの基本構想、コーパス利用による日本語史研究の方法を広く開示し、学界に歴史コーパスを利用した研究方法を提案するという意義がある。なお、2014年以降も、研究雑誌に歴史コーパス特集号を編纂すること、また、コーパスの対象も鎌倉時代、室町時代に拡張すること等を計画している。</p>			
<p>《2015年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本語歴史コーパス鎌倉時代編 I 説話・随筆、明治・大正時代編 I 雑誌コアデータを2016年3月に公開。 本プロジェクト成果をまとめた論文集である近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信（編）『コーパスと日本語史研究』を編集し、2015年10月にひつじ書房により刊行した。 2015年10月に第3期準備プロジェクト「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」と共同で、プロジェクト国際シンポジウム「『通時コーパス』国際シンポジウム」を開催した。 			
参加機関名	青山学院大学, 岩手大学, 群馬大学, 恵泉女学園大学, 埼玉大学, 静岡大学, 実践女子大学, 首都大学東京, 成城大学, 千葉大学, 東京大学, 東京外国語大学, 東京工業大学, 東洋大学, 名古屋大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 福井大学, 明治大学, 国立情報学研究所, 情報通信研究機構, オックスフォード大学, 中国華僑大学, (株) はてな		
共同研究員数	31名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究	言語対照研究系 教授	John WHITMAN	2012.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究の目的は日本語とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアを一つの「言語地域」として位置づけることである。統語形態論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語においても見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語周辺諸言語の歴史的再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。2013年からは、アンナ・ブガエワ准教授が中心となる「アイヌ語班」を加え、日本列島において唯一日本語族と共存するアイヌ語族の言語類型論的研究を積極的に行う。</p>			

上記の3つのテーマに沿って、プロジェクトを「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は(1) 類型論的観点と通時的言語学観点を組み合わせること、(2) 言語類型論、国語学(日本語学)、言語学理論(統語理論・音韻理論)、記述言語学にわたる、幅広い理論・方法的観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。

当然のことながら、研究成果の公表もプロジェクトの目的である。各班別に、年に1回ずつの共同研究発表会(アイヌ語班の場合には2回)、3つの国際ワークショップ・シンポジウムと、言語対照研究系の合同研究発表会を行う。そのほか、「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」のメンバーはそれぞれ主に下記の4点の海外出版企画で研究成果を公表する。

- ・ *Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar* (John Benjamins 社に提出する予定) 形態・統語論班のメンバー
- ・ *Handbook of Japanese Historical Linguistics* (Mouton 社と契約済) 形態・統語論班、音韻再建班のメンバー
- ・ 雑誌 *Korean Linguistics* (Brill 社) の特集号 音韻再建班のメンバー
- ・ *Handbook of the Ainu Language* (Mouton 社に提出する予定) アイヌ語班のメンバー

《2015年度の主要な成果》

- ・ 2015年6月13日～14日、アイヌ語班が共同研究発表会を開催した。
- ・ 2015年12月5日～6日、アイヌ語班が共同研究発表会を開催した。
- ・ 2015年8月20日、国際シンポジウム“Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area”を開催した。
- ・ 2015年9月5日～6日、国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び」を開催した。
- ・ 2016年3月23日、『アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロス付き—』を公開した。
- ・ *Handbook of the Ainu Language* (De Gruyter Mouton 社) の編集準備作業を行った。

参加機関名	青山学院大学、茨城大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、甲南女子大学、神戸大学、札幌学院大学、静岡県立大学、千葉大学、筑波大学、東京大学、東京外国語大学、東北大学、富山大学、新潟大学、福井大学、北海学園大学、北海道大学、明治学院大学、琉球大学、麗澤大学、和歌山大学、和光大学、早稲田大学、アダム・ミツケヴィチ大学、オックスフォード大学、オハイオ州立大学、啓明大学校、サハリン州立郷土博物館、ハワイ大学、フランス国立科学研究所、ヘルシンキ大学、マインツ大学、ワシントン大学
共同研究員数	58名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	言語対照研究系 教授	Prashant PARDESHI	2009.10-2016.3
《研究目的及び特色》			
述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が出来事の認識およびその言語表現にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約40言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。			

また、理論的な研究の知見を日本語教育へ還元することを目標に、他動性に関する言語学、日本語学、日本語教育、対照言語学、第二言語習得研究、辞書編纂学、認知言語学、コーパス言語学などといった様々な研究分野の最新の研究成果を取り入れ、日本語の自動詞・他動詞の体系的且つ効率的な学習に役立つネット版「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」を作成する。この試みを通じて、市販の教科書、辞書、文法書、参考書などと異なった新たな教材・資料を提供することにより、世界各国の日本語教育への寄与を目指す。

《2015年度の主要な成果》

- ・国際会議1件、国際ワークショップ1件、研究成果発表会2件を開催した。
- ・研究成果の刊行（単著1冊、編著書1冊、辞書1冊）を行った。
- ・電子成果（言語地図、動詞ハンドブック、自他動詞一覧）をWebサイトで公開した。

〈著書・編著〉

- ・Prashant Pardeshi（著）*A Functional Account of Marathi's Voice Phenomenon: Passives and Causatives in Marathi* (Leiden/Boston: Brill, 2016) を出版した。
- ・プラシャント・パルデシ、桐生和幸、ハイコ・ナロック（編著）『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』（くろしお出版、2015）を出版した。
- ・Prashant Pardeshi, Kazuyuki Kiryu, Hari Damle, Meena Ashizawa（編著）『日本語・マラーティ語基本動詞辞典』（Pune, India: Rajhans Prakashan, 2015）を出版した。

〈データベース類〉

- ・2015年4月、「有対自他動詞の地理理型論的なデータベース（WATP）」に12言語のデータを追加した。
- ・2015年11月、「基本動詞ハンドブック」に12見出しを追加した。

参加機関名	愛知教育大学、青山学院大学、亜細亜大学、大阪大学、大阪女学院大学、岡山大学、小樽商科大学、金沢大学、関西国際大学、神田外語大学、学習院大学、岐阜大学、九州大学、京都大学、熊本大学、慶応義塾大学、神戸大学、神戸市立工業高等専門学校、神戸夙川学院大学、札幌学院大学、滋賀大学、拓殖大学、筑波大学、東亜大学、東京大学、東京外国語大学、東京海洋大学、同志社大学、東北大学、東北学院大学、東洋大学、名古屋大学、新潟大学、北海道大学、防衛大学校、三重大学、美作大学、武庫川女子大学、山口大学、龍谷大学、麗澤大学、早稲田大学、国立民族学博物館、サンフランシスコ州立大学、ピッツバーグ大学
共同研究員数	88名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多文化共生社会における日本語教育研究	日本語教育研究 ・情報センター 教授	迫田久美子	2010.4-2016.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトでは、第二言語習得研究、対照言語学、社会言語学、心理言語学、コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により、多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について、実証的な研究を行う。

現在、海外には398万人の日本語学習者が第二言語としての日本語を学んでいる。また、国内に

在住する日本語非母語話者は、200万人であり、労働力確保、高度人材の登用も含め、日本は確実に多文化共生の社会に向かっている。このプロジェクトには、このような現状で問われるべき課題として、2つの柱となる研究がある。それぞれの目的は以下のとおりである。

【非母語話者の日本語の第二言語習得研究】

日本語非母語話者の日本語習得を自然環境か教室環境か、日本国内か海外か、などの環境要因および彼らの母語の違いが習得にどのように影響を与えるのかについて、学習者の会話コーパス・作文コーパスに基づいて明らかにする。

【定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究】

多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者や研究が進んでいない少数派の外国人の言語習得、複数の言語使用の実態をよりの確に捉え、どのような日本語を必要とするのかを明らかにし、言語使用と言語生活の関係を明らかにする。

《2015年度の主要な成果》

- (1) 異なる12言語の母語話者の発話・作文データを収録した日本語学習者コーパス (I-JAS) の公開準備を整えた (2016年5月公開予定)。
- (2) 2015年9月、時空間言語変異研究系の共同研究プロジェクトとともに、NINJAL コーパス合同シンポジウム「[正しい日本語] ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」を主宰し、第一言語習得研究者 宮田 Susanne 氏を迎え、方言コーパス、歴史コーパス、現代日本語話し言葉コーパスの研究者とともに、学習者コーパスにおける「正用と誤用」について発表した。参加者は約100名であった。
- (3) 2016年1月、基調講演者として Patsy Lightbown 氏および Hiroko Kataoka 氏を招き、NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」を企画・運営した。さらに、分科会の1つ「学ぶ」班において、小柳かおる氏および曹英南氏とともに「教室指導は習得にどんな影響を与えるか」について発表した。参加者は181名であった。
- (4) 学術交流協定に基づき、北京日本学研究中心及び北京師範大学の日本語専攻の中国人大学生の4年間の日本語学習の縦断コーパス構築のためにデータ収集を行った。

参加機関名	大阪大学、学習院大学、実践女子大学、首都大学東京、上智大学、筑波大学、名古屋外国語大学、日本女子大学、広島修道大学、広島国際学院大学、広島市立大学、横浜国立大学、麗澤大学、サンフランシスコ州立大学、タマサート大学、ピッツバーグ大学
共同研究員数	22名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
コミュニケーションのための言語と教育の研究	日本語教育研究・情報センター教授	野田 尚史	2013.4-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語能力は現実のコミュニケーションの観点から「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの能力に分けられる。しかし、非母語話者の日本語能力についての研究は、これまではこの4つを明確に分けず、語彙に関する能力や文法に関する能力というように伝統的な言語学の分類に従って進められることが多かった。

この共同研究プロジェクトでは、「聞く」「話す」という話しことばに関する能力と、「読む」「書く」という書きことばに関する能力を分け、また、「聞く」「読む」という理解能力と、「話す」「書く」という使用能力を分けて非母語話者の日本語能力を研究する。特に研究方法の開発が遅れていて、これまで研究が盛んではなかった「聞く」「読む」という理解能力に焦点を当て、非母語話者の理解過程や理解困難点を解明することを目的とする。

日本語教育研究・情報センターでは日本語非母語話者のコミュニケーション能力を明らかにすることを大きな課題の一つとしているが、この研究は現実のコミュニケーションの中での非母語話者の日本語能力を解明するという新しい方向性を持ったものになっている。

《2015年度の主要な成果》

[共同研究]

- ・日本語教育学会 2015年度秋季大会（2015年10月10日、沖縄国際大学）に応募し採択されたパネルセッション「日本語以外の文字による日本語音声表記」で4名が研究成果を発表した（参加者約60名）。

[国際化]

- ・プリンストン日本語教育シンポジウム（2015年5月10日、プリンストン大学）で発表し、*The 22st Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings*（2015年11月発行）に論文を発表した。
- ・ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（2015年8月28日、ボルドーモンテーニュ大学）で発表した。その内容は、『ヨーロッパ日本語教育』（2016年6月発行予定）に論文として掲載される予定。
- ・インド・プネー市日本語教育開始50周年記念セミナー“The Japanese Language and Cultural Studies in Pune from 1965 to 2015: Past, Present and Future”（2015年12月19日、インド・プネー市）の講演でプロジェクトの研究成果を発表した。
- ・国際シンポジウム「グローバル化時代に求められる日本語教育・日本学研究」（2015年12月26日、中国・暨南大学）の基調講演でプロジェクトの研究成果を発表した。
- ・国際シンポジウム「日本語教育学の理論と実践をつなぐ」（2016年3月26日、中国・北京、高等教育出版社）の基調講演でプロジェクトの研究成果を発表した。
- ・スペイン日本語教師会第7回研修会（2016年2月6日、Residencia de Estudiantes（スペイン・マドリッド））でプロジェクトの研究成果を発表した。

[社会貢献]

- ・「ふくおか地域日本語の会」の福岡県国際交流センター支援事業である日本語ボランティア研修会で「外国の人たちにもわかりやすい日本語」という講演を行った（2016年3月12日、福岡市立中央市民センター、参加者約55名）。
- ・兵庫日本語ボランティアネットワーク研修会で「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」という講演を行った（2015年10月25日、兵庫県立のじぎく会館、参加者約60名）。

参加機関名	跡見学園女子大学、いわき明星大学、大阪大学、金沢大学、関西学院大学、京都教育大学、熊本県立大学、群馬大学、神戸大学、大東文化大学、津田塾大学、帝塚山大学、東京大学、名古屋外国語大学、人間環境大学、一橋大学、福井大学、麗澤大学、オックスフォード・ブルックス大学、国立政治大学、チェラーロンコーン大学、パリディドロ第7大学、バルセロナ自治大学、プリンストン大学、ミュンヘン大学、グーグル（株）
共同研究員数	33名

人間文化研究機構では、人間文化研究の新たな領域を従来の枠組を超えて創出し、先端的・国際的研究を展開するために、機構に所属する諸機関の間での連携研究など各種の事業を実施し、国立国語研究所もそれらの事業に参画している。

連携研究

人間文化研究機構を構成する個々の機関が培ってきた研究基盤と成果を、機関の枠を超えてつなぎ、補完的、有機的に結合させることで、新たな視座を開拓し、より高次なものに発展させようと企画、実施してきたのが連携研究で、2014年度までに行われた研究に基づき、2015年度はその成果を公開した。

アジアにおける自然文化の重層的関係の歴史的解明

日本を含むアジア地域には、歴史的に形成された多様な文明と文化が存在する。とくに、文化はいわゆる自然とのかかわりのなかから生まれてきた。人間は自然からどのような恩恵を受け、あるいは災害や自然の脅威にどのように対処してきたのか。この問いに、国語研では言語世界から見た自然への認識と思想、言語表現の多様性と普遍性という側面から研究を推進した。

研究課題：言語分析による自然観・自然思想の研究

研究期間：2010-2014

- ・昔がたりにみる自然観・自然思想の解明（木部暢子，時空間変異研究系教授）
- ・河川流域の自然・人間社会と方言の分布（大西拓一郎，時空間変異研究系教授）
- ・鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査（窪園晴夫，理論・構造研究系教授）
- ・Rendaku across Dialects（Timothy J. Vance，理論・構造研究系教授）

大規模災害と人間文化研究

国語研が総括班となって、「大規模災害と人間文化研究」と題する連携研究を2012年度に開始した。これは、東日本大震災以降、人間文化研究機構内で各機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき、それぞれのグループの連携・協力を図ることにより、人間文化という大きな視点から地域の復興を支援するとともに、今後、起きると予想される大規模災害に対して人間文化研究の立場からどう向き合うかについて検討することを目的とする研究で、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」、「B. 大規模災害とミュージアムの連携、活用の研究」、「C. 大規模災害と資料保存・活用の研究」に分かれる。このうち、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」の下に下記を実施した。

「大規模災害と人間文化研究」については、日本の災害研究において人間文化研究という視座に立った研究をはじめ体系的に実施した共同研究であり、被災地の具体的な研究に基づく復興支援であると高く評価されたのを受け、法人第3期の基幹研究プロジェクトに発展させた。

- ・方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究

研究代表者：木部暢子（時空間変異研究系教授）

研究期間：2012-2014

日本関連在外資料の調査研究

日本関連在外資料の国際共同研究は、欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と、日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしている。本研究はオーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料のデジタル化、ならびにその資料の書き起しを行った上でアノテーションを作成すると同時に、その資料を所蔵する機関との合意のもとに資料を公開することを目的としている。音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」については、法人第3期の基幹研究プロジェクトに発展させた。

・近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究

音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」(朝日祥之, 時空間変異研究系准教授)

研究資源の共有化

人間文化研究機構を構成する6研究機関のデータベースを横断検索が可能な統合検索システムに次のデータベースを提供している。また、統合検索システムでの検索をより行いやすくするために人名一覧基盤システムの作成に参画している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース

3 外部資金による研究

○科学研究費補助金

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額 (千円) (直接経費)
基盤研究 (A) 一般	大西拓一郎	方言分布変化の詳細解明 —変動実態の把握と理論の検証・構築—	5,000
基盤研究 (A) 一般	窪菌 晴夫	日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型	6,800
基盤研究 (A) 一般	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築 —研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—	8,100
基盤研究 (A) 海外	小木曾智信	日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用	9,000
基盤研究 (A) 一般	野田 尚史	読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究	7,100
基盤研究 (B) 一般	PARDESHI P.V.	統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アプリケーション研究：複文を中心に	3,700
基盤研究 (B) 一般	山崎 誠	会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張	2,700
基盤研究 (B) 一般	浅原 正幸	言語コーパスに対する読文時間付与とその利用	3,600
基盤研究 (B) 一般	木部 暢子	方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究	4,700
基盤研究 (B) 一般	前川喜久雄	自発音声コーパスの分析による filled pause の音声学的特徴の解明	3,800
基盤研究 (B) 一般	高田 智和	字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位	3,200
基盤研究 (C) 一般	小磯 花絵	自発音声における発話の継続・終了の予測に関わる韻律情報の解明	1,100
基盤研究 (C) 一般	井上 史雄	公用語の地域差に関する社会言語学的総合研究	1,200
基盤研究 (C) 一般	鎌水 兼貴	多様な方言資料の横断的分析による新たな方言分布研究	1,000
基盤研究 (C) 一般	井上 文子	方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究	1,100
基盤研究 (C) 一般	福永 由佳	多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究 —在日パキスタン人を中心に—	2,000
基盤研究 (C) 一般	柏野和佳子	「書き言葉的」と「話し言葉的」という文体差のある語の分析	1,200
基盤研究 (C) 一般	熊谷 康雄	大規模方言分布データの計量的分析方法の開発	1,600
基盤研究 (C) 一般	籠宮 隆之	実環境下を想定した聴覚補助機による非言語・パラ言語情報伝達性能評価試験の開発	1,200
基盤研究 (C) 一般	長崎 郁	19世紀半ば～20世紀半ばロシア北東地域のユカギール語資料に関する言語学的研究	1,700

基盤研究 (C) 一般	渡辺美知子	後続要素の複雑さが言い淀みの発生に及ぼす影響についての日英対照研究	1,400
基盤研究 (C) 一般	間淵 洋子	近代語コーパスの計量分析に基づく同語異表記の通時的な研究	1,700
基盤研究 (C) 一般	朝日 祥之	北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究	1,400
基盤研究 (C) 一般	津田 智史	多文化共生社会に向けての災害時コミュニケーションに関する総合的研究	1,000
基盤研究 (C) 一般	石本 祐一	音声アシスタントとの円滑な話者交代を実現する音声言語特徴の解明	1,500
挑戦的萌芽 研究	窪藪 晴夫	「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究	1,100
挑戦的萌芽 研究	山口 昌也	即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究	800
挑戦的萌芽 研究	野山 広	多言語社会に対応した言語サービスとサービス評価の在り方に関する萌芽的研究	1,200
挑戦的萌芽 研究	浅原 正幸	近代語コーパスに対する統語情報アノテーションの基準策定	1,500
若手研究 (B)	南部 智史	文章と発話の自発性からみた主語標示の助詞「が・の」の計量的研究	700
若手研究 (B)	保田 祥	コーパスから取得しやすい情報と取得しにくい情報の研究	900
若手研究 (B)	ホワン ヒョン ギョン	韓国語サイソリにおける意味構造とプロソディの方言・言語対照研究	700
若手研究 (B)	市村 太郎	コーパス内話者情報を利用した近世後期江戸語・上方語の研究	1,400
若手研究 (B)	三樹 陽介	消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料作成とその分析に関する研究	1,100
若手研究 (B)	乙武 香里	讃岐方言における発話行為体系と発話未表現の相関の解明のための予備的研究	1,000
若手研究 (B)	河瀬 彰宏	旋律と歌詞の計量的分析による日本民謡の地域的特徴の解明	1,000
若手研究 (B)	池上 尚	統語・意味情報付き形容詞を実装した通時コーパスによる中古形容詞の意味・用法研究	1,200
若手研究 (B)	船越 健志	自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究	700
研究成果公開 促進費	藤本 灯	『色葉字類抄』の研究	3,400
特別研究員 奨励費	津田 智史	新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究	800
特別研究員 奨励費	青井 隼人	関係性に着目した宮古語音韻構造の探求	1,000
特別研究員 奨励費	南部 智史	言語変異に関する実験およびコーパスに基づく研究	200
特別研究員 奨励費	三樹 陽介	消滅の危機に瀕する八丈語の調査・記録と談話資料の作成・公開	1,200

特別研究員 奨励費	POPPE CLEMENS	言語類型論から見た日本語諸方言におけるトーンと母音の相互作用	800
研究活動 スタート支援	藤本 灯	「色葉字類抄」を中心とする国語辞書史研究	1,000
研究活動 スタート支援	松井 真雪	超音波映像資料から見るロシア語の有声阻害音と無声阻害音の喉頭特徴	1,100
研究活動 スタート支援	堤 智昭	訓点資料電子化のためのデジタル記述法と電子化プロセスの確立	1,000

○寄附金（2015 年度受入）

- ・「旋律と歌詞の計量的分析による日本民謡の地域的特徴の解明」（河瀬彰宏）サントリー文化財団（若手研究者のためのチャレンジ研究助成） 960 千円
- ・「山田孝雄著『日本文体の変遷』」（藤本灯）新村出記念財団（刊行助成金） 1,000 千円

4 刊行物

『国語研プロジェクトレビュー』（NINJAL Project Review）

個々の共同研究プロジェクトの研究活動の総体を展望することによって国語研全体の動向を展望する。年3回程度、オンラインで刊行し、まとめたものを冊子体で発行している。オンライン版は国語研 Web サイトで公開し、冊子体は全国の大学図書館等で利用できる。

○第6巻第1号

〈プロジェクト紹介〉

浅原正幸

「日本語 Web コーパスの構築 —利活用—」 pp.1-10.

〈共同研究プロジェクト紹介〉

田中牧郎

「『日本語歴史コーパス』による平安時代と室町時代の語彙の比較」 pp.11-20.

〈著書紹介〉

金水 敏

金水 敏, 田中ゆかり, 岡室美奈子 編

『ドラマと方言の新しい関係 —『カーネーション』から『八重の桜』,そして『あまちゃん』へ—』 pp.21-22.

金水 敏 著

『コレモ日本語アルカ？ —異人のことばが生まれるとき—』 pp.21-22.

石黒 圭

石黒 圭, 橋本行洋 編

『話し言葉と書き言葉の接点』 pp.23-24.

青木博史

青木博史, 小柳智一, 高山善行 編

『日本語文法史研究 2』 pp.25-26.

山崎 誠

前川喜久雄 監修 / 山崎 誠 編

山崎 誠, 前川喜久雄, 丸山岳彦, 柏野和佳子, 山口昌也, 小椋秀樹, 小木曾智信, 田中牧郎 著
『書き言葉均衡コーパス —設計と構築—』 pp.27-28.

小磯花絵

前川喜久雄 監修 / 小磯花絵 編

小磯花絵, 前川喜久雄, 五十嵐陽介, 丸山岳彦, 伝 康晴, 籠宮隆之, 西川賢哉, 菊池浩平 著
『話し言葉コーパス —設計と構築—』 pp.29-30.

〈論文紹介〉

市村太郎

市村太郎

「副詞「ほんに」をめぐって —「ほん」とその周辺—」, 『日本語の研究』 10 (2) : 1-16. (2014)
pp.31-32.

池上 尚

池上 尚

「水クサイの意味変化 —水ッポイとの共存過程から考える—」, 『日本語の研究』 10 (2) : 33-48.
(2014) pp.33-34.

○第6巻第2号 (2015年10月)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの —プロジェクトの理論的・応用的な研究成果—」
pp.35-46.

〈著書紹介〉

影山太郎

Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama (Series editors)

HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, pp.47-49.

下地理則

Patrich Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (editors)

Handbooks of Japanese Language and Linguistics 11

Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use, pp.50-51.

窪蘭晴夫

Haruo Kubozono (editor)

Handbooks of Japanese Language and Linguistics 2

Handbook of Japanese Phonetics and Phonology, pp.52-53.

中山峰治

Mineharu Nakayama (editor)

Handbooks of Japanese Language and Linguistics 9

Handbook of Japanese Psycholinguistics, pp.54-55.

志波彩子

志波彩子 著

『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』 pp.56-57.

木部暢子

木部暢子 編

『災害に学ぶ —文化資源の保全と再生—』 pp.58-60.

朝日祥之

朝日祥之, 原山浩介 編

『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』 pp.61-62.

アンナ・ブガエワ

アンナ・ブガエワ, 長崎 郁 編

『アイヌ語研究の諸問題』 pp.63-64.

相澤正夫

金澤裕之, 相澤正夫 編

『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料』 pp.65-66.

〈論文紹介〉

銭谷真人

銭谷真人

『『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い —明治期の新聞における字体の統一について—』, 『日本語の研究』 10 (4) : 48-66. (2014) pp.67-68.

○第6巻第3号 (2016年3月)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

ジョン・ホイットマン

「東北アジア言語地域の位置付けに向けて」 pp.69-82.

野田尚史

「ウェブサイトのクチコミに対するヨーロッパの日本語学習者と日本語母語話者の解釈の違い」 pp.83-92.

迫田久美子, 小西 円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」 pp.93-110.

〈著書紹介〉

小木曾智信

近藤泰弘, 田中牧郎, 小木曾智信 編

『コーパスと日本語史研究』 pp.111-113.

田中牧郎

前川喜久雄 監修 / 田中牧郎 編

『コーパスと国語教育』 pp.114-116.

プラシャント・パルデシ

プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, ナロック・ハイコ 編

『有対動詞の通言語的研究 —日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』 pp.117-119.

プラシャント・パルデシ

プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, Hari Damle, Meena Ashizawa 編著

『日本語・マラーティー語基本動詞辞典』 pp.120-123.

〈論文紹介〉

渡辺由貴

渡辺由貴

「文末表現『と思ふ』と『とおぼゆ』の史的変遷」、『日本語文法』15(2):116-132. (2015)
pp.124-125.

『国立国語研究所論集』(NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回(7月と1月)、オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第9号(2015年7月)

有田節子

「日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について—係助詞から感動詞へ—」pp.1-22.

加藤 祥

「テキストからの対象物認識に有用な記述内容—動物を例に—」pp.23-50.

風間伸次郎

「日本語(話しことば)は従属部標示型の言語なのか?—映画のシナリオの分析による検証—」
pp.51-80.

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間瀬洋子, 浅原正幸, 立花幸子, 加藤 祥, 今田水穂, 山口昌也,
前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正」pp.81-100.

桑原陽子

「非漢字系日本語学習者がレストランのクチコミから情報を得るときの方略と困難点」pp.101-
119.

奥野由紀子, ディアンニ・リスダ

「「話す」課題と「書く」課題に見られる中間言語変異性—ストーリー描写課題における「食べ
られてしまっていた」部を対象に—」pp.121-134.

Shimizu Masaaki

“A reconstruction of ancient Vietnamese initials using Chữ Nôm materials”, pp.135-158.

鳥谷善史

「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」pp.159-176.

上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料(2)」pp.177-205.

ティモシー・J・バンス

「連濁の不規則性とローゼンの法則」pp.207-214.

ヴォロビヨワ・ガリーナ, ヴォロビヨフ・ヴィクトル

「漢字の構造分析に関わる問題—漢字字体の構造分解とコード化に基づく計量的分析—」pp.215-
236.

渡辺由貴

「『虎明本狂言集』における「と思ふ」と「と存ず」—『日本語歴史コーパス』を利用して—」
pp.237-254.

○第10号(2016年1月)

Chien Yuehchen

“Yilan Creole case marking”, pp.1-17.

平田未季

「コ系の意味の再分析 —指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」 pp.19-39.

丁 美貞

「岡崎敬語調査での機能的要素の経年変化について —「荷物預け」場面の対人配慮を中心に—」
pp.41-54.

金澤裕之

「現代に繋がる近代初期の口語的資料における言語実態 —速記本と SP レコードによる東西の落語を対象として—」 pp.55-84.

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査」 pp.85-106.

李 奎台

「日本で働く韓国人ヴォーカルトレーナーの教育観の多様化に関する質的研究」 pp.107-133.

松森晶子

「複合語アクセントが日本語史研究に提起するもの」 pp.135-158.

松浦年男

「天草諸方言における有声促音の音韻論的・音声学的記述」 pp.159-177.

太田 聡, 太田真理

「連濁の生起率に基づく日本語複合語の分類 —連濁データベースによる研究—」 pp.179-191.

志波彩子

「近代日本語の間接疑問構文とその周辺 —従属カ節を持つ構文のネットワーク—」 pp.193-220.

竹田晃子, 鎌水兼貴

「痛みを表す言語表現ウズクの地域差」 pp.221-243.

寺島宏貴

「日本語研究資料の整備と公開 —国立国語研究所研究資料室の取組み—」 pp.245-263.

上野善道

「喜界島方言のアクセント資料 (4)」 pp.265-295.

山本真理

「相互行為における聞き手反応としての「うん／はい」の使い分け —「丁寧さ」とは異なる観点から—」 pp.297-313.

尹 鎬淑, 迫田久美子, 川崎千枝見

「e-learning を利用した韓国語母語話者によるライティングの誤用への間接的フィードバックの研究」 pp.315-333.

朱 京偉

「在華宣教師資料の二字語とその語構成的特徴 —蘭学資料の二字漢語との対照を兼ねて—」
pp.335-364

5 2015 年度公開中のコーパス・データベース

Web サイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開しているが、2015 年度は下記資料の公開（ないし公開の継続）を行った。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス（言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの）。

- ・ **現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)**
現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、Web、法律などから無作為に抽出した約1億語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよびDVDで公開している。
- ・ **BCCWJ 全文検索サイト『少納言』**
国立国語研究所で開発された Web アプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができる。
- ・ **NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)**
BCCWJ を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システム。
- ・ **日本語話し言葉コーパス (Corpus of Spontaneous Japanese: CSJ)**
日本語の自発音声を大量にあつめて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構（旧通信総合研究所）、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベース。音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。
- ・ **日本語歴史コーパス (Corpus of Historical Japanese: CHJ)**
日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスで、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められており、現在は構築済みの部分を公開中。
- ・ **学習者コーパスに基づく第二言語としての日本語の習得研究『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』(C-JAS)**
日本語学習者6名の3年間の縦断的発話データを公開している。
- ・ **近代語のコーパス**
明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスで、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』を公開している。
- ・ **コーパス検索アプリケーション『中納言』**
国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションで、短単位・長単位・文字列の3つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。
- ・ **アイヌ語口承文芸コーパス —音声・グロスつき—**
木村きみさん（1900-1988、沙流川上流域のペナコリ出身）がアイヌ語で語った物語10編（ウエペケレ（散文説話）8編、カムイユカラ（神謡）2編）約3時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成。
- ・ **日本語学習者による、日本語・母語対照データベース**
国立国語研究所日本語教育センターが作成した「作文対訳データベース」および「発話対照データベース」を公開している。いずれも日本語学習者が同一の課題に基づき、日本語および自分の母語によって行った言語表現を対照可能な形でデータベース化したもの。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集。

- ・ **基本動詞ハンドブック**

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツール。例文、コロケーションなどの執筆には、国語研の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(約 1 億語)や筑波大学の『筑波ウェブコーパス』(約 11 億語)などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

・ **複合動詞レキシコン (国際版)**

「押し上げる、晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞 (2,700 語以上) に意味や用法の情報を付与した言語研究及び日本語学習用のオンライン辞書で、英語・中国語・韓国語翻訳付き。研究教育目的での元データのダウンロードも可能。

・ **トピック別 アイヌ語会話辞典**

1898 年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典。

・ **寺村誤用例集データベース**

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベース。

・ **Web データに基づく用例データベース (複合動詞, サ変動詞, 形容詞)**

複合動詞, 形容詞, サ変動詞の用例のデータベース。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスから行っている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料。

・ **使役交替言語地図**

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベース。日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート (表) 上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できる Web アプリケーションとなっている。

・ **日本言語地図**

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図 (方言地図) で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料。『日本言語地図』所載の地図の画像 (全 300 図) を公開している。

・ **方言文法全国地図**

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図 (方言地図) で、方言研究における基本的な資料。『方言文法全国地図』所載の地図の画像 (全 350 図) を公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル、論文の PDF ファイルなど。

・ **日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵)**

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

・ **米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文**

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(全 54 冊, LC Control No.: 2008427768) の翻字本文 (電子テキスト) を公開。また、全 54 巻を対象とした文字列検索も提供している。

- ・ **米国議会図書館蔵『源氏物語』画像**

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能。

- ・ **雑誌『国語学』全文データベース**

日本語学会の（旧）機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベース。誌面のPDFファイルも公開している。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムや Web 上で利用するツール。

- ・ **形態素解析ツール Web 茶まめ**

各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツール。形態素解析に必要な一連の作業を Web 上でわかりやすいインターフェイスによって行うことができる。

- ・ **(方言研究の部屋) データとプログラム**

『方言文法全国地図』全データ（1～6集）、最新版 PDF 『方言文法全国地図』（1～6集）、方言文法全国地図作成の機械化（イラストレータ用プラグイン・白地図・記号）、準備調査（調査票と地図・データ）、言語地図データベースの公開ページ。

- ・ **全文検索システム『ひまわり』**

『ひまわり』は、コーパス、用例集、辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアである。XML で記述された言語資料を全文検索し、検索文字列に対する前後文脈や付与情報（書誌情報など）を表示することができる。

カタログ

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料。

- ・ **日本語研究・日本語教育文献データベース**

学術雑誌、論文集等に掲載された日本語関係の論文等のデータベース。データは定期的に追加され、Web 上で 19 万件以上のデータから文献を検索することが可能。

- ・ **国立国語研究所蔵書目録データベース**

国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約 15 万冊と雑誌約 5,800 タイトルの目録・所蔵情報が検索できるデータベース。貴重書や視聴覚資料、特殊文庫の目録・所蔵情報も掲載している。

- ・ **ことばに関する新聞記事見出しデータベース**

国立国語研究所が集めた 1949 年から 2009 年 9 月までのことばに関する新聞記事「切抜集」の、発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し（目録）データベース」。

- ・ **国立国語研究所 刊行物データベース**

創立（1948 年）から現在に至るまでの、国立国語研究所の刊行物を検索可能なデータベース。

- ・ **国立国語研究所学術情報リポジトリ**

国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果及び国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し、Web 上で公開している。

その他データ

各種言語調査等のデータ。

- ・ **『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ**

分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）」で、書籍版の『分類語彙表 増補改訂版』の元となったデータを加工したもの。データベースソフトに取り込めるよう CSV 形式になっており、レコード総数は 101,070 件。

・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

2001 年から 2004 年にかけて行われた「現代雑誌の語彙調査 —1994 年発行 70 誌—」の調査結果の語彙表。

・「学校の中の敬語」アンケート調査データ

国立国語研究所が 1989 年から 1990 年にかけて中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータ。中学生は東京 2,456 名, 山形 339 名, 高校生は東京 2,222 名, 大阪 1,004 名が回答している。

・岡崎敬語調査データベース

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市で行った敬語調査のデータベース。岡崎敬語調査 (OSH) は、1953 (昭和 28) 年, 1972 (昭和 47) 年, 2008 (平成 20) 年に行われ、戦後の 55 年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。

・沖縄語辞典データ集

国立国語研究所資料集 5『沖縄語辞典』の本文篇, 索引篇, 地名一覧表のデータ。

・『日本語教育のための基本語彙調査』データ

国立国語研究所報告 78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984) の「基本語彙 五十音順表」, 「意味分類体語彙表」, 「分類項目一覧表」を電子化したもの。

・『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告 69『幼児・児童の連想語彙表』(1981) の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したもの。

6 研究成果の発信と普及

国語研では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A. 国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

I. NINJAL 国際シンポジウム

○Grammaticalization in Japanese and Across Languages (文法化: 日本語研究と類型論的研究)

2015 年 7 月 3 日～5 日 (国立国語研究所)

7 月 3 日

Opening remarks

Taro Kageyama (NINJAL), Pardeshi Prashant (NINJAL), Heiko Narrog (Tohoku U/NINJAL)

Session on Japanese

ハイコ・ナロック

Introduction 「日本語における文法化 —文法化研究から見た特徴と課題—」

岸本秀樹 (神戸大学)

「日本語動詞否定辞「ない」の文法化について」

久好孝子 (国際医療福祉大学)

「[項位置における指示対象のコード化]—日本語と韓国語の対照研究—」

アラン・ヒョンオク・キム (南イリノイ大学)

「[「ます」と「そうろう」の文法化を促すもの：Dasher (1995), Traugott & Dasher (2004) の分析に見える問題点」

楊 文江 (南開大学)

「日本語エヴィデンシャルの歴史的変遷：構文化的アプローチ」

笠間裕一郎 (九州大学大学院)

「文法化した語・しなかった語」

宮地朝子 (名古屋大学)

「ダケノ句の史的展開 —副助詞句の名詞性」

阿部 裕 (名古屋大学)

「古代日本語における複合動詞前項の接頭辞化」

Ryoko Suzuki (Keio U) and Tsuyoshi Ono (Alberta U)

“The use of frequent verbs as reactive tokens in Japanese everyday talk: Formulaicity, florescence, and grammaticization”

Cross-linguistic session

Umberto Ansaldo (Hongkong U)

“Grammaticalization in Southeast Asia”

Kazuyuki Kiryu (Mimasaka U)

“Grammaticalization of nominalizer constructions in Tibeto-Burman languages”

Peter Hook (Universities of Virginia and Michigan) and Prashant Pardeshi (NINJAL)

“Grammaticalization in South Asia? Weighing areal, genetic, and typological factors”

7月4日

Session on Japanese

青木博史 (九州大学)

「準体助詞「の」と文法化・構文化」

小野寺典子 (青山学院大学)

「より広い「文法化」：談話標識の発達と、その後の「構文化」の考え方」

小柳智一 (聖心女子大学)

「文法変化と意味記述 —対人化と推意—」

金水 敏 (大阪大学)

「役割語にも文法化は存在するか」

Kaoru Horie (Nagoya U)

“Genre-specificity of some grammaticalization processes in Korean: A contrastive study with Japanese”

Poster session

Cross-linguistic session

Masayoshi Shibatani (Rice U/NINJAL)

“Benefactive constructions in Western Austronesian Languages”

Marian Klamer (U Leiden)

“Genetic and areal motivations in grammaticalization: The Papuan languages of Timor-Alor-Pantar”

Ilana Mushin (U Queensland)

“Grammaticalization and typology in Australian Aboriginal Languages: Word order and the grammaticalization of second position clitic complexes.”

Mohssen Esseesy (U Washington)

“Typology of semitic grammaticalization”

Bernd Heine (U Koln; emeritus)

“Some major pathways of grammaticalization”

7月5日

Östen Dahl (Stockholm U; emeritus)

“Grammaticalization in the languages of Europe”

John McWhorter (Columbia U)

“Is grammaticalization in Creoles interesting?”

Roberto Zariquiey (La Pontificia U Católica del Perú)

“Diachronic stories of body-part nouns in some language families of South America”

Marianne Mithum (UC Santa Barbara)

“Grammaticalization and typology in North America”

○「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」

2016年1月23日（国立国語研究所）

基調講演1

Pasty M. Lightbown (Concordia University)

“How language are learned: What can teachers learn from the research?”

ポスターセッション

小西 円, 須賀和香子, 迫田久美子（国立国語研究所）

「日本語学習者コーパス I-JAS におけるタグの分析 —タグ G とタグ X の表すもの—」

佐々木藍子, 細井陽子, 迫田久美子（国立国語研究所）

「学習者コーパスの意義と I-JAS —I-JAS の特徴と可能性を中心に—」

霍 沁宇, 石黒 圭（国立国語研究所）

「「三つの対話」を用いた読解授業における日本語上級学習者の読み方の意識変容プロセス — 2名の非漢字圏上級学習者を中心に—」

田中啓行, 布施悠子, 胡 方方, 石黒 圭（国立国語研究所）

「読解授業における三つの対話 —協働学習の談話データから—」

野山 広（国立国語研究所）, 嶋田和子（アクラス日本語教育研究所）, 北川裕子（のしろ日本語学会）

「定住外国人の言語生活と日本語会話力に関する縦断調査からみえてきたこと —OPIの枠組みを活用した形成的フィールドワークから—」

福永由佳（国立国語研究所）

「多言語使用者としての在日外国人の言語生活の多様性」

中河和子（トヤマ・ヤポニカ）

「日本語教育におけるエンパワメント評価の実践」

平田未季（秋田大学）

「文化誌作成プロジェクトを通じた地域の歴史の保存 —留学生と地域住民の交流を通じた地域活性化の試み—」

池田佳子（関西大学）

「アクティブ・ラーニングを生み出す日本語教育・学習の試み —ICT 活用による反転授業・ブレンディッド学習—」

加藤恵梨（朝日大学）

「日本語教育に役立つコーパスを用いた例文作り —意思・判断を表す表現について—」

清水由貴子（東京外国語大学）

「わかりやすい例文を考える —逆接を表す表現を例に—」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「学校お便りコーパスによる特徴語抽出」

劉 志偉（首都大学東京）

「ニア・ネイティブを目指すための語彙の諸相 —教師側の指導指針と学習者側の要望とのずれに注目して—」

第一分科会【学ぶ】「教室指導は習得にどのような影響を与えるか」

小柳かおる（上智大学）

「教室指導は習得にどんな影響を与えるか —混合環境（自然習得環境 + 教室習得環境）の第二言語習得研究—」

曹 英南（高麗大学校）

「JFL 教室環境学習者の言語使用と指導の影響 —4 ヶ月間の縦断・初級作文資料をデータとして—」

迫田久美子（国立国語研究所）

「自然環境学習者の言語使用とその特徴 —ストーリーテリングとロールプレイの発話資料に基づいて—」

第二分科会【教える】「学習者が満足する授業のために、教師は何が出来るのか」

嶋田和子（アクラス日本語教育研究所）

「「学びのデザイナー」としての教師を目指す —「学習者のやる気に火をつける」には—」

横溝紳一郎（西南女学院大学）

「学習者が自分たちで学ぶ授業をめざして —頑張るのは、教師ではなく学習者—」

羅 暁勤（銘傳大学）

「なぜを問い続ける教師を目指す —今を省み経験を思い出しつつ—」

第三分科会【評価する】「コースデザインは評価にどんな影響を与えるか」

伊東裕郎（東京外国語大学）

「評価する：コースデザインは評価にどんな影響を与えるか —グローバル人材育成を見据えてのコースデザインと評価について考える—」

島田徳子（武蔵野大学）

「日本の大学における経験学習行動促進のためのコースデザイン —外国人留学生と日本人学生の共修科目での教育実践—」

アグス・スヘルマン・スルヤディムリヤ (パジャジャラン大学)

「インドネシアの高等学校における日本語教育のコースデザインと評価の実情」

基調講演 2

片岡裕子 (カリフォルニア州立大学ロングビーチ校)

「バックワードデザインに基づく日本語指導 —カリキュラムとクラス活動—」

II. その他の国際会議

○Geminate Consonants Across the World (GemCon2015) (促音・重子音に関する国際ワークショップ)

2015年8月12日 (The Scottish Exhibition and Conference Centre)

Oral session 1

Shigeto Kawahara (Keio University)

“The phonetics of geminates: an overview”

Olga Dmitrieva (Purdue University)

“The role of context sonority in the typology and perceptibility of geminate consonants”

Yukari Hirata (Colgate University) and Izumi Takiguchi (Bunkyo Gakuin University/NINJAL)

“Production of Japanese geminates by native English speakers: Durational accuracy and native speaker evaluation”

Oral session 2

Rachid Ridouane (CNRS/Sorbonne Nouvelle)

“The phonetics and phonology of word-initial geminates”

Aditi Lahiri (University of Oxford), Sandra Kotzor (University of Oxford), Adam Roberts (University of Oxford), and Allison Wetterlin (University of Oxford/University of Agder)

“Bengali geminates in the mental lexicon”

Poster session

Manami Hirayama (Ritsumeikan University)

“Complete and incomplete neutralization between underlying and derived geminates in Japanese: Evidence from three germination processes”

Ghada Khattab (Newcastle University) and Jalal AI-Tamimi (Newcastle University)

“Spectral properties of vowels preceding singleton and geminate consonants in Lebanese Arabic”

Albert Lee (University College London) and Peggy Mok (The Chinese University of Hong Kong)

“Japanese consonant quantity contrasts by Hong Kong L2 learners: Preliminary results”

Lara Ehrenhofer (University of Maryland), Adam C. Roberts (Nanyang Technical University), Allison Wetterlin (University of Oxford/University of Agder), Sandra Kotzor (University of Oxford), and Aditi Lahiri (University of Oxford)

“Asymmetric processing of consonant duration in Swiss German”

Alexei Kochetov (University of Toronto)

“Length in Kannada alveolar and retroflex laterals: A preliminary acoustic study”

Maho Morimoto (University of California, Santa Cruz)

“Degemination in Japanese loanwords from Italian”

Hyunsoo Kim (Hongik University)

“Korean speakers’ perception of Japanese geminates: Evidence for the role of L1 grammar in loanword adaptation”

Elinor Payne (University of Oxford), Brechtje Post (University of Cambridge), Hanne Gram Simonsen (Oslo & Akershus University College of Applied Sciences), and Nina Gram Garmann (University of Oslo)

“The acquisition of long consonants in Norwegian”

Giuseppina Turco (University of Stuttgart) and Bettina Braun (University of Konstanz)

“Long-distance effects caused by length contrast”

Masako Fujimoto (Waseda University) and Shigeko Shinohara (Sophia University)

“Articulation of voiced geminate and word-initial geminate obstruents in the Miyakojima Ikema dialect of Ryukyuan: A Real-time MRI analysis”

Qandeel Hussain (Macquarie University) and Hassan Mustafa (Al-Mustafa Institute of Management and Sciences)

“Do Punjabi geminates show loooooong-distance anticipatory effects?”

Shinichi Tanaka (Kobe University)

“The adaptation of Italian geminates and vowels in Japanese: its relation to the perception”

Rosey Billington (University of Melbourne)

“Geminate glides in Eastern Nilotic: Evidence from Lopit”

Gertjan Postma (Meertens Institute) and Etske Ooijselaar (Meertens Institute)

“Geminate onsets in Dutch interjections – VOT normalization and the germination factor”

Toshiko Isei-Jaakkola (Chubu University/University of Helsinki)

“JL1’s identification of quantity in Finnish disyllabic meaningful words in different word structures”

Maida Percival

“The acoustics of geminates in Eastern Oromo”

Hanna Rush (University of Zurich)

“Re-emergence of sonorant geminates in Zurich and Grison German”

Toshio Matuura (Hokusei Gakuen University) and Michinao Matsui (Osaka Health Science University)

“Where lexical distribution meets phonetic realization: Closure voicing of voiced obstruent geminates in two Amakusa Japanese dialects”

○ International Conference: Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area

2015年8月20日～21日（北海道大学）

8月20日

Session 1

Iku Nagasaki (NINJAL)

“Ergativity in Kolyma Yukaghir nominalizations”

Yukari Nagayama (Hokkaido University)

“Argument nominalization Alutor”

Itsuji Tangiku (Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University) and Takayuki Hashimoto (Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University)

“On the possibility of community based dispersive Ainu language archives network”

Session 2

Tomomi Satō (Hokkaido University)

“Noun incorporation and the problem of accent assignment in Ainu”

Anna Bugaeva (NINJAL)

“The age of polysynthesis in Ainu”

Ekaterina Gruzdeva (University of Helsinki)

“On the special features of the Shimdt peninsula dialect of Nivkh”

Session 3

Hidetoshi Shiraishi (Sapporo Gakuin University) and Bert Botma (Leiden University)

“Stress-dependent height harmony in Nivkh”

8月21日

Session 4

Shinjiro Kazama (Tokyo University of Foreign Studies)

“On the Silverstein’s hierarchy from the viewpoint of linguistic area and linguistic typology”

Sangyub Baek (Hokkaido University)

“Third person markings on the finite indicative forms in Tungusic”

Andrew Joseph

“Manchu dialect diversity and its implications for Tungusic reconstruction”

Session 5

Osahito Miyaoka (Kyoto University Emeritus)

“Suffixes vs. Enclitics in Japanese Grammar, with a time-honoured scriptura continua”

John Whitman (NINJAL/Cornell University) and Yohei Ono

“A preliminary list of features for a typological databases of Northeast Asian (and North Pacific) languages”

Alfred F. Majewicz (Adam Mickiewicz University)

“Looking anew at data old and long established”

○ International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective (「比較的観点から見た係り結び」)

2015年9月5日～6日 (国立国語研究所)

9月5日

Session 1

John Whitman (NINJAL/Cornell University)

“Kakarimusubi from a comparative perspective: A crosslinguistic survey of focus scope concord constructions”

Hideki Kishimoto (Kobe U)

“Sinhala focus constructions from a discourse-syntactic perspective”

Michinori Shimoji (Kyusyu University)

“Kakarimusubi in the Irabu dialect of Ryukyuan”

Session 2

Rumiko Shinzato-Simonds (Georgia Institute of Technology)

“(Old) Okinawan and Old Japanese KM in functional and diachronic perspective: Part I ”
Leon Serafim (University of Hawaii ret.)

“(Old) Okinawan and Old Japanese KM in functional and diachronic perspective: Part II ”
Tomohide Kinuhata (Fukuoka University)

“Kakarimusubi as a device to determine the sentence type”

Session 3

Takashi Katsumata (Fukuoka University of Education)

“On the position of the Old Japanese kakari particle so and the focus expressed by the clause (上代における係助詞ソの出現位置と文の焦点について) ”

Edith Aldridge (University of Washington)

“Two focus constructions in Old Japanese kakari-musubi”

Yoshiyuki Takayama (Fukui University)

“Kakarimusubi and modality”

9月6日

Session 4

Satoshi Kinsui (Osaka University)

“On kakari-musubi and focus in interrogative sentences in Old Japanese (上代日本語の疑問文の係り結びと焦点について) ”

Iku Nagasaki (NINJAL)

“The structural properties of Kolyma Yukaghir’s kakarimusubi-like construction”

Honoré Watanabe (Tokyo University of Foreign Studies, ILCAA)

“Focus constructions in Siammon”

Session 5

Christopher Davis (University of the Ryukyus)

“Focus, mood, and interrogatives in Yaeyaman”

Taiki Yoshimura (Ankara University)

“Focussing and morpho-syntactic characteristics of Turkish predicates”

Session 6

Tomohiro Miyake (Tsurumi University)

“Kakarimusubi and wh-interrogative sentences in Modern Japanese (現代日本語の不定語疑問文と「係り結び」) ”

Charles Quinn (Ohio State University)

“Why izenkei in koso-focused kakari-musubi? –some considerations”

○ International Conference on Phonetics and Phonology 2015

2015年9月25日～27日 (慶應義塾大学)

9月25日

Keynote lecture

Andries Coetzee (University of Michigan)

“Modeling phonological variation”

Poster session 1

Group A

Kaoru Tomita (Yamagata University)

“Visualization of vowel spaces in language learning”

Richard Gananathan (The Chinese University of Hong Kong)

“The productivity of postnasal voicing in Japanese”

Guan-Nan Jiang (National Chung Cheng University)

“Learning biases and weight-sensitive stress”

Shuangshuang Hu (Utrecht University)

“Online processing of lexical pitch-accent by Korean learners of Japanese”

Gabor Pinter (Kobe University) and Hiroki Watanabe (Kobe University)

“Perceptual model evaluation using non-categorical data: A case study with Japanese sibilants”

Group B

Takashi Otake (E-Listening Laboratory)

“Can Japanese preschoolers recognize embedded words?”

Hijo Kang (Chosun University) and Mira Oh (Chonnam National University)

“Laryngeal cooccurrence restriction in Korean”

Tsung-Ying Chen (National Chung Cheng University)

“Probabilistic selection of input in diachronic Mandarin tone 3 reduction”

Michinao Matsui (Osaka Health Science University)

“On the effect of the fricative vowels in the adaptation of English voiceless fricatives in Japanese”

Anastasia Karlsson (Lund University)

“F0 timing in two verb-initial Formosan languages”

Wong Yee Ping (The Chinese University of Hong Kong)

“Difference in comprehensibility of spontaneous and read speech of Japanese”

Oral session

Hyun Kyung Hwang (NINJAL)

“The role of perceived similarity and contrast: English loanwords into Korean and Japanese”

Shin-ichiro Sano (Keio University)

“Studying phonological variation using the Corpus of Spontaneous Japanese”

Jason Shaw (MARCS Institute, Keio University)

“Some consequences of micro-prosody for phonetic variation”

9月26日

Keynote lecture

Sun-Ah Jun (UCLA)

“Interactions between word prosody, prominence type, and macro-rhythm”

Oral session

Kumiko Sato (Nagasaki University of Foreign Studies)

“Prosody of the sentences with indeterminate words in Nagasaki Japanese”

Tomoyuki Kubo (Kyusyu University)

“WH-prosody and compound”

Yuki Hirose (The University of Tokyo)

“Predictive processing of compounds in adults and six to seven-year-old children”

Yosuke Igarashi (Hitotsubasi University)

“Word tones at the sentence level in the ikema dialect of Miyako Ryukyuan”

Poster session 2

Group A

Markus A. Pöchtrager (Boğaziçi University)

“What’s in a cluster?”

Albert Lee (University of Hong Kong) and Yi Xu (University College London)

“Conditional realization of post-focus compression in Japanese”

Chihkai Lin (University of Hawaii)

“Special tone sandhi in Taiwan Southern Min and Taiwan Hakka”

Kyung-Ae Choi (Mokwon University)

“A study on the replacement of [p]~[h] between Korean and Japanese”

Jeroen Breteler (University of Amsterdam)

“Saghala tone is foot-driven”

Group B

Carolina Jorge Trujillo (University of La Laguna) and Josefa Dorta Luis (University of La Laguna)

“Approach to prosodic labeling within the framework of the autosegmental-metrical model”

Gakuji Kumagai (Tokyo Metropolitan University)

“The too-many-solutions problem on English word-initial sC clusters”

Thanasak Sirikanerat (Tohoku University) and Chawadon Ketkaew (Chulalongkorn University)

“Tonal assignment on English loanwords in Thai: A case study of assignment of Mid and High tone on syllable structure”

Hiroko Hirano (Tokyo University of Foreign Studies) and Nobuaki Minematsu (The University of Tokyo)

“An online prosodic reading tutor “Suzuki-kun” —visualization of hidden prosodic information of Japanese speech—”

Kentaro Suganuma (Kyusyu University/JSPS)

“The indexed faithfulness approach cannot capture the phonological differences between native words and loanwords in Modern Uyghur”

Jane Tsay (National Chung Cheng University)

“A cross-modality study of prosody in Mandarin and Taiwan Sign Language”

Oral session

Haruo Kubozono (NINJAL)

“Focus prosody in Kagoshima Japanese”

Keynote lecture

Caroline Féry (Goethe University Frankfurt am Main)

“Phrase languages in the typology of intonational systems”

9月27日

Keynote lecture

Bruce Hayes (UCLA)

“Learning-theoretic generative phonetics with maxent: a Hausa example”

Oral session

Donna Erickson (Sophia University), Shigeto Kawahara (Keio University), Jeff Moore (Sophia University), Atsuo Sumeitsu (JAIST), and Ian Wilson (The University of Aizu)

“Jaw displacement patterns reflect metrical structure”

Seunghun Lee (ICU/The University of Johannesburg), Jeremy Perkins (The University of Aizu), and Jullían Villegas (The University of Aizu)

“Acoustic methods in the study of tone: applications to Du’an Zhuang and Burmese”

Andrew Martin (Konan University, RIKEN BSI), Keiichi Tajima (Hosei University), and Reiko Mazuka (RIKEN BSI)

“Function word reduction in infant-directed Japanese”

○「通時コーパス」国際シンポジウム

2015年10月4日（国立国語研究所）

講演

小木曾智信（国立国語研究所）

「『日本語歴史コーパス』の質的・量的拡張」

Bjarke Frellesvig (The University of Oxford)

“Corpora and the grammar of Old Japanese（コーパスと上代語の文法）”

岡崎友子，小林雄一郎（東洋大学）

「中古作品における接続表現の統計的分析 —指示詞を中心に—」

ポスター発表

池上 尚（国立国語研究所）

「コーパスに見る中世語複合系形容詞の一語性」

間淵洋子，小木曾智信（国立国語研究所），田中牧郎（明治大学／国立国語研究所）

「形態論情報付き『増補改訂版 太陽コーパス』の構築について」

鴻野知暁（国立国語研究所）

「万葉集コーパスの設計」

堤 智昭，小木曾智信（国立国語研究所）

「歴史的資料を対象とした UniDic による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』」

老子裕輝（国立国語研究所）

「物類称呼データベース」

渡辺由貴，市村太郎（国立国語研究所）

「『日本語歴史コーパス 室町時代編』の進捗状況」

市村太郎，上野左絵（国立国語研究所）

「『日本語歴史コーパス 江戸時代編』の現状と今後」

近藤明日子（国立国語研究所）

「近代雑誌コーパスを利用した文語複合辞の抽出試行」

近藤泰弘（青山学院大学），近藤みゆき（実践女子大学）

「平安時代日本語における時間を表わす名詞の統語機能」

小島聡子（岩手大学）

「近代の東北地方出作家の文体 —方言と話し言葉—」

高田智和, 藤本 灯 (国立国語研究所), 岡部嘉幸 (千葉大学)

「人情本のコーパス化の現状」

山田祐実, 大村 舞 (奈良先端科学技術大学院大学), 鴻野知暁 (国立国語研究所), Kevin Duh (奈良先端科学技術大学院大学), 小木曾智信 (国立国語研究所), 松本裕治 (奈良先端科学技術大学院大学)

「万葉集コーパスにおける原文と読み下し文のアライメント」

パネルディスカッション「コーパスによる通史研究へ」

田中牧郎 (明治大学 / 国立国語研究所)

「『日本語歴史コーパス』による時代間の語彙比較」

山田昌裕 (恵泉女学園大学)

「格助詞「ガ」の副助詞性 —対象格表示の通時的变化を通して—」

高山善行 (福井大学)

「対人コミュニケーションの表現史 —〈受諾〉〈断り〉をめぐって」

張 元哉 (啓明大学)

「日韓の語彙の通史的対照研究と対訳コーパス」

B. 研究系の合同発表会

○コーパス合同シンポジウム「「正しい日本語」ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」

2015年9月3日 (国立国語研究所)

小磯花絵

「現代語コーパスの観点から」

木部暢子

「方言コーパスの観点から」

小木曾智信

「歴史コーパスの観点から」

迫田久美子

「学習者コーパスの観点から」

宮田 Susanne

(招待講演)「第一言語習得研究の観点から」

前川喜久雄

「総評と今後のコーパス研究の展望」

理論・構造研究系

○理論・構造研究系 プロジェクト研究成果合同発表会「レキシコン・フェスタ 4」

2016年3月4日 (自治大学校)

藤本 灯 (国立国語研究所)

「人情本のコーパス化 —現状と課題—」

船越健志 (国立国語研究所)

「意味役割としての内在的参加者の言語学的有用性」

小磯花絵（国立国語研究所）

「節境界における発話計画に関わる音声的・言語的特徴」

三井はるみ（国立国語研究所）

「条件表現の全国分布に見られる経年変化」

高田智和（国立国語研究所）

「変体仮名の国際文字コード標準化」

ティモシー・J・バンス（国立国語研究所）

「前部要素末尾の撥音と連濁の生起率 — 「連濁データベース」を踏まえた分析—」

横山詔一（国立国語研究所）

「文字環境のスマールデータサイエンス」

基調講演

中山峰治（オハイオ州立大学 / 国立国語研究所）

「外国語習得における母語の役割」

時空間変異研究系

○時空間変異研究系公開研究発表会 Japanese Language Variation and Change Conference 2016

（JLVC2016）「再考 ことばの時空間」

2016年2月13日～14日（国立国語研究所）

2月13日

ワークショップ1「在住外国人の日本語会話力と言語生活に関する縦断研究」

司会・進行：野山 広（国立国語研究所）

発表：野山 広， 篠野智紀（慶應義塾普通部）

指定討論者：村田晶子（法政大学）

ワークショップ2「方言，言語，そしてその領域をめぐって」

司会・進行：大西拓一郎（国立国語研究所）

発表：大西拓一郎， 岩田 礼（金沢大学）， かりまたしげひさ（琉球大学）

指定討論者：ダニエル・ロング（首都大学東京）

2月14日

招待講演

ジョン・ホイットマン（コーネル大学）

「日本諸語（諸方言）の系譜図の可能性について — 従来の研究と将来の展望」

ポスター発表

呉 琳（北海道大学大学院）

「副詞「まんじり」の通時的考察」

簡 月真（国立東華大学）

「宜蘭クレオールの基本語彙 — 4村の対照 —」

ケビン・ヘファナン（関西学院大学）

「口語における「みたいな」の固まり化 — 見かけ時間調査の結果」

今西祐介（関西学院大学）， ケビン・ヘファナン（関西学院大学）， 本田 盛（関西学院大学）

「見かけ時間調査に見える口語におけるテンス・アスペクト省略現象の増加」

東泉裕子（東京学芸大学）， 高橋圭子（東洋大学）

「和語系名詞句の用法の拡張 — 近代語および現代語コーパスの用例より —」

宮崎康支（関西学院大学大学院）

「『発達障害』概念と否定表現 —新聞記事コーパスにおける計量分析から—」

宮本淳子（常葉大学短期大学部）

「協調性を反映した言語的手段の広がり ～発話頭のハに注目して～」

白田理人（日本学術振興会 / 琉球大学），Lukas Rieser（京都大学大学院）

「喜界島上嘉鉄方言の疑問詞 nuwa/nuka 「なぜ」と文末辞 -soo の成立」

久保博雅（徳島大学大学院）

「愛媛県今治市伯方島のアクセントの現在」

林 琳（徳島大学大学院）

「中国五県における方言の地理的分布の経年変化」

トーマス・ダリン（北海道大学大学院）

「北海道諸方言における韻律的变化」

ヴォーゲ・ヨーラン（神戸女学院大学）

「ツッコミにおけるバリエーションをめぐって」

片岡邦好（愛知大学），朝日祥之（国立国語研究所）

「商業看板における「空間参照枠表現」の地域間変異について」

ワークショップ3「進行中の言語変化の通言語的考察 —東アジアを中心に—」

司会・進行：ジョン・ホイットマン（コーネル大学）

発表：ジョン・ホイットマン

コメンテーター：黄 賢景（国立国語研究所 / 日本学術振興会 PD），井上 優（麗澤大学）

ワークショップ4「日本語と方言の一世紀：社会言語学と歴史言語学が明らかにしたもの」

司会・進行：朝日祥之（国立国語研究所）

発表：朝日祥之，横山詔一（国立国語研究所），尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学），鐘水兼貴（国立国語研究所）

指定討論者：塩田雄大（NHK 放送文化研究所）

言語資源研究系

○第8回コーパス日本語学ワークショップ

2015年9月1日～2日（国立国語研究所）

9月1日

口頭発表（1）

何 龍

「日中同形語の品詞の違いによる誤用について —中国人の日本語学習者を対象として—」

中俣尚己

「[日中 Skype 会話コーパス] を用いた話題別語彙の抽出 —「食」の場合—」

森 秀明

「BCCWJ 図書館サブコーパスの代表性試論」

丸山岳彦

「[通時音声コーパス] は可能か」

ポスター発表（1）A グループ

浅原正幸，坂口智洋，渡邊友香

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現アノテーションの再修正作業」

宮城 信, 今田水穂

「『児童・生徒作文コーパス』を用いた漢字使用能力の推定」

渡辺由貴, 市村太郎

「『虎明本狂言集』における濁点表記情報 —全例に濁点が付された語を中心に—」

池上 尚, 鴻野知暁, 河瀬彰宏, 片山久留美

「『今昔物語集』のコーパス化における非コアデータの精度向上作業」

小椋秀樹

「外来語における [ei] の表記のゆれ」

ポスター発表 (1) B グループ

浅原正幸, 小西 光, 田中弥生, 加藤 祥

「品詞列・係り受け部分木に基づくラベリングツールの設計と実装 —節境界ラベリングを例
に—」

大津千尋, 三日市綾花, 須永哲矢

「形態素解析辞書「中古和文 UniDic」を用いた古文単語帳作成」

本田由美子

「二次漢語における語と漢字の意味の結びつきの特徴 —国語辞典の語義の説明文を利用した
調査—」

山崎 誠

「テキストの計量語彙論的指標はどのような条件で変化するか」

金 愛蘭

「外来語「クレーム」の基本語化とその“挫折”」

宮部真由美, 菅谷有子, 遠藤直子, 中村亜美

「『理工学系話し言葉コーパス』における後置詞の特徴—中級日本語教材をアカデミックなコ
ミュニケーション能力につなげるために—」

口頭発表 (2)

林 淳子

「中古語における意志系 Yes/No 疑問文の表現機能 —日本語歴史コーパス平安時代編を利用
して—」

劉 琳

「コーパスによる日本書紀古訓形容詞「カシコシ, サカシ」に関する調査」

芮 真慧

「漢字とその訓読みとの対応の歴史的変遷」

柴崎礼士郎

「「…事実也。」から「。事実…」へ —談話機能の発達に伴う統語位置の変化—」

9月2日

口頭発表 (3)

浅原正幸, 加藤 祥

「文体指標を特徴づける係り受け部分木の抽出」

丸山直子

「助詞の使用実態 —BCCWJ・CSJ にみる分布—」

服部 匡

「漢語動詞における格表示変化傾向の探索 —ヲ格とニ格—」

庵 功雄

「近代語から現代語にかけての名詞修飾表現の変化についての一考察 —1 項名詞に前接する限定詞を例に一」

ポスター発表 (2) A グループ

植田禎子, 飯田 龍, 浅原正幸, 松本裕治, 徳永健伸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造・共参照関係アノテーション」

田中弥生

「職場における談話の修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」

佐藤理史, 丸山岳彦

「節境界認定に関する諸問題」

竹丸孔一

「名詞の項構造データの構築」

山口昌也, 大塚裕子, 北村雅則

「ディスカッション観察支援システム FishWatchr を用いた実践手法の提案」

山田祐実, 大村 舞, 鴻野知暁, Kevin Duh, 小木曾智信, 松本裕治

「万葉集を対象とした原文と読み下し文のアライメント」

ポスター発表 (2) B グループ

田辺和子

「日英パラレルコーパスにみる日本語格外連体修飾形の訳され方」

浅原正幸, 森田敏生

「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の「文章一部分構造行列」出力機能」

中野陽子

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) のコア・データに基づく関係節付加曖昧名詞句と先行文脈内の結束連鎖の分析」

李 在鎬, 佐々木馨

「教科書コーパスを利用した難易度別コロケーション辞書の提案」

渡部涼子, 田中弥生, 小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』UniDic 版形態論情報の構築」

阿辺川武, 八木 豊, ホドシチェク・ポル, 仁科喜久子

「アカデミック・ライティングに見られる副詞に関する分析」

指定討論: 丸山岳彦, 金 愛蘭, 丸山直子, 須永哲也, 中俣尚己, 浅原正幸

全体討論

○第8回コーパス日本語学ワークショップ・サテライトシンポジウム 国立国語研究所・統計数理研究所 合同研究集会「統計的言語研究の現在」

2015年9月4日 (国立国語研究所)

セッション I

村脇有吾

「言語変化と系統への統計的アプローチ」

阿部貴人

「社会言語学におけるデータ分析の展開」

特別講演

久保拓弥

「カウントデータの統計モデリング入門」

セッションⅡ

荒牧英治

「Twitter 解析における現実と言語の差異」

新井 学, Douglas Roland

「眼球運動測定による注視時間データと反応時間としての読み時間データの分析」

C. プロジェクトの発表会

共同研究プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として多数開催している。

I. 共同研究プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

シンポジウム

○「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会 言語地理学フォーラム

2015年6月7日（国立国語研究所）

津田智史（国立国語研究所 / 日本学術振興会）

「アスペクトの全国分布地図を読む —GAJ と FPID の比較と周辺形式の地域差の把握—」

大橋純一（秋田大学）

「方言音声の追跡調査 —新潟県北部のガ行入り渡り鼻音について—」

大西宏治（富山大学）

（講演）「地図表現のルール」

松丸真大（滋賀大学）

「富山県庄川流域における疑問表現の分布」

船木礼子（神戸女子大学）

「推量表現形式、意思・勧誘表現形式の分布から見えてくること —接触と対人的用法に注目して—」

○「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」

2015年8月21日～23日（国立国語研究所）

8月21日

又吉里美

「津堅方言のテンス・アスペクト —進行相を中心に—」

島袋幸子

「沖縄今帰仁方言のアスペクト・エビデンシャルティ」

狩俣繁久

「八重山語石垣方言の間接エビデンシャルティ」

林 由華

「池間方言のテンス・アスペクト形式の意味について —完了表現を中心に—」

原田走一郎, 荻野千砂子

「黒島方言のヴォイス・アスペクト」

新永悠人

「北琉球沖縄久高島方言のアスペクト・ヴォイス接辞と主語・目的語のケースマーキング」

8月22日

當山奈那

「首里方言のヴォイスと利益性」

松本泰文

「動詞の形態論的なカテゴリー — 「メノマエ性」, 「二重使役」などのこと —」

佐々木冠

「北海道方言のヴォイスとアスペクト」

竹内史郎, 松丸真大

「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー — 関西方言と宮城県登米方言の分析 —」

下地理則, 坂井美日

「九州琉球におけるガ系とノ系による主語表示 — 類型と歴史 —」

後藤 睦

「古代日本動詞述語文の格標示方法について」

佐々木冠

「日本語方言の斜格」

8月23日

木部暢子

「日本語諸方言におけるゼロ格」

小西いずみ

「富山市方言におけるゼロ格」

金田章宏

「宮崎県椎葉村方言, 格におけるいくつかの特徴」

ディスカッション

○ 「方言の形成過程解明のための全国方言調査」 公開研究発表会 言語地理学フォーラム

2015年9月27日 (国立国語研究所)

村上敬一 (徳島大学)

「味の表現の地域差 — 『新日本言語地図』 から —」

加藤和夫 (金沢大学)

「福井県若狭地方の約35年を隔てた言語分布の比較 — 共通語化の諸相とその要因 —」

日高水穂 (関西大学)

「[接触] による方言変容の諸現象」

谷 謙二 (埼玉大学)

(講演) 「今昔マップ on the web」で見る明治以降の地域の変遷」

○ 「[字体と漢字情報] — HNG 公開10周年記念 —」

2015年11月21日～22日 (国立国語研究所)

11月21日

セッション1: 字体研究1

石塚晴通（北海道大学）

「HNG 公開 10 周年にあたり」

山田健三（信州大学）

「草体漢字と字体標準」

萩原義雄（駒澤大学）

「漢字字体規範データベースの利用 — 「フレッシュマンセミナー」での単漢字報告書—」

横山詔一（国立国語研究所）

「字体規範意識のスモールデータサイエンス」

セッション 2：字体のデジタル記述

守岡知彦（京都大学人文科学研究所）

「CHISE による HNG データ収録の試み」

須永哲矢（昭和女子大学）、堤 智昭（東京農工大学）

「コーパス構築における字体の問題とその処理」

ガリーナ・ヴォロビヨワ（キルギス国立総合大学）

「非漢字圏学習者のための漢字構造記述」

セッション 3：歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究

馬場 基（奈良文化財研究所）

「歴史的文字に関する経験知・暗黙知の蓄積と資源化の試み」

宮崎 肇（東京大学史料編纂所）

「歴史的文字分析の視点をめぐって」

高田祐一（奈良文化財研究所）

「歴史的文字に関する経験知のデータ化と共有手法」

耒代誠仁（桜美林大学）

「デジタル技術による分析と経験知の融合にむけて — 文字の数値的分析技術から見た可能性—」

11 月 22 日

セッション 4：字体研究 2

佐藤栄作（愛媛大学）

「画像データベースと漢字字体」

齋木正直（北海道大学）

「初唐の標準字体の再検討」

山下真理（東北大学）

「近世から近代日本における異字体使用の変化」

セッション 5：文字データベースと連携

池田証寿（北海道大学）

「平安時代漢字字書総合データベース構築の方法と課題 — 『類聚名義抄』を中心に—」

安岡孝一（京都大学人文科学研究所）

「開成石経と拓本文字データベース」

井上 聡（東京大学史料編纂所）

「東京大学史料編纂所と奈良文化財研究所での文字画像データベースの連携について」

永崎研宣（人文情報学研究所）

「SAT 大蔵経データベースをめぐる漢字情報」

○キックオフワークショップ「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」

2016年1月10日～11日（国立国語研究所）

1月10日

窪菌晴夫（国立国語研究所）

「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」

佐藤久美子（長崎外国語大学）

「長崎市方言におけるアクセントとイントネーション」

松浦年男（北星学園大学）

「長崎・天草方言における統語構造と韻律構造の写像関係」

基調講演

石原慎一郎（ルンド大学）

「統語節境界とイントネーション句境界の一致／不一致について」

1月11日

五十嵐陽介（一橋大学）

「宮古語池間方言・多良間方言の韻律階層」

松森晶子（日本女子大学）

「多良間島における文のプロソディー：韻律句が連なる場合の音調交替現象について」

新田哲夫（金沢大学）

「白峰方言のプロソディーの諸問題 一下降強化および複合名詞アクセント一」

II. 各プロジェクトの研究発表会

理論・構造研究系

○日本語レキシコンの音韻特性

プロジェクトリーダー 窪菌晴夫

2015年10月4日（神戸大学）

ワークショップ「三型アクセント研究の現在」

司会：小川晋史（熊本県立大学）

コメンテーター：児玉 望（熊本大学）

松倉昂平（東京大学大学院）

「福井県あわら市北潟方言及び浜坂方言の三型アクセント」

青井隼人（日本学術振興会／国立国語研究所）

「多良間方言の三型アクセント」

小川晋史（熊本県立大学）、麻生玲子（東京外国語大学大学院）

「波照間方言の三型アクセント」

シンポジウム「日本語の三型アクセント ―原理と歴史―」

司会：新田哲夫（金沢大学）、コメンテーター：上野善道（東京大学名誉教授）

松森晶子（日本女子大学）

「三型アクセント記述研究の過去、現在、未来 ―隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら―」

五十嵐陽介（一橋大学）

「南琉球宮古語の三型アクセント体系 —池間方言と多良間方言を中心に—」

新田哲夫（金沢大学），松倉昂平（東京大学大学院）

「福井平野周辺地域の三型アクセント」

2015年11月27日（名古屋大学）

金アリン（九州大学博士後期課程）

「徳之島天城町浅間方言の名詞アクセント」

クレメンス・ポッペ（国立国語研究所 / 日本学術振興会）

「日本語諸方言におけるピッチと母音の広狭の関係について」

三村竜之（室蘭工業大学）

「アイスランド語文音調序説」

定延利之（神戸大学）

「発話の「ギア」と語アクセント，イントネーション」

時空間変異研究系

○多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明

プロジェクトリーダー 相澤正夫

2016年1月24日（国立国語研究所）

林直樹（日本大学助手），田中ゆかり（日本大学教授），前田忠彦（統計数理研究所准教授）

「1万人調査からみた最新の方言意識 —「2015年全国方言意識 Web 調査」の概要と報告—」

朝日祥之（国立国語研究所准教授），尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学教授）

「北海道方言における経年変化の地域間比較 —札幌市・釧路市・富良野市・函館市における調査結果から—」

石井正彦（大阪大学教授）

「現代新聞における引用助詞“話す”の基本語化」

○日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究

プロジェクトリーダー 金水敏

2015年6月6日～7日（大阪大学）

6月6日

クリストファー・デイヴィス

「八重山語における疑問文」

西垣内泰介

「指定文」および関連する構文の構造と派生」

外池滋生

「WH 疑問文の理論と Clause-typing 理論の問題点」

6月7日

高山善行

「間接疑問文の成立をめぐって —ケム型疑問文」

張麟声

「中国における文頭疑問マーカー型の言語及び方言について」

井上優

「大丈夫ですか？」と「没事吧」

2015年12月19日～20日（国立国語研究所）

12月19日

Session 1

江口 正

「集合操作表現と間接疑問節」

黒木邦彦

「日本語における疑問対象とその形態統語範疇の関係」

松尾 愛

「現代標準アラビア語の疑問文 ―古典アラビア語との比較を中心に―」

Session 2

矢島正浩

「近代日本語の諸文体と疑問文の用法との関係」

竹村明日香

「間接疑問文とゾ・ヤ・カ・ヤラ」

金水 敏, 山田昇平

「上代・中古の「や」について」

Session 3

外池滋生

「「か／も」の移動について ―帰謬法による議論」

西垣内泰介

「指定文」を中核とするいくつかの構文について：量関係節, 潜伏疑問文, 比較構文などの分析」

12月20日

Session 4

大塚裕子

“Typology of WH-words: An Austronesian perspective”

張 麟声

「孤立型 SVO 言語のイエスノー疑問文の構文パターンについて ―WALS における記述の修正を目指して―」

Session 5

富岡 諭

「日本語, 韓国語の従属疑問文の動作主性に関する考察」

鄭 聖汝

「現代韓国語の疑問形式 KKA の成立と文タイプ ―慶南・済州方言を手掛かりに」

日高俊夫

「佐賀方言における韻律語と疑問文」

Session 6

井上 優

「日本語と中国語の「話し手情報」と「聞き手情報依存」」

森 勇太

「疑問文における「敬語」の類型 ―甌島平良方言の記述から―」

言語対照研究系

○日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究

プロジェクトリーダー ジョン・ホイットマン

2015年6月13日～14日（国立国語研究所）

6月13日

深澤美香（千葉大学大学院）

「沙流方言グループをとり囲む方言区分の再考 —アイヌ語の疑問詞を中心に—」

吉川佳見（千葉大学大学院）

「アイヌ語沙流方言の助動詞 a の「完了」用法について」

大野徹人（様似民族文化保存会）

「アイヌ民族とアイヌ語復興運動」

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

「ハンドブックのグロスについて」

6月14日

小林美紀（千葉大学大学院 / 国立国語研究所）

「アイヌ語動詞の派生と結合価」

高橋靖以（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

「アイヌ語の否定構造について」

深澤美香（千葉大学大学院）、小野洋平（統計数理研究所大学院）

「アイヌ語諸方言にみられる三種の成分」

2015年12月5日～6日（国立国語研究所）

12月5日

高橋靖以（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

「十勝地方におけるアイヌ口頭伝承の語り方について：関連性理論の論点から」

佐藤知己（北海道大学）

「アイヌ語の主要古文献とアイヌ語史の諸問題」

丹菊逸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

「アイヌ語樺太方言の特徴」

岸本宜久（北海道大学大学院）

「アイヌ語における動詞の助動詞用法と制約」

12月6日

遠藤志保（北海道博物館）

「アイヌ口承文学における言語的特徴とジャンルによる差異」

奥田統己（札幌学院大学）

「アイヌ語の系統と歴史」

日本語教育研究・情報センター

○コミュニケーションのための言語と教育の研究

プロジェクトリーダー 野田尚史

2016年2月27日（TKP ガーデンシティ博多アネックス）

野田尚史（国立国語研究所）

「言語使用実態調査に基づく聴解教材の作成方法」

島津浩美（神戸大学）

「言語使用実態調査に基づくコーヒーショップでの注文時の聴解教材」

太原ゆか（日本国際協力センター）

「言語使用実態調査に基づく訪問者対応時の聴解教材」

萩原章子（国際基督教大学）

「言語使用実態調査に基づく大学講義の聴解教材」

D. NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月1回、国立国語研究所で開催している。2015年度は下記12件を開催した。

○第57回 2015年4月7日

田窪行則（京都大学教授／国語研客員教授）

「危機言語・危機方言のドキュメンテーションの道具としてのデジタル博物館：配信機能付きのメディアデータベース」

○第58回 2015年6月2日

下條光明（ニューヨーク州立大学バッファロー校准教授）

「日本語書き言葉ナラティブにおける注意の中心と主題形式 一母語話者と英語母語の学習者の比較一」

○第59回 2015年6月16日

鈴木 泰（専修大学教授）

「昭和初期における橋本進吉の文法論の展開 一昭和4年と7年の講義筆記を比較して一」

○第60回 2015年7月2日

Bernd Heine（ケルン大学名誉教授）

“Discourse grammar: Some linguistic and neurological observations”

○第61回 2015年9月15日

上野善道（東京大学名誉教授）

「鼻濁音2題」

○第62回 2015年10月13日

中川誠司（産業技術総合研究所 上級主任研究員）

「非侵襲計測によるヒトの聴覚・音声知覚・言語機能の解明」

○第63回 2015年11月24日

狩俣繁久（琉球大学教授）

「沖縄島幸喜方言の終助詞とモダリティー」

○第64回 2015年12月8日 人間文化研究機構第5回日本研究功労賞受賞記念コロキウム

アレキサンダー・ボビン（フランス国立社会科学高等研究院教授）

「上代日本列島の民族言語史」

○第65回 2015年12月11日

伝 康晴（千葉大学教授）

「コーパス言語学的手法による会話インタラクションの分析」

- 第 66 回 2016 年 1 月 19 日
Gabriel Bergounioux (オルレアン大学教授 / ロワール地域圏言語学研究所長)
“A Corpus of Spoken French: ESLO”
- 第 67 回 2016 年 2 月 2 日
真田信治 (奈良大学教授)
「Vernacular の記述について — 個人語彙における基底層 —」
- 第 68 回 2016 年 3 月 8 日
砂川有里子 (筑波大学名誉教授 / 国語研客員教授)
「「です」と「ます」の文法化 — 好まれる語順への変化の過程 —」

E. NINJAL サロン

国語研の研究者 (共同研究員を含む) を中心として, 各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。2015 年度は第 125 回から第 140 回までを開催した。

- 第 125 回 2015 年 4 月 14 日
アンナ・ブガエワ (言語対照研究系特任准教授)
「アイヌ語と日本語の言語接触について — 日本語からアイヌ語への統語的借用の可能性 —」
- 第 126 回 2015 年 4 月 28 日
丁美貞 (時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員)
「岡崎敬語調査の機能的要素の経年変化 — 「荷物預け」場面の対人配慮」
- 第 127 回 2015 年 5 月 19 日
アレキサンダー・ラテ (オハイオ州立大学大学院生 / 国語研特別共同利用研究員)
「日韓祖語の新たな語彙的証拠, そして形態論的根拠」
- 第 128 回 2015 年 5 月 26 日
佐々木藍子 (日本語教育研究・情報センタープロジェクト非常勤研究員), 細井陽子 (日本語教育研究・情報センタープロジェクト非常勤研究員)
「学習者コーパスにおける十分条件と必要条件 — 日本語学習者コーパス (I-JAS) 構築に向けて —」
- 第 129 回 2015 年 6 月 9 日
小西 円 (日本語教育研究・情報センタープロジェクト非常勤研究員), 須賀和香子 (日本語教育研究・情報センタープロジェクト非常勤研究員), 八木 豊 (株式会社ピコラボ), 迫田久美子 (日本語教育研究・情報センター教授)
「学習者発話の高度な形態素解析を目指したタグの設計 — 日本語学習者コーパス (I-JAS) の構築に向けて —」
- 第 130 回 2015 年 6 月 23 日
尹 鎬淑 (サイバー韓国外国語大学校教授 / 国語研外来研究員), 川崎千枝見 (広島国際学院大学), 迫田久美子 (日本語教育研究・情報センター教授)
「e-learning を使ったライティングにおける誤用への間接的フィードバックの研究 — 韓国語母語話者の受身, 助詞, モダリティ, 自他動詞の誤用を中心に —」
- 第 131 回 2015 年 6 月 30 日
松井真雪 (理論・構造研究系プロジェクト PD フェロー)

- 「閉鎖音と摩擦音の有声性：ロシア語の知覚実験から」
- 第 132 回 2015 年 7 月 14 日
今田水穂（言語資源研究系共同研究員 / 文部科学省教科書調査官）
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する情報構造アノテーション」
- 第 133 回 2015 年 12 月 22 日
小西 光（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）
「近代口語文翻訳小説コーパス構築の概要と計量的分析」
- 第 134 回 2016 年 1 月 26 日
浅原正幸（言語資源研究系准教授）
「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の現状」
- 第 135 回 2016 年 2 月 9 日
鶴谷千春（グリフィス大学准教授 / 国語研外来研究員）
「丁寧さに現れる日本語プロソディの研究」
- 第 136 回 2016 年 2 月 23 日
大島 一（広報室非常勤研究員）
「ハンガリー語と日本語の結合の複数について」
- 第 137 回 2016 年 3 月 1 日
スティーブン・ライト・ホーン（国語研外来研究員）
「万葉集コーパスの統語情報付与」
- 第 138 回 2016 年 3 月 15 日
船越健志（理論・構造研究系特任助教）
「日本語の動詞句省略と付加詞脱落」
- 第 139 回 2016 年 3 月 22 日
藤本 灯（理論・構造研究系特任助教）
「『色葉字類抄』研究の現状と展望」
- 第 140 回 2016 年 3 月 29 日
前川喜久雄（言語資源研究系教授）
「日本語 final lowering の GLMM による統計的モデリング」

F. その他

- 「「方言」と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学—「ことば」と「ことば」の接点—」第 2 回地球研・国語研合同研究会
2015 年 7 月 30 日（国立国語研究所）
相澤正夫（国立国語研究所）
「『外来語』を言い換えるとは—理念と実践—」
山崎 誠（国立国語研究所）
「日常語と専門用語との接点—コンピュータ用語の定着過程から—」
朝日祥之（国立国語研究所）
「日本語起源の外行語と日系移民のトランスナショナリティ」
門司和彦（長崎大学）、ハイン・マレー、蔣 宏偉（総合地球環境学研究所）
「健康・公衆衛生をめぐる概念の整理とエコヘルス」

○「北米日系社会の移民資料を活用した言語生活史研究」研究発表会

2016年3月16日（国立国語研究所）

横田カーター啓子（ミシガン大学大学院日本学研究司書）

「Digital Humanities：北米大学図書館の現在 —ミシガン大学日本（人文学）研究・日本語資料とのかかわりで考える」

7 センター・研究図書室の活動

研究情報資料センター

研究者の共同利用に供するため、日本語学・言語学・日本語教育学に関する国内外の各種研究情報・研究資料を調査・収集している。

- ・Webサイトのリニューアルを行った。
- ・「国立国語研究所学術情報リポジトリ」を構築・公開した。
- ・「日本語研究・日本語教育研究文献データベース」に文献情報を定期的に追加（5月・7月・10月・1月の年度内4回合計3,002件）及び国立大学の学術リポジトリとのリンクを進めるとともに著者名をひらがな・ローマ字検索ができるようにシステム改修を行った。
- ・研究図書室所蔵の日本語史研究資料のデジタル画像（『小三金五郎仮名文章娘節用』、『春色梅児与美』、『比翼連理花廻志満台』、『おくみ惣次郎春色江戸紫』、『改正増補和英英和語林集成』、『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』（院政期写本）、『尚書』（古活字版）、『中華若木詩抄』（寛永十年版）、『かたこと』、『徒然草』（寛文七年版）、『仮名文字遣』、『通言総籙』、『大磯風俗仕懸文庫』、『青楼阿蘭陀鏡』、『標題徐状元補注蒙求』、『古文真宝抄』、『倭玉篇』（慶長十八年版）、『補忘記』（元禄版）、『磨光韻鏡』、『かさし抄』、『あゆひ抄』、『石場妓談辰巳婦言』、『字音仮字用格』、『梅曆余興春色辰巳園』、『仮字本末』、『仮字類纂』、『哲学字彙』）及び『諸国方言物類称呼』、『比翼連理花廻志満台』の翻字テキストを公開した。
- ・データベース（「トピック別アイヌ語会話辞典」「岡関敬語調査データベース」の受け入れを行った。
- ・「よくある「ことば」の質問」にQ&Aを追加、補記した。
- ・『国立国語研究所論集』第9号（7月）・第10号（1月）、『国語研プロジェクトレビュー』第6巻第1号（6月）・第6巻第2号（10月）・第6巻3号（3月）を刊行した。
- ・研究資料室収蔵資料データベースの構築を開始した。

コーパス開発センター

コーパス開発センターでは、日本語言語資源の整備計画であるKOTONOHA計画に従って、国内外の研究者の共同利用に供するため、各種言語資源の開発、整備、公開を進めている。開発に際しては言語資源研究系との間に密接な協力関係を維持しているが、センター独自で「国語研日本語ウェブコーパス（NWJC）」構築も進めた。

- ・『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』（短単位データ）を公開した（2015年4月）。
- ・『日本語歴史コーパス 平安時代編』から、ジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集』（小学館）へのリンクを実現した（2015年4月）。
- ・第8回コーパス日本語学ワークショップを開催した（2015年9月）。
- ・国立国語研究所・統計数理研究所合同研究集会「統計的言語研究の現在」（第8回コーパス日本語

- 学ワークショップ サテライトシンポジウム) を開催した (2015 年 9 月)。
- ・コーパス利用技術の普及を目標とした講習会を開催した。ChaKi.NET 講習会を開催した (東京地区: 2015 年 8 月, 中京地区: 2015 年 9 月)。
- ・「洒落本コーパス」「人情本コーパス」の試作版を公開した (2015 年 10 月)。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

2015 年度は、所蔵資料の現物貸借サービス開始に向けて、利用規程の改正や申合せの制定を行った。また、外国雑誌購入費の増加を抑えるため、冊子体からオンラインジャーナルへ切り替えることを決定した。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9 時 30 分～17 時
(土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室)
- ・主なコレクションには、東条操文庫 (方言)、大田栄太郎文庫 (方言)、保科孝一文庫 (言語問題)、見坊豪紀文庫 (辞書)、カナモジカイ文庫 (文字・表記)、藤村靖文庫 (音声科学)、林大文庫 (国語学)、輿水実文庫 (国語教育)、中村通夫文庫 (国語学) などがある。
- ・「国立国語研究所 蔵書目録データベース」を Web 検索できる。
- ・図書館間文献複写サービス (NACSIS-ILL) により、所属機関の図書館を通して複写を申し込み、郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数 (2016 年 4 月 1 日現在)

	図書	雑誌
日本語	120,449 冊	5,316 種
外国語	30,653 冊	528 種
計	151,102 冊	5,844 種

※視聴覚資料など 7,772 点を含む



国際的研究協力と社会貢献

1 国際的研究協力

国語研全体の研究テーマである「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

オックスフォード大学との提携

2015年に国語研は、オックスフォード大学人文科学部と学術交流協定を締結した。その以前から、歴史的な日本語のコーパスの構築について研究交流を行っていたが、この協定は、さらに研究交流を拡大させるとともに、両機関の若手の日本語研究者の交流と育成にも取り組み、日本語に関する言語学研究が日英両国だけでなく世界規模で促進されることを目的としている。

台湾・中央研究院語言學研究所との提携

台湾の中央研究院と、共同研究や、研究資料の交流についての研究協力に関する覚書を交換している。主に中央研究院語言學研究所とのシンポジウムの共同開催や、研究者間の盛んな交流等を通じて発展した研究活動を行い、特に東アジア地域における言語研究のさらなる促進を目的としている。

北京日本学研究中心との提携

北京日本学研究中心と、研究者の相互交流や、国際的な共同研究の推進に関する学術交流合意書を締結している。本合意書に基づき、日本語学習者の縦断コーパスの構築や、そのデータに基づく実証的研究に取り組んでいる。

国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、NINJAL国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している。

日本語研究英文ハンドブック刊行計画

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードするDe Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社 ベルリン／ポストン）からの申し出により、国語研の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本語言語学の研究に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（全12巻予定）を順次刊行しており、2015年度は心理言語学、レキシコン・語形成、応用言語学の3巻を刊行した。このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学 教授） Masayoshi Shibatani (Rice University)

影山太郎（国立国語研究所 所長） Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成

全巻英文，各巻 600 ～ 700 ページ

1. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig (University of Oxford/NINJAL), Satoshi Kinsui (Osaka University/NINJAL) and John Whitman (NINJAL)

2. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*

Edited by Haruo Kubozono (NINJAL)

3. *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*

Edited by Taro Kageyama (NINJAL) and Hideki Kishimoto (Kobe University/NINJAL)

4. *Handbook of Japanese Syntax*

Edited by Masayoshi Shibatani (Rice University/NINJAL), Shigeru Miyagawa (MIT/NINJAL) and Hisashi Noda (NINJAL)

5. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen (Harvard University) and Yukinori Takubo (Kyoto University/NINJAL)

6. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*

Edited by Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL)

7. *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe (NINJAL) and Tetsuo Nitta (Kanazawa University)

8. *Handbook of the Ryukyuan Languages*

Edited by Patrick Heinrich (Dokkyo University), Shinsho Miyara (formerly, University of the Ryukyus) and Michinori Shimoji (Kyushu University/NINJAL)

9. *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue (Meikai University/NINJAL), Mayumi Usami (Tokyo University of Foreign Studies) and Yoshiyuki Asahi (NINJAL)

10. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*

Edited by Mineharu Nakayama (Ohio State University/NINJAL)

11. *Handbook of Japanese Applied Linguistics*

Edited by Masahiko Minami (San Francisco State University/NINJAL)

12. *Handbook of the Ainu Language*

Edited by Anna Bugaeva (NINJAL)

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員として招へいすると同時に，研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また，海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う，外来研究員（2015年度新規6名）や特別共同利用研究員（2015年度新規4名）として受け入れている。

消滅危機方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語(話者が非常に少なくなってきた言語)には、日本国内の8つの言語(方言)が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国語研では日本語コーパスの整備を進めており、英語等の主要なコーパスと肩を並べる1億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を2011年に全面的に公開した。これにより、用法や表記の揺れの実態が端的に把握できる等の利便性を、研究者のみならず、日本語(国語)教師、日本語学習者、マスコミなど多方面に提供している。さらに、100億語規模の超大規模現代日本語コーパスの設計・構築も進行中である。

多文化共生社会における日本語教育研究

近年、在日外国人や留学生の増加にともなって日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している。様々な言語的・文化的背景を持つ人びとが生活する現代社会においては、それにふさわしい日本語教育や学習の在り方に関する探究がますます大切になっている。国語研は、第二言語(外国語)としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究によって、国内外における日本語教育・学習の内容と方法の改善や、異文化摩擦などの社会的問題の解決に資する成果を提供している。

地方自治体との連携

- 地方自治体の協力を得て、研究成果を分かり易く説明するNINJALセミナーを各地で開催した。(内容はp.79に掲載)
- 立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動
 - ・2015.7.18 子ども向け一般公開イベント・ニホンゴ探検において、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明を行った。
 - ・2015.11.29 歴史民俗資料館において、理論・構造研究系准教授 高田智和による講演会「印刷本からわかること～文字から立川を探る～」を開催した。

訪問者の受入等

NINJAL 職業発見プログラム・ジュニアプログラム

- 2015.7.10 仙台第一高等学校
- 2015.7.23 明星学園中学校
- 2015.7.30 明星学園中学校
- 2015.8.4 兵庫高校
- 2015.9.17 群馬県立高崎東高校
- 2015.10.23 横浜翠嵐高等学校

- 2015.11.13 開智高校
- 2015.11.19 大妻中学校
- 2016. 1.22 加古川東高校
- 2016. 3.11 中央中等教育学校
- 2016. 3.25 阿南町立大下条小学校

見学・研修・視察等

- 2015. 5.18 文部科学省研究振興局学術機関課長
- 2015. 6. 8 立川第二中学校職業体験学習
- 2015. 6.15 文部科学省関係機関職員研修生実地研修
- 2015. 9.30 同志社東京校友会歩こう会
- 2015.12.24 文部科学省研究振興局学術機関課学術研究調整官
- 2016. 3.30 国分寺市泉町三丁目地区連合自治防災会

学会等の後援

- ・第6回立川文学賞 2015.7-2016.6
主催者：立川文学賞実行委員会
- ・平成27年度危機的な状況にある言語・方言サミット（沖縄大会） 2015.9.18
主催者：文化庁，沖縄県，国立大学法人琉球大学
開催地：沖縄県立博物館・美術館
- ・平成27年度日本語教育能力検定試験 2015.10.25
主催者：公益財団法人日本語教育支援協会
- ・日本語ボランティアシンポジウム2015「多文化のなかの子ども支援」 2015.12.5
主催者：公益財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター
- ・第14回全養協公開講座 2016.1.16
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：学校法人吉岡教育学園千駄ヶ谷日本語学校
- ・第7回地球研東京セミナー「人が空を見上げるとき：文化としての自然」 2016.1.29
主催者：総合地球環境学研究所
開催地：有楽町朝日ホール
- ・第7回産業日本語研究会・シンポジウム 2016.2.29
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
開催地：丸ビルホール

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

○第9回「ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」

2016年3月5日（一橋大学一橋講堂 学術総合センター）

[講演]

木部暢子

「危機方言はおもしろい —方言にひそむ多様な発想法—」

前川喜久雄

「言語研究のインフラ整備 —日本語コーパスから見てきたもの—」

窪蘭晴夫

「日本語の音声 —促音（っ）の謎—」

プラシャント・パルデン

「言語の普遍性と多様性 —自動詞・他動詞の対応にみられる普遍的傾向—」

迫田久美子

「日本人と外国人の日本語コミュニケーション —学習者の「安全な誤用」と「危険な正用」—」

[ポスター展示とデモンストレーション]

理論・構造研究系

ティモシー・バンス

「上代語連濁データベース」

影山太郎

「複合動詞レキシコン」

時空間変異研究系

相澤正夫

「SP 盤レコードが拓く日本語研究」

大西拓一郎

「方言の形成過程の解明 —方言分布の経年比較に基づく—」

井上史雄

「敬語の成人後採用と記憶時間」

井上文子

「方言コーパス試作版」

言語資源研究系

山崎 誠

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) の概要と検索」

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス (CHJ)』の概要と検索」

言語対照研究系

今村泰也, プラシャント・パルデン

「日本語教育に役立つ『基本動詞ハンドブック』の開発」

アンナ・ブガエワ, 小林美紀

「アイヌ語研究の新しい局面へ向けた取り組み —アイヌ語班研究活動報告—」

ジョン・ホイットマン, 長崎 郁

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 —3年間の研究成果から—」

アンナ・ブガエワ, 小林美紀

「語りの中に生きることば —『アイヌ語の口承文芸コーパス』—」

日本語教育研究・情報センター

石黒 圭

「接続詞に透けて見えるジャンルの不思議 —商学・経済学・法学・社会学・国際政治学の違い

を例に一」

野山 広

「日本に定住した外国人のことばの使用と環境に関する縦断的研究 ―日本語学習者の会話力に焦点を当てながら見えてきたこと―」

コーパス開発センター

浅原正幸

「『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』の概要と検索」

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて、その研究内容を様々な形で一般の方々に発表し、地域社会と触れ合う場としてNINJAL セミナーを次のように実施した。

○「データが主導する日本語研究」

2015年9月15日（国立台湾大学（台北市，台湾））

○「平成27年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（沖縄大会）」

2015年9月18日（沖縄県立博物館・美術館）

「ことば」展示

国語研が行う「日本語・言葉の研究」について楽しみながら触れることができる一般公開イベントを開催した。（立川観光協会「立川体験スタンプラリー」対象イベント）

2015年10月17日（国立国語研究所）

プログラム

- ・パネル展示
- ・ことばの実験体験コーナー
- ・映像上映コーナー

児童・生徒向けイベント

職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問の楽しさやすばらしさを知ってもらうためのプログラム。（受入校は、p.76に掲載）

ジュニアプログラム（小学生向け）

小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施した。

○「めざせ、ことば博士！みんなの方言を調べてみよう」

2015年7月31日（立川市西砂学習館・出前授業）

対象：小学3～6年生

講師：朝日祥之（時空間変異研究系准教授）、柏野和佳子（言語資源研究系准教授）

○「あなたと私の方言 ―日本語の不思議な世界―」

2016年2月16日（立川市立第六小学校・出前授業）

対象：小学5年生

講師：朝日祥之（時空間変異研究系准教授）、大島 一（広報室広報コミュニケーター）

○「めざせ！辞書引きの達人」

2016年2月22日（立川市立西砂小学校・出前授業）

対象：小学4年生

講師：柏野和佳子（言語資源研究系准教授）、大島 一（広報室広報コミュニケーター）

○「めざせ！辞書引きの達人」

2016年3月25日（阿南町立大下条小学校・訪問受入）

対象：小学6年生

講師：柏野和佳子（言語資源研究系准教授）、大島 一（広報室広報コミュニケーター）

ニホンゴ探検 2015 ー1日研究員になろうー

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。

2015年7月18日（国立国語研究所）

プログラム

・ことばのミニ講義

「日本語も外国語もおもしろい！」 迫田久美子（日本語教育研究・情報センター教授）

「話しことばのひみつどうぐ」 丸山岳彦（言語資源研究系准教授）

・変わっていく「ことば」～過去から現在、そして未来へ～

・辞書引きコーナー

・にほんご☆スタンプラリークイズ

・れきみんワークショップ

・ことばシアター

3 大学院教育と若手研究者育成

（1）連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。その中で、国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。

（2）特別共同利用研究員制度

国語研では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備、文献等の利用や、国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。（2015年度新規4名受入）

（3）NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年

数回、全国各地で実施している。2015年度は第18回～第19回を実施した。

受講対象：原則として、大学院生レベル

- ・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等

○第18回 2015年9月1日（一橋大学一橋講堂）

「言語生活のロジスティック回帰分析入門」

講師：横山詔一（理論・構造研究系教授）

○第19回 2016年2月19～20日（那覇市内）

「言語類型論の最新の動向 ―理論研究と応用研究の接点―」

講師：プラシャント・パルデシ（言語対照研究系教授）

講習会

○『日本語歴史コーパス』「中納言」講習会

2015年5月23日（国立国語研究所）

○『ChaKi.NET』講習会（東京地区）

2015年8月21日（ジャストシステム本社）

○『ChaKi.NET』講習会（中京地区）

2015年9月14日（名古屋大学）

（4）優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクトPDフェロー）を設け、公募により積極的に採用している。（2015年度在籍者8名、内新規採用2名）



教員の研究活動と成果

影山 太郎 (かげやま たろう) 国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学, 1977)

【学歴】 大阪外国語大学英語学科卒業 (1971), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了 (1973), 南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了 (1977)

【職歴】 神戸学院大学教養部助手 (1973-1974), 大阪大学言語文化部講師 (1978-1980), 同助教授 (1980-1987), 関西学院大学文学部教授 (1987-2009), パリ第7大学 (招聘教授, 2008), 関西学院大学名誉教授 (2009), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長 (2009), 国立国語研究所 所長 (2009.10)

【専門領域】 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論, 言語類型論

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問 (元会長)・評議員; 日本語学会 評議員; 関西言語学会 運営委員; 特定非営利活動法人言語資源協会 (GSK) 理事; 日本国際教育支援協会 理事; 文化審議会 国語分科会臨時委員; 財団法人新村出博士記念財団 委員

【受賞歴】

1994 第22回金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 著書『文法と語形成』)

1980 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 著書『日英比較 語彙の構造』)

1973 東京言語研究所言語学懸賞論文賞 (東京言語研究所, 論文「場所理論的見地から」『言語の科学5』)

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」: リーダー

研究目的:

語彙と語形成の仕組みを, 辞書における静的な項目列挙としてではなく, 意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え, 日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目的とする, そのため, 理論的分析だけでなく, 外国語との比較, 心理実験, 歴史的变化, 方言, コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチをとる。ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れる現象として, 具体的には, (1) 動詞の自他と項交替, (2) 動詞+動詞型の複合動詞, (3) 事象表現と属性表現, (4) レキシコンと意味・統語, という4つの事項を解明するため, それぞれでチームを編成して取り組む。

研究成果:

本年度は次のとおり成果の取りまとめと出版を行った。

(共同研究, 成果発信, 国際化)

①日本語語彙論に関する世界初の包括的論文集として, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (全19章, 706頁) を2016年1月に De Gruyter Mouton 社から出版した。

②NINJAL 国際シンポジウム(2012)の成果をまとめた論文集として, Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (496頁) を執筆・編集し, 校正を終えた。De Gruyter Mouton から2016年7月に刊行予定。

- ③ NINJAL 国際シンポジウム (2013) の成果をまとめた論文集 (Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*) の出版契約を Oxford University Press と結び、執筆・編集を進めた。
- ④ 世界諸言語の動詞結合価に関するマックスプランク進化人類学研究所との連携研究の成果として、論文 Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki “Valency classes in Japanese” を Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World’s Languages*, Vol.1, pp.765–805 (Berlin: De Gruyter Mouton, 2015.9.) で刊行した。
- ⑤ 若手研究者育成のため、影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.7』において共同研究者の執筆による「日本語レキシコン入門Ⅱ」の特集を組み、出版した (ひつじ書房, 2016年3月)。

(共同利用)

[オンラインデータベース] 昨年度に完成・更新したオンライン辞書「複合動詞レキシコン (国際版)」について、国内外の研究者 (教育関係, 情報学関係) からの要望を承け、本データベースを用いた共同利用を促進するため、オリジナルデータ (エクセルファイル) を Web サイトからダウンロードできるようにした (2015年11月)。

【研究業績】

《著書・編書》

Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.)

Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

影山太郎 (編)

『レキシコンフォーラム No.7』, ひつじ書房, 2016.3.

《論文・ブックチャプター》

Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki

“Valency classes in Japanese”, Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World’s Languages*, Vol.1, pp.765–805, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2015.9.

Taro Kageyama and Michiaki Saito

“Vocabulary strata and word formation processes”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.11–50, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

Hideki Kobayashi, Kiyoko Yamashita, and Taro Kageyama

“Sino-Japanese words”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.93–131, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

Takayasu Namiki and Taro Kageyama

“Word structure and headedness”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.201–235, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

Taro Kageyama

“Noun-compounding and noun-incorporation”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.237–272, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

Taro Kageyama

“Verb-compounding and verb-incorporation”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.273–310, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

Taro Kageyama

“Lexical integrity and the morphology-syntax interface”, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, pp.489–528, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.1.

影山太郎

「名詞＋動詞型の複合動詞」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.7』, pp.1–18, ひつじ書房, 2016.3.

小林英樹, 影山太郎

「形と意味のミスマッチ」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.7』, pp.41–55, ひつじ書房, 2016.3.

影山太郎

「句につく語と形態素」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.7』, pp.57–73, ひつじ書房, 2016.3.

【講演・口頭発表】

影山太郎

「回顧と展望」(招待講演), 日本言語学会第150回大会記念フォーラム「日本言語学会の回顧と展望」, 大東文化大学, 2015.6.21.

影山太郎

「言語類型と2種類の複合動詞」, 東京外国語大学国際日本研究センター「外国語と日本語との対照言語学的研究」第16回研究会, 東京外国語大学, 2015.7.11.

影山太郎

「対照言語学から照射した現代日本語文法：名詞抱合と言語類型」(招待講演), 日本語文法学会第16回大会シンポジウム「関連領域から照射した現代語文法」, 学習院女子大学, 2015.11.14.

影山太郎

「国立国語研究所 一世界のグローバル化と日本語研究」(基調講演), 東京外国語大学大学院国際日本学研究院国際シンポジウム「国際日本研究 一対話, 交流, ダイナミクス」, 東京外国語大学, 2016.1.31.

影山太郎, 神崎享子

「複合動詞レキシコン」(ポスター発表), 第9回NINJALフォーラム「ここまで進んだ!ここまですで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【その他の学術的・社会的活動】

・ 日本語言語学の国際普及

Oxford Research Encyclopedia of Linguistics, Advisory Board & Senior Editor (Japanese/Korean/Chinese linguisticsほかの編集を担当), Oxford University Press, 2014–.

窪 蘭 晴夫 (くぼの はるお) 理論・構造研究系 教授, 研究系長

1957 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部卒業(1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了(1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了(1986)

【職歴】 南山大学外国語学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国語大学外国語学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology, International Phonetic Association

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 会長; 日本音声学会 理事・企画委員長・評議員; 日本学術会議 連携会員; 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員; 台湾東呉大学 客員教授; 市河三喜賞 審査委員・幹事; 東京言語研究所 運営委員; The Association for Laboratory Phonology, Executive Committee member; Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP), Advisory Editor; International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS), Permanent council member; *Lingua*, Editorial board member.

【受賞歴】

2015 国立国語研究所第10回所長賞

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

1997 金田一京助博士記念賞 (金田一賞)

1995 市河三喜賞

1988 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985 イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」: リーダー

研究目的:

本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し, 世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究者として参画してもらうことにより, 通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で, 時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し, また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが, 本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより, 日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを, 音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域(音声学, 音韻論, 国語史, 言語獲得, 日本語教育)の専門家を集め共同研究を推進する。

アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより、(i) 日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究、類型論研究にどのような知見を与えるか、(ii) 逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。

研究成果：

1. 共同研究

- ・日本音声学会第29回大会(2015年10月4日)において日本語アクセントに関するシンポジウム「日本語の三型アクセント —原理と歴史—」とワークショップ「三型アクセント研究の現在」を共同研究員の協力を得て企画した(参加者数60余名)。
- ・2015年11月27日に名古屋大学にて研究成果発表会を開催し、研究発表3件(うち2件は若手研究者)と講演を企画した(参加者数27名)。
- ・共同研究および国際シンポジウムの成果を下記3.1の欄の英文論文集にまとめ、編集作業を行った。

2. 国際化

- ・促音に関する国際ワークショップ GemCon 2015 (2015年8月12日, イギリス・グラスゴー) を世界最大の音声学国際会議 (ICPhS 2015) のサテライトワークショップとして企画した(参加者18ヶ国, 76名; 発表者11ヶ国, 23名)。
- ・国際シンポジウム ICPP 2015 (International Conference on Phonetics and Phonology, 2015.9.25-27) を慶應義塾大学言語文化研究所と共催し、国内外から90名(3日間で延べ185名)の参加を得た。
- ・下記3.1の欄の英文論文集の編集作業を進めた。

3. 成果発信(講演・口頭発表については該当項目参照)

- ・アクセント関係の英文論文集 *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton) の編集を進め、合計13編の論文について再査読と英文校閲を行った(2016年前半に入稿, 2017年度初頭に刊行の予定)。
- ・促音関係の英文論文集 *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press) の編集を進め、合計14編の論文について(再)査読と英文校閲を行った(2016年4月に入稿, 2017年2月に刊行予定)。
- ・2014年に招致した実験音韻論国際会議(LabPhon 14)の成果を集めた論文集として *Laboratory Phonology* 特集号(Special issue: Corpus-based approaches to the phonological analysis of speech, Guest editors: Haruo Kubozono, Kikuo Maekawa, and Timothy J. Vance) の編集作業を行い、2015年10月に刊行した。

4. 教育, 若手研究者の育成

- ・プロジェクトPDフェローを新規に1名雇用し、育成に努めた。
- ・国内の若手研究者(大学院生)1名に対し、アクセント調査の旅費を支援した。
- ・上記の国際シンポジウムICPP 2015において、国内外からの若手発表者5名に旅費支援を行った。
- ・上記の日本音声学会ワークショップにおいて若手発表者4名に旅費支援を行った。
- ・第11回音韻論フェスタ(2016.3.10-11, 立命館大学)の若手発表者3名に旅費支援を行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題(研究代表者)】

- ・基盤研究(A)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」
- ・挑戦的萌芽研究「「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究」

【研究業績】

《著書・編書》

Haruo Kubozono, Kikuo Maekawa, and Timothy J. Vance (eds.)

Laboratory Phonology, Vol.6, No.3-4, (Special issue: Corpus-based approaches to the phonological analysis of speech), 2015.10.

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono

“Japanese dialects and general linguistics”, 『言語研究』 148, pp.1-31, 2015.9.

窪蘭晴夫

「日本語の方言と一般言語学 — 「音節量」による一般化—」, 『文化情報学』 11 (2), pp.112-116, 同志社大学文化情報学会, 2016.3.

《国際会議録》

Haruo Kubozono

“High tone shift and spreading in endangered Japanese dialects”, *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS 2015, DVD)*, Glasgow, 2015.8.10-14.

《データベース類》

・ 雫石方言アクセントデータベース（上野善道氏データ）の作成と内部配付。 2016.3.

【講演・口頭発表】

窪蘭晴夫

「日本語の二重母音とアクセント」（招待講演），関西言語学会第40回記念大会，神戸大学，2015.6.14.

窪蘭晴夫

「日本語の方言研究と一般言語学」（会長就任講演），日本言語学会150回大会，大東文化大学，2015.6.21.

窪蘭晴夫

「日本語の構造と音声教育」（招待講演），国際日本語普及協会（AJALT）研修会，2015.7.9.

Haruo Kubozono

“Question and vocative intonation in Japanese”（招待講演），上智大学言語学会30周年記念大会，上智大学，2015.7.18.

Haruo Kubozono

“Focus prosody in Kagoshima Japanese”, *International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2015)*, Keio University, 2015.9.26.

窪蘭晴夫

「日本語の方言と一般言語学」（招待講演），同志社大学文化情報学研究科共通シンポジウム，同志社大学，2015.11.11.

窪蘭晴夫

「日本語の音声と異文化間コミュニケーション」（招待講演），立命館大学言語教育情報研究科学術講演会，立命館大学，2016.2.4.

窪蘭晴夫

「日本語研究と英語研究の相互作用」（招待講演），奈良女子大学欧米言語文化学講演会，奈良女子大学，2016.2.18.

窪蘭晴夫

「日本語の音声 一促音（っ）の謎―」, 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

- ・2016.2 薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のイントネーション調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・International Workshop on Geminate Consonants (GemCon 2015), SECC, Glasgow（企画・運営）2015.8.12.
- ・International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2015)（慶應義塾大学言語文化研究所と共同で企画・運営）2015.9.25-27.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・日本学術振興会外国人特別研究員（1名）の受入

Timothy J. Vance (ティモシー・J・バンス)

理論・構造研究系 教授, 研究情報資料センター長

1951 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (シカゴ大学, 1979)

【学歴】 ワシントン大学 (セントルイス) 卒業 (1973), シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了 (1976), シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了 (1979)

【職歴】 ハワイ大学マノア本校 准教授 (1988), コネチカット・カレッジ 准教授 (1993), 同 教授 (1994), アリゾナ大学 教授 (2000), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2010), 研究情報資料センター長 (2013.10)

【専門領域】 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 言語科学会, 日本音声学, 日本音韻論学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 編集委員; 日本音韻論学会 理事

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン — 連濁事典の編纂」: リーダー

研究目的:

本プロジェクトの最終目的は、連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は、(1) 連濁の由来と史的变化, (2) ライマンの法則, (3) 右枝条件, (4) 連濁と形態・意味構造, (5) 連濁と語彙層, (6) 他の音韻交替と連濁の相互作用, (7) アクセントと連濁の相互作用, (8) 連濁と表記法, (9) 連濁に関する心理言語学研究, (10) 方言の連濁, (11) 連濁と日本語学習, (12) 連濁研究史, 等々である。事典には、包括的な参考文献一覧も含める。

研究成果:

リーダー・プロジェクト共同研究員の執筆により、連濁に関する査読付き論文 4 本を 2015 年度に刊行した。

リーダー・プロジェクト共同研究員により、連濁に関する口頭発表 2 件およびポスター発表 1 件を 2015 年度に行なった。

ボルドー大学で開催されたフランス音韻論ネットワーク (French Phonology Network) の第 13 回年次大会の翌日 (2015 年 7 月 2 日) に「連濁研究ハンドブックの編纂」をテーマに特別ワークショップを行なった。参加人数は、プロジェクトのリーダーと共同研究員 4 人を含めて 25 人であった。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

ティモシー・J・バンス

「連濁の不規則性とローゼンの法則」, 『国立国語研究所論集』9, pp.207-214, 2015.7.

ティモシー・J・バンス

「連声は現代日本語に生きているか」, 西原哲雄, 田中真一 (編) 『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』, pp.147-159, 開拓社, 2015.11.

《データベース類》

・ The Old Japanese Rendaku Database (version 1.0) 公開 2016.2.

<http://pj.ninjal.ac.jp/rendaku/database/>

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance

“Spelling pronunciation in Japanese”, 13th Meeting of the French Phonology Network, Bordeaux, France, 2015.7.

Timothy J. Vance

“The Old Japanese Rendaku Database and the strong version of Lyman’s Law”, 17th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences, Beppu City, 2015.7.

Timothy J. Vance

“Is Spanish stress perceived as Japanese vowel length?”, 日本音声学会国際ワークショップ, 東京大学, 2016.1.

ティモシー・J・バンス

「上代語連濁データベース」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・ French Phonology Network (ワークショップの企画・運営) 2015.7.2.

横山 詔一（よこやま しょういち）理論・構造研究系 教授

1959 生

【学位】博士（心理学）（筑波大学，1991）

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業（1981），筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得（1983），筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学（1985）

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手（1985），国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員（1991），同 情報資料研究部 主任研究官（1995），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長（2001），同 研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授（2009），研究情報資料センター長（2009.10-2013.9）

【専門領域】認知科学，心理統計，日本語学

【所属学会】日本心理学会，社会言語科学会，計量国語学会，日本語学会，日本教育工学会，行動計量学会

【学会等の役員・委員】大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 運営会議委員；社会言語科学会 監事；計量国語学会 理事；日本語学会 会計監査；筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員；博報財団「児童教育実践についての研究助成」審査委員

【受賞歴】

2010 社会言語科学会 第9回徳川宗賢賞（優秀賞）

2010 国立国語研究所 第1回所長賞

1997 日本教育工学会 第11回日本教育工学会論文賞

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：リーダー

研究目的：

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には，（1）新聞・雑誌・書籍，市販辞書，文字コード規格，各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること，（2）文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること，の双方向のアプローチが必須である。そこでは，文字政策，歴史的背景，出現頻度，接触意識，なじみ，好み，文字使用など，さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば，人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって，その文字に対する「接触意識」が生じ，それが「なじみ」，ひいては「好み」を形成し，社会的な「出現頻度」に影響を与えると考えられる。さらに，それらの要素以外に，未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか，文字の規範意識によっても文字生活が影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について，統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り，言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

研究成果：

〈共同研究の国際的な推進〉

1. 国際文字コードの標準化に関する国際会議において，変体仮名の国際文字コード化をプロジェクト

- トの成果にもとづいて提案し、受理された（規格名「ISO/IEC 10646」：高田ほか，2015）。
2. 米国，カナダのほか中央アジアのキルギス国立総合大学，台湾の国立台湾大学，韓国の大学とのネットワークを維持した（ガリーナ・横山ほか，2015）。
 3. 海外の大学（国立台湾大学）においてNINJALセミナーを実施し，プロジェクトの成果を海外の大学院生に教授した（高田・阿部・横山，2015）。

〈共同研究の学際的な推進〉

1. 高田が行った共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」（漢字・漢文に関するもの），人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」（仮名・仮名文に関するもの），国際文字コード標準化活動（コンピュータの文字に関するもの）の成果をふまえ，文献資料の共同利用を促進させるため，原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発をおこなった。このシステムは，米国議会図書館本『源氏物語』写本のほか，研究所貴重書の公開にも利用されている。
2. 学術交換用変体仮名のデータベースを構築し，公開した（高田ほか，2015）。
<http://kana.ninjal.ac.jp/>
3. シンポジウム「[字体と漢字情報]—HNG 公開 10 周年記念—」を 2015 年 11 月に開催し，日本語学・文献学だけでなく，歴史学・考古学・仏教学・心理学・情報学・日本語教育学など，分野横断的に字体と漢字情報について議論する場を提供した（高田・横山，2015）。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「共通語の生涯習得に関する研究の動向」，『言語・情報・テキスト』（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要）22，pp.13-22，2015.12.

久野雅樹，横山詔一

「鏡映描写—練習法と学習のプロセス—」，日本心理学会認定心理士資格認定委員会（編）『認定心理士資格準拠 実験・実習で学ぶ心理学の基礎』，pp.63-71，金子書房，2015.8.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

書評「新刊寸感」，『日本語学』34（7），明治書院，2015.6.

横山詔一

書評「新刊寸感」，『日本語学』34（15），明治書院，2015.12.

【講演・口頭発表】

阿部貴人，横山詔一

「話し言葉の経年変化」，NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」，国立台湾大学，2015.9.

横山詔一

「字体規範意識のスモールデータサイエンス」，シンポジウム「[字体と漢字情報]—HNG 公開 10 周年記念—」，国立国語研究所，2015.11.

【研究調査】

- ・ 2015.9 台湾台北市，文字環境調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・高田智和, 横山詔一, NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」(企画・運営), 国立台湾大学, 2015.9.
- ・高田智和, 横山詔一, シンポジウム「「字体と漢字情報」—HNG 公開 10 周年記念—」(企画・運営), 国立国語研究所, 2015.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・第 18 回 NINJAL チュートリアル「言語生活のロジスティック回帰分析入門」, 一橋大学一橋講堂, 2015.9.

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 理論・構造研究系 准教授

【学位】博士(理学)(奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】千葉大学大学院文学研究科行動科学専攻修士課程修了(文学)(1996), 奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了(理学)(1998)

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員(1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員(1998), 同 主任研究員(1998), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授(2009)

【専門領域】コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】日本認知科学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 人工知能学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事; 日本認知科学会 第32回大会プログラム委員; 日本学術会議 特任連携会員

【受賞歴】

2002 情報処理学会山下記念研究賞

1996 人工知能学会大会論文賞

1996 人工知能学会研究奨励賞

【2015年度の研究成果の概要】

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備」: リーダー

研究目的:

国語研究所が主体となって大規模日本語会話コーパスを構築することを視野に, その基盤整備として, 以下の3つを策定する: ①均衡性を考慮した会話コーパスの設計, ②種々の日常会話を収録するための方法論, ③日常会話を適切・効率的に転記するための方法論。

日常会話は社会生活の基盤であり, 日常生活を円滑にするためのコミュニケーションのあり様を総合的に解明することは急務である。こうした研究を支えるものとして, 実際の日常会話場면을対象とした大規模な会話コーパスの構築が求められている。言語生活の本質を解明するには, 日常の言語生活を反映したコーパス設計が不可欠である(①)。また, 屋外での会話や携帯電話を介した会話など, 日常の会話を収録するための技術的・倫理的な問題を整理・解決し, 日常会話を収録するための方法論を具体的に策定する必要もある(②)。更には大量に収録した会話を適切かつ効率的に転記するための方策を確定する必要もある(③)。本課題では, コーパス構築に欠かすことのできない上記3点を具体的に検討・策定することで, 大規模日本語会話コーパス構築のための道筋をつける。

研究成果:

①会話コーパスの設計: 2014年度に実施した会話行動調査の結果にもとづき, 均衡性を考慮した日常会話コーパスの設計方針を打ち立てた。また, 調査結果及び設計方針を『国立国語研究所論集』10号で報告した。

②会話収録法の策定: 日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を収録することを目指し, データ収集法として, 個人密着法(2~3か月に渡りインフォーマント自身に日常会話を収録してもらう方法)と特定場面法(店舗での店員とのやりとりなど個人密着法では技術的・倫理的に収録が難しい場면을対象に調査者が主体となり収録する方法)の2つを採用することとした。今年度は特に個人密着法の具体的な手続きを整備してマニュアル化し, 一般の3名のインフォーマントの協力を得て約3ヶ月に渡るテスト収録(計30時間)を実施した。これに基づき収録手続きやマニュアルの見直しを行った。

③書き起こし方法の検討：2014年度に作成したマニュアルβ版に準拠してテスト収録の会話を書き起こし，基準の見直しを行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

・基盤研究（C）「自発音声における発話の継続・終了の予測に関わる韻律情報の解明」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』に見る句末境界音調の特徴」, 『日本語学』34(13), pp.62-67, 明治書院, 2015.11.

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査」, 『国立国語研究所論集』10, pp.85-106, 2016.1.

《国際会議録》

Hanae Koiso and Yasuharu Den

“Causal analysis of acoustic and linguistic factors related to speech planning in Japanese monologs”, *Proceedings of the 7th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech*, University of Edinburgh, 2015.8.9.

Yasuharu Den and Hanae Koiso

“Factors affecting utterance-final vowel devoicing in spontaneous Japanese”, *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences*, Scottish Exhibition and Conference Centre, 2015.8.13.

《データベース類》

・『日本語話し言葉コーパス』第4刷

《その他の出版物・記事》

・コーパス合同シンポジウム報告書「『正しい日本語』って何？ —コーパスに見る日本語のバリエーション—」, 国立国語研究所, 2016.3.

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 石本祐一, 菊池英明, 坊農真弓, 坂井田瑠衣, 渡部涼子, 田中弥生, 伝 康晴

「大規模日常会話コーパスの構築に向けた取り組み —会話収録法を中心に—」, 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会, 千葉大学, 2015.7.22.

渡部涼子, 田中弥生, 小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』, UniDic 版形態論情報の構築」, 第8回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, 2015.9.2.

小磯花絵

「現代語コーパスの観点から」, コーパス合同シンポジウム「『正しい日本語』ってなに？ —コーパスに見る日本語のバリエーション—」, 国立国語研究所, 2015.9.3.

小磯花絵

「節境界における発話計画に関わる音声的・言語的特徴」, 理論・構造研究系レキシコン・フェスタ4, 自治大学校, 2016.3.4.

船越孝太郎, 東中竜一郎, 稲葉通将, 小林優佳, 菅原 朔, 高梨克也, 大塚裕子, 小磯花絵, 坊農真弓

「対話破綻検出チャレンジにおける対話破綻データと破綻検出結果の分析 —主観性の高い言語データにおける言語処理に関して—」, 言語処理学会第22回年次大会, 東北大学, 2016.3.8.

石本祐一, 小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスに基づく自発発話の継続・終了に関わる韻律情報の分析」, 日本音響学会2016年春季研究発表会, 桐蔭横浜大学, 2016.3.9.

Hanae Koiso

“Towards the construction of a corpus of Japanese everyday conversations”, International Symposium on Building and Using Spoken Corpora: Experiences in Japan and Finland, Keio University, 2016.3.13.

【研究調査】

- ・テスト会話収録（調査協力者3名, 計30時間）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・コーパス合同シンポジウム「「正しい日本語」ってなに？ —コーパスに見る日本語のバリエーション—」（企画・運営）, 国立国語研究所, 2015.9.3.
- ・NINS/IURIC Colloquium2015「学術研究の将来」, 分科会3「物理解から人間理解へ —人間・社会・文化の理解を目指して—」（企画・運営）, 掛川市, 2015.12.1-3.
- ・言語処理学会第22回年次大会企画セッション「対話・言語コミュニケーションにおける主観性とその評価」（企画）, 東北大学, 2016.3.8.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

高田 智和 (たかだ ともかず) 理論・構造研究系 准教授

1975 生

【学位】博士 (文学) (北海道大学, 2004)

【学歴】北海道大学文学部卒業 (1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了 (2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2005), 同研究開発部門言語資源グループ 研究員 (2006), 同研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2007), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009)

【専門領域】日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会広報委員会 委員長 (-2015.5)・委員 (2015.6-); 計量国語学会 理事; 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員; 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

2013 北海道大学文学部同窓会楡文賞

2010 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 日本規格協会標準化貢献賞

【2015 年度の研究成果の概要】

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業機構内連携研究「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 代表者

研究目的:

文献学と言語計量の手法により, 言語単位 (単語, 文節, 句, 文など) と表記・書記単位 (仮名字体, 漢字字体, 連綿文字列, 句読点等表記記号など) と書物や版面の形状 (装丁, 料紙, 版型, 頁遷移, 行遷移など) との相関関係を明らかにする。また, 既存の日本語歴史コーパスに表記情報・書誌形態情報を加え, 言語から見た書物, 書物から見た言語を分析するための共同利用基盤を作成・提供することで, 異分野融合による新領域「総合書物学」の形成に寄与する。

研究成果:

- (1) 日本語歴史コーパス精緻化のための基礎研究 (言語単位の検討, 表記・書記単位の検討, 書誌学的検討) を行った。
- (2) 人情本コーパス作成のため, 国立国語研究所所蔵の『小三金五郎仮名文章娘節用』 (曲山人作・画, 全9冊, 天保2~5年刊行) 『春色梅児与美』 (狂訓亭主人作, 柳川重信・柳川重山画, 全13冊, 天保3~4年刊) 『梅暦余興春色辰巳園』 (教訓亭主人作, 歌川国直画, 全12冊, 天保4~6年刊) 『おくみ惣次郎春色江戸紫』 (山々亭有人作, 全9冊, 元治元~明治刊) の翻字を行い, 簡易タグつき全文テキスト作成に着手した。
- (3) 『比翼連理花酒志満台』 (松亭金水作・歌川国直画, 全12冊, 天保7~9年刊) を「ひまわり版「人情本コーパス」 Ver.0.1」として公開した。

人間文化研究の連携共同推進事業（資源共有化推進事業）「固有表現知識ベースデータ（人名データ）の作成」：代表者

研究目的：

『古事類苑』や芳賀矢一『日本人名辞典』から日本史人名を収録した知識ベースを構築し、人間文化研究機構研究資源共有化システムの高度化を行う。

研究成果：

芳賀矢一『日本人名辞典』の全文テキストに対して、漢字字体、仮名遣いなどの現代表記化を行った。

【2015 年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

- ・基盤研究（B）「字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

高田智和

「漢文訓読と日本語」, 専修大学図書館（編）『日本語の風景 —文字はどのように書かれてきたのか—』, pp.163-194, 専修大学出版局, 2015.4.

高田智和, 矢田 勉, 斎藤達哉

「変体仮名のこれまでとこれから —情報交換のための標準化—」, 『情報管理』58 (6), pp.438-446, 2015.9.

《データベース類》

- ・「日本語史研究資料（国立国語研究所蔵）」に下記 27 点を追加公開。

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=orandakagami>

『小三金五郎仮名文章娘節用』, 『春色梅児与美』, 『比翼連理花廻志満台』, 『おくみ惣次郎春色江戸紫』, 『改正増補和英英和語林集成』 2015.5.

『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経（院政期写本）』, 『尚書（古活字版）』, 『中華若木詩抄（寛永十年版）』, 『かたこと』, 『徒然草（寛文七年版）』, 『仮名文字遣』, 『通言総籙』, 『大磯風俗仕懸文庫』, 『青楼阿蘭陀鏡』 2015.9.

『標題徐状元補注蒙求』 2015.11.

『古文真宝抄』, 『倭玉篇（慶長十八年版）』, 『補忘記（元禄版）』, 『磨光韻鏡』, 『かさし抄』, 『あゆひ抄』, 『石場妓談辰巳婦言』, 『字音仮字用格』, 『梅曆余興春色辰巳園』, 『仮字本末』, 『仮字類纂』, 『哲学字彙』 2016.3.

- ・「物類称呼データベース」 <http://dglb01.ninjal.ac.jp/brskdb> 2015.10.

- ・「学術情報交換用変体仮名」（試験公開） <http://kana.ninjal.ac.jp/> 2015.10.

- ・「ひまわり版「人情本コーパス」 Ver.0.1」 2015.10.

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#ninjou

《その他の出版物・記事》

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』34 (11), pp.82-83, 明治書院, 2015.9.

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』35 (3), pp.84-85, 明治書院, 2016.3.

【講演・口頭発表】

高田智和

「日下部漢字表への林大氏の書入れについて」, 韓国日本語文化学会 2015 年度春季国際学術大

会, 韓国・仁川大学校, 2015.5.9.

高田智和, 銭谷真人, 斎藤達哉, 矢田 勉, 小助川貞次, 當山日出夫

「学術情報交換のための変体仮名セット」, 日本語学会 2015 年度春季大会, 関西学院大学, 2015.5.24

高田智和

「国立国語研究所のデータベース」, NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」, 国立台湾大学, 2015.9.15.

藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 高田智和

「人情本のコーパス化」, 日本語学会 2015 年度秋季大会, 山口大学, 2015.11.1.

堤 智昭, 田島孝治, 高田智和

「点図情報入力支援ツールによるヲコト点図の電子化」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015 じんもんこんの新たな役割 一知の創成を目指す文理融合のこれから」, 同志社大学, 2015.12.19.

高田智和, 小林龍生, 田代秀一, 矢田 勉

「ISO/IEC 10646 への変体仮名収録提案 —レパートリと符号化アーキテクチャー」, 第 109 回人文科学とコンピュータ研究会, 国立情報学研究所, 2016.1.30.

高田智和

「変体仮名文字符号標準化の問題点」, 東洋学へのコンピュータ利用第 27 回研究セミナー, 京都大学, 2016.3.18.

田島孝治, 佐村拓哉, 堤 智昭, 高田智和

「撮影データの分別・分類に着目した景観文字調査ツール」, 社会言語科学会第 37 回大会, 日本大学, 2016.3.20.

【研究調査】

- ・ 2015.7.17 立川市歴史民俗資料館 中世印刷本（普濟寺版）調査
- ・ 2015.7.29-30 京都大学附属図書館 中世印刷本（普濟寺版）調査
- ・ 2015.9.29 専修大学図書館 向井文庫調査
- ・ 2016.1.25 東洋文庫 中世印刷本（春日版）調査
- ・ 2016.2.1 米国議会図書館 源氏物語写本調査
- ・ 2016.2.3-4 ミシガン大学図書館 昭和戦前期漢字学習書調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ NINJAL セミナー「データが主導する日本語研究」（企画・運営）, 2015.9.
- ・ シンポジウム「字体と漢字情報—HNG 公開 10 周年記念—」（企画・運営）, 2015.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 情報処理推進機構技術本部国際標準推進センター 専門委員
- ・ 立川市歴史民俗資料館で講演「印刷本からわかること —文字から立川を探る—」, 立川市歴史民俗資料館, 2015.11.29.
- ・ 文字情報技術促進協議会で講演「変体仮名と文字コード」, フクラシア品川クリスタルスクエア, 2016.2.19.

三井 はるみ (みついはるみ) 理論・構造研究系 助教

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1986)

【学歴】 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程単位修得満期退学 (1989)

【職歴】 昭和女子大学 講師 (1989), 国立国語研究所 主任研究官 (1997), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教 (2009)

【専門領域】 日本語学, 社会言語学, 方言文法

【所属学会】 日本語学会, 日本方言研究会, 社会言語科学会, 日本音声学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】 日本方言研究会 世話人; 日本音声学会 評議員

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」: 共同研究員

研究成果:

『新日本言語地図』の担当箇所を執筆した。

理論・構造研究系プロジェクト成果合同発表会「レキシコン・フェスタ 4」(2016.3.4)において、成果の一部を「条件表現の全国分布に見られる経年変化」として発表した。

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」: 共同研究員

研究成果:

方言コーパス構築のための作業 (担当: 東京都) を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

鎌水兼貴, 三井はるみ

「第 20 章 首都圏在住者の方言話者への評価意識」, 宇佐美洋 (編) 『「評価」を持って街に出よう』, pp.337-353, くろしお出版, 2016.1.

三井はるみ

「第 9 章 首都圏のことば」, 井上史雄, 木部暢子 (編) 『はじめて学ぶ方言学 —ことばの多様性をとらえる 28 章』, pp.88-99, ミネルヴァ書房, 2016.3.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「ことばのゆれを考える」, 文部科学省検定済教科書中学校国語用 『伝え合う言葉 中学国語 1』, pp.142-147, 教育出版, 2015.4.

三井はるみ (取材協力)

「首都圏まるかじりなんでも調査団: 「ざます」「しがし」東京に方言」, 『日本経済新聞』, 38 面, 2015.9.15.

三井はるみ

「東京のほお〜言!!」(「のめっこい」(2015.12.8), 「よこはいり」(2015.12.15), 「こけ(ら)」(2016.2.2), 「めがね」(2016.2.9), 「かったるい」(2016.3.8), 「うっちゃる」(2016.3.15)), 『朝日新聞』朝刊 東京版

【講演・口頭発表】

三井はるみ

「方言のおもしろさ・方言研究のおもしろさ」, 昭和女子大学特殊研究講座, 昭和女子大学,

2015.5.19.

鎌水兼貴, 三井はるみ

「言語調査システムによる首都圏若年層の高密度調査」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015」, 同志社大学京田辺キャンパス, 2015.12.20.

三井はるみ

「方言」てどんなもの?, 昭島市民図書館昭和分館主催講座, 昭島市昭和会館, 2016.2.7.

【研究調査】

- ・ 2016.2.24-26 東京都八丈町 方言調査
- ・ 2016.3.10 東京都昭島市 方言調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 出版記念シンポジウム「『評価』を持って街に出よう ―『教えたこと・学んだことの評価』からの脱却を目指して―」セッション3「言語変種への評価がもたらすもの」(企画・運営), 2016.1.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL 職業発見プログラム (明星学園中学校), 国立国語研究所, 2015.7.23.
- ・ NINJAL 職業発見プログラム (群馬県立中央中等教育学校), 国立国語研究所, 2016.3.11.

藤本 灯 (ふじもと あかり) 理論・構造研究系 特任助教

【学位】 博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学専修課程卒業 (2005), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程修了 (2007), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程単位取得退学 (2011)

【職歴】 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 特任助教 (2015)

【専門領域】 国語学, 文献学, 古辞書

【所属学会】 日本語学会, 訓点語学会

【受賞歴】

2016 漢検漢字文化研究奨励賞優秀賞

2015 新村出記念財団刊行助成

2014 日本語学会大会発表賞

【2015 年度の研究成果の概要】

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業機構内連携研究「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員

研究目的:

近世日本語資料である人情本を対象としたコーパスの構築作業を行った。2015 年度は、『比翼連理花廻志満台』(1836 [天保 7] ~ 1838 [天保 9] 年, 松亭金水作, 4 編 12 冊) を対象とし, 国立国語研究所蔵本を底本とした翻字テキストならびに「日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本」(ひまわり版 ver.0.1) を公開した。

翻字テキスト版: http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html

ひまわりテキスト版: <http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=hananosimadai>

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

- ・ 研究活動スタート支援 「『色葉字類抄』を中心とする国語辞書史研究」
- ・ 研究成果公開促進費 (学術図書) 「『色葉字類抄』の研究」

【研究業績】

《著書・編書》

藤本 灯

『『色葉字類抄』の研究』, 勉誠出版, 2016.2.

《論文・ブックチャプター》

藤本 灯, 林 禎映, 田中草大, 南雲千香子, 小野響太

「東京大学国語研究室蔵 黒川文庫目録〈辞書之部〉ら〜を」, 『日本語学論集』12, pp.53-84, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室, 2016.3.

《データベース類》

- ・ 三巻本「色葉字類抄」収録語彙データベース <http://jiruisho.l.u-tokyo.ac.jp/> 2015.11.

【講演・口頭発表】

高田智和, 藤本 灯, 岡部嘉幸

「人情本のコーパス化の現状」, 「通時コーパス」国際シンポジウム, 国立国語研究所, 2015.10.4.

藤本 灯

「色葉字類抄データベースの構築と展望」, 第 113 回訓点語学会研究発表会, 東京大学, 2015.11.8.
藤本 灯, 北崎勇帆, 市村太郎, 岡部嘉幸, 高田智和

「人情本のコーパス化」, 日本語学会 2015 年度秋季大会, 山口県教育会館, 2015.11.1.
田中草大, 藤本 灯, 北崎勇帆

「山田孝雄の未刊稿『日本文体の変遷』」, 日本語学会 2015 年度秋季大会, 山口県教育会館,
2015.11.1.

藤本 灯, 志村 誠, 津村昌祐, 北崎勇帆

「古辞書データベース構築の過程 —院政期の国語辞書『色葉字類抄』を例に一」, 人文系データベ
ース協議会第 21 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」, 同志社大学, 2016.2.27.

藤本 灯

「人情本のコーパス化 —現状と課題—」, 理論・構造研究系レキシコン・フェスタ 4, 自治大学校,
2016.3.4.

【研究調査】

- ・ 2015.7 龍門文庫 「伊呂波字類抄」写本調査
- ・ 2015.8 山田孝雄文庫 「日本文体の変遷」調査
- ・ 2016.1 國學院大学 「伊呂波字類抄」写本調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL 職業発見プログラム（群馬県立高崎東高校）講師, 国立国語研究所, 2015.9.17.

船越 健志 (ふなこし けんし) 理論・構造研究系 特任助教

【学位】 Ph.D. (言語学) (メリーランド大学, 2014)

【学位】 早稲田大学第一文学部総合人文学科卒業 (2007), 大阪大学大学院言語文化研究科専攻博士前期課程修了 (2009), メリーランド大学大学院言語学科博士課程修了 (2014)

【職歴】 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 特任助教 (2015)

【専門領域】 言語学, 統語論, 生成文法

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会

【2015年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・若手研究 (B) 「自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Kenshi Funakoshi

“Silent possessors in Korean”, *Proceedings of the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, pp.333-338, Massachusetts Institute of Technology, 2015.7.

【講演・口頭発表】

Kenshi Funakoshi

“Silent external possessors in Japanese” (招待講演), 言語学講演会, 東北大学, 2015.11.

Kenshi Funakoshi

“Backward control from possessors in Japanese” (招待講演), 南山コロキウム, 南山大学, 2015.12.

船越健志

「付加詞脱落と擬似空所化」, 日本英文学会関西支部第10回大会シンポジウム, 武庫川女子大学, 2015.12.

【その他の学術的・社会的活動】

・国語研「ニホンゴ探検」でスタンプラリークイズのポスターを展示。 2015.7.18.

【大学院教育・若手研究者育成】

・博士論文審査委員 (副査)

横浜国立大学大学院環境情報学府 (林晋太郎), 2015.7.

木部 暢子 (きべのぶこ) 時空間変異研究系 教授, 研究系長, 副所長

1955 生

【学位】 博士 (文学) (九州大学, 1998)

【学歴】 九州大学文学部文学科卒業 (1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了 (1980)

【職歴】 純真女子短期大学 助手 (1980), 純真女子短期大学 講師 (1981), 福岡女学院短期大学 講師 (1985), 鹿児島大学法文学部 助教授 (1988), 同 教授 (1999), 同 副学部長 (2004), 同 学部長 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授, 研究系長, 副所長 (2010)

【専門領域】 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本学術会議 会員; 日本語学会 理事; 日本音声学会 理事; 日本言語学会 評議員

【受賞歴】

1990 新村出財団 研究助成

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」: リーダー

研究目的:

グローバル化が進む中, 世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると, 日本語方言の中では, 沖縄県のほぼ全域の方言, 鹿児島県の奄美方言, 東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は, 他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や, 他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く, 一地域の方言研究だけでなく, 歴史言語学, 一般言語学の面でも高い価値を持っている。また, これらの方言では, 小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く, バリエーションがどのように形成されたか, という点でも注目される。

本プロジェクトでは, フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して, これら危機方言の調査を行い, その特徴を明らかにすると同時に, 言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また, 方言を映像や音声で記録・保存し, それらを一般公開することにより, 危機方言の記録・保存・普及を行う。

研究成果:

・調査: 島根県隠岐の島方言を実施した (2015.11.8-11)。参加者 18 人, 話者 21 人。

・研究発表会:

①「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」を開催した (2015.8.21-23, 国語研)。科研費基盤 (A)「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語」, 科研費基盤 (C)「日本語の分裂自動詞性」と共催。参加者: 21 日 55 人 (若手 15 人), 22 日 59 人 (若手 13 人), 23 日 44 人 (若手 9 人)。

②コーパス合同シンポジウム「正しい日本語」ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」を開催した (2015.9.3, 国語研)。国語研共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」, 「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」, 「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉研究の革新」, 科研費基盤 (A)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築」, 科研費基盤 (B)「方言話し言葉コーパスの構築」と共催。参加者: 約 90 人。

・報告書:

①『鹿児島県与論島方言・沖永良部島方言調査報告書』(国立国語研究所, 2016.3)

②『島根県出雲方言調査報告書』（国立国語研究所，2016.3）

・社会貢献：

「平成 27 年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（沖縄大会）」（2015.9.18，沖縄県立博物館・美術館講堂，主催：文化庁，沖縄県，琉球大学，後援：国立国語研究所）において，共同研究員の狩俣繁久（琉球大学）が全体の解説を，プロジェクト代表者の木部暢子が「危機度報告 八丈・岩手・甕島」（木部暢子）を発表した。参加者 110 人。

・音声データの整備・公開：

①「日本の危機言語・方言のデータ」（鹿児島県喜界島方言，鹿児島県与論島方言，東京都八丈島方言の基礎語彙データ（音声付））を整備し，研究所ホームページで公開した。

②「方言コーパス試作版」（47 地点（各都道府県 1 地点）の談話テキストによるコーパス）を整備し，内部公開を行なった。

第 3 期準備プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：リーダー
研究目的：

本プロジェクトは，日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として，各地の言語・方言の調査を実施し，言語資源の整備・分析を行うとともに，言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献する。

近年，世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009 年のユネスコの危機言語リストには，日本で話されている 8 つの言語—アイヌ語，与那国語，八重山語，宮古語，沖縄語，国頭語，八丈語—が含まれている。特に，アイヌ語は危機の度合いが高く，系統関係も不明で，その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく，日本各地の伝統的な方言もまた，消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと，また，これらの言語・方言の継承活動を支援することは，言語学上の重要課題であるばかりでなく，日本社会においても重要な課題である。

研究成果：

・調査：上記の「危機方言」プロジェクトと連携して，島根県隠岐の島方言調査，研究発表会の開催を行なった。

人間文化研究機構法人第 3 期中期目標・中期計画期間における問題解決志向型基幹研究プロジェクト
形成に係る準備調査「日本の消滅危機言語・方言の記録と伝承」：リーダー

研究目的：

近年，世界的な規模で少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月，ユネスコは世界の約 2500 の言語が消滅の危機にあると発表した。この中には，日本で話されている 8 つの言語—アイヌ語，与那国語，八重山語，宮古語，沖縄語，国頭語，八丈語—が含まれている。また，日本各地の伝統的な方言や 19 世紀末以降，移住等により海外へ渡った日本語も消滅の危機にさらされている。これらが消滅する前に，その包括的な記録を作成し，データを保存・公開することは，言語学上の重要課題であるばかりでなく，地域文化や日本社会にとっても重要な課題である。

本プロジェクトでは，これらの消滅危機言語・方言とその文化的背景に関する包括的な記録・ドキュメンテーションの作成のための資料収集，および準備調査を行う。

研究成果：

・調査：

①宮崎県椎葉村小崎方言調査を実施した（2015.5.8-11）。参加者 6 人，話者 10 人。

②宮崎県椎葉村梅尾方言調査を実施した（2015.9.6-11）。参加者 11 人，話者 15 人。

・研究打合せ：ハワイ日本文化センター，全米日系人博物館，全米日系人歴史協会との研究打合せ（2016.2.25-28），ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ言語学研究所との研究打合せ（2015.9.6-8）を実施した。

・報告書：

①木部暢子，山本友美，坂井美日（編）『椎葉村方言語彙集（中間報告）』，国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館共同事業報告書，2016.3.

②下地理則，小川晋史，新永悠人，平塚雄亮，坂井美日『尾前調査班 中間報告 一宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説一』，国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館共同事業報告書，2016.3.

・データの整備・公開：

「アイヌ語口承文芸コーパス」（音声付）を整備し，研究所ホームページで公開した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

・基盤研究（B）「方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究」

【研究業績】

《著書・編書》

高山倫明，木部暢子，早田輝洋，松森晶子，前田広幸（共著）

『シリーズ日本語史1 音韻史』，岩波書店，2016.1.

井上史雄，木部暢子（編著）

『はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28 章』，ミネルヴァ書店，2016.3.

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「危機方言は面白い！」，『アステイオン』082，pp.101-113，サントリー財団，2015.5.

木部暢子

「アクセント史」，『シリーズ日本語史1 音韻史』，pp.69-118，岩波書店，2016.1.

木部暢子

「方言のアクセント」，『はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28 章』，pp.133-143，ミネルヴァ書店，2016.3.

《データベース類》

・「日本の危機言語・方言のデータ」（喜界島方言，与論島方言，八丈島方言の基礎語彙（音声付）データ）<http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>

・「方言コーパス試作版」（47 地点（各都道府県1 地点）の談話テキストを共通語により横断検索ができるようにしたもの。非公開）

【講演・口頭発表】

木部暢子

「研究動向の分析 第3期（40～59回：1985～1994年）」，日本方言研究会第100回研究発表会記念シンポジウム「方言研究の過去・現在・未来」，甲南大学，2015.5.22.

木部暢子

「奄美・甌島方言の状況」，危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会，文化庁，2015.8.27.

木部暢子

「危機度報告 八丈・岩手・甌島」，平成27年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（沖縄大会），

沖縄県立博物館・美術館, 2015.9.18.

木部暢子

「対格助詞ゼロの地域差 一方言コーパスの可能性」, 日本方言研究会第101回研究発表会, 山口大学, 2015.10.30.

木部暢子

「自然遺産と「しま」の生活文化」, 第30回国民文化祭・かごしま2015シンポジウム, 奄美パーク, 2015.11.13.

木部暢子

「方言の魅力」, 第15回地球研地域連携セミナー天草「「のさり」の活かし方 天草の未来可能性」, 天草文化交流館, 2016.1.19.

木部暢子

「日本語方言の多様性 ―アクセントの地域差― (招待講演), 東京外国語大学国際日本学研究院国際シンポジウム「国際日本研究 ―対話, 交流, ダイナミクス」, 東京外国語大学, 2016.1.30.

木部暢子

「危機方言はおもしろい 一方言にひそむ多様な発想法」, 第9回NINJALフォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

- ・2015.4 鹿児島方言調査 (『鹿児島方言辞典』作成のため)
- ・2015.5 宮崎県椎葉村小崎方言調査 (『椎葉村方言語彙集』作成のため)
- ・2015.9 宮崎県椎葉村梅尾方言調査 (『椎葉村方言語彙集』作成のため)
- ・2015.11 島根県隠岐の島方言調査
- ・2015.11 鹿児島県与論方言調査 (与論方言基礎語彙音声データベース作成のため)

【その他の学術的・社会的活動】

- ・木部暢子 (編) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 与論島・沖永良部島方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2016.3.
- ・木部暢子 (編) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2016.3.
- ・木部暢子, 山本友美, 坂井美日 (編) 『椎葉方言語彙集 (中間報告)』, 国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館, 2016.3.
- ・「土地のことは失わせない ―「消滅危機」アイヌ語・沖縄などの7方言」, 朝日新聞, 2015.9.24.
- ・「自然と人の共生発信を 奄美市でしまシンポ」, 南日本新聞, 2015.11.14.
- ・「方言の魅力と未来」, 日経新聞, 2016.2.27.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・日本学術振興会特別研究員の受入 (2名) 津田智史, 青井隼人
- ・フィールド調査指導:
 - ①宮崎県椎葉村小崎方言調査 (2015.5.8-11) でPD 1名を指導。
 - ②宮崎県椎葉村梅尾方言調査 (2015.9.6-11) でPD・大学生8名を指導。
 - ③島根県隠岐の島方言調査 (2015.11.8-11) でPD・大学院生6人を指導。

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 時空間変異研究系 教授

1953 生

【学位】 修士 (言語学) (東京大学, 1980)

【学歴】 東京大学文学部第 3 類 (語学文学) 言語学専修課程卒業 (1977), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了 (1980), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第 1 種博士課程単位取得退学 (1984)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員 (1984), 同 主任研究官 (1990), 同 室長 (1991), 国立国語研究所言語体系研究部 部長 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長 (2001), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 副所長 (2009.10-2013.9)

【専門領域】 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 社会言語科学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員; 日本音声学会 評議員; 『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」: リーダー

研究目的:

20 世紀前半から 21 世紀初頭 (昭和戦前期から現在まで) の「現代日本語」, 特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して, そこに見られる変異の実態, 変化の方向性, すなわち「動態」を, 従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明する。あわせて, 現代日本語の的確な動態把握に基づき, 言語問題の解決に資する応用研究を開拓する。

研究成果:

共同研究の最終年次に当たり, 次の (1) (2) に示すとおり研究成果の取りまとめを行うとともに, (3) のような今後の研究にも繋がっていく調査を企画・実施した。

- (1) 「SP 盤貴重音源資料 (音声+文字化テキスト)」をプロジェクト内で共有し, 通算で第 6 回目の研究会を開催 (2015 年 5 月 16 日) した結果, 論文集への執筆予定者 12 名全員の研究発表が完了した。
- (2) 成果物として, 相澤正夫, 金澤裕之 (編) 『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』 (全 13 章, 299 頁) を, 笠間書院から 2016 年 3 月に刊行した。
- (3) 今後の経年調査を見据えた「言語変化の先端現象」を捉える調査 2 件 (①全国方言意識 Web 調査, ②北海道富良野市・函館市面接調査) を委託により実施し, 公開共同研究発表会 (2016 年 1 月 24 日) で中間報告をした。

関連して, 次の (4) (5) (6) に示すような成果の発信も積極的に行った。

- (4) 「SP 盤貴重音源」の文字化テキストに基づき, 金澤裕之, 相澤正夫 (編) 『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料—』 (全 452 頁) を, 日外アソシエーツから 2015 年 4 月に刊行し, 2015 年 5 月末付けで日本図書館協会の選定図書に選ばれた。
- (5) 「SP 盤貴重音源」の文字化テキストに基づき, 金澤裕之, 田中牧郎, 相澤正夫 (編) 『アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクション I』 (全 545 頁) を, 想隆社から 2015 年 6 月にオンデマンド版として刊行した。
- (6) 「SP 盤貴重音源」の音声と文字化テキストに基づき, 「想隆社アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクション I」 (全 165 作品, 18.5 時間分の SP レコードデジタル

音源+文字化テキスト)として、想隆社から2015年5月に有料でWeb配信を開始した。

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備」:共同研究員

研究成果:

「一日の会話行動調査」の調査報告(『国立国語研究所論集』10所収)の共同執筆を分担した。

【研究業績】

《著書・編書》

金澤裕之, 相澤正夫(編)

『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料—』, 日外アソシエーツ, 2015.4.

金澤裕之, 田中牧郎, 相澤正夫(編)

『アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクション I』, 想隆社, 2015.6.
相澤正夫, 金澤裕之(編)

『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』, 笠間書院, 2016.3.

《論文・ブックチャプター》

相澤正夫

「5.2 コーパスによる固有名に使われる漢字の検討」, 田中牧郎(編)『講座日本語コーパス4 コーパスと国語教育』, pp.138-159, 朝倉書店, 2015.12.

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査」, 『国立国語研究所論集』10, pp.85-106, 2016.1.

相澤正夫

「幕末~明治前期のガ行鼻音を推定する」, 相澤正夫, 金澤裕之(編)『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』, pp.24-46, 笠間書院, 2016.3.

《データベース類》

・「想隆社アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクション I」(想隆社より有料でWeb配信) 2015.5.

《辞書・辞典類》

林 四郎(監修), 篠崎晃一, 相澤正夫, 大島資生(編著)

『例解新国語辞典 第九版』, 三省堂, 2016.1.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』34(6), pp.90-91, 2015.5. (書評・紹介3冊: 森 大毅, 前川喜久雄, 粕谷英樹(共著)『音声は何を伝えているか —感情・パラ言語情報・個人性の音声科学—』(2014.12, コロナ社), 小松英雄(著)『日本語を動的にとらえる —ことばは使い手が進化させる—』(2014.11, 笠間書院), E・コセリウ(著), 田中克彦(訳)『言語変化という問題 —共時態, 通時態, 歴史—』(2014.11, 岩波文庫))

相澤正夫

「〈著書紹介〉金澤裕之, 相澤正夫(編)『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料—』, 『国語研プロジェクトレビュー』6(2), pp.65-66, 2015.10.

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』 34 (13), pp.74-75, 2015.11. (書評・紹介 3 冊: 定延利之 (編) 『私たちの日本語研究』 (2015.5, 朝倉書店), NHK 放送文化研究所 (編) 『現代日本人の意識構造 [第八版]』 (2015.2, NHK 出版), 岩本 裕 (著) 『世論調査とは何だろうか』 (2015.5, 岩波新書))
金澤裕之, 相澤正夫

[[研究資料] 『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集 —SP 盤レコード文字化資料』], 『計量国語学』 30 (3), pp.146-154, 2015.12.

【講演・口頭発表】

相澤正夫

「[外来語] を言い換えるとは —理念と実践—」, 第 2 回 地球研・国語研合同研究打合せ会 「[方言] と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学 —「ことば」と「ことば」の接点—」, 国立国語研究所, 2015.7.30.

相澤正夫

「SP 盤レコードが拓く日本語研究」 (ポスター発表), 第 9 回 NINJAL フォーラム 「ここまで進んだ! ここまで分かった! 国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

・ 2015.8 共同調査 「2015 年全国方言意識 Web 調査」 (1 万人調査) の企画・実施

【その他の学術的・社会的活動】

・ 『NHK 日本語発音アクセント辞典』 改訂専門委員

大西 拓一郎 (おおにし たくいちろう) 時空間変異研究系 教授

1963 生

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】 東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】 東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009)

【専門領域】 方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」: リーダー

研究目的:

本研究は, 日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に, 全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては, 言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を 50 年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方, 大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は, 中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり, 現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する, 世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。

研究成果:

全国 554 地点の調査結果をデータベース化し, Web で広く公開した。また, プロジェクトのリーダーとして, 方言形成について次のような基本理論を考えた。方言 (言語) は意思疎通のための道具であるゆえ, 社会で共有されるシステムとしての性格を強く有する。したがって, 言語変化はシステムとしての合理性, 伝達道具としての有効性を高めるために起こり, 分布の変化・形成にもそれが反映される。この理論をもとに (1) 言語変化はいわゆる「中心地」に限らずどこでも発生する, (2) 発生した変化は「放射状」に広がる必然性はなく, 共同体領域内を埋めるように広がって分布を形成する, (3) 拡散は永続せず分布形成後に停止する, (4) 伝達道具であるゆえ不変化が基本である, (5a) 文法事項は語彙事項より変化の拡散範囲が広い, (5b) 文法事項は語彙事項より変化普及に時間を要する, という仮説を立てた。この仮説に対し, 本プロジェクトで得られた方言分布データを利用して, 実時間経年比較による検証を行い, その結果を論文ならびに学会における口頭発表で公表した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・ 基盤研究 (A) 「方言分布変化の詳細解明 ―変動実態の把握と理論の検証・構築―」

【研究業績】

《著書・編書》

大西拓一郎

『長野県伊那諏訪地方言語地図』, 私家版, 2016.3.

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「方言の東西」, 『HUMAN』, pp.41-50, 2016.1.

Takuichiro Onishi

“Timespan comparison of dialectal distributions”, Marie-Hélène Côté, Remco Knooihuizen and John Nerbonne (eds.), *The Future of Dialects: Selected Papers from Methods in Dialectology XV*, pp.377-387, Berlin: Language Science Press, 2016.2.

《データベース類》

・全国方言分布調査 (FPJD) データベース 2016.3.

http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html

【講演・口頭発表】

Takuichiro Onishi

“Starting place and diffusing area of language changes”, The 8th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), East Mediterranean University, Northern Cyprus, 2015.9.17.

大西拓一郎

「方言分布と方言区画」(招待講演), 東アジア言語地理学国際シンポジウム, 富山大学, 2015.11.7.

大西拓一郎

「太陽と語るひとびと」(招待講演), 第7回地球研東京セミナー「人が空を見上げるとき 文化としての自然」, 朝日ホール, 2016.1.29.

大西拓一郎

「方言, 言語, そしてその変遷をめぐって」, JLVC2016, 国立国語研究所, 2016.2.13.

大西拓一郎

「方言の形成過程の解明」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

・2015.4 長野県富士見町, 原村, 伊那市 言語地理学調査

・2016.1 和歌山県田辺市 方言敬語調査

【大学院教育・若手研究者育成】

・日本方言研究会サマーセミナー はじめての方言調査「言語地図を作成してみる」講師, 2015.8.19.

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 時空間変異研究系 准教授

1973 生

【学位】博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同研究開発部門言語生活グループ研究員 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009)

【専門領域】社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会

【学会等の役員・委員】変異理論研究会 世話人; METHODS, International steering committee member; NWAV-AP, Steering committee member; *Asia-Pacific Language Variation*, Editorial board member

【受賞歴】

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 第9回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2015年度の研究成果の概要】

人間文化研究機構日本関連在外資料調査研究「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」音声資料チーム「ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」: 代表者

研究目的:

本研究は、オーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料の言語資源化、およびその資源を活用した言語学的分析を行うものである。ハワイ・北米への日系移民を中心的に取り上げ、そこで用いられている日本語・英語の言語学的特徴の分析を行う。

研究成果:

サクラメント歴史センター、ハワイ日本文化センター所蔵資料のデジタル化作業を進めた。また、すでにデジタル化の済ませたものについてはアノテーションの作成を進めた。

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「日本関連在外音声資料の学際共同利用に向けた言語研究資源化」: リーダー

研究目的:

本研究では、在外日本語音声資料をデータベース化し、言語学、歴史学、文化人類学、民俗学、音楽学などの研究者に提供することにある。

研究成果:

全米日系人博物館所蔵の Barbara Kawakami コレクションについて、2015年度にハワイ大学ウエストオアフ校に所蔵される同氏のコレクションを含め、Kawakami 氏、ハワイ大学の関係者とともに資料許可を取るための打ち合わせ、また作業内容に関する打ち合わせを行った。また、2016年2月、3月に全米日系人博物館の音声資料のデジタル変換を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

研究成果：

北海道富良野市における言語使用・言語意識調査を実施した。調査結果について北海道方言研究会で研究発表を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

研究成果：

2013年度までに担当した調査結果を踏まえ、分析を行った。その成果は北海道方言研究会で研究発表を行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

・基盤研究（C）「北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Kuniyoshi Kataoka and Yoshiyuki Asahi

“Synchronic and diachronic variation in the use of spatial frames of reference: An analysis of Japanese route instruction”, *Journal of Sociolinguistics*, 19(2), pp.133-160, 2015.4.

Yoshiyuki Asahi

“Interface between regional and social dialects in Hokkaido: The case of the small town of Tokoro”, *Multilingual Perspectives in Geolinguistics*, pp.62-68, 2015.5.

朝日祥之，尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その4」, 『北海道方言研究会会報』92, pp.68-90, 2015.12.

朝日祥之

「北海道方言の分布に見られる経年変化」, 『北海道方言研究会会報』92, pp.26-44, 2015.12.

朝日祥之

「サハリン島における言語関係史：日本語を中心に」, 『Arctic Circle』98, pp.4-9, 2016.3.

朝日祥之

「海外の日本語方言」, 井上史雄, 木部暢子（編）『はじめて学ぶ方言学 —ことばの多様性をとらえる28章』, pp.50-58, ミネルヴァ書房, 2016.3.

《辞書・辞典類》

朝日祥之

「威信」, 「言語変数」, 「俗語」, 「方言」, 「変異理論」, 「言語行動」, 「過剰修正」, 「厳密コード」, 「方言接触」, 『明解言語学辞典』, 三省堂, 2015.7.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』34（8）, pp.84-85, 明治書院, 2015.7.

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』35（1）, pp.94-95, 明治書院, 2015.12.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“Interface between regional and social dialects of Tokoro, a small town of Hokkaido”, American

Society of Geolinguistics Conference, Daito Bunka University, 2015.4.11.

朝日祥之

「北海道方言の分布に見られる経年変化」, 第 213 回北海道方言研究会例会, 札幌市北区民センター, 2015.6.14.

Yoshiyuki Asahi

“The role of a standard variety in the new town koine formation”, Globalising Sociolinguistics 2015, Leiden University, 2015.6.18.

朝日祥之

「日本語起源の外行語と日系移民のトランスナショナリティ」, 第 2 回地球研・国語研合同研究打合せ会「[方言]と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学 —「ことば」と「ことば」の接点—」, 国立国語研究所, 2015.7.30.

朝日祥之, 尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その 4」, 第 214 回北海道方言研究会例会, 札幌市北区民センター, 2015.9.6.

朝日祥之

「変異研究にみる日本語の多様性」(招待講演), 東京外国語大学国際日本学研究院国際シンポジウム「国際日本研究 一対話, 交流, ダイナミクス」, 東京外国語大学, 2016.1.31.

片岡邦好, 朝日祥之

「商業看板における『空間参照枠表現』の地域間変異について」, JLVC2016, 国立国語研究所, 2016.2.14.

【研究調査】

- ・ 2015.5 米国・ハワイ州ホノルル市
- ・ 2015.8 米国・カリフォルニア州サクラメント市
- ・ 2015.10 米国・ミシガン州アナーバー市
- ・ 2015.11 北海道北見市
- ・ 2016.3 米国・カリフォルニア州ロサンゼルス市

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ JLVC2016, 国立国語研究所, 2016.2.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL ジュニアプログラム「めざせ！ことば博士 みんなの方言を調べてみよう」, 立川市西砂公民館, 2015.7.31.
- ・ 取材協力・情報提供「NHK BS1 スペシャル 戦場の真心 チムグクル ～沖縄を救った日系人～」, NHK 東京ビデオセンター, 2015.8.10.
- ・ NINJAL ジュニアプログラム「あなたと私の方言 —日本語の不思議な世界—」, 立川第六小学校, 2016.2.16.

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 時空間変異研究系 准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【受賞歴】

1993 第11回新村出記念財団 研究助成

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」: 共同研究員
研究成果:

中央資料庫に所蔵されている方言談話資料を公開するためのデータ整備と、『全国方言談話データベース ふるさとことば集成』を用いた「方言コーパス」試作版のデータ整備を行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・基盤研究 (C) 「方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究」

【研究業績】

《データベース類》

・「方言ロールプレイ会話」(更新) <http://hougen-db.sakuraweb.com/> 2015.12.

【講演・口頭発表】

井上文子

「方言コーパス試作版」(デモンストレーション), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ! ここまで分かった! 国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

・2015.9. 鹿児島県日置市 方言談話収録調査

【その他の学術的・社会的活動】

・日本語教師養成講座講師

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 時空間変異研究系 准教授

1955 生

【学位】 修士 (文学) (埼玉大学, 1984)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業 (1976), 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了 (1984)

【職歴】 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1988), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1989), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1993), 国立国語研究所 室長 (1998), 国立国語研究所情報資料部門 部門長 (2001), 大学共同利用機関法人国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本語学会, 日本語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」: 共同研究員
研究成果:

『日本言語地図』データベース (LAJDB) の整備と分析を進めた。データ整備に関しては, 原データの状態に関する情報の整理, ドキュメンテーションを進めつつ, 凡例語形に関するクロスチェックに加え, 見出し語形カードによる語彙カードの分類状態についても, カード画像データによる点検にクロスチェックを追加するなど, 信頼性, 整合性の確保に注力しつつ, 整理を進めた (地図化 240 項目に対して約 52% 段階)。経緯度情報, 凡例分類情報などを追加, 更新した構造によるデータの検証なども行った。新規項目のデータの点検, 校閲に関しては, 調査の原カードの状態と印刷刊行された言語地図の内容との間の不一致や, 原カード上の情報の不備がある場合, 問題点の調査・点検, 解決が必要になり, これに時間を要するケースが多くあったが, 記録を整備しつつ新規に 5 項目を整備した。また, LAJDB のホームページを更新した。基本的統計情報の追加更新, Web 地図を利用した, LAJDB による Web 版日本言語地図試作版の追加更新 (「<いい天気>だ」, 「とんぼ」), 情報の更新などを行った。LAJDB の分析に関しては, 探索的な計量的分析を継続した。探索的な分析のために作成したデータセット (55 項目) を対象に方言類似度や標準語形の分布やこれらと言語外情報との関係に関する探索を行い, パターンの予備的な観察, 分析を行った。成果の一部として, *Methods in Dialectology XV* (2014.8) の発表内容をもとに執筆, 投稿した論文を完成させた (2016.2 刊行の *Proceedings* に掲載)。継続して, データ整備と分布データの分析に関する検討, 考察を行った。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・基盤研究 (C) 「大規模方言分布データの計量的分析方法の開発」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yasuo Kumagai

“Developing a linguistic atlas of Japan database and advancing analysis of geographical distributions of dialects”, Marie-Hélène Côté, Remco Knooihuizen and John Nerbonne (eds.), *The Future of Dialects: Selected Papers from Methods in Dialectology XV*, pp.333–362, Berlin: Language Science Press, 2016.2.

《データベース類》

- ・『『日本語地図』データベース』（Web 地図の追加・更新） <http://www.lajdb.org/> 2015.4.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」スタンプラリーで「セミの鳴き声の方言（方言の擬声語）」ポスター展示。
2015.7.18.

新野 直哉 (にいの なおや) 時空間変異研究系 准教授

1961 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2010）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1984），東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1986），東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1988）

【職歴】宮崎大学教育学部 助手（1988），同 講師（1989），同 助教授（1992），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1996），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門文献情報グループ 主任研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本近代語研究会，表現学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 編集委員（-2015.5）；日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第2回所長賞

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員
研究成果：

次項に掲載の論文を発表した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「“嗚咽”の「気づかない意味変化」について 一般雑誌記事を契機とした言語変化研究の一例」、『言語文化研究』15, pp.1-18, 静岡県立大学短期大学部言語文化学会, 2016.3.

新野直哉

「昭和戦前期の総合月刊誌における言語規範意識研究資料 — 「現代語考」（一九三五） —」, 国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究』35, pp.163-179, 和泉書院, 2016.3.

《データベース類》

・「副詞“全然”研究のための主要文献目録」増補 2016.3.

<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/newlycoinedw/files/MainBibliographyForResearch-zenzen-Adverb.pdf>

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第323回日本近代語研究会（春季発表大会）（企画・運営），2015.5.

・第327回日本近代語研究会（秋季発表大会）（企画・運営），2015.10.

・JLVC2016（Japanese Language Variation and Change conference2015）（企画・運営），2016.2.

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

言語資源研究系 教授, 研究系長, コーパス開発センター長, 副所長

1956 年生

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2011)

【学歴】 上智大学外国語学部フランス語学科卒業 (1980), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了 (1982), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退 (1984)

【職歴】 鳥取大学教育学部 助手 (1984), 同 講師 (1987), 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1992), 同 室長 (1994), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長 (2001), 同 言語資源グループ長 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授, 研究系長, コーパス開発センター長 (2009), 副所長 (2013.10), 一橋大学 連携教授 (2005-2014)

【専門領域】 音声学, 言語資源学

【所属学会】 ISCA, IPA, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会, 日本音声学会

【受賞歴】

2012 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形狀と言語的機能」, 『音声研究』15 (1)

2012 国立国語研究所第 4 回所長賞

2011 日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』14 (2)

2010 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: リーダー

研究目的:

コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション (検索用情報付与) についての基礎研究を行うことが本プロジェクトの目的である。

研究成果:

本年度はデータ公開のための準備を進めた。本プロジェクトで整備を進めた 12 種類のアノテーションデータを公開した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: リーダー

研究目的:

我が国の言語関連学界コーパスを利用した研究を定着させることが本プロジェクトの目的である。そのために一般からも応募可能な「コーパス日本語学ワークショップ」を開催するとともに、「講座日本語コーパス」(全 8 巻) の刊行を進めている。

研究成果:

まず「コーパス日本語学ワークショップ」については、本年度開催の第 8 回では 35 件の発表があり、うち 21 件が一般からの応募であった。本ワークショップでは毎回最後のセッションを指定討論(文法, 語彙, 音声などの領域ごとに指定討論者が当該ワークショップで発表された研究を講評する機会)と全体討論の機会を設け、参加者がコーパスを利用した言語研究の問題点を共有できるよう配慮している。

朝倉書店から刊行を続けている「講座日本語コーパス」は、2015 年 12 月に第 4 巻『コーパスと国語教育』, 2016 年 3 月に第 5 巻『コーパスと日本語教育』を刊行し、8 巻中 6 巻まで刊行した。

【2015年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

・基盤研究（B）「自発音声コーパスの分析による filled pause の音声学的特徴の解明」

【研究業績】

《著書・編書》

田中牧郎（編），前川喜久雄（監修）

『講座日本語コーパス 4 コーパスと国語教育』，朝倉書店，2015.12.

砂川有里子（編），前川喜久雄（監修）

『講座日本語コーパス 5 コーパスと日本語教育』，朝倉書店，2016.3.

《論文・ブックチャプター》

Kikuo Maekawa

“Corpus-based phonetics”, Haruo Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, pp.651-680, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2015.2.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa

“Functional difference between the two variants of rising-falling intonation in spontaneous Japanese monologue”, *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS2015)*, Glasgow, 2015.8.

Kikuo Maekawa and Hiroki Mori

“Voice-quality analysis of Japanese filled pauses: A preliminary report”, *DiSS 2015 (Disfluency in Spontaneous Speech)*, Edinburgh, 2015.8.

Michiko Watanabe, Yosuke Kashiwagi, and Kikuo Maekawa

“The relationship between preceding clause type, subsequent clause length and the duration of silent and filled pauses at clause boundaries in Japanese monologues”, *DiSS 2015 (Disfluency in Spontaneous Speech)*, Edinburgh, 2015.8.

《その他の出版物・記事》

前川喜久雄

「コーパス活用の勘所【現代語】音声・総合（2）リレーショナルデータベース」，『日本語学』35（1），pp.82-87，2016.1.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「国立国語研究所におけるコーパス開発の展望」，NII・国語研共同研究 2015 公開研究会「言語資源構築における諸問題：権利問題を中心に」，2015.7.24.

Kikuo Maekawa and Takuya Asai

“Classification of vowels in filled pauses and lexical items on the basis of voice quality, and, automatic annotation of phonation type”，Institute of Linguistics, Academia Sinica, 2015.12.22.

前川喜久雄

「日本語の全体像を知るために—国立国語研究所による言語資源整備—」（基調講演），産業日本語シンポジウム，2016.2.29.

前川喜久雄

「言語研究のインフラ整備—日本語コーパスから見えてきたもの—」，第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」，一橋大学一橋講堂，

2016.3.5.

浅原正幸, 河原一哉, 武井裕也, 舩岡英人, 大場寧子, 鳥井 雪, 森井 亨, 前川喜久雄, 加藤 祥, 小西 光

「『国語研日本語ウェブコーパス』の検索系」, 言語処理学会第 22 回年次大会(NLP2016), 東北大学, (論文集, P17-7), 2016.3.10.

藤本雅子, 前川喜久雄, 船津誠也

「有声, 無声子音の調音タイミング」, 日本音響学会 2016 年春季研究発表会, 桐蔭横浜大学, 3-P-22, 2016.3.11.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ NII・国語研共同研究 2015 公開研究会「言語資源構築における諸問題：権利問題を中心に」(企画・運営), 2015.7.24.
- ・ 国立国語研究所・統計数理研究所 合同研究集会「統計的言語研究の現在」(企画・運営), 2015.9.4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 国立情報学研究所音声コーパス推進委員会 委員
- ・ 言語資源協会 (GSK) 運営委員
- ・ *Interspeech2015*, Reviewing committee member
- ・ *Phonetica*, Editorial board member
- ・ *Speech Communication*, Editorial board member
- ・ *Language and Linguistics*, Editorial board member

山崎 誠 (やまざき まこと) 言語資源研究系 准教授 (-2015.9.30), 教授 (2015.10.1-)

1957 生

【学位】博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015.10-)

【専門領域】日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事; 言語処理学会 理事・編集委員

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: 共同研究員

研究成果:

第 8 回コーパス日本語学ワークショップにおいて、「テキストの計量語彙論的指標はどのような条件で変化するか」のタイトルでポスター発表を行った。2014 年に国際計量言語学会で行った口頭発表“The influence of word unit and sentence length on the ratio of parts of speech in Japanese texts”をまとめた論文が大会後編纂された予稿集 *Recent Contributions to Quantitative Linguistics* に掲載された。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・基盤研究 (B) 「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間淵洋子, 浅原正幸, 立花幸子, 加藤 祥, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正』, 『国立国語研究所論集』9, pp.81-100, 2015.7.

Makoto Yamazaki

“The influence of word unit and sentence length on the ratio of parts of speech in Japanese texts”, Arjuna Tuzzi, Martina Beneove, and Jen Macutec (eds.) *Recent Contributions to Quantitative Linguistics*, pp.255-267, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2015.10.

《その他の出版物・記事》

山崎 誠

「コーパス活用の勘所第 15 回【現代語】文章・文体 (2) 基本統計量に現れるテキストの特徴」, 『日本語学』34 (7), pp.78-83, 明治書院, 2015.6.

山崎 誠

「宮島達夫先生著作目録」, 『計量国語学』30 (4), pp.243-250, 計量国語学会, 2016.3.

【講演・口頭発表】

山崎 誠

「日常語と専門用語との接点 ―コンピュータ用語の定着過程から―」, 第2回地球研・国語研合同研究打合せ会「方言」と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学 ―「ことば」と「ことば」の接点―, 国立国語研究所, 2015.7.30.

山崎 誠

「テキストの計量語彙論的指標はどのような条件で変化するか」, 第8回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, 2015.9.1.

宮壽由美, 西野あゆみ, 柏野和佳子, 山崎 誠

「若者のあいさつ言葉と待遇性の考察 ―ケータイメールコーパスにおける「おつかれさま」の出現例をもとに―」, 計量国語学会第59回大会, 神戸大学, 2015.9.26.

山崎 誠

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) の概要と検索」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第8回コーパス日本語学ワークショップ (企画・運営), 2015.9.1-2.

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学言語社会研究科 連携教授

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) 言語資源研究系 准教授

1975 生

【学位】博士(工学)(奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業(1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了(2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了(2003)

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教(2004), 大学共同利用機関法人国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授(2012), 同 言語資源研究系 准教授(2014.10-)

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会, 言語処理学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会自然言語処理研究会 運営委員; 言語処理学会 編集委員

【受賞歴】

2014 吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会論文誌『自然言語処理』2014年論文賞, 「Markov Logic による日本語述語項構造解析」

2011 Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”

2010 Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”

2008 岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会第14回年次大会 優秀発表賞, 「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003 浅原正幸

平成15年度情報処理学会 山下記念研究賞, 「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2015年度の研究成果の概要】

コーパス開発センタープロジェクト「超大規模コーパス」: 実務担当

研究成果:

プロジェクト「超大規模コーパス」においては, 200億語規模のコーパスを文字列・品詞・係り受けにより問い合わせ可能な検索系「梵天」を完成させた。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: 共同研究員

研究成果:

共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」においては, 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する係り受け・並列構造アノテーション BCCWJ-DepPara, 述語項構造共参照アノテーション BCCWJ-DepParaPAS, 英語・中国語・イタリア語・インドネシア語からなる対訳 BCCWJ-Trans, 要約 BCCWJ-SUMMなどを公開した。これらはコーパス開発センターで開発したコーパス配布サーバにより配信している。さらにコーパスコンコーダンサ ChaKi.NET に対する可視化機

能の改善を行った。さらに内外で ChaKi.NET の講習会を 5 回実施した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

- ・ 基盤研究 (B) 「言語コーパスに対する読文時間付与とその利用」
- ・ 挑戦的萌芽研究 「近代語コーパスに対する統語情報アノテーションの基準策定」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間淵洋子, 浅原正幸, 立花幸子, 加藤 祥, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正」, 『国立国語研究所論集』9, pp.81-100, 2015.7.

《データベース類》

- ・ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する係り受け・並列構造アノテーション BCCWJ-DepPara
- ・ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造・共参照アノテーション BCCWJ-PAS
- ・ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を元文書とした対訳 BCCWJ-TRANS
- ・ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を元文書とした要約 BCCWJ-SUMM

【講演・口頭発表】

浅原正幸, 坂口智洋, 渡邊友香

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現アノテーションの再修正作業」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.37-46), 2015.9.1.

浅原正幸, 小西 光, 田中弥生, 加藤 祥

「品詞列・係り受け部分木に基づくラベリングツールの設計と実装 —節境界ラベリングを例に—」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.83-92), 2015.9.1.

浅原正幸, 加藤 祥

「文体指標を特徴づける係り受け部分木の抽出」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.171-178), 2015.9.2.

植田禎子, 飯田 龍, 浅原正幸, 松本裕治, 徳永健伸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造・共参照関係アノテーション」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.205-214), 2015.9.2.

浅原正幸, 森田敏生

「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の「文書-部分構造行列」出力機能」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.257-264), 2015.9.2.

浅原正幸

「『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』の概要と検索」(ポスター発表), 第 9 回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

浅原正幸

「言語研究のための言語資源整備 —凸最適化からの脱却—」(チュートリアル), 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, 2016.3.7.

浅原正幸, 森田敏生

「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』のラベリング機能」, 言語処理学会第 22 回年次大会,

東北大学, (論文集, P7-6), 2016.3.8.

加藤 祥, 富田あかね, 浅原正幸

「物語がその物語であるための要素」, 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, (論文集, P10-1), 2016.3.8.

浅原正幸, 大村 舞

「BCCWJ-DepParaPAS:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』係り受け・並列構造と述語項構造・共参照アノテーションの重ね合わせと可視化」, 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, (論文集, P12-2), 2016.3.9.

田中弥生, 浅原正幸

「Yahoo! 知恵袋における修辞ユニット分析の中核要素認定に関する諸問題」, 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, (論文集, A6-3), 2016.3.10.

浅原正幸, 河原一哉, 武井裕也, 舛岡英人, 大場寧子, 鳥井 雪, 森井 亨, 前川喜久雄, 加藤 祥, 小西 光

「『国語研日本語ウェブコーパス』の検索系」, 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, (論文集, P17-7), 2016.3.10.

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 言語資源研究系 准教授

1971 生

【学位】博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程 日本文化研究専攻修了 (1997), 同 博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【職歴】明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009)

【専門領域】日本語学, 自然言語処理

【所属学会】日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】言語処理学会 編集委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第2回所長賞

2011 情報処理学会山下記念研究賞

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」: 共同研究者

研究成果:

本プロジェクト成果をまとめた論文集である近藤泰弘, 田中牧郎, 小木曾智信 (編)『コーパスと日本語史研究』を編集, 2015 年 10 月にひつじ書房より刊行した。また, 2015 年 10 月に第3期準備プロジェクト「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」と共同で, プロジェクト国際シンポジウム「『通時コーパス』国際シンポジウム」を開催した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: 共同研究者

研究成果:

コーパス検索アプリケーション「中納言」の機能追加アップデートを担当した。また, 形態素解析用の辞書「UniDic」をアップデートし, 解析用インターフェイス「Web 茶まめ」とともに公開した。プロジェクトで開催した「第8回コーパス日本語学ワークショップ」では司会を担当した。

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業機構内連携研究「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究者

研究成果:

人情本のコーパス化とアノテーションについて共同研究を行ない, 全文検索システム「ひまわり」による試作版「人情本コーパス」の構築に協力した。

第3期準備プロジェクト「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」: リーダー

2015 年 10 月に基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」と共同で, プロジェクト国際シンポジウム「『通時コーパス』国際シンポジウム」を開催した。また, 「通時コーパスの設計」プロジェクトを引き継いで, コーパス検索アプリケーション「中納言」上で『日本語歴史コーパス』の「平安時代編」に2作品を追加, 「室町時代編 I 狂言」に長単位データを追加, 「鎌倉時代編 I 説話・随筆」を新規公開, 「明治・大正編 I 雑誌」を新規公開した。さらに「江戸時代編 I 洒落本」の試作版として全文検索システム「ひまわり」用データを公開した。これらの時代別の形態素解析辞書 (時代

別 UniDic 辞書) を開発, 解析用インターフェイス「Web 茶まめ」とともに公開した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・ 基盤研究 (A)「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」

【研究業績】

《著書・編書》

近藤泰弘, 田中牧郎, 小木曾智信 (編)

『コーパスと日本語史研究』(ひつじ研究叢書 (言語編) 第 127 巻), ひつじ書房, 2015.10.

《論文・ブックチャプター》

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間淵洋子, 浅原正幸, 立花幸子, 加藤 祥, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正』, 『国立国語研究所論集』9, pp.81-100, 2015.7.

小木曾智信

『中古和文における文体別の特徴語』, 『コーパスと日本語史研究』, pp.93-117, ひつじ書房, 2015.10.

《国際会議録》

Tomoaki Kouno and Toshinobu Ogiso

“Improving an electronic dictionary for morphological analysis of Japanese: Use of historical period information”, *Proceedings of the 9th Asialex Conference*, pp.441-449, 2015.6.

《データベース類》

- ・『日本語歴史コーパス』「平安時代編」短単位／長単位 ver.1.1
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html
- ・『日本語歴史コーパス』「鎌倉時代編 I 説話・随筆」短単位／長単位 ver.1.0
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/kamakura.html
- ・『日本語歴史コーパス』「室町時代編 I 狂言」短単位／長単位 ver.1.0
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/muromachi.html
- ・『日本語歴史コーパス』「江戸時代編 I 洒落本」ひまわり版 ver.0.5
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html
- ・『日本語歴史コーパス』「明治・大正編 I 雑誌」短単位 ver.0.9
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html
- ・形態素解析支援ツール「Web 茶まめ」ver.2016.3 <http://chamame.ninjal.ac.jp/>
- ・時代別 UniDic 辞書「現代語 UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「現代語話し言葉 UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「旧仮名口語 UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「近代文語 UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「近世口語 (洒落本) UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「中世口語 (狂言) UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「中世文語 (説話・随筆) UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「中古和文 UniDic」ver.2016.3
- ・時代別 UniDic 辞書「上代 (万葉集) UniDic」ver.2016.3

《その他の出版物・記事》

田中牧郎, 小木曾智信

「開発者に聞く『日本語歴史コーパス』とは?」, ネットアドバンス JK ボイス インタビュー,
<http://japanknowledge.com/articles/jkvoice/interview/> 2015.6.

小木曾智信

「コーパス活用の勘所【日本語史】中古語の文法(2) 係り結びと連体形終止」, 『日本語学』34(10),
pp.68-73, 明治書院, 2015.8.

小木曾智信

「ネットワークにつなぐこと」, 『東京大学国語国文学会会報』54, p.1, 2016.3.

小木曾智信

「〈著書紹介〉近藤泰弘, 田中牧郎, 小木曾智信 編『コーパスと日本語史研究』」, 『国語研プロジェクトレビュー』6(3), pp.111-113, 2016.3.

小木曾智信

「歴史コーパスの観点から」, 『NINJAL 合同シンポジウム報告書『正しい日本語』ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」, pp.37-58, 国立国語研究所, 2016.3.

【講演・口頭発表】

小木曾智信, 鴻野知暁, 市村太郎

「狂言台本の形態素解析」, 日本語学会 2015 年度春季大会, 関西学院大学, 2015.5.24.

市村太郎, 渡辺由貴, 鴻野知暁, 河瀬彰宏, 小林正行, 山田里奈, 堀川千晶, 村山実和子, 小木曾智信, 田中牧郎

「『虎明本狂言集』コーパスの公開」, 日本語学会 2015 年度春季大会, 関西学院大学, 2015.5.24.

Taro Ichimura, Yuki Watanabe, Tomoaki Kouno, and Toshinobu Ogiso

“Construction of the Corpus of Toraakira-bon Kyōgen”, DH2015: Annual Conference of Digital Humanities, The Alliance of Digital Humanities Organizations (ADHO), Western Sydney University, 2015.7.1.

Toshinobu Ogiso, Tomoaki Kouno, and Taro Ichimura

“Morphological analysis of Japanese kyōgen text”, DH2015: Annual Conference of Digital Humanities, The Alliance of Digital Humanities Organizations (ADHO), Western Sydney University, 2015.7.1.

小木曾智信

「国語研究所のコーパスと Web」, 京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文学研究資料にの Web の可能性を再探する」, 京都大学, 2015.8.21.

山田祐実, 大村 舞, 鴻野知暁, Kevin Duh, 小木曾智信, 松本裕治

「万葉集を対象とした原文と読み下し文のアライメント」, 第 8 回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, 2015.9.2.

小木曾智信

「歴史コーパスの観点から」, コーパス合同シンポジウム「『正しい日本語』ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」, 国立国語研究所, 2015.9.3.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』にもとづく中古仮名文学作品の語彙分析」, 第 110 回国語語彙史研究会, 京都大学, 2015.9.26.

小木曾智信

「日本語歴史コーパスの量的・質的拡張」, 「通時コーパス」国際シンポジウム, 国立国語研究所,

2015.10.4,

小木曾智信

「自然言語処理から照射した現代日本語文法：統計的機械学習と『文法』」(招待講演), 日本語文法学会 第16回大会シンポジウム「関連領域から照射した現代語文法」, 学習院女子大学, 2015.11.14.

堤 智昭, 小木曾智信

「歴史的資料を対象とした複数の UniDic による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015」, 同志社大学京田辺キャンパス, 2015.12.19,

間淵洋子, 小木曾智信

「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015」, 同志社大学京田辺キャンパス, 2015.12.19.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス (CHJ)』の概要と検索」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

市村太郎, 小木曾智信

「文書構造を利用した近世期洒落本の形態素解析」, 言語処理学会第22回年次大会, 東北大学, 2016.3.8.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・コーパス合同シンポジウム, 国立国語研究所 (企画), 2015.9.3.
- ・「通時コーパス」国際シンポジウム, 国立国語研究所 (企画・運営), 2015.10.4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ニホンゴ探検 2016 変わっていく「ことば」～過去から現在, そして未来へ～「昔のこどもの本を読もう! 100年前の国語の教科書『国定読本』」, 国立国語研究所, 2015.7.18.
- ・情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム・じんもんこん 2015 査読委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・外来研究員の受入
博報財団国際日本研究フェローシップ招聘研究者 Stephen Wright Horn
(研究テーマ:「近世以前の日本語の通時コーパスの統語情報付加: 言語学研究の実用に向けて」)
- ・特別共同利用研究員の受入
オックスフォード大学大学院生 久屋愛実
(研究テーマ:「コーパスに基づく外来語の社会言語学的研究」)
- ・講習会講師
日本語歴史コーパス「中納言」講習会 講師, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス, 2015.5.23.

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 言語資源研究系 准教授

【学位】 文学学士

【学歴】 東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991)

【職歴】 富士通株式会社システムエンジニア (1991-1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター研究員 (1991-1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員 (2009), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009)

【専門領域】 日本語学

【所属学会】 計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員・学会試行標準 WG9 小委員会委員

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: 共同研究員

『BCCWJ/CSJ』に対する「れる・られる」用法アノテーション』を公開用データとして整え, 公開した。これは, 「れる・られる」の意味分析や自動分類の可能性を探るべく, 「受身・尊敬・可能・自発」の分類情報を人手により付与したものである。さらに, 「受身」の下位分類として, 「直接の受身」「間接の受身」「持ち主の受身」「有情の受身」「非情の受身」といった分類情報も付与している。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: 共同研究員

雑誌『日本語学』(明治書院) の連載「コーパス活用の勘所」(全 22 回) のうち, 16 回目の執筆を担当した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・基盤研究 (C) 「書き言葉的」と「話し言葉的」という文体差のある語の分析」

【研究業績】

《データベース類》

・BCCWJ/CSJ に対する「れる・られる」用法アノテーション BCCWJ_AUX-1.0.0.zip
<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mdl/>

《その他の出版物・記事》

柏野和佳子

「コーパス活用の勘所【現代語】語彙 (2) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による古風な語の研究」, 『日本語学』34 (8), pp.70-75, 明治書院, 2015.7.

【講演・口頭発表】

宮壽由美, 西野あゆみ, 柏野和佳子, 山崎 誠

「若者のあいさつ言葉と待遇性の考察 —ケータイメールコーパスにおける「おつかれさま」の出現例をもとに—」, 計量国語学会第 59 回大会, 神戸大学, (予稿集, pp.55-60), 2015.9.

柏野和佳子, 田嶋明日香, 平本智弥, 木田真理

「学術的文章作成時に留意すべき「書き言葉的」「話し言葉的」な語の文献調査」, 言語処理学会第 22 回年次大会, 東北大学, (発表論文集, pp.1041-1044), 2016.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検 2016」で辞書引きコーナーを担当。2015.7.18.
- ・NINJAL ジュニアプログラムによる出前授業（立川市西砂学習館）。2015.7.31.
- ・NINJAL ジュニアプログラムによる小学校への出前授業（立川市立西砂小学校）。2016.2.22.
- ・NINJAL ジュニアプログラム（訪問受入型）による小学生への授業（阿南町立大下条小学校）。2016.3.25.
- ・「本と遊ぼうこどもワールド 2015 第 37 回優良児童図書展示会」にて講演。2015.8.7.

丸山 岳彦 (まるやま たけひこ) 言語資源研究系 准教授

1972 生

【学位】博士(学術)(国際基督教大学, 2013)

【学歴】神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業(1995), 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科日本語日本文化専攻修士課程修了(1997), 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻博士課程単位取得退学(2000)

【職歴】株式会社 ATR 音声言語通信研究所 客員研究員(2000), 国際電気通信基礎技術研究所 ATR 音声言語コミュニケーション研究所 研究員(2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員(2004), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教(2009), 同 准教授(2011)

【専門領域】言語学, 日本語学, コーパス日本語学

【所属学会】日本語文法学会, 言語処理学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議 特任連携会員; 日本語文法学会 学会誌委員; 言語処理学会 評議員

【受賞歴】

2016 言語処理学会第 22 回年次大会 優秀賞「現代日本語における節の分類体系について」(丸山岳彦, 佐藤理史, 夏目和子)

2006 言語処理学会第 12 回年次大会 優秀発表賞「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」(共著)

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: 共同研究員

研究成果:

BCCWJ コアデータに対して節境界ラベルをアノテーションするため, 名古屋大学の佐藤理史教授と連携して, 節境界解析プログラム「Rainbow4」の開発を進めた。開発の経過とアノテーションの実施に関して, 研究発表を行った。そのうちの 1 つは, 言語処理学会第 22 回年次大会優秀賞を受賞した。1 月, BCCWJ のコアデータの一部に対して節境界ラベルをアノテーションした結果を, コーパス開発センターの Web ページ上で公開した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: 共同研究員

研究成果:

次期中期計画の間に国語研で開発する日本語コーパスの候補として, 「通時音声コーパス」を想定し, その設計に関して検討と発表を行った。歴史的な音声資料を収集してコーパス化すると, 過去 100 年における話し言葉の変化を実データに基づいて分析できることになる。この予備的分析と, 今後の見通しについて検討し, その成果を発表した。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」: 共同研究員

研究成果:

昭和戦前期の「SP 盤貴重音源資料」の文字化資料を活用した研究の成果を論文にし, 論文集の形で刊行した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間淵洋子, 浅原正幸, 立花幸子, 加藤 祥, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正, 『国立国語研究所論集』9, pp.81-100, 2015.7.

丸山岳彦

「大正～昭和前期の演説に現れる文末表現のバリエーション」, 相澤正夫, 金澤裕之 (編) 『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』, pp.271-291, 笠間書院, 2016.3.

《その他の出版物・記事》

丸山岳彦

「コーパス活用の勘所【現代語】文法(2)『日本語話し言葉コーパス』に基づく自己修復の分析」, 『日本語学』34(6), pp.78-83, 明治書院, 2015.5.

【講演・口頭発表】

丸山岳彦

「コーパスに基づく節連鎖構造の分析」(招待), 神戸大学・国立国語研究所・オックスフォード大学ワークショップ: コーパスに基づく日本語研究, 神戸大学, 2015.5.22.

Takehiko Maruyama

“Segmentation of two English short texts through different theoretical views” IX LABLITA and IV LEEL International Workshop: Units of Reference for Spontaneous Speech Analysis and Their Correlations across Languages, Belo Horizonte, 2015.8.3.

Takehiko Maruyama

“Two-level utterance units: Cognitive and communicative aspects of spontaneous speech”, IX LABLITA and IV LEEL International Workshop: Units of Reference for Spontaneous Speech Analysis and Their Correlations across Languages, Belo Horizonte, 2015.8.6.

丸山岳彦

「[通時音声コーパス]は可能か」, 第8回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.29-36), 2015.9.1.

佐藤理史, 丸山岳彦

「節境界認定に関する諸問題」, 第8回コーパス日本語学ワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.225-232), 2015.9.2.

丸山岳彦

「コーパス日本語学の射程」, 第3回地球研・国語研合同研究打合せ会「[方言]と伝統的暮らし・価値観から見直す地球環境学—情報のまとめ方, 使い方—」, 2015.10.5.

丸山岳彦

「日本語文法から見た『基本文型の研究』」(パネルセッション「現代から見た林言語学の魅力」), 日本語文法学会第16回大会, 学習院女子大学, (発表予稿集, pp.66-74), 2015.11.15.

丸山岳彦, 佐藤理史, 夏目和子

「現代日本語における節の分類体系について」, 言語処理学会第22回年次大会, 東北大学, (予稿集, pp.1113-1116), 2016.3.8.

Takehiko Maruyama

“Diachronic corpus of spoken Japanese: Retrospect and prospect”, International Symposium on Building and Using Spoken Corpora: Experiences in Japan and Finland, 2016.3.13.

丸山岳彦

「日本語コーパスに基づく節連鎖構造の分析」, 頭脳循環プログラム 総括シンポジウム：日本語のコーパス研究, 2016.3.20.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・日本語文法学会第16回大会パネルセッション「現代から見た林言語学の魅力」(共同企画), 2015.11.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ニホンゴ探検 2015 ミニ講義「話しことばのひみつどうぐ」を担当。2015.7.18.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・特別共同利用研究員の受入
オックスフォード大学大学院生 Maria Telegina 2016.1-2
- ・集中講義
東京外国語大学(コーパス日本語学) 2016.2.

山口 昌也 (やまぐち まさや) 言語資源研究系 准教授

1968 生

【学位】 博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】 東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同研究開発部門言語資源グループ 研究員 (2006), 同研究開発部門言語資源グループ主任研究員 (2008), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011)

【専門領域】 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本教育工学会, 電子情報通信学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

・挑戦的萌芽研究「即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山口昌也, 大塚裕子, 北村雅則

「学習者によるアノテーションを用いた協調学習過程観察支援システムの設計」, 『「評価」を持って街に出よう』, pp.222-237, くろしお出版, 2016.1.

《データベース類》

・全文検索システム『ひまわり』用の『分類語彙表』パッケージ

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (全文検索システム『ひまわり』のページ) 2015.6.

・全文検索システム『ひまわり』用の『青空文庫』パッケージ

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (全文検索システム『ひまわり』のページ) 2015.10.

・ディスカッション観察支援ツール FishWatchr ver.0.9.5

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (FishWatchr のページ) 2016.2.

・全文検索システム『ひまわり』ver.1.5.4

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (全文検索システム『ひまわり』のページ) 2016.2.

《その他の出版物・記事》

山口昌也

「自分用のコーパスを作る (2) — 『青空文庫』パッケージを例として—」, 『日本語学』34 (15), pp.68-73, 明治書院, 2015.10.

【講演・口頭発表】

山口昌也, 大塚裕子, 北村雅則

「ディスカッション観察支援システム FishWatchr を用いた実践手法の提案」, 第8回日本語コーパスワークショップ, 国立国語研究所, (予稿集, pp.237-242), 2015.9.2.

Masaya Yamaguchi

“A video annotation tool for students to observe language activities”, Construction of Digital

Resources for Learning Japanese, Bologna, Italy, 2015.10.24.

北村雅則, 山口昌也

「議論を通じた意見集約に見られる問題点の分析」, 日本教育工学会研究会, 香川大学, 2016.3.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・ワークショップ:「授業を評価する:FishWatchrによる評価の集約と可視化」(企画・運営),
2016.1.10.

・ワークショップ:「話し合いを分析する:FishWatchrによる評価の集約と可視化」(企画・運営),
2016.1.10.

【その他の学術的・社会的活動】

・産業日本語研究会 世話人

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

言語対照研究系 教授, 研究系長

【学位】 博士 (学術) (神戸大学, 2000)

【学歴】 ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了 (1993), 神戸大学大学院文化科学研究科修了 (2000)

【職歴】 神戸大学文学部 講師 (2005), 同 人文学研究科 講師 (2007), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2011), 同 研究系長 (2014)

【専門領域】 言語学, 言語類型論, 対照言語学

【所属学会】 日本語文法学会, 日本言語学会, 関西言語学会

【受賞歴】

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞: パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋 (編) 2007. 『日本語 —マラーティー語基本動詞用法事典』(428 ページ)。財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000 The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”, Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」: リーダー

研究目的:

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の1つは「他動性」である。本プロジェクトでは、意味的他動性が出来事の認識とその言語表現および言語習得にどのように反映するかを解明することを目的とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の35の言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを志向する。方法論においては、従来の研究手法を超えて、言語類型論の知見を心理学や第二言語習得研究における実験的手法に取り入れることによって、共同研究でなければ到達できない理解を目指す。

研究成果:

- ・国際会議1件 (NINJAL 国際シンポジウム “Grammaticalization in Japanese and Across Languages”), 国際ワークショップ1件, 研究成果発表会2件を開催した。
- ・研究成果の刊行 (単著1冊, 編著書1冊, 辞書1冊) を行った。
- ・電子成果物として, 「使役交替言語地図」(WATP) 1.10 版 (12 言語のデータを追加, 合計 60 言語), 「基本動詞ハンドブック (インターフェース更新, 見出し追加, 合計 65 見出し)», 「現代語自他対一覧表 Excel 版」を Web サイトで公開した。

【2015 年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

- ・基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」

【研究業績】

《著書・編書》

プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, ハイコ・ナロック (編)

『有対動詞の通言語的研究 —日本語と諸言語の対照から見えてくるもの—』, くろしお出版, 2015.12.

Prashant Pardeshi

A Functional Account of Marathi's Voice Phenomenon: Passives and Causatives in Marathi, Brill's Studies in South and Southwest Asian Languages 7, Leiden/Boston: Brill, 2016.2.

《論文・ブックチャプター》

ハイコ・ナロック, プラシャント・パルデシ, 赤瀬川史朗

「日本語自他動詞対のコード化の頻度論的動機づけ —大規模コーパスによる検証—」, プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, ハイコ・ナロック (編) 『有対動詞の通言語的研究 —日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの』, pp.25-41, くろしお出版, 2015.12.

《データベース類》

・「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) 1.10 版 (12 言語のデータを追加, 合計 60 言語) <http://watp.ninjal.ac.jp/> 2015.4.29.

・「基本動詞ハンドブック」インターフェース更新 (見出し語一覧に意味別, 50 音別の検索を追加, 4 見出し追加), 2015.7.7.; 8 見出し追加 (合計 65 見出し), 2015.11.24.

<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>

《辞書・辞典類》

Prashant Pardeshi, Kazuyuki Kiryu, Hari Damle, and Meena Ashizawa

『日本語—マラーティー語基本動詞辞典』, Pune: Rajhans Prakashan, 2015.12.

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ

「日本語から見たマラーティー語 —温度表現の対照研究—」, 『日本語学』 34 (8), pp.62-68, 明治書院, 2015.7.

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの —プロジェクトの理論的・応用的な研究成果—」 『国語研プロジェクトレビュー』 6 (2), pp.35-46, 2015.10.

【講演・口頭発表】

Peter Hook and Prashant Pardeshi

“Grammaticalization in South Asia? Weighing areal, genetic, and typological factors”, NINJAL International Symposium “Grammaticalization in Japanese and Across Languages”, NINJAL, 2015.7.3-5.

プラシャント・パルデシ

「言語研究 (理論) と言語教育 (実践) の双方向法的な対話に向けて」, Department of Language and Linguistic Science, University of York, U.K., 2015.9.21.

プラシャント・パルデシ

「インド・ブネーにおける日本語学習と印日文化交流の歩み —オーラル・ヒストリーの記録を通じて—」, 日本南アジア学会第 28 回全国大会, 東京大学, 2015.9.26-27.

今村泰也, プラシャント・パルデシ, ソーナル・クルカルニー, ピーター・フック, 李 在鎬

「マラーティー語における行為の結果の回避可能性について —日本語と対照を通じて—」, 日本南アジア学会第 28 回全国大会, 東京大学, 2015.9.26-27.

プラシャント・パルデシ

「言語の普遍性と多様性～自動詞・他動詞の対応に見られる普遍的傾向～」, 第9回NINJALフォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

今村泰也, プラシヤント・パルデシ

「日本語教育に役立つ『基本動詞ハンドブック』の開発」(ポスター発表), 第9回NINJALフォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

アラステア・バトラー, 吉本 啓, 岸本秀樹, プラシヤント・パルデシ

「統語・意味解析情報付き日本語コーパスのアノテーション」, 言語処理学会第22回年次大会, 東北大学, (発表論文集, pp.589-592), 2016.3.7-11.

プラシヤント・パルデシ

「体系的な基本動詞学習『基本動詞ハンドブック』の活用」, Dept. of East Asian Languages, Literatures, and Cultures, University of Virginia, U.S.A., 2016.3.28.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL 国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」(企画・運営), 2015.7.3-5.

【大学院教育・若手研究者育成】

・第19回NINJAL チュートリアル「言語類型論の最新の動向 ー理論研究と応用研究の接点ー」, 那覇市ぶんかテンブス館, 2016.2.19-20.

Anna Bugaeva (アンナ ブガエワ) 言語対照研究系 特任准教授

1973 生

【学位】博士 (文学) (北海道大学, 2004)

【学歴】サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部日本語科卒業 (1996), 北海道大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了 (2000), 北海道大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程修了 (2004)

【職歴】オーストラリア ラ・トロブ大学言語類型論センター 客員研究員 (2007), 早稲田大学高等研究所 助教 (2008), 同 准教授 (2011), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 特任准教授 (2012)

【専門領域】言語学, アイヌ語学, 言語類型論

【所属学会】Societas Linguistica Europaea (SLE), Association for Linguistic Typology (ALT), 日本言語類型論学会, 日本言語学会, 日本ロシア文学会

【受賞歴】

2015 国立国語研究所第 11 回所長賞

2013 大学共同利用機関法人人間文化研究機構人間文化研究奨励賞

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」(リーダー: John Whitman 教授)における「アイヌ語班」: リーダー

研究目的:

このプロジェクトは, 日本語との接触によるアイヌ語の文法的変容に注目しつつ, 日本における唯一の非日本諸語であるアイヌ語についての我々の知識を維持・拡充することに焦点を当てるものである。

アイヌ語班は, アイヌ語諸方言の記述, アイヌ語資料の整理・分析・保存, そして言語類型論の観点から見たアイヌ語研究を進めることを目指している。アイヌ語の言語学的研究が開始されてから 1 世紀以上が過ぎたが, 言語学的研究の全体的な蓄積は未だ不十分であり, 精密な記述, 通時的側面の解明, 言語類型論の観点からの位置づけなど, さらなる研究の深化が期待される。

研究成果:

アイヌ語班は, アイヌ語研究を牽引してきた国内の研究者 9 名 (共同研究員) と大学院生を含む若手研究者 11 名 (研究協力者) をメンバーに迎え, 今年度 2 回の研究発表会 (6 月 13 ~ 14 日と 12 月 5 ~ 6 日), 1 回の国際学会 (北海道大学, 8 月 20 ~ 21 日) における研究発表と議論をとおして研究の向上をはかった。

- 1) 『アイヌ語口承文芸コーパス —音声・グロス付き—』(日本語版・英語版) を公開した。
- 2) Anna Bugaeva (ed.) *Handbook of the Ainu Language* (De Gruyter Mouton) の編集準備を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Anna Bugaeva

“Valency classes in Ainu”, Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World's Languages*, pp.807-854, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2015.9.

Anna Bugaeva

“Causative constructions in Ainu: A typological perspective with remarks on the diachrony”, *STUF- Language Typology and Universals (Sprachtypologie und Universalienforschung)*, 68(4),

pp.439–484, 2015.11.

《データベース類》

- ・中川 裕, アンナ・ブガエワ, 小林美紀『アイヌ語口承文芸コーパス —音声・グロス付き—』
<http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/>

Hiroshi Nakagawa, Anna Bugaeva, and Miki Kobayashi, A Glossed Audio Corpus of Ainu Folklore. <http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/en/> 2016.3.23.

【講演・口頭発表】

Anna Bugaeva

“The age of polysynthesis in Ainu”, International Conference on Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area, Hokkaido University, 2015.8.20.

Anna Bugaeva

“Possession and beyond: the polyfunctionality of the possessive construction in Ainu”, 48th Annual Meeting, Societas Linguistica Europaea, Leiden University, 2015.9.4.

Anna Bugaeva

“Evidence for interaction with Japanese in Ainu morphosyntax” (招待講演), Leiden University, 2015.9.24.

Anna Bugaeva

“Relative clause-based complex possessive NP in Ainu”, Workshop on Relative Clauses: Relatives in East Asia & Beyond, Cornell University, 2015.11.14.

アンナ・ブガエワ

「アイヌ語研究の新地平 —国立国語研究所プロジェクトのアイヌ語班の研究活動—」(招待講演), 東京外国語大学国際日本学研究院国際シンポジウム「国際日本研究 —対話, 交流, ダイナミクス」, 東京外国語大学, 2016.1.31.

アンナ・ブガエワ, 小林美紀

「アイヌ語研究の新しい局面へ向けた取り組み —アイヌ語班研究活動報告—」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

アンナ・ブガエワ, 小林美紀

「語りの中に生きることば —『アイヌ語の口承文芸コーパス』—」(デモンストレーション), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

Anna Bugaeva

“Ainu, an atypical language of Northeast Asia”, Workshop “Frontiers of Early Human Expansion in Asia: Linguistic and Genetic Perspectives on Ainu, Japan and the North Pacific Rim”, University of Zurich, 2016.3.14.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・International Conference: Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area (北海道大学とヘルシンキ大学との共催による国際会議の企画運営), 2015.8.20–21.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・学術誌査読委員: *Diachronica, Language Change and Dynamics, The Journal of Asian and African Studies*

- ・ “The Ainu language and culture”, A lecture for American students from Earlham College, Tokyo Central Youth Hostel, Tokyo.
- ・ 「日本国内の言語多様性 ―消滅の危機に瀕した言語・方言― 近くて遠いアイヌを知ろう」(ポスター発表・デモンストレーション), 大学共同利用機関シンポジウム 2015, アキバ・スクエア, 2015.11.27.
- ・ 「日本が誇るべきのアイヌ語の研究 ―世界の言語の類型研究への貢献―」, 第3回人間文化研究機構メディア懇談会, 人間文化研究機構, 2016.1.13.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
一橋大学大学院言語社会研究科 「日本語学講義 I」 言語類型論. アイヌ語と日本語を中心に」
東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 「アイヌ語」, 「言語学演習」

石本 祐一 (いしもと ゆういち) 研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士(情報科学)(北陸先端科学技術大学院大学, 2004)

【学歴】宇都宮大学工学部卒業(1997), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了(2000), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了(2004)

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手(2007), 同 助教(2009), 独立行政法人国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員(2010), 情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員(2010), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員(2013), 同 研究情報資料センター 特任助教(2013)

【専門領域】音響音声学, 音声工学

【所属学会】日本音響学会, 電子情報通信学会

【2015年度の研究成果の概要】

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備」: 共同研究員

研究成果:

日常場面での会話を収録するための方法論を構築するために, 日常会話の収録要件を整理した。さらに, 2016年度からの大規模な日本語日常会話の収録に向けて, 主に音声データの収録に適した機器や収録形態の検討を行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題(研究代表者)】

・基盤研究(C)「音声アシスタントとの円滑な話者交替を実現する音声言語特徴の解明」

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 石本祐一, 菊池英明, 坊農真弓, 坂井田瑠衣, 渡部涼子, 田中弥生, 伝 康晴

「大規模日常会話コーパスの構築に向けた取り組み 一会話収録法を中心に」, 人工知能学会研究会, 千葉大学, (SIG-SLUD-B5(01), pp.37-42), 2015.7.

石本祐一, 榎本美香

「話者移行適格場の韻律的予測に関わる特徴量の実験的検証」, 日本音響学会 2015年秋季研究発表会, 会津大学, (講演論文集, pp.357-360), 2015.9.

石本祐一, 小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスに基づく自発発話の継続・終了に関わる韻律情報の分析」, 日本音響学会 2016年春季研究発表会, 桐蔭横浜大学, (講演論文集, pp.345-346), 2016.3.

籠宮 隆之 (かごみや たかゆき) 研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士(学術)(神戸大学, 2008)

【学歴】東京都立大学人文学部史学科卒業(1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了(1999), 神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士課程修了(2008)

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員(1999-2005), 独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員(2008), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教(2013)

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会, 日本音響学会, 社会言語科学会, International Speech Communication Association

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員; 日本音声学会 広報委員; 日本音声学会 庶務委員; 日本音声学会 音声学普及委員; 社会言語科学会 企画委員; 社会言語科学会 編集委員

【2015年度の研究成果の概要】

情報発信機能強化のための機関リポジトリ構築事業: 共同研究者

研究目的:

国立国語研究所の研究成果を広く発信するため, 機関リポジトリの構築に取り組んでいる。本事業課題では, 人間文化研究機構全体で統一的に研究成果を発信するための統一プラットフォームの構築と, リポジトリに登録するデータの作成に取り組む。

研究成果:

人間文化研究機構で統一的に研究成果を発信するため, JAIRO Cloud 上で「国立国語研究所学術情報リポジトリ」を構築し, 公開した。また, 過去の国語研が刊行した出版物の一部を PDF 化し, その刊行物のメタ情報を作成した。

【2015年度に実施した科研費研究課題(研究代表者)】

- ・基盤研究(C)「実環境下を想定した聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能評価試験の開発」

【研究業績】

《国際会議録》

Takayuki Kagomiya

“Articulatory positions of Japanese vowels as a function of duration computed from a large-scale spontaneous speech corpus”, *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences*, pp.ICPHS0671:1-5, Glasgow, 2015.8.

Takayuki Kagomiya and Seiji Nakagawa

“Development and evaluation of bone-conducted ultrasonic hearing aid regarding transmission of voice emotion: Comparison of DSB-TC and DSB-SC amplitude modulation methods”, *Proceedings of the 12th Western Pacific Acoustics Conference 2015*, pp.495-500, Singapore, 2015.12.

《データベース類》

- ・『沖縄語辞典』データ集 <http://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/> 2016.3.
- ・『幼児・児童の連想語彙表』データ <http://mmsrv.ninjal.ac.jp/wordlists/#association> 2016.3.
- ・『日本語教育のための基本語彙調査』データ

【講演・口頭発表】

籠宮隆之, 中川誠司

「異なる振幅変調方式を用いた骨導超音波補聴器の話者感情伝達性能の評価」, 日本音響学会
2015年秋季研究発表会, 会津大学, (講演論文集, pp.465-466), 2015.9.17.

籠宮隆之, 中川誠司

「異なる振幅変調方式の違いによる骨導超音波補聴器の話者情報伝達性能の変化」, 日本音響学会
2016年春季研究発表会, 桐蔭横浜大学, (講演論文集, pp.545-546), 2016.3.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・兵庫県立兵庫高校「平成27年度東京みらいフロンティアツアー」にて, 高校生を対象とした講演。
2015.8.4.

野田 尚史 (のだ ひさし) 日本語教育研究・情報センター 教授, センター長

1956 生

【学位】博士(言語学)(筑波大学, 1999)

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業(1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了(1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退(1981)

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手(1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師(1985), 大阪府立大学総合科学部 講師(1991), 同 助教授(1993), 同 教授(1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授(2005), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構日本語教育研究・情報センター 教授(2012), 同 センター長(2015)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese, Canadian Association for Japanese Language Education

【学会等の役員・委員】日本語学会 理事・評議員; 日本言語学会 事務局長・評議員; 日本語文法学会 評議員; 社会言語科学会 理事・学会誌編集委員長; 言語系学会連合 運営委員

【受賞歴】

2006 第4回日本語教育学会奨励賞

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」: リーダー

研究目的:

研究の目的は, 次の2つであった。

- (1) 日本語教育研究の中でも特に研究が不足している日本語学習者の聴解過程の分析を中心に, コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要な基礎的な研究を行う。
- (2) 日本語と他の言語の対照研究を中心に, 世界の言語研究に貢献でき, 日本語教育にも役立つような日本語文法についての基礎的な研究を行う。

研究成果:

- (1) コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要な基礎的な研究の成果としては, *Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings* で「中級学習者が雑談に参加するときの聴解の問題点」という論文を発表した。また, ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで「日本語学習者コーパスにおける対話: ロールプレイ, メール, エッセイの分析をとおして」というパネル発表と「日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点」という口頭発表を行った。これらは2016年6月発行予定の『ヨーロッパ日本語教育』に論文として掲載される予定である。そのほか, 中国の広州と北京で開かれた国際シンポジウムで, それぞれ「日本語教育における文法の役割」「日本語教育学の理論と実践をつなぐ方法」という基調講演を行ったのをはじめ, インド・プネー市, 南山大学, 東京外国語大学等で日本語教育に関する講演を行った。また, 神戸と福岡で日本語ボランティアのための研修を行った。
- (2) 世界の言語研究に貢献でき, 日本語教育にも役立つような日本語文法研究の成果としては, 益岡隆志(編)『日本語研究とその可能性』に「世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性—「する」言語と「なる」言語, 高コンテキスト言語と低コンテキスト言語の再検討を中心に—」という論文を発表した。また, 『日本語文法』に「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」

という論文を、『国語と国文学』に「文の階層構造から見た現代日本語の接続表現」という論文を
発表した。そのほか、『日本語文法』に対照研究に関する展望を掲載し、東京言語研究所、立命館
大学等で日本語教育に役立つ日本語文法について講演を行った。

【2015 年度に実施した科研費研究課題（研究代表者）】

・基盤研究（A）「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野田尚史

「文の階層構造から見た現代日本語の接続表現」、『国語と国文学』92（4），pp.3-18，東京大学国
語国文学会（編集），明治書院（発行），2015.4.

野田尚史

「わかりにくい揭示」，定延利之（編）『私たちの日本語研究 一問題のありかと研究のあり方一』
pp.1-3，朝倉書店，2015.5.

野田尚史

「世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性 —「する」言語と「なる」言語，高
コンテクスト言語と低コンテクスト言語の再検討を中心に—」，益岡隆志（編）『日本語研究とそ
の可能性』，pp.106-132，開拓社，2015.6.

野田尚史

「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」、『日本語文法』15（2），pp.82-98，日本語文
法学会，2015.9.

野田尚史，阪上彩子，中山英治

「中級学習者が雑談に参加するときの聴解の問題点」，*The 22st Princeton Japanese Pedagogy
Forum Proceedings*，pp.142-152，Princeton, NJ: Department of East Asian Studies, Princeton
University. 2015.12.

野田尚史

「[書評論文] 藤田保幸著『引用研究史論 一文法論としての日本語引用表現研究の展開をめぐっ
て—』」，『日本語文法』16（1），pp.88-95，日本語文法学会，2016.3.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「〈共同研究プロジェクト紹介〉ウェブサイトのクチコミに対するヨーロッパの日本語学習者と日
本語母語話者の解釈の違い」，『国語研プロジェクトレビュー』6（3），pp.83-92，2016.2.

野田尚史，益岡隆志，井上 優

「[[特別記事：日本語文法学会の展望] 展望 3：対照研究」，『日本語文法』16（1），pp.145-154，
日本語文法学会，2016.3.

野田尚史

「[[学びを語る] 外国人の日本語]（インタビュー）」，『朝日新聞』2016年1月21日（朝刊），25面，
朝日新聞東京本社，2016.1.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「日本語教科書の過去，現在，未来 一文法重視からコミュニケーション重視へ」（招待講演），
南山大学外国人留学生別科創立 40 周年記念事業「日本語と留学生でつなぐ過去，現在，未来」，

- 日本語・日本語教育連続講演会，南山大学，2015.4.
- 吉本 啓，プラシヤント・パルデシ，アラステア・バトラー，岸本秀樹，野田尚史
「日本語構造体コーパスの有用性と課題 ―条件節を含む複文を例として―」，ワークショップ「文の統語・意味解析情報をタグ付けした日本語構造体コーパスの開発」，関西言語学会第40回大会，神戸大学，2015.6.
- 野田尚史
「日本語教育のための日本語文法」，東京言語研究所2015年度第1回公開講座，東京言語研究所，2015.6.
- 野田尚史
「日本語教科書はどこが変わり，どこが変わっていないか？ ―過去を振り返り，将来の日本語教材を考えるために―」(招待講演)，夏季セミナー2015「言語・文化・社会―国際日本研究の試み―」，東京外国語大学，2015.7.
- 宇佐美まゆみ，野田尚史，迫田久美子，福田由紀，小川一美，森島泰則
「日本語学習者の聴解における不適切な解釈についての言語学的研究」，日本心理学会第79回大会 公募シンポジウム「心理学と言語教育科学の連携に向けて ―理解と産出・コミュニケーションの観点から―」，名古屋国際会議場，2015.9.
- 野田尚史，中北美千子，島津浩美，宮崎聡子
「日本語以外の文字による日本語音声表記の必要性」，日本語教育学会2015年度秋季大会パネルセッション「日本語以外の文字による日本語音声表記」，沖縄国際大学，2015.10.
- 中北美千子，野田尚史
「中級学習者の聴解における推測ストラテジー ―日本語母語話者との雑談を例として―」，日本語教育学会2015年度秋季大会，沖縄国際大学，2015.10.
- 野田尚史
「日本語コミュニケーション教育のための文法」(招待講演)，立命館大学言語教育情報研究科学術講演会，2015.11.
- 野田尚史
「日本語教科書の過去・現在・未来」(招待講演)，プネー市日本語教育開始50周年記念セミナー“Japanese Language and Cultural Studies in Pune: Past, Present and Future”，Maharatta Chamber of Commerce, Industries, & Agriculture, Pune, 2015.12.
- 野田尚史
「日本語教育における文法の役割」(招待講演)，国際シンポジウム「グローバル化時代に求められる日本語教育・日本学研究」，中国・暨南大学，2015.12.
- 野田尚史
「国立国語研究所の日本語教育研究 ―日本語学習者の読解のための文法を中心に―」(招待講演)，東京外国語大学国際日本学研究院国際シンポジウム「国際日本研究 ―対話，交流，ダイナミクス―」，東京外国語大学，2016.1.
- 野田尚史
(司会)第9回NINJALフォーラム「ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」，一橋大学一橋講堂，2016.3.
- 野田尚史
「日本語教育学の理論と実践をつなぐ方法」(招待講演)，『日本語教育基礎理論と実践シリーズ叢書』全巻刊行記念国際シンポジウム「日本語教育学の理論と実践をつなぐ」，中国・高等教育出版社，

2016.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ ―母語話者が日本語を使うときの問題として―」（招待講演），兵庫日本語ボランティアネットワーク 2015 年度第 2 回研修会，兵庫県立のじぎく会館，2015.10.
- ・「外国の人たちにもわかりやすい日本語」（招待講演），ふくおか地域日本語の会 日本語ボランティア研修会，福岡市立中央市民センター，2016.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・博士論文審査（副査）
大阪府立大学

石黒 圭 (いしぐろ けい)

日本語教育研究・情報センター 准教授 (-2015.11.30), 教授 (2015.12.1-)

【学位】 博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】 一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015.12-)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】 表現学会 理事; 日本語教育学会 大会委員; 日中言語研究と日本語教育研究会 編集委員; 国立大学日本語教育研究協議会 代表理事; 日本語学会 評議員; 日本語文法学会 評議員

【受賞歴】

2009 第7回日本語教育学会奨励賞

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」: 共同研究員

研究目的:

コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要なことを明らかにすることを目的とする。なかでも, 本年度は, アカデミックな日本語教育場面を対象に,

- ①アカデミックなコミュニケーションに見られる日本語の特徴の分析
- ②日本語教室における学習者どうしのコミュニケーションの実態の分析

に力を入れた。

研究成果:

①の「アカデミックな日本語」については, 接続詞と文末表現を中心に考えた。学習者が専門科目を学ぼうと読む必要がある大学教科書の接続詞の特徴については「NINJAL フォーラム」のポスター発表で, また, 学習者のレポートを書くときに使う接続詞の問題点については『文法・談話研究と日本語教育の接点』所収の論文で紹介した。一方, 大学で学習者が聴かなければならない講義については『一橋大学国際教育センター紀要』所収の論文で, 文末表現の機能の分析を行った。なお, 内容語についても, 「データに基づいた日本語教育のための語彙・文法研究会公開シンポジウム」の講演のなかで, 日本語教育学という身近な専門領域を例に特徴語の抽出を行い, 専門語の偏りの傾向を明らかにする方法を提示した。

②の「学習者どうしのコミュニケーション」については, ピア・リーディングの授業全15回を収録した談話データ, インタビュー・データを用いて, どのようなグループ分けや課題設定をすればピア・ラーニングの効果が大きくなるか, ピア・ラーニングの授業をつうじて学習者の意識がどのように変容していくのか, について分析を行った。グループ分けや課題設定については, 同じシンポジウムの田中, 布施, 胡の3氏との共同発表のなかで, 学習者の意識の変容については, NINJAL 国際シンポジウムでの霍氏との共同発表をつうじて明らかにした。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

石黒 圭

「日本語学習者の意見文に見られる列挙の文章構造の問題点 —中国語母語話者と日本語学習者の予告文を比較して—」, 阿部二郎, 庵 功雄, 佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』, pp.223-242, くろしお出版, 2015.4.

石黒 圭

「レストランに行ってみたら」, 定延利之 (編) 『私たちの日本語研究 —問題のあり方と研究のあり方—』, pp.34-37, 朝倉書店, 2015.5.

石黒 圭

「大学講義の文末表現の機能 —引用助詞『と』で終わる文を例に—」, 『一橋大学国際教育センター紀要』 6, pp.17-29, 一橋大学国際教育センター, 2015.7.

石黒 圭

「聖書のなかの接続詞 —口語訳聖書と新共同訳聖書の比較から—」, 『New 聖書翻訳』 2, pp.58-73, 一般社団法人日本聖書協会, 2015.12.

《その他の出版物・記事》

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (13) 内包と外延」, 『指導と評価』 61-4, pp.41-43, 図書文化社, 2015.4.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (14) コソアの力」, 『指導と評価』 61-5, pp.42-44, 図書文化社, 2015.5.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (15) 聞き間違いはなぜ起きるか」, 『指導と評価』 61-6, pp.41-43, 図書文化社, 2015.6.

石黒 圭, 柳田直美

「日本語教育学の研究の進め方 —指導経験・投稿経験から見えてくるもの—」, 『一橋大学国際教育センター紀要』 6, pp.151-165, 一橋大学国際教育センター, 2015.7.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (16) 上位語と下位語」, 『指導と評価』 61-7, pp.40-42, 図書文化社, 2015.7.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (17) 有標と無標」, 『指導と評価』 61-8, pp.43-45, 図書文化社, 2015.8.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (18) 言葉の習得」, 『指導と評価』 61-9, pp.41-43, 図書文化社, 2015.9.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (19) 対義語の複雑さ」, 『指導と評価』 61-10, pp.43-45, 図書文化社, 2015.10.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (20) 言葉の組み合わせ」, 『指導と評価』 61-11, pp.38-40, 図書文化社,

2015.11.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (21) 理解語彙と使用語彙」, 『指導と評価』 61-12, pp.41-43, 図書文化社, 2015.12.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (22) 言葉のアクセント」, 『指導と評価』 62-1, pp.40-42, 図書文化社, 2016.1.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (23) 形容詞の意味変化」, 『指導と評価』 62-2, pp.41-43, 図書文化社, 2016.2.

石黒 圭

「感度を高める言葉の教育 (24) 言葉の機能と意味変化」, 『指導と評価』 62-3, pp.41-43, 図書文化社, 2016.3.

【講演・口頭発表】

霍 沁宇, 石黒 圭

「『三つの対話』を用いた読解授業における日本語上級学習者の読み方の意識変容プロセス —2名の非漢字圏上級学習者を中心に—」, NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

田中啓行, 布施悠子, 胡 方方, 石黒 圭

「読解授業における三つの対話 —協働学習の談話データから—」, NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

石黒 圭

「コミュニケーションの考え方」(招待講演), スペイン日本語教師会第7回研修会 Residencia de Estudiantes, スペイン・マドリード, 2016.2.6.

石黒 圭

「接続詞に透けて見えるジャンルの不思議 —商学・経済学・法学・社会学・国際政治学の違いを例に一—」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった! 国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

石黒 圭

「話し言葉と書き言葉」(招待講演), 第12回話しことばの言語学ワークショップ, 東京外国語大学, 2016.3.18.

石黒 圭

「日本語教育の世界を表す語彙と表現 —日本語教育学専攻の修士論文データベースからわかること—」(基調講演), データに基づく日本語教育のための語彙・文法研究会公開シンポジウム「コーパスから始まる例文作り」, 聖心女子大学, 2016.3.21.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「日本語教師のための実践・作文指導」, 6月アクラス研修会〈著者との対話〉講師, 一般社団法人アクラス日本語教育研究所, 2015.4.14.
- ・「日本語の人称表現について」, 平成27年度文部科学省関係機関職員研修生実地研修講師, 国立国語研究所, 2015.6.15.
- ・「自立した書き手を育てるための文章指導」, 日本語教師夏季集中セミナー講師, 長沼スクール東京

- 日本語学校, 2015.8.14.
- ・「外国人から見た日本語」, 法務省矯正研修所講師, 法務省矯正研修所, 2015.8.27.
 - ・「文書作成で大切なこと 一読み手への配慮」, 第42回支払基金講演会講師, 社会保険診療報酬支払基金, 2015.8.28.
 - ・「文章校正の考え方 一読み手に伝わりやすい文章作成のコツ」, 情報通信ネットワーク産業協会講演会講師, 一般社団法人情報通信ネットワーク産業協会, 2015.10.29.
 - ・「心の距離を縮める伝え方」, 朝日カルチャーセンター講座講師, 朝日カルチャーセンター新宿教室, 2015.12.19.
 - ・「コミュニケーション論」, 総務省自治大学校第1部課程第125期講師, 自治大学校, 2016.1.29.
 - ・「社会言語学入門『日本語は空気が決める』」, 第4回JTC日本語学校主催講師勉強会講師, JTC日本語学校, 2016.2.26.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科連携教授（論文指導：修士課程5名, 博士後期課程10名（いずれも主指導））
- ・ 博士論文審査
一橋大学大学院言語社会研究科（主査2名, 副査1名）
- ・ 外来研究員受入
国際交流基金日本研究フェロシップ 王麗莉（中国・長春師範大学）

迫田 久美子 (さこだ くみこ) 日本語教育研究・情報センター 教授

【学位】博士(教育学)(広島大学, 1996)

【学歴】広島女学院大学文学部英米文学科卒業(1973), 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻修士課程修了(1992), 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士後期課程修了(1996)

【職歴】広島大学教育学部 講師(1996), 同 助教授(1998), 広島大学大学院教育学研究科 助教授(2001), 同 教授(2003), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授(2012), センター長(2012.4-2015.3)

【専門領域】日本語教育学, 第二言語習得研究, 誤用分析, 日本語教授法

【所属学会】日本語教育学会, 日本言語学会, 第二言語習得研究会, AATJ (American Association of Teachers of Japanese), AJE (Association of Japanese Language Teachers in Europe)

【学会等の役員・委員】文化審議会国語分科会 委員・日本語教育小委員会委員; 国際交流基金「国際交流基金の運営に関する諮問委員会」委員; 日本外国語教育推進機構(JACTL) 理事; 2015年度国際交流基金賞選考委員会 委員; 2015年第56回外国人による日本語弁論大会 審査委員長

【受賞歴】

2003 日本語教育学会奨励賞

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」: リーダー

研究目的:

本プロジェクトは、「非母語話者の日本語の第二言語習得研究」および「定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究」の2つの研究を柱として進めている。

「非母語話者の日本語の第二言語習得研究」については、学習者の発話コーパス・作文コーパスに基づいて日本語非母語話者の学習環境要因および彼らの母語の違いが習得にどのように影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。また、「定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究」では、日本国内の定住者少数派の外国人の言語習得、複数の言語使用の実態をよりの確に捉え、言語使用と言語生活の関係を明らかにすることを目的としている。

研究成果:

- (1) 2012年～2014年にかけて行った日本語学習者に関する海外17の国と地域および国内3地域で収集された日本語学習者のデータ1000名以上および日本語母語話者50名の文字化に着手し、ベトナム語、スペイン語、フランス語、ハンガリー語、韓国語、中国語、韓国語、英語、トルコ語、ロシア語、タイ語、インドネシア語の12言語の異なる母語のコーパスの構築にとりかかった(「I-JAS: 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」)。既に公開している中国語・韓国語母語の日本語縦断発話コーパス(C-JAS)と共にHPで本プロジェクト(I-JAS構築)の進捗状況等を掲載した(<http://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/lsaj/>)。
- (2) 2015年9月、時空間言語変異研究系の共同研究プロジェクトと共に、NINJALコーパス合同シンポジウム「『正しい日本語』ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」を主催し、第一言語習得研究者 宮田 Susanne 氏を迎え、方言コーパス、歴史コーパス、現代日本語話し言葉コーパスの研究者と共に、学習者コーパスにおける「正用と誤用」について発表した。参加者は約100名であった。
- (3) 2016年1月、基調講演者として Patsy Lightbown 氏および Hiroko Kataoka 氏を招き、NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」を企画・運営した。さらに、分科会の1つ「学ぶ」班において、小柳かおる氏および曹英南氏と共に「教室指導は習

得にどんな影響を与えるか」について発表した。参加者は181名であった。

- (4) 2016年3月, NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」において, 本プロジェクトのデータを取り上げ, 「日本人と外国人の日本語コミュニケーション—外国人の安全な誤用と危険な正用—」について発表した。

【2015年度に実施した科研費研究課題(研究代表者)】

- ・基盤研究(A) 海外「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

李 在鎬, 小林典子, 今井新悟, 酒井たか子, 迫田久美子

「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」, 第二言語習得研究会(編)『第二言語としての日本語の習得研究』18, pp.53-69, 凡人社, 2015.12.

尹 鎬淑, 迫田久美子, 川崎千枝見

「e-learningを使ったライティングにおける誤用への間接的フィードバックの研究—韓国語母語話者の受身, 助詞, モダリティ, 自他動詞の誤用を中心に—」, 『国立国語研究所論集』10, pp.315-333, 2016.1.

Kumiko Sakoda

“Errors and learning strategies by learners of Japanese as a second language”, Masahiko Minami (ed.), *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.129-150, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton, 2016.2.

《その他の出版物・記事》

迫田久美子, 小西 円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子

「〈共同研究プロジェクト紹介〉基幹型: 多文化共生社会における日本語教育研究 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」, 『国語研プロジェクトレビュー』6(3), pp.93-110, 2016.2.

迫田久美子, 小西 円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子

「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—最終報告書」, 平成24~27年度科学研究費助成事業(基盤研究A) 課題番号24251010, 2016.3.

木部暢子, 迫田久美子

「コーパス合同シンポジウム「正しい日本語」ってなに?—コーパスに見る日本語のバリエーション—報告書」, 国立国語研究所, 2016.3.

【講演・口頭発表】

Kumiko Sakoda

“Corpus of learners of Japanese as a L2 among 16 countries” (招待発表), The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences, Tokyo University of Foreign Studies, 2015.8.1.

迫田久美子

「日本語学習者コーパスにおける対話—ロールプレイ, メール, エッセイの分析をとおして—」(パネル発表), ヨーロッパ日本語教師会(AJE), ボルドーモンテニュー大学, 2015.8.28.

迫田久美子

「第二言語習得研究の観点から」, コーパス合同シンポジウム「「正しい日本語」ってなに?—コーパスに見る日本語のバリエーション—」, 国立国語研究所, 2015.9.3.

迫田久美子

「日本語指導に生かす学習者コーパス研究」(招待講演), 2015年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム, ベトナム ホーチミン市統一会堂, 2015.9.19.

迫田久美子

「日本語学習者の『話すタスク』と『書くタスク』における言語使用の違い」(パネル発表), 第79回日本心理学会大会パネル「心理学と日本語教育科学の連携に向けて」, 名古屋国際会議場, 2015.9.22.

小西 円, 須賀和香子, 細井陽子, 佐々木藍子, 八木 豊, 迫田久美子

「学習者発話の高度な形態素解析を目指したタグの設計」(ポスター発表), 日本教育工学会, 電気通信大学, 2015.9.23.

迫田久美子

「日本語教育のための学習者コーパス研究 —学習者の文法・教師の文法—」(招待講演), 創価大学日本語日本文化学会大会, 創価大学, 2015.11.13.

迫田久美子

「教室指導は日本語習得にどんな影響を与えるか」(パネル発表), NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

佐々木藍子, 細井陽子, 迫田久美子

「学習者コーパスの意義と I-JAS —I-JAS の特徴と可能性を中心に—」(ポスター発表), NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

小西 円, 須賀和香子, 迫田久美子, 八木 豊

「日本語学習者コーパス I-JAS におけるタグの分析 —タグ G とタグ X の表すもの—」(ポスター発表), NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

迫田久美子

「日本人と外国人の日本語コミュニケーション —外国人の安全な誤用と危険な正用—」, 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

I-JAS 関係 (調査総責任者 迫田久美子)

- ・ 2015.6.22 東京 (長沼スクール東京日本語学校)
- ・ 2015.7.27-28 フランス・ボルドー (ボルドーモンターニュ大学)
- ・ 2015.9.7-11 広島 (広島国際学院大学)
- ・ 2015.11.3-4 ドイツ・ハイデルベルグ (ハイデルベルグ大学)
- ・ 2015.12.26-27 広島 (広島国際学院大学)
- ・ 2016.1.5 広島 (広島 YMCA 専門学校)

北京日本学術センターとの学術交流プロジェクト

- ・ 2016.1.8-11 北京 (北京師範大学)

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ コーパス合同シンポジウム「「正しい日本語」ってなに? —コーパスに見る日本語のバリエーション—」(企画・運営), 2015.9.3.

- ・ NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 ―学ぶ・教える・評価する―」（企画・運営），2016.1.23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「ニホンゴ探検 2015」でミニ講義「日本語も外国語もおもしろい」。2015.7.18.
- ・ 「NINJAL 職業発見プログラム」で「日本語教師という仕事」を講義。2015.11.19.
- ・ 『長沼スクール東京日本語学校主催 冬期集中セミナー』で「日本語の習得研究は教師にとってなぜ重要か」を講義。2015.12.23.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 外来研究員受入
博報財団国際日本研究フェローシップ 尹 鎬淑（サイバー韓国外国語大学教授）

野山 広 (のやま ひろし) 日本語教育研究・情報センター 准教授

1961 生

【学位】 修士 (文学) (早稲田大学, 1988), 修士 (日本語応用言語学) (モナシユ大学, 1995), 修士 (教育学) (早稲田大学, 1996)

【学歴】 早稲田大学卒業 (1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了 (1988), 豪州モナシユ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了 (1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了 (1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学 (2001)

【職歴】 文化庁文化部国語課専門職員 (日本語教育調査官) (1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員 (2004), 同 領域長 (2005), 同 整備普及グループ長 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員 (2009), 同 准教授 (2010)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 理事・大会委員会副委員長・学会連携副委員長; 移民政策学会 理事・企画委員; 異文化間教育学会 常任理事; 日本語プロフィシェンシー研究会 監事; 港区国際化推進プラン検討委員会 委員長

【2015 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」: 共同研究員

研究目的:

本プロジェクトでは, 主として旧国語研の日本語教育基盤情報センターで実施した縦断調査 (約2年半) 及び独創・発展型共同研究プロジェクト「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究 (リーダー)」 (約3年) で得られた (合計5年間の) 日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備, 分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ, データベースを整備, 蓄積している。そのことで, 多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得, 言語生活の実態をよりの確に捉えることが主な目的である。また, 日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ応えようとするためには, どのようなアプローチをすればいいのか, その研究方法の基盤を築くことも目的の一つである。

研究成果:

- (1) 日本語学習者会話データの分析やフォローアップインタビュー結果については, その成果の一部をヨーロッパ日本語教育シンポジウムや, 国際シンポジウム「コンピュータと日本語教育」(Castel/J) での口頭発表, 社会言語科学会研究大会でのワークショップ (共同), 国語研究所のNINJAL国際シンポジウムでのポスター発表(共同), JLVC 2016でのワークショップ(共同), NINJALフォーラムでのポスター発表 (個人) として発表した。
- (2) その他, 縦断調査の結果や, 学習者の言語生活に関する調査からみえてきた成果については, 「地域における日本語教育支援と多文化共生 —ローカルな視点から捉えるグローバル・シティズンシップ—」という論文で報告した。また, ドイツ・ベルリン (中央学園) で開催された継承語教育関係者研修での招待講演, ドイツ・ケルン日本文化会館での特別講演, ベルギー・ルーヴァン・カソリック大学での特別小講演などの中で発表した。
- (3) 日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備に関しては, 6年目から7年目 (2013

年度～2014年度分)の縦断データ(文字化データ)の整備を行った。

【2015年度に実施した科研費研究課題(研究代表者)】

・挑戦的萌芽研究「多言語社会に対応した言語サービスとサービス評価の在り方に関する萌芽的研究」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山 広

「地域における日本語教育支援と多文化共生 ―ローカルな視点から捉えるグローバル・シティズンシップ―」, 『異文化間教育』42, pp.45-58, 異文化間教育学会, 2015.8.

野山 広, 齋藤ひろみ, 佐藤郡衛, 浜田麻里, 見世千賀子, 南浦涼介

「異文化間教育学における実践・現場への接近法 ―現場へのまなざしを研究行動へ展開する―」, 『異文化間教育』43, pp.13-31, 異文化間教育学会, 2016.3.

【講演・口頭発表】

野山 広, 林原 慎, 齋藤ひろみ, 浜田麻里, 見世千賀子, 南浦涼介, 佐藤郡衛

「実践をまなざし, 現場を動かす異文化間教育学とは2 ―「カンボジアにおける授業改善に関する研修」の実践を読み解く―」(ケース・パネル: ディスカッション), 異文化間教育学会, 千葉大学, 2015.6.7.

野山 広, 李 在鎬, 西川寛之, 伊東祐郎, 坂本 正, 野口裕之, 嶋田和子, 由井紀久子, 六川雅彦, 鎌田 修

「JOPTテスト実施支援システムについて」(ポスター発表), 第10回国際OPIシンポジウム, 函館国際ホテル, 2015.8.2.

野山 広

「日本語学習者会話データベース縦断調査編の活用展望」, 第6回国際シンポジウム「コンピュータと日本語教育」(Castel/J 2015 in Hawaii), ハワイ大学, 2015.8.8.

野山 広, 西川寛之, 鎌田 修, 野口裕之, 伊東祐郎, 嶋田和子, 由井紀久子, 六川雅彦, 李 在鎬

「会話テストJOPT抽出データに与えるインタビュアーの影響」(ポスター発表), 第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, フランス・ボルドーモンテニュ大学, 2015.8.28.

野山 広

「CLD生徒に対する縦断調査の結果から窺える対話と継承語の重要性」, 第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, フランス・ボルドーモンテニュ大学, 2015.8.29.

野山 広

「子どもの言語生活支援を多角的に考える」(招待講演), 継承語教育関係者研修, ドイツ・ベルリン(中央学園), 2015.9.1.

野山 広, 杉澤経子, 吉富志津代, 石崎雅人, 花崎 攝

「ウェルフェア・リングイステイクスと調査研究 ―現場性・実践性という観点から―」(ワークショップ), 社会言語科学会研究大会, 京都教育大学, 2015.9.5.

野山 広

「複言語・複文化環境に生きる子どもとことばの教育 ―継承語の重要性, 可能性をバイリンガル教育の観点から考える―」(特別講演), ドイツ・ケルン日本文化会館, 2015.10.31.

野山 広

「複言語・複文化環境に生きる子どもとことばの教育について考える」(特別小講演・セミナー), ベルギー・ルーヴァン・カソリック大学, 2015.11.3.

野山 広, 北川裕子, 嶋田和子

「定住外国人の言語生活と日本語会話力に関する縦断調査からみえてきたこと —OPI の枠組みを活用した形成的フィールドワークから—」(ポスター発表), NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 —学ぶ・教える・評価する—」, 国立国語研究所, 2016.1.23.

野山 広, 村田晶子, 簗野智紀

「在住外国人の日本語会話力と言語生活に関する縦断研究」(ワークショップ), JLVC2016, 国立国語研究所, 2016.2.13.

野山 広

「日本に定住した外国人のことばの使用と環境に関する縦断的研究 —日本語学習者の会話力に焦点を当てながら見えてきたこと—」(ポスター発表), 第9回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!国立国語研究所の日本語研究」, 一橋大学一橋講堂, 2016.3.5.

【研究調査】

OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等

- ・ 2015.5 群馬県大泉町
- ・ 2015.9 秋田県能代市
- ・ 2016.3 秋田県能代市

北京師範大学, 北京日本学研究中心との協働による縦断調査

- ・ 2016.1 中国・北京師範大学

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 異文化間教育学会第36回大会特定課題研究「異文化間教育学における実践・現場への接近法 —現場へのまなざしを研究行動へ展開する」(企画・運営), 千葉大学, 2015.6.6.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 足立区, 横浜市, 浜松市, 町田市, 札幌市等の地域研修等で, 研修担当講師(講演)を担当。
- ・ 「外国人児童生徒に対する日本語教育」, 2015年度東京都教育委員会夏季教員研修担当講師, 東京都教職員研修センター, 2015.8.
- ・ 日本語指導者養成講座, 2015年横浜市教育委員会主催講座第5回担当講師, 横浜花咲ビル201研修室, 2015.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
政策研究大学院大学
東海大学大学院

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 日本語教育研究・情報センター 研究員

【学位】 修士 (日本語教育) (ウィスコンシン大学, 1993)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 識字, 個人・社会の多言語性

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 日本質的心理学会

【2015年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」: 共同研究員

研究成果:

これまで収集した各種データの分析し, 在日外国人の多言語使用の特徴について複数の観点から考察した。その成果は口頭発表や研究論文として公表した。さらに, 調査地域への社会貢献として, 一般向けのシンポジウム「改めて多文化共生とは 一移民コミュニティの言語生活研究会5年間を振り返る」(「移民コミュニティの言語生活研究会」第6回, 2016年3月)を開催した。

【2015年度に実施した科研費研究課題 (研究代表者)】

- ・基盤研究 (C)「多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究 一在日パキスタン人を中心に」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「母語に対する評価の諸相 一在日パキスタン人の言語使用意識調査をてがかりに一」, 宇佐美洋 (編)『「評価」を持って街に出よう 一「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』, pp.322-335, くろしお出版, 2016.1.

福永由佳

「日本で生活する外国人の言語能力に関する考察 一『生活のための日本語』全国調査から一」, *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 21, pp.33-51, 2015.11.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「母語に対する評価の諸相 一在日パキスタン人の言語使用意識調査を手がかりに一」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学, 2016.1.10.

福永由佳

「多言語使用者としての在日外国人の言語生活の多様性」, NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 一学ぶ・教える・評価する一」, 国立国語研究所, (予稿集, pp.34-37), 2016.1.23.

Yuka Fukunaga

“Multilingual landscape of “Pakistan Street”: Language use in societal and political context in a

Pakistani community”, University of Technology Sydney, 2016.2.

福永由佳

「在日パキスタン人の多言語使用」, ニューサウスウェールズ大学 (オーストラリア), 2016.2.

【研究調査】

- ・ 2015.11.15-16 富山県射水市内：NHK ワールドラジオ日本・ウルドゥー語放送公開収録の見学および収録後の関係者インタビュー

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 一学ぶ・教える・評価する一」(企画・運営), 2016.1.23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「第6回移民コミュニティの言語生活研究会」の開催
- ・ 「在日外国人 どう共生？一射水で研究会 解決策を議論」, 『北陸中日新聞』, 2016.3.21.



資 料

1

運営会議

運営会議規程

- ・委員は20名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究系長、センター長、他所長の氏名する教授又は客員教授 若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2015年度の開催状況

○第1回 2015年7月23日 13:30～16:30（フクラシア東京ステーション）

議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について

審議事項

1. 組織の改組について
2. 時空間変異研究系教授・准教授の選考について
3. 言語対照研究系教授・准教授の選考について
4. 言語資源研究系教授の内部選考について
5. 研究教育職員の内部選考について
6. 客員教員の選考について
7. 所長候補者選考の手続きに関する申合せについて

報告事項

1. 研究所の設置目的（省令）について
2. 研究所のミッションの確認について
3. 第3期中期目標・中期計画について
4. 平成28年度概算要求（案）について
5. 平成26事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
6. 平成26年度業務の実績に関する外部評価報告書について
7. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第2回 2015年11月7日 10:00～12:00（フクラシア東京ステーション）

議事概要確認

1. 議長及び副議長の選出について
2. 前回議事概要（案）について

所長説明

1. 国立国語研究所の現状および第3期中期目標・中期計画について

審議事項

1. 人事委員会の設置について
2. 日本語教育研究・情報センター教授の内部選考について
3. 所長候補者選考の手続きに関する申合せについて

報告事項

1. 研究情報資料センター特任助教の契約更新について
2. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第3回 2016年2月22日 10:00～12:00（フクラシア東京ステーション）

議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について

審議事項

1. 理論・対照研究領域教授の公募について
2. 所長候補者選考の手続きに関する申合せ及び所長候補者選考日程について
3. 客員教員の選考について
4. 名誉教授候補者選考委員会の設置について

報告事項

1. 第2期中期目標・中期計画の実績報告について
2. 第3期中期目標・中期計画及び平成28年度計画の素案について
3. 第3期中期目標・中期計画期間の体制について
4. 国立国語研究所運営会議規程の改正について
5. 平成28年度予算について
6. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第4回 2015年3月9日（メール会議）

審議事項

1. 前回議事概要（案）について
2. コーパス開発センター特任助教の公募について
3. 客員教員の選考について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会（2015年度開催なし）

所長候補者選考委員会規程

- ・委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関することを行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
- ・委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。

- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

人事委員会規程

- ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
- ・委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

人事委員会審議状況

2015年2月20日（2014年度第7回）、2015年7月13日（第1回）

時空間変異研究系教授として Bjarke Frellesvig 氏を運営会議に推薦

日本語教育研究・情報センター教授として宇佐美まゆみ氏を運営会議に推薦

言語資源研究系教授として山崎誠准教授を運営会議に推薦

（2015年7月23日開催の運営会議で採用・昇任決定）

2015年7月23日（第2回）、2015年9月25日（第3回・メール審議）

日本語教育研究・情報センター教授として石黒圭准教授を運営会議に推薦

（2015年11月7日開催の運営会議で昇任決定）

(3) 名誉教授候補者選考委員会（2015年度開催なし）

名誉教授称号授与規程

- ・研究所の教授として10年以上勤務し、学術研究上特に功績があった者。
- ・研究所の教授としての勤務年数が前号の規定に満たないが、学術研究上特に顕著な功績があった者。
- ・研究所の所長又は副所長として、研究所の運営に関し功績が特に顕著であった者。
- ・名誉教授の選考は、研究所の運営会議において行う。

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、第2期中期目標・中期計画期間（2010～2015年度）の研究業績について、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の観点で外部評価委員がその専門的立場から検証を行うとともに、2015年度の「研究系・センターの実績」、「組織・運営」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、評価を行った。

自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関すること、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2015年度は9回開催した。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

平成27年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成27年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行う。研究所が作成した、平成27年度の計画及びその実施状況が記入された「27年度業務の実績報告書」（「研究系・センターの実績」、 「組織・運営」、 「管理業務」）の内容を検証。

第2期中期目標・中期計画期間の研究業績及び平成27年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

○平成27年度外部評価委員会（第2回）

2016年1月14日 10:00～12:00（フクラシア東京ステーション）

議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 第2期中期目標・中期計画期間の研究業績について
3. その他（報告）

○平成28年度外部評価委員会（第1回）

2016年7月21日 15:00～17:00（ステーションコンファレンス東京）

議事

1. 前回議事概要（案）確認

2. 平成 27 年度業務の実績に関する評価結果の確認について
3. その他

共同研究プロジェクトの評価

- ・基幹型共同研究プロジェクト

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査を行った。

3 広報

- 国語研 Web サイト <http://www.ninjal.ac.jp/>

各種催し物、データベース等、国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介。

- 国立国語研究所要覧 2015/2016

国語研の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子。

- 国立国語研究所リーフレット 2016/2017

- 国立国語研究所英文リーフレット 2015/2016

- 国語研からの御案内（メールマガジン）

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、公募情報など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。月 2 回発行。

- 国語研ムービー

国語研の研究を分かりやすく紹介した動画を制作し、Web 配信（Youtube）やイベント時の上映を行っている。2015 年度は、「与論方言調査ドキュメント ～言語と文化の多様性を守るために～」、「ことばのミニ講義「話しことばのひみつどうぐ」」を制作、公開。

- イベント出展

- ・「子ども霞が関見学デー」（ブース出展）、旧文部省庁舎、2015.7.29-30.
- ・「大学共同利用機関シンポジウム 2016 研究者に会いに行こう！—大学共同利用機関博覧会—」（研究者トーク、ブース出展）、アキバ・スクエア、2015.11.29.

4 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰を行い、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年 2 回行う。

- 第 11 回所長賞：2015 年度前期（2015 年 4 月 1 日～2015 年 9 月 30 日）

〈所長賞〉

- ・ Anna Bugaeva（言語対照研究系特任准教授）

業績：Bugaeva, Anna. 2015. Causative constructions in Ainu: A typological perspective with remarks on the diachrony. *STUF - Language Typology and Universals (Sprachtypologie*

und Universalienforschung) , 68(4), 1-46.

理由：世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文
〈若手研究者奨励賞〉

- ・渡辺由貴（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）

業績：「文末表現『と思ふ』と『とおぼゆ』の史的変遷」『日本語文法』15 (2), pp.116-132, 2015.9.

理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

○第12回所長賞：2015年度後期（2015年10月1日～2016年3月31日）

〈特別所長賞〉

- ・Prashant Pardeshi（理論・対照研究領域教授）

業績：著書（単著）*A Functional Account of Marathi's Voice Phenomena: Passives and Causatives in Marathi*, Brill, 2016.2.

理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版
〈所長賞〉

- ・相澤正夫（言語変化研究領域教授）

業績：著書（編書）『SP盤演説レコードがひらく日本語研究』，笠間書院，2016.3.

理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版
〈若手研究者奨励賞〉

- ・藤本 灯（言語変化研究領域特任助教）

業績：著書（単著）『「色葉字類抄」の研究』，勉誠出版，2016.2.

論文「字音から見た三卷本「色葉字類抄」「仏法部」の性質」により、「漢検漢字文化研究奨励賞（優秀賞）」受賞。2016.3.

理由：博士論文（ないしその改訂版）等，単著の出版
学会レベルでの受賞

- ・間淵洋子（明治大学大学院国際日本学研究科博士後期課程，元・コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）

業績：論文「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」により，人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」における「ベストポスター賞」受賞。2015.12.

理由：学会レベルでの受賞

5

研究教育職員の異動（2015年度中の異動者）

2015.4.1	准教授	石黒 圭	採用	
2015.4.1	特任助教	船越健志	採用	
2015.4.1	特任助教	藤本 灯	採用	
2015.9.30	教授	ジョン・ホイットマン	辞職	
2015.10.1	教授	山崎 誠	昇任	准教授より
2015.12.1	教授	石黒 圭	昇任	准教授より
2016.3.31	教授	迫田久美子	定年退職	

2016.3.31	准教授	丸山岳彦	辞職
2016.3.31	特任准教授	アンナ・ブガエワ	任期満了
2016.3.31	特任助教	籠宮隆之	任期満了



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 27 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 28 年 7 月 21 日

はじめに

国立国語研究所が大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として再発足したのは、第1期中期目標・中期計画期間の最終年度の途中（2009年10月1日）で、それから半年後の2010年4月には第2期中期目標・中期計画期間が始まりました。当初は2009年4月に予定されていた新研究所の発足が半年遅れたのは、2009年3月の国会審議において、外国人に対する日本語教育に関する研究等の継続を求め付帯決議がなされたためでした。発足から2年目には、付帯決議の実施状況について、文部科学省および文化庁のそれぞれに設置された委員会で検証が行われました。

このように、発足時は必ずしも順風満帆の船出とは言えない状況でしたが、第2期中期目標・中期計画期間が終了した現在、この6年間の振り返ってみると、共同研究、共同利用、国際化、社会貢献などの主要業務についてまずまずの実績を上げ、国内外の研究者からも好評を得ることができたのではないかと考えています。とりわけ、発足当初は不明瞭だった新しい国語研の特色も、現在では、(1)日本語研究及び日本語そのものの国際的普及、(2)日本語言語資源の開発・公開による共同利用の促進、(3)国内の消滅危機言語・方言の研究による地域文化の継承と社会貢献という3本柱が研究所の「強み」として明確化されました。

現在の外部評価委員会の先生方には、2012年度から2015年度にわたる4年間の評価にご協力いただき、共同利用・共同研究および研究所の管理運営について毎年度、的確な評価を頂戴しました。評価報告書の中でご指摘のあった改善事項については、PDCAサイクルに則り、その都度すみやかに改善に取り組みました。

第2期中期目標・中期計画期間の最終年度にあたる今回は、平成27年度を中心としながらも第2期全体の活動にも目配りして、評価をいただくようお願いしました。共同利用、共同研究のいずれにおいても、一応の合格点を頂戴できたものと受け止めています。いつも、批判的かつ建設的なご意見をくださった委員の先生方全員に厚く御礼を申し上げます。とりわけ委員長の樺山紘一先生（2011年の文部科学省の検証委員会主査）、副委員長の林史典先生（同年の文化庁の検証委員会主査）、そして共同利用・共同研究に関する評価のとりまとめを担当された仁科喜久子先生には格段のご配慮とご尽力をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

平成28年7月

国立国語研究所長

影山 太郎

目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 平成 27 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果.....	2
2. 平成 27 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	37
3. 第二期中期目標期間（最終年度）の評価を終えて.....	48
2. 資料	49
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	50
2. 国立国語研究所平成 27 年度業務の実績に関する評価の実施について	51
3. 基幹型共同研究プロジェクト一覧	52
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	53
5. 国立国語研究所平成 27 年度外部評価委員会（第 2 回）	55
国立国語研究所平成 28 年度外部評価委員会（第 1 回）	56

1. 評価結果報告書

平成 27 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 28 年 1 月 14 日 国立国語研究所平成 27 年度外部評価委員会（第 2 回）

平成 28 年 7 月 21 日 国立国語研究所平成 28 年度外部評価委員会（第 1 回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 樺山 紘一

平成 27 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果

総合評価

国立国語研究所においては、平成 27 年度に 4 研究系および 2 センターの下で 16 件の基幹型共同研究プロジェクトが実施された。外部評価委員会では、これらの共同研究プロジェクトおよび 4 研究系・2 センターの自己点検報告書に基づき、第 2 期中期計画期間の最終年度としての総合的な評価を行った。16 プロジェクトの評価の内訳としては、結果的には自己点検報告書に記された自己評価の通り、「計画を上回って実施した」もの 8 件、「計画どおりに実施した」もの 7 件、「計画どおりに実施できなかった」もの 1 件となり、成果は概ね良好であったという判断をした。計画を上回る成果をあげた 8 プロジェクトは、「日本語レキシコンの音韻特性」（以下「語彙の音韻特性」）、「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」（以下「日本語レキシコン」）、「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」（以下「危機方言」）、「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」（以下「大規模経年調査」）、「コーパスアノテーションの基礎的研究」（以下「アノテーション」）、「通時コーパスの設計」（以下「通時」）、「コーパス日本語学の創成」（以下「創成」）、「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」（以下「述語構造」）であり、これらは理論・構造研究系、時空間変異研究系、言語資源研究系、言語対照研究系の 4 つの研究系に属している。評価の概要は以下のとおりである。

(1) 理論・構造研究系に属する「語彙の音韻特性」プロジェクトと「日本語レキシコン」プロジェクトのレキシコン（語彙、語構成）に関する研究は学術面で卓越しており、国内外への成果発信力、共同研究の連携の組織強化においても優れていた。特に海外の著名な出版社から日本語を学問的に紹介するハンドブック（論文集）を昨年に引き続き刊行したことは、特記すべき点である。この研究系の中で当初の計画設定が明確でないため最終的な成果を公刊できなかったプロジェクトが一部あったのは残念である。

(2) 時空間変異研究系に属する「危機方言」プロジェクトでは、ユネスコによって消滅危機言語と認められた沖縄・奄美・八丈島方言の調査・収集を精力的に行い、危機方言保存に貢献したこと、更に文化庁等との共催で「危機方言サミット」を開催し、各地域の住民や自治体との連携による方言研究の促進が期待されることなどにより高い評価を得た。同じく「大規模経年調査」においては、情報発信面では従来、国語研内部での利用に限定されがちであった貴重なデータを社会に、広く迅速に提供したこと、研究面では岡崎調査の中で「成人後採用」や「談話行動の分析」などの新たな視点を獲得したこと、この成果をウェブ上で公表したことが高く評価され、今後の新たな研究の展開が期待される。

(3) 言語資源研究系に属する 3 プロジェクト「アノテーション」「通時」「創成」のプロジェクトは総て計画を上回ったとして高い評価を得た。「アノテーション」では言語学者の言語理論と自然言語処理研究者の技術というそれぞれの強みを活かす架け橋となるプロジェクトを構成し、新しい分野の基礎研究に貢献した。「通時」では、その設計において技術的な問題を多くクリアし、今後のこの分野の展開の基礎作りを行うとともに、「平安」、「鎌倉」、「室町」、「江戸」、「明治」の各時代のコーパスを公開したこと功績は大きい。またオックスフォード大学との国際的な共同研究も注目に値する。「創成」では、「コーパス日本語学ワークショップ」を今中期計画中に通算 8 回開催し、実質的にこの分野における学会に当

たる役割を果たした点も高く評価される。『講座日本語コーパス』の刊行、雑誌における「コーパス特集」の企画編集、関連記事連載など社会へ積極的に発信したことも評価される。

(4) 言語対照研究系に属する「述語構造」プロジェクトでは、国内外において研究発表会、ワークショップ、講演、パネルセッションなどの研究活動が活発に行われたこと、特にアジア・アフリカ・ヨーロッパの多様な言語についての調査研究の成果をまとめた「有対自他動詞の地理類型論的なデータベース」の構築・公開、刊行物としての『有対動詞の通言語的研究』が国際的共同研究ならではの大きな成果であったことにより、国内外の学界に寄与したことが高く評価された。

以上は、「計画を上回って実施した」として評価されたものであるが、当初の計画の理想が高いために、自己評価で「計画どおりに実施した」とされた業績であっても高く評価される価値があるプロジェクトもあった。とりわけ、日本語教育研究のプロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」では、今中期計画中に「12 言語母語話者による日本語学習者コーパス」を企画し、計画通りの1,000名の発話データの他に、母語話者50人分のデータも収集した。これらのデータは、規模においても国内外において従来にないものであり、第二言語習得研究者にとっては、重要かつ画期的な研究資料であるとともに、日本語学習者にとっても学習素材となるものである。しかしながら、データ処理をした上で公表し、この資料を用いた論文を発表するためには、更なる時間を要するものである。実際に第3期中期計画に向けて準備が整えられている。このような潜在的可能性のある研究にも高い評価をすべきである。今後は、適切な目標設定か否かをチェックする評価のあり方を、国立国語研究所という組織を超えた人間文化研究機構全体の課題として検討されることを要望する。

今後の国立国語研究所に対する期待としては、日本語の基礎的な研究調査を通して、国内外に対する啓蒙的事業の新しい展開が望まれる。例えば、国立国語研究所には優れた辞書編纂研究を輩出した過去の業績もあることから、第2期のレキシコン研究およびコーパス構築の成果を辞書編纂に生かすために、民間出版社の辞典編集者、日本語学者、日本語教育関係者などを共同研究者として加えて、新しい形の国語辞典編纂のあり方を追求することも重要な課題であろう。

最後に国立国語研究所が新しい研究方法と成果を産出するためには若手研究者育成が重要である。研究所の指導的立場にある研究者には、国際的な場で研究ができる文理融合型の研究者の育成と支援を要望する。

取りまとめ担当：仁科 喜久子

各研究系・センターの評価

理論・構造研究系

研究系長：窪菌 晴夫

テーマ：日本語レキシコンの総合的研究

平成 27 年度の計画

「日本語レキシコンの総合的研究」を総合研究テーマとして、世界的に見て日本語に特徴的と思われる音声・音韻現象並びに語彙の形態的・意味的・文法的特性に係る研究について研究成果の取りまとめを行う。共同研究の成果を国際シンポジウムや論文集などの形で発信する。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

次の4つの基幹型研究プロジェクトを軸として、第二期中期計画の研究成果の取りまとめのために下記①～⑥の共同研究を推進した。

- ・日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性（リーダー：影山太郎，略称「日本語レキシコン」）
- ・日本語レキシコンの音韻特性（リーダー：窪菌晴夫，略称「語彙の音韻特性」）
- ・文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（リーダー：横山詔一，略称「文字と社会言語学」）
- ・日本語レキシコン—連濁事典の編纂（リーダー：ティモシー・バンス，略称「連濁事典」）

①共同研究発表会の開催：プロジェクトごとに共同研究発表会を開催し（計2回），あわせて若手研究者に研究発表の場と発表旅費を提供した。

②理論・構造研究系合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会（レキシコン・フェスタ4）を開催した（2016年3月4日，自治大学校）。今年度は客員教授の中山峰治氏（オハイオ州立大学）による基調講演および7件の口頭発表により，研究系の研究成果を研究者コミュニティに向けて発信し，あわせてプロジェクト間の連携を図った。共同研究員以外の参加者も多く，合計54名の参加が得られた。

③研究成果の取りまとめ：共同研究の成果としてプロジェクトごとに英文刊行物の編集作業を進めた（（5）「研究成果の発信と社会貢献」の欄参照）。

④国際シンポジウムの開催：プロジェクトが中心となって GemCon 2015, ICPP 2015 など3つの国際会議を開催した（（4）「国際化」の欄参照）。

⑤研究資源共有化：

- ・看板，新聞・雑誌，市販辞書，JIS 漢字規格，各種文字表，古典籍写刊本など，現代日本語の文字・表記を中心に，史の変遷も視野に入れ，物的文字環境に関する資料整備を引き続き進めた。（「文字と社会言語学」）

⑥研究者の受け入れ：4名の客員教員（国内1名，海外3名）に加え，外来研究員2名（ともに海外）と日本学術振興会外国人特別研究員1名を受け入れ，共同研究を行った。

(2) 研究実施体制

①研究組織：専任教員8名（教授3名，准教授2名，助教1名，特任助教2名），プロジェクトPDフェロー2名を中心に，客員教員4名，非常勤研究員4名（うち新任2名），外来研究員2名，日本学術振興会外国人特別研究員1名（新任），プロジェクト共同研究員（合計133名）の陣容で研究を推進した。

②外部組織との連携：

- ・世界諸言語の動詞結合価に関するマックスプランク進化人類学研究所の共同研究に参画し，論文 Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, and Kan Sasaki “Valency classes in Japanese” を Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World's Languages*, Vol. 1, pp. 765–805 (Berlin: De Gruyter Mouton [以下，Mouton 社と略記]，2015年9月) に刊行した（「日本語レキシコン」）。
- ・日本音声学会第29回大会（2015年10月4日）において日本語アクセントに関するシンポジウム「日本語の三型アクセント—原理と歴史—」とワークショップ「三型アクセント研究の現在」を共同研究員の協力を得て企画した（参加者数60余名）（「語彙の音韻特性」）。
- ・言語行動・意識のデータを解析する新たな手法等に関して，統計数理研究所と連携して理論研究をおこなった。（「文字と社会言語学」）。
- ・プロジェクトごとに科研費や人間文化研究機構連携研究の予算と組み合わせて事業を実施し，経費の有効利用を図った。

(3) 共同利用の推進

①共同研究発表会および出版物等の公開：共同研究発表会を公開し，プロジェクトメンバー（共同研究員）以外の研究者にも参加および発表の機会を提供した。また複数のデータベースと論文集を公開・公刊した（(5)「研究成果の発信と社会貢献」の欄参照）。

②研究会・シンポジウム等の情報発信：共同研究発表会・シンポジウム開催に際しては，研究所ホームページや各プロジェクトホームページ，メールマガジンでの広報に加え，開催通知案内を諸学会・研究会のメーリングリストに流して，開催情報を広く研究者コミュニティに伝えた。

③研究文献リストの更新：プロジェクトごとに作成・公開している研究文献リスト（複合動詞，アクセント，促音他）を増補更新した（「日本語レキシコン」「語彙の音韻特性」）。

④文献資料の共同利用

- ・共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」（漢字・漢文に関するもの），人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」（仮名・仮名文に関するもの），国際文字コード標準化活動（コンピュータの文字に関するもの）の成果をふまえ，文献資料の共同利用を促進させるため，原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発をおこなった。このシステムは，米国議会図書館本『源氏物語』写本のほか，研究所貴重書の公開にも利用されている。
- ・学術交換用変体仮名のデータベースを構築し，公開した。<http://kana.ninjal.ac.jp/>
- ・シンポジウム「字体と漢字情報」—HNG 公開10周年記念—を11月に開催し，日本語学・文献学だけでなく，歴史学・考古学・仏教学・心理学・情報学・日本語教育学など，分野横断的に字体と漢字情報について議論する場を提供した。（以上「文字と社会言語学」）

⑤オンラインデータベースの更新：昨年度に完成・更新したオンライン辞書「複合動詞レキシコン（国際版）」について、オリジナルデータ（エクセルファイル）をウェブサイトからダウンロードできるようにした（「日本語レキシコン」）。

⑥データベース等の公開

- ・鹿児島県甕島方言のアクセントデータベースについて、試作版の仮公開に続き、完成版の編集をほぼ完了した（2016年夏頃に全面公開予定）。
- ・共同研究員の上野善道氏が収集した方言音声資料（アナログテープ）を雫石方言アクセントデータベースとしてデジタル化し、USBメモリーで公開する準備を終えた（2016年3月にプロジェクト共同研究員他へ配布）。（以上「語彙の音韻特性」）

（4）国際化

①国際シンポジウム等の開催

- ・促音に関する国際ワークショップ GemCon 2015（2015年8月12日、イギリス・グラスゴー）を世界最大の音声学国際会議(ICPhS 2015)のサテライトワークショップとして企画した（参加者18ヶ国、76名；発表者11ヶ国、23名）
- ・国際シンポジウム ICPP 2015（International Conference on Phonetics and Phonology, 2015年9月25日～27日）を慶應義塾大学言語文化研究所と共催し、国内外から90名（3日間で延べ185名）の参加を得た。
- ・2015年6月29日～7月1日にボルドー大学で開催されたフランス音韻論ネットワーク（Réseau français de phonologie）の第13回年次大会の翌日（7月2日）に「連濁研究ハンドブックの編纂」をテーマに特別ワークショップを行なった。

②研究成果の国際発信（（5）「研究成果の発信と社会貢献」の欄参照）

③英語による論文集の編集作業（（5）「研究成果の発信と社会貢献」の欄参照）

④国際会議等における貢献：

- ・10月に開催された国際文字コードの標準化に関する国際会議において、変体仮名の国際文字コード化をプロジェクトの成果にもとづいて提案し、受理された（規格名「ISO/IEC 10646」）。
- ・国立台湾大学においてNINJALセミナーを9月に実施し、プロジェクトの成果を海外の大学院生に教授した。

⑤海外研究者の受け入れ：3名の客員教授（いずれも米国）に加え、外来研究員2名（オーストラリア、アメリカ各1名）と日本学術振興会外国人特別研究員1名（オランダ）を新たに受け入れ、共同研究（研究指導）を行った。

（5）研究成果の発信と社会貢献

①研究系合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会（レキシコン・フェスタ4）を開催し、研究系の研究成果を研究者コミュニティに向けて発信した（2016年3月4日、自治大学校）（（1）「共同利用の推進」の欄参照）

②論文集の刊行：

- ・Haruo Kubozono, Kikuo Maekawa and Timothy J. Vance (eds.), *Laboratory Phonology: Special issue on*

Corpus-based approaches to the phonological analysis of speech (Mouton 社, 2015 年 10 月)

- Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.), *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (Mouton社, 2016年1月)
- 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム No. 77』特集「日本語レキシコン入門 II」(ひつじ書房, 2016年3月)。

③論文集の編集：プロジェクトごとに次の刊行物（論文集）について編集作業を進めた（他のプロジェクトや機関との共同事業も一部含まれる）。

- *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (Mouton 社, 2016 年 7 月刊行予定)
- *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Mouton 社, 2017 年 9 月刊行予定)
- *Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (Oxford University Press 社) (以上「日本語レキシコン」)
- *Tonal Change and Neutralization* (Mouton 社)
- *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press, 2016 年 3 月に入稿済) (以上「語彙の音韻特性」)
- 日本語版『連濁研究ハンドブック』(出版社未定)
- *Sequential Voicing in Japanese* (John Benjamins 社, 2016 年 6 月刊行予定) (以上「連濁事典」)。

④国内学会等での招待講演：国内の学会や研究団体に招かれて講演を行った。

- 関西言語学会 40 周年記念大会, 日本言語学会第 150 回大会, 上智大学言語学会 30 周年大会, 同志社大学文化情報学研究科合同シンポジウム他 (窪菌)

⑤一般向けの成果発信：

- 立川市歴史民俗資料館と国語研の共同企画として, 講演会「印刷本からわかること～文字から立川を探る」を開催した (2015 年 11 月 29 日, 立川市歴史民俗資料館, 講師高田)。

(6) 若手研究者育成

①PD フェロー：2名のPDフェローを雇用し(うち1名は新規), 研究費の援助やサロン等での発表指導, 国際シンポジウムの開催指導, 科研費申請時の指導等を通じてその育成に努めた(「語彙の音韻特性」「連濁事典」)。

②特別研究員：日本学術振興会外国人特別研究員(PD)を1名受け入れ, 育成に努めた。

③NINJAL チュートリアル開催：「言語生活のロジスティック回帰分析入門」と題してNINJAL チュートリアルを開催した(2015年9月1日, 講師横山)。

④NINJAL セミナー開催：国立台湾大学においてNINJAL セミナーを実施し, プロジェクトの成果を海外の大学院生に教授した(2015年9月)(「文字と社会言語学」)。

⑤発表の機会提供：各プロジェクトが主催した研究発表会において, 若手研究者(大学院生および非常勤)に発表の機会を提供し, また旅費の支援を行った。

⑥旅費支援：日本語アクセントの研究を行っている若手研究者(大学院生)1名に対して調査旅費, 成果発表旅費の支援を行った。また上述(1)①の共同研究発表会において若手発表者5名に, 音韻論フェスタ(京都)の若手発表者3名に対して, それぞれ旅費支援を行った。国際シンポジウムICPP 2015((4)①)においても, 国内外からの若手発表者5名に旅費支援を行った(「語彙の音韻特性」)。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

平成 27 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

総合研究テーマのもとで、4つの基幹型研究プロジェクトがそれぞれ着実に成果を蓄積しており、高く評価できる。実施内容は、国内の研究発表会、国際シンポジウム、研究資源共有化など多岐にわたっている。このほか、英文刊行物の編集も今後の刊行に向けて進展している。共同利用の推進に関しては、ビューアの拡張開発に加え、学術交換用変体仮名のデータベースなどをウェブサイトから公開している。いずれも目覚ましいレベルで計画が遂行されている。以下、各評価項目について具体的に評価する。

《評価項目》

(1) 共同研究の推進

各プロジェクトの中で共同研究が行われ多数の研究者による参加があったこと、共同研究をもとにして理論・構造研究系の合同研究へとまとめあげて刊行物や国際シンポジウムとしての成果を発信し、研究資源の共有化や外国人研究者の受け入れにも配慮するなど、高いレベルでバランスのとれた共同研究が推進されている。国内外の日本語の理論的な研究の中心として共同研究を担っている点が高く評価される。

(2) 研究実施体制

研究所内の研究実施体制も、専任教員8名のほか、客員教員、外来研究員、日本学術振興会外国人特別研究員にプロジェクト共同研究員を加えることで、研究実施体制が充実している。国内外の研究機関との共同研究の実施体制も十分に整えられていることも合わせて、評価される。また、予算の有効活用への取り組みもみられてよい。

(3) 共同利用の推進

各プロジェクトの研究成果を国内外で共同利用できるよう、多面的な工夫がなされている。社会貢献としても有効な活動があり、十分な実施状況である。文献資料の共同利用を促進するビューアの拡張開発は、国語研究所内の貴重書の公開だけでなく、米国議会図書館所蔵書の公開にも利用されるなど、国際的な共同利用の推進に貢献している。ほかに、学術交換用変体仮名のデータベースを構築するなど、分野横断的な字体と漢字情報についての議論の場を提供していることも評価される。

(4) 国際化

国際シンポジウム開催に加え、国内外の国際研究集会で促音、連濁という日本語音韻現象についてのワークショップを企画、実施するなど、日本語の理論的な研究の国際化を進めている点が高く評価される。特にイギリス・フランスの国際ワークショップや学会において、サテライトワークショップなどを企画して多くの参加者を得るなど成果を積極的に伝授したことは貴重である。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

書籍や論文集の刊行、研究発表や講演などが活発に行われた。具体的には、海外の専門出版社から論文集を刊行したほか、多数の英文刊行物の編集、刊行準備を行うことにより、研究成果発信に努めている。また物類称呼データベースおよび文献資料をウェブサイト上に公開している。これらは国立国会図書館のポータルサイトやアカデミックリソースガイドで紹介されているが、中でも、「学術交換用変体仮名」データベースはインターネットウォッチなどの文字・フォント関連で紹介されるなど、印刷普及以

前の日本語文字への関心を社会一般に呼び覚ましている点で、国語研ならではの社会貢献となっている。また、地元である立川市の歴史民俗資料館との共同企画を行ったことも社会貢献として望ましい。

(6) 若手研究者育成

PD フェローの雇用と指導育成に加え、日本学術振興会外国人特別研究員を受け入れている。また、チュートリアルやセミナーの開催、研究支援など、若手研究者育成のための多面的な取り組みが行われていて評価できる。但し、それらの若手研究者の具体的な研究成果が実績報告書からは見えにくいのが残念である。

時空間変異研究系

研究系長：木部 暢子

テーマ：日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化

平成 27 年度の計画

「日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化」を総合研究テーマとして、消滅危機方言の研究、方言分布の解明、現代日本語の動態研究、大規模経年調査のデータ分析、日本語疑問文の研究を充実させて研究成果の取りまとめを行う。危機方言の音声データ、戦前の貴重音源関連資料、方言の経年比較データ等の各種データを公開する。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

①系の活動は、系の合同研究発表会JLVC2016の開催と各共同研究プロジェクトを通じた調査研究の2種類からなる。研究系の合同研究発表会JLVC2016は、2016年2月13～14日に国立国語研究所講堂において開催した。(詳細については(3)共同利用の推進を参照)。

②本系の共同研究プロジェクトは、以下の5つである(いずれも基幹型プロジェクト)。

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究(略称：危機方言)」(代表者：木部暢子)

「方言の形成過程解明のための全国方言調査(略称：方言分布)」(代表者：大西拓一郎)

「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明(略称：現代日本語の動態)」(代表者：相澤正夫)

「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究(略称：大規模経年調査)」(代表者：井上史雄)

「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究(略称：日本語疑問文)」(代表者：金水敏)

27年度は第2期の最終年度に当たるため、各プロジェクトでは研究成果のとりまとめを中心に研究を推進した。概要を以下にあげる(詳細については(3)以下を参照)。

- ・研究発表会：「危機方言」2回、「方言分布」2回、「現代日本語の動態」1回、「大規模経年調査」2回、「日本語疑問文」3回の研究発表会を開催した。
- ・プロジェクト報告書の刊行：「危機方言」5冊、「現代日本語の動態」3冊、「大規模経年調査」2冊、「日本語疑問文」1冊のプロジェクト報告書を刊行した。「方言分布」では2冊の報告書を28年度内に刊行の予定である。
- ・データベースの公開：「日本の危機言語・方言データベース」、「全国方言分布調査(FPJD)調査結果」、「想隆社アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクションI」、「岡崎調査データ」、「鶴岡調査データ」、「中世語疑問文文献データベース」等を公開した。
- ・フィールド調査：第3期の準備として、宮崎県椎葉村方言、島根県隠岐の島方言の調査を実施した。

(2) 研究実施体制

①系の研究組織は、専任の教授3人、准教授4人、客員の教授3人、准教授1人である。このうち専任教授3人(木部・大西・相澤)と客員教授2人(井上・金水)がリーダーとしてプロジェクトを推進した。

②非常勤研究員を11人雇用してプロジェクトを運営した。内訳は「危機方言」3人(PDフェロー2人、

非常勤研究員1人),「現代日本語の動態」1人(非常勤研究員),「大規模経年調査」5人(非常勤研究員),「日本語疑問文」2人(非常勤研究員)である。

③各プロジェクトの共同研究員は,「危機方言」38人,「方言分布」51人,「現代日本語の動態」19人,「大規模経年調査」19人,「日本語疑問文」26人である。研究成果のとりまとめ・公刊に向けて,いくつかのプロジェクトでは共同研究員を増員した。

④科研費,科研費基盤(B)「方言話し言葉コーパスの構築」(代表者木部),基盤(A)「方言分布変化の詳細解明」(代表者大西)と連携してプロジェクトを運営した。

(3) 共同利用の推進

①時空間変異研究系の合同発表会 JLVC 2016 を2016年2月13~14日に国立国語研究所講堂で開催した。全体テーマは「再考 ことばの時空間」で,ジョン・ホイットマン氏の講演「日本諸語(諸方言)の系譜図の可能性について—従来の研究と将来の展望」,4つのワークショップ(「在住外国人の日本語会話力と言語生活に関する縦断研究」,「方言,言語,そしてその領域をめぐって」,「進行中の言語変化の通言語的考察—東アジアを中心に—」,「日本語と方言の一世紀:社会言語学と歴史言語学が明らかにしたもの」),全体討論,及び13件のポスター発表(公募)を行った。参加者は2月13日が83人,14日が93人であった。

②各プロジェクトでは,以下の研究発表会を開催した。

- ・「危機言語」:○「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015年8月21~23日,国語研講堂,科研費基盤(A)「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語」,基盤(C)「日本語の分裂自動詞性」と共催)。発表16件。アスペクト,ヴォイスについては琉球語を中心に,格については琉球語,本土方言の格標識について研究発表を行った。参加者21日55人,22日59人,23日44人。○合同シンポジウム「正しい日本語」ってなに?—コーパスに見る日本語のバリエーション—(2015年9月3日,国語研講堂,国語研共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」,「通時コーパスによる日本語史研究の新展開」,「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉研究の革新」,科研費基盤(A)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築」,基盤(B)「方言話し言葉コーパスの構築」と共催)。発表5件,招待講演1件。「形容詞+です」「ら抜き言葉」を中心に各コーパスを使った研究発表を行った。参加者約100人。
- ・「方言分布」:○「言語地理学フォーラム」(2015年6月7日,国語研多目的室,科研費基盤(A)「方言分布変化の詳細解明」と共催)。発表5件。○「言語地理学フォーラム」(2015年9月27日,国語研多目的室,基盤(A)「方言分布変化の詳細解明」と共催)。発表3件,及び地理学の谷謙二氏(埼玉大学教育学部准教授)による講演を行った。
- ・「現代日本語の動態」:○研究発表会(2016年1月24日,国語研多目的室)。発表3件。「言語変化の先端現象」を捉える調査2件(全国方言意識1万人Web調査,北海道富良野市・函館市面接調査)の中間報告,「戦後60年の通時的変化」を捉える新聞語彙の分析結果の報告を行った。
- ・「大規模経年調査」:○研究発表会(2015年12月20日,岡崎市 図書館交流プラザ りぶら)。発表4件。○研究発表会「鶴岡・岡崎調査の分析と展望」(2016年3月8日,国語研セミナー室)。発表6件。パネルサンプル(同一人物の追跡調査)のデータが約60年間でどう変化したかを分析し,言語変化に及ぼす加齢や生涯発達の効果を検討した。

- ・「日本語疑問文」：○第7回研究発表会（2015年6月6～7日，大阪大学豊中キャンパス）。発表5件。参加者22人。○第8回研究発表会（国際研究集会）（2015年12月19～20日，国語研講堂）。発表16件。参加者55人。○国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び（International Workshop “Kakarimusubi from a Comparative Perspective”）」（2015年9月5～6日，国語研講堂，国語研共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」と共催）。発表16件。参加者の述べ222人。

③各プロジェクトでは，以下のデータをウェブで公開した。

- ・「日本の危機言語・方言データベース」（喜界島方言，与論島方言，八丈島方言の基礎語彙データ，沖縄県本部町瀬底方言の談話資料，2016年4月公開）。(<http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>)
- ・「方言コーパス試作版」（47地点（各都道府県1地点）の談話テキストを共通語により横断検索ができるようにしたもの），2015年11月内部公開）。(<http://hougen-corpus.ninjal.ac.jp/search/>)
- ・「全国方言分布調査（FPJD）調査結果」（全国554地点，約146,000件のデータ），2016年3月公開）。(http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html)
- ・「想隆社アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクションI」（全165作品，18.5時間分のSPレコードデジタル音源＋文字化テキスト），想隆社，2015年5月有料Web配信開始）。(<http://academic-resource.net/>)
- ・「岡崎調査データ」（2016年2月公開）。(<http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/okazaki.html>)
- ・「鶴岡調査データ」（2016年4月より統計数理研究所の共同利用研究制度により公開）。(<http://www.ism.ac.jp/noe/survey-center/451/index.html>)
- ・「中世語疑問文文献データベース」をHP上で公開。(<http://j-int.info/archives/>)

④「危機方言」では，以下の調査を行った。

- ・宮崎県椎葉村小崎方言調査（2015年5月8～11日，参加者6人，話者10人），同村梅尾方言調査（2015年9月6～11日，参加者11人，話者15人），島根県隠岐の島方言調査（2015年11月8～11日，参加者18人，話者21人）。宮崎県椎葉村の調査は，椎葉民俗芸能博物館研究事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」（5ヶ年計画）と「危機方言」プロジェクトが連携して実施する調査である。

（4）国際化

- ①調査への参加：宮崎県椎葉村方言調査，島根県隠岐の島方言調査に海外の研究者各1人（ニュージーランド，フランス）が参加した。
- ②国際研究集会の開催：国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び」（International Workshop “Kakarimusubi from a Comparative Perspective”）（2015年9月5日～6日），第8回研究発表会（国際研究集会）を開催した（2015年12月19～20日）。
- ③ホームページの英訳：「危機方言」と「日本語疑問文」では，プロジェクトのホームページの英語訳を促進した。

（5）研究成果の発信と社会貢献

- ①研究成果の発信：各プロジェクトでは，報告書を刊行した。

- ・木部暢子[編]『与論島・沖永良部島方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2016年3月。
- ・木部暢子[編]『出雲方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2016年3月。
- ・木部暢子・山本友美・坂井美日(編)国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館共同事業報告書『椎葉村方言語彙集(中間報告)』, 国立国語研究所, 2016年3月。
- ・下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日『尾前調査班 中間報告—宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説—』, 国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館共同事業報告書, 2016年3月。
- ・『「正しい日本語」ってなに?—コーパスに見る日本語のバリエーション—』国立国語研究所, 2016年3月。
- ・金澤裕之・相澤正夫(編)『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集—SP 盤レコード文字化資料—』(452頁), 日外アソシエーツ, 2015年4月。(5月に日本図書館協会の選定図書に選定された)
- ・金澤裕之・田中牧郎・相澤正夫(編)『アカデミックリソースシリーズ 貴重音源コレクション 岡田コレクション I』(545頁), 想隆社, 2015年6月。オンデマンド版。
- ・相澤正夫・金澤裕之(編)『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』, 299頁, 笠間書院, 2016年3月。
- ・統計数理研究所・国立国語研究所『第4回鶴岡市における言語調査報告書 発展的調査編』2016年3月。
- ・井上史雄・阿部貴人・鏈水兼貴・柳村裕・丁美貞『敬語表現の成人後採用—岡崎における半世紀の変化—』, 国立国語研究所, 2016年3月。
- ・金水敏[編]『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書(3)』, 国立国語研究所, 2016年2月。
- ・言語地図集『新日本言語地図』, 朝倉書店, 2016年刊行予定。
- ・論文集『空間と時間の中の方言』, 朝倉書店, 2016年刊行予定。

②研究論文：各プロジェクトではそれぞれ研究論文を発表した。代表的なものをあげる。

- ・木部暢子(2015)「危機方言は面白い！」『アステイオン』82, pp.101-113, サントリー財団, 査読無。
- ・Onishi, Takuichiro (2016) Timespan comparison of dialectal distributions. Edited by Marie-Hélène Côté, Remco Knooihuizen and John Nerbonne, *The Future of Dialects*, pp.377-387, Berlin Language Science Press.
- ・Yasuo Kumagai (2016). Developing the linguistic atlas of Japan database and advancing analysis of geographical distributions of dialects. Edited by Marie-Hélène Côté, Remco Knooihuizen and John Nerbonne, *The future of dialects*, pp.325-348, Berlin: Language Science Press. 査読有。

③研究発表：代表的なものをあげる。(詳細については各プロジェクトの実績報告書参照)

- ・第8回 SIDG (2015年9月, 東地中海大学, 北キプロス), 韓国日本語文化学会(2015年11月7日)等で「方言分布」「大規模経年調査」のメンバーが研究発表を行った。
- ・木部暢子, 大西拓一郎(2016)「日本方言研究会第100回研究発表会 記念シンポジウム 方言研究の過去・現在・未来 研究動向の分析」(甲南大学, 2015年5月22日)。
- ・木部暢子(2015)「対格助詞ゼロの地域差—方言コーパスの可能性—」(日本方言研究会第101回研究発表

会，パルトピア山口，2015年10月30日）。

④編集作業：ムートン社の日本語ハンドブックの Japanese Dialects の編集作業を進めた。

⑤社会貢献：

- ・「危機方言」では，第2回「日本の危機言語・方言サミット」（沖縄県立博物館・美術館講堂，2015年9月18日，主催：文化庁，沖縄県，琉球大学，後援：国立国語研究所，一般参加者110人）で木部，狩俣（琉球大学）が研究発表を行なった。また，「危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会」（文化庁，2015年8月27日），第30回国民文化祭・かごしま2015 シンポジウム（奄美パーク，2015年11月13日）等で木部が発表を行った。
- ・「大規模経年調査」では，統計数理研究所ともに経年調査に関するプレス・リリースを行った。新聞やテレビで取り上げられ，NHK クローズアップ現代「“正しい”アクセント 誰が決める？～日本語発音辞典 大改訂へ～」(2015年10月8日)では，鶴岡の経年調査が取り上げられた。
- ・立川市西砂学習館において出前授業「めざせ，ことば博士！ みんなの方言を調べてみよう」を行った（2015年7月31日，講師は朝日祥之，参加者は小中学生19人，大人5人）。

（6）若手研究者育成

- ①研究発表の機会の提供：JLVC2016（2016年2月13～14日）ではポスター発表を公募し，13件の若手研究者の発表を採択した。また，「日本語のAspect・Voice・格」（2015年8月21～23日）ではPD・大学院生5人が発表した。「現代日本語の動態」では日本学術振興会 PD1人，大学助手1人に研究発表，論文執筆等の機会を提供した
- ②フィールド調査による若手指導：宮崎県椎葉村方言調査（2015年5月）にPD1人が，同方言調査（2015年9月）にPD・大学生8人が，島根県隠岐の島方言調査（2015年11月）にPD・大学院生6人が参加し，ベテランの研究者とチームを組んで調査を行った。
- ③その他：聴覚障害の大学院生の支援のために，「日本語のAspect・Voice・格」（2015年8月21～23日），国際ワークショップ「比較的観点から見た係り結び」（2015年9月5～6日）においてノートテイカーを雇用した。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

平成27年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

「危機方言」プロジェクトが順調に方言データ収集と公開を進めるとともに，第2回「危機言語・方言サミット」に貢献した点，「大規模経年調査」のモデル的研究が公開され，また，経年調査の社会周知がプレス・リリース等で進んだ点，「方言分布」調査が予定通り遂行され，一定の結論を得たこと，「現代日本語の動態」プロジェクトが掘り起こした「貴重音源」を資料として刊行し，それについての研究成果をまとめたことなどの成果により，プロジェクト全体として「計画を上回って実施した」と評価できる。

《評価項目》

（1）共同研究の推進

- ・「危機方言」プロジェクトや「大規模経年調査」プロジェクトは高いレベルの達成度を示し、公刊書籍や報告書、ウェブ公開データとして結実している点、評価できる。
- ・「危機方言」プロジェクトが第3期の準備としての調査を先行的に行っている点も評価できる。
- ・プロジェクト間の連携をはかるために、例年どおり開催した JLVC も評価できる。

(2) 研究実施体制

- ・各プロジェクトとも、おおむね適切な研究組織が構成され、研究が推進されている。「危機方言」プロジェクト、「方言分布」プロジェクトの代表者が、科研 (B), (A) を獲得して効率的な研究連携を行っている点は評価できる。
- ・共同研究員などのプロジェクト構成員を多くかかえる一部のプロジェクトにおいては、代表者もしくはサブリーダーのより一層強力なリーダーシップがほしいところであった。

(3) 共同利用の推進

- ・各プロジェクトにおいて多くのデータがウェブ上で公開されたことは評価できる。内部公開にとどまっているデータは、一般公開を急ぎたい。疑問文プロジェクトの HP のように、各研究会の内容についても、その概略がウェブで周知されるのが望ましい。
- ・有料で公開したデータについては、利用にかかる費用が若干高めに設定されているので、今後、利用状況を追跡し、より一層利用しやすい環境を構築していくことが必要であろう。他の公開データについても、継続的に維持・管理するシステムを構築することが必要である。
- ・研究系内の合同研究発表会を開催するとともに、各プロジェクトのテーマに沿った研究会が活発に行われている。

(4) 国際化

- ・国際研究集会を開催したことは評価できるが、個々の共同プロジェクトが設定する研究課題の国際的な動向や取り組み状況、日本の研究が世界に先駆けて積み重ねてきた成果などを考慮すれば、国際化に向けての方略はやや低調である。
たとえば、危機言語・方言の調査・収集・保存という課題は全世界共通だと思われるので、国内で開催された「危機方言サミット」の国際版のような企画が期待される。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ・報告書、研究論文集、地図集、個別の論文など、研究成果の刊行および今後の刊行に向けての準備は十分になされている。
- ・「危機方言」プロジェクトが第2回「危機言語・方言サミット」に貢献した点、および、「大規模経年調査」プロジェクトが経年調査に関するプレス・リリースを行って経年調査を社会にアピールした点は、重要な社会貢献として評価できる。

(6) 若手研究者育成

- ・椎葉村や隠岐方言調査に PD, 院生, 学部生などを参加させ、現場で実践指導を継続的に実施してい

ることは，若手研究者育成のきわめて有効な方法として評価できる。

- ・聴覚障害者への支援は，若手研究者に限定せず，研究所全体で幅広く実施していきたい。

言語資源研究系

研究系長：前川 喜久雄

テーマ：現代語および歴史コーパスの構築と応用

平成 27 年度の計画

「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を総合研究テーマとして、「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの設計」の共同研究を実施し、講座「日本語コーパス」の出版や、コーパス開発センターとの連携による超大規模コーパスの構築等、成果の取りまとめを行う。あわせて一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを開催する。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

- ①「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を系全体の総合研究テーマとして、「コーパス日本語学の創成（略称：創成）」（代表者：前川喜久雄）、「コーパスアノテーションの基礎研究（略称：アノテーション）」（代表者：前川喜久雄）、「通時コーパスの設計（略称：通時）」（代表者：田中牧郎）の3共同研究プロジェクトを実施している。
- ②「創成」の活動の一環として、一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを年2回開催している。今年度は第8回を平成27年9月1-2日に開催した。
- ③共同研究の成果の一部として、講座『日本語コーパス』（全8巻、朝倉書店）の出版を進めている。平成26年12月に第4巻『コーパスと国語教育』、平成28年3月に第5巻『コーパスと日本語教育』を刊行した。

(2) 研究実施体制

- ①所外の共同研究者数は「創成」が36名、「アノテーション」が16名、「通時」が27名である。「アノテーション」には主に自然言語処理領域の、「通時」には主に日本語史領域の、そして「創成」には日本語学全領域の研究者が参加している。
- ②基本的には3プロジェクトとも独立に年数回の研究会（公開または非公開）を開催しているが、コーパス日本語学ワークショップを研究発表の場として共有することで、3プロジェクトのメンバー交流を実現している。
- ③「通時」では㈱小学館をはじめとする出版社と古典資料の著作権処理等について協力関係を構築している。
- ④コーパスの構築に関しては、研究系全員がコーパス開発センターに併任して、コーパス開発業務にも携わっている（詳しくはコーパス開発センターの実績報告書参照）。

(3) 共同利用の推進

- ①「創成」では、コーパス日本語学ワークショップを開催することで、コーパス日本語学に関する成果発表と意見交換の場を一般に広く提供している。毎回、ほぼ半分が一般（共同研究メンバー以外）からの応募である。参加者数も異なりで120名ほどを維持しているので、実質上の学会機能を提供できている。予稿集はPDF化してコーパス開発センターのホームページからダウンロードできる。

- ②「アノテーション」で作成した各種アノテーションデータ（文節係り受け，述語項構造，動詞項構造，拡張固有表現，時間表現，レル・ラレルの意味，節境界，文体情報など11種）をマニュアルとともに公開した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD版のユーザーはサーバーからダウンロードできる。
- ③「通時コーパス」関係では，鎌倉時代編Ⅰ 説話・随筆を平成28年3月に公開し，明治・大正時代編Ⅰ 雑誌のコアデータも平成28年3月に公開した。また，江戸時代編の試作版も公開した。
- ④国立情報学研究所と共同で言語資源構築における著作権処理をテーマとした公開研究会を開催した（平成27年7月24日，参加者54名），また統計数理研究所とは，言語分析における統計手法の利用に関するシンポジウムを共同開催した（同9月4日，参加者120名）。

（4）国際化

- ①オックスフォード大学の大学院生1名を外来研究員として受け入れた。
- ②「通時コーパス国際シンポジウム」を平成27年10月4日に開催した。
- ③台湾中央研究院と filled pause の音声特徴に関する共同研究を実施した。

（5）研究成果の発信と社会貢献

- ①『講座日本語コーパス』シリーズ（朝倉書店）の刊行を継続している。今年度は2巻を刊行し，8巻中6巻までの刊行を終えた。
- ②『コーパスと日本語史研究』（ひつじ書房）を刊行した。
- ③査読付英文論文1編，査読付国際会議予稿集論文3編等を発表した。
- ④国内外での招待講演を2件実施した。
- ⑤言語処理学会2014年優秀論文賞を受賞した（2015年10月）。
- ⑥コーパス開発センターと連携して『中納言』およびChaKi.NET（茶器）の講習会を地方も含めて3回開催した。

（6）若手研究者育成

コーパス日本語学ワークショップは若手の発表の場としても機能している。毎回全体の1/3から1/2が大学院生や非常勤職にある若手研究者による発表である。

自己点検評価	計画どおりに実施した。
--------	-------------

平成27年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

自己点検報告書の自己評価は「計画どおりに実施した」であったが，外部評価委員会では「計画を上回って実施した」と評価した。3つの共同研究プロジェクトが，連携をとりながら，それぞれ活発に共同研究を推進しており，いずれも高いレベルの成果を挙げている。特に，アノテーションに関しては，基礎研究にとどまらず，多種のアノテーションを作成し，公開したことは大きな成果である。通時コーパスでも計画以上の進展が見られた。

《評価項目》

(1) 共同研究の推進

- ・ 3つの共同研究プロジェクトがそれぞれ活発に共同研究を推進しており、いずれも高いレベルの成果を挙げている。共同研究プロジェクト間の連携も十分に取れている。
- ・ 前年度に引き続き、コーパス日本語学の公開ワークショップの開催や講座『日本語コーパス』の継続的出版が順調になされている。

(2) 研究実施体制

- ・ コーパス開発センターとの併任により、研究系とセンターの機能の有機的な連携が図られている。
- ・ 多数の所外の研究者の参加を得ることにより、研究会やワークショップの場を通しての共同研究を実のあるものに行っている。
- ・ 「通時コーパス」プロジェクトが出版社との協力関係を構築している点も評価できる。

(3) 共同利用の推進

- ・ コーパス日本語学ワークショップが、所内外の共同研究メンバーの間の研究交流の場としてだけでなく、広く一般からの参加も集めて開催されていて、実質的な学会機能を提供していること、および発表論文が公開されていることは特筆に値する。本年度は最終年度であるため1回だけであったが、今後ともなんらかの形で同様の機能を提供することが望ましい。
- ・ アノテーションについては、基礎研究を越えて、多種のアノテーションデータを公開したことは大きな成果である。
- ・ 通時コーパスについては、設計段階にとどまらず、多くを公開して一般の利用に供したことは、計画以上の進展ぶりと評価できる。「鎌倉時代編」「明治・大正時代編」の一部のデータの公開も順調になされた。今後とも継続的、発展的に拡充されていくことを期待する。

(4) 国際化

- ・ 「通時コーパス国際シンポジウム」の開催により、日本語の歴史コーパスの進展を海外に発信したことは優れた業績である。
- ・ ただし、研究系全体の成果としては件数が少ないのが気になる。次期計画への過渡期ということもあるため、今後の発展的な成果に期待する。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ・ 講座『日本語のコーパス』の継続的刊行および研究書の刊行はコーパスの意義を示すものとして有意義である。
- ・ 学会発表、招待講演など、研究成果の発信状況は良好である。
- ・ コーパス利用の講習会を開いたことも、この分野の研究の裾野を広げるために有益であり、社会貢献の役割も果たしている。

(6) 若手研究者育成

- ・コーパス日本語学ワークショップの開催により、所外の多くの若手研究者に研究発表の場を提供し、育成の場となって、この分野の研究への刺激を与えたことは、本研究系のユニークな成果であり、学界全体に貢献する活動として評価できる。ただし、学会の大会とは異なった、ワークショップならではの特色も考える余地があろう。

言語対照研究系

研究系長：プラシャント・パルデシ

テーマ：世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明

平成 27 年度の計画

「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」を総合研究テーマとして、述語構造の言語類型論的研究と東北アジア諸言語の比較研究を充実させ、研究成果を論文集、電子データベース、電子言語地図などの形で公開する。また、国際シンポジウムの開催を通して成果の国際発信を行う。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」(略称「述語構造」)および「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究(略称:「東北アジア言語地域」)」の2つの基幹型研究プロジェクトでは国際会議(1件)、国際ワークショップ(1件)、研究成果発表会(2件)を開催し、研究成果の刊行(単著1冊、編著書1冊、辞書1冊)を行った。加えて、電子成果(言語地図、動詞ハンドブック、自他動詞一覧)を研究所のウェブサイトを通じて公開した。(詳細については(3)共同利用の推進を参照)。

(2) 研究実施体制

- ①系の研究組織は、専任の教授(2名、ホイットマン、パルデシ)、特任准教授(1名、ブガエワ)である。専任教授がリーダーとして、特任准教授は班のリーダーとしてプロジェクトを推進した。
- ②非常勤研究員3名(PDフェロー2名、非常勤研究員1名)を雇用してプロジェクトを運営した。
- ③共同研究員は、「述語構造」プロジェクト88名、「東北アジア言語地域」58名である。

(3) 共同利用の推進

国際会議(1件)、国際ワークショップ(1件)、研究成果発表会(2件)を開催し、プロジェクトメンバー(共同研究員)以外の研究者、特に大学院生にも参加および発表の機会を提供した。また、研究成果の刊行(単著1冊、編著書1冊、辞書1冊)を行った。加えて、電子成果(言語地図、動詞ハンドブック、自他動詞一覧)を研究所のウェブサイトを通じて公開した。

A. 研究成果発表会

- ・「述語構造」プロジェクト
研究会を行わず、成果をまとめることに専念した。
 - ・「東北アジア言語地域」プロジェクト
- ①2015年6月13-14日、アイヌ語班の研究発表会(通算5回目)を開催し、アイヌ語班メンバー6名が研究発表を行った。
 - ②2015年12月5-6日、アイヌ語班の研究発表会(通算6回目)を開催し、研究発表6件を行った。

B. 電子成果の公開

- ・「述語構造」プロジェクト
- ①「有対自他動詞の地理類型論的なデータベース(WATP)」の構築と公開：世界諸言語における有対自他

動詞のデータに基づく地理類型論的なデータベースを構築し、2014年6月に48言語を追加したものを一般公開 (<http://watp.ninjal.ac.jp/>)。2015年4月にさらに12言語のデータを追加。2016年3月末現在、セッション数：7615、ユニークユーザ数：5,885、ページビュー数：15,338。

- ②「基本動詞ハンドブック」の公開：「基本動詞ハンドブック」は日本語学習者と日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いてわかりやすく解説したオンラインツール。2015年11月現在12見出しを追加し、2016年3月末現在合計65見出しを公開中。2016年3月末現在、セッション数：22712、ユニークユーザ数：16,290、ページビュー数：39,930。
- ③ナロック・ハイコ、プラシャント・パルデン、影山 太郎、赤瀬川 史朗 (2015)『現代語自他対一覧表 Excel 版』をウェブで公開 (<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>) (合計586対)した。

(4) 国際化

- ①国際シンポジウムの開催：NINJAL 国際シンポジウム「Typology and Cognition in Motion Event Descriptions」を開催し、国内外の研究者が成果を発表した（詳細は(5)を参照）。
- ②海外研究者の受け入れ：客員教授として、Peter Hook 教授（米ミシガン大学名誉教授）を迎えた。
- ③海外研究機関との連携：ヘルシンキ大学と共同で国際シンポジウムを開催した。
- ④海外の研究者との共同活動：「述語構造」には4名、「東北アジア言語地域」には9名の外国人研究者が共同研究員として参加している。
- ⑤研究成果の国際発信：両プロジェクトのリーダーは、海外の研究者と共同で研究発表・論文刊行等を行った（詳細は(5)を参照）。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

・「述語構造」プロジェクト

・著書

Prashant Pardeshi (2016). *A Functional Account of Marathi's Voice Phenomenon: Passives and Causatives in Marathi* (Brill Studies in South and Southwest Asian Languages 7), Leiden, Boston: Brill

・編著書

プラシャント・パルデン、桐生和幸、ハイコ・ナロック（編著）(2015)『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版

・辞書

Prashant Pardeshi, Kazuyuki Kiryu, Hari Damle, Meena Ashizawa (2015) 『日本語・マラーティー語基本動詞辞典』Pune, India: Rajhans Prakashan

・論文

- ①Prashant Pardeshi and Peter Hook. 2015. Blowing hot, hotter, and hotter yet: Temperature vocabulary in Marathi. In Maria Koptjevskaja-Tamm (ed.) *Linguistics of Temperature* [TSL 107]. Amsterdam: John Benjamins. Pp. 463-481
- ②プラシャント・パルデン 2015. 「日本語から見たマラーティー語——温度表現の対照研究」『日本語

学』東京：明治書院（2015年7月号）：62-68

- ③ プラシヤント・パルデン，今村泰也（2015）「日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの—プロジェクトの理論的・応用的な研究成果—」『国語研プロジェクトレビュー NINJAL Project Review』第6巻第2号 pp. 35-46（2015年10月）（<http://www.ninjal.ac.jp/publication/review/0602/>）

・口頭発表

- ① 今村泰也，プラシヤント・パルデン，ソーナル・クルカルニー，ピーター・フック，李在鎬（2015）「マラーティー語における行為の結果の回避可能性について—日本語と対照を通じて—」日本南アジア学会第28回全国大会@東京大学駒場Iキャンパス，2015年9月26日～27日

・成果とりまとめ（編集）作業

- ① *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*（プロジェクトメンバー数名が執筆）の編集作業を進めている。Mouton 社から2017年8月に刊行予定である。

- ② *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*（Oxford University Press）

・「東北アジア言語地域」プロジェクト

・編著書

本プロジェクト「音韻再建班」の論文5本を収録した『琉球諸語と古代日本語』（田窪行則，ジョン・ホイットマン平子達也編，くろしお出版）が2016年3月に刊行された。

・成果とりまとめ（編集）作業

- ① 本プロジェクトリーダー，ジョン・ホイットマンが編者の1人となる *Handbook of Japanese Historical Linguistics*（プロジェクトメンバー数名が執筆）の編集作業を進めている。Mouton 社から2017年8月に刊行予定である。

- ② 本プロジェクトのアイヌ語班を率いるブガエワ・アンナの編集による *Handbook of the Ainu Language*（アイヌ語班メンバーが執筆）の編集作業を進めており，Mouton 社より2017年8月に刊行予定である。

- ③ 本プロジェクト「形態統語論班」メンバーの論文を6本収録した，*Linguistic Crossings and Crosslinguistics in Northeast Asia*（Ekaterina Gruzdeva・Juha Janhunen 編）が現在査読中である。

- ④ 本プロジェクトリーダー，ジョン・ホイットマンが編者の1人となる *Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar* の編集作業を進めている。

国際シンポジウム開催に際しては，研究所ホームページやメールマガジンでの広報に加え，開催案内を諸学会・研究会のメーリングリストに流して，情報を広く研究者コミュニティに伝えた。

（6）若手研究者育成

- ① 昨年度に引き続き，プロジェクトPDフェローを2名，非常勤研究員を1名雇用し，国際シンポジウム，学会，プロジェクト研究会，国語研のサロンなどで発表させ，研究系や研究所の研究活動に参加させ，育成に努めた。

- ② アイヌ語班の研究発表会（2015.6.13-14）において大学院生を含む若手研究者4名に研究発表の機会

を与えた。

③2015年12月5-6日), アイヌ語班の研究発表会(通算6回目)を開催し, 研究発表6件(内, 若手研究者による発表1件)を行った。

④国際会議 Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area (2015.8.20-21)において, 大学院生を含む若手研究者3名に研究発表の機会を与えた。

⑤国際ワークショップ Kakarimusubi from a Comparative Perspective (比較的観点から見た係り結び, 2015.9.5-6)において, 若手研究者1名に研究発表の機会を与えた。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

平成27年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した。

自己評価は「計画を上回って実施した」であったが, 外部評価委員会では「計画どおりに実施した」と評価するにとどめた。

年度当初の計画に基づいて, 「述語構造」の言語類型論的研究ならびに「東北アジア諸言語」の比較研究の2分野の研究を国内, 国外の研究者との共同研究として行い, その成果として, 前者では編著書1冊, 辞書1冊を刊行し, また言語地図やデータベースなどをウェブサイトから公開している。後者ではプロジェクト研究会を2回開催している。このほか, 両分野に関する成果公刊を海外の専門出版社から公刊するための編集作業が進行中であるが, あえて評価を下げた理由としては, 研究系全体の有機的な共同研究体制の組織化が不十分なこと, 成果の電子化公表が遅れていること等が挙げられる。以下各評価項目について評価する。

《評価項目》

(1) 共同研究の推進

「述語構造」研究には88名, 「東北アジア諸言語」研究には58名の国内外の研究者が参加しており, 広域に分布し, 典型的にも多様な諸言語の比較対照を行っている点が高く評価できる。しかし, 年度計画記載内容のうち, 述語構造研究に比較すると東北アジア諸言語研究を充実させるための活動や研究成果がやや弱く, 研究系全体としての有機的な共同研究やその成果の蓄積・公開が十分とは言えない。

(2) 研究実施体制

「述語構造」研究には4名, 「東北アジア諸言語」研究には9名の海外の研究者が参加しており, 類型論研究, 対照研究という研究系にふさわしい活動を行っている点が高く評価できる。一方で, 同研究系においては国語研常勤研究者が少なく, 文字通り孤軍奮闘の感がある。日本語学全体の発展のためには, 日本語を国際的な検証の場におくことが望ましい。そのためには客員研究員, 海外研究員, 若手研究者に頼るだけでなく, 将来の対照・類型研究の発展を見越して常勤研究者を配置するなど, 研究所としての組織的な研究実施体制の充実が望まれる。実績報告書からは, この研究系としての研究班の全体構成や研究役割分担が見えづらく, 効率的な共同研究体制の計画的な組織化が十分ではないと判断される。

(3) 共同利用の推進

パルデン他編著 2015『有対動詞の通言語的研究』の刊行を補完するものとして地理類型論的なデータベース（WATP）の充実が行われており、アクセスも活発であることから、これを使用した同研究分野の更なる発展が期待される。オンラインツール「基本動詞ハンドブック」は、2016年3月末現在、合計65見出しを公開中であるが、今後見出しをさらに増やすなど、いっそうの充実が望まれる。このように「述語構造」研究では電子成果の公開が積極的に行われていて評価できる。一方で「東北アジア諸言語」研究ではアイヌ語班の研究成果発表会が2回開催されているが、電子成果の公開がなかったのは残念である。

(4) 国際化

同研究系の活動には、国内外の研究者が参加しており、また最終的な成果公開も海外出版社から出版を準備している点で評価できる。一方、国際会議において、この系の複数の班のメンバー10名が研究発表を行っているが、その成果がまとまった形で見えてこないのはやや残念である。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

両研究プロジェクトとも、メンバーによる著書、編著書、辞書、論文の公表、および口頭発表が活発に行われており、この言語対照研究系ならではの成果も多く、評価できる。また、「有対動詞」研究成果の国内出版社からの刊行およびウェブサイトでのデータベース公開は、日本語を含めた類型論研究、対照研究への関心を高めている。今後「基本動詞ハンドブック」のウェブ公開を充実していくことで、日本語教育分野の高度化に貢献することも期待される。

(6) 若手研究者育成

プロジェクトPDフェロー2名、非常勤研究員1名を雇用しているほか、若手の共同研究多数の研究成果をまとめた成果物を刊行し、国内外の研究発表会やワークショップでも研究発表の経験を積ませている。またデータベースの充実を図っている点も評価できる。

日本語教育研究・情報センター

センター長：野田 尚史

テーマ：日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

平成 27 年度の計画

「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」を総合研究テーマとして、「多文化共生社会における日本語教育研究」と「コミュニケーションのための言語と教育の研究」を実施し、第2期中期目標期間の成果の総まとめとして国際シンポジウムを開催する。また、第3期中期目標期間に向けて、日本語学習者コーパスの構築に着手する。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

- ①平成 24 年度から開始した異なる 12 言語の母語話者の日本語学習者コーパス（「多言語母語の日本語学習者横断コーパス, International Corpus of Japanese As a Second Language: I-JAS」）のデータ収集調査を終了した。そのうち 225 名分のデータに検索システムを付与し、音声データと共に公開する準備を整えた。
- ②日本語学習者の読解と聴解に関しては、読解に関する調査方法をマニュアルにまとめ、主に中国語話者に対する約 50 件の調査を行った。聴解に関する調査でも、調査方法を検討した上で約 70 件の調査を行った。
- ③日本語教育研究・情報センターでは、国立国語研究所で NINJAL 国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究 一学ぶ・教える・評価する」を開催した。
- ④共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」では、国立国語研究所で共同研究プロジェクト「危機方言」「通時コーパス」「大規模日常会話コーパス」と合同で「『正しい日本語』って何？ーコーパスに見る日本語のバリエーションー」という研究発表会を開催し、研究成果を発表した。
- ⑤共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」では、福岡市で研究発表会を開催し、日本語学習者の聴解と聴解教育に関する研究成果を発表した。

(2) 研究実施体制

- ①共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」では、迫田久美子を中心に野山広、福永由佳、非常勤研究員、内外の共同研究員約 20 名とともに共同研究を実施した。このプロジェクトに実施に当たっては、科研費基盤研究(A)「海外連携による日本語学習者コーパスの構築ー研究と構築の有機的な繋がりに基づいてー」（研究代表者：迫田久美子）と連携して効率的に研究を行う体制を作った。
- ②共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」では、野田尚史を中心に石黒圭、非常勤研究員、内外の共同研究員約 30 名とともに共同研究を実施した。このプロジェクトに実施に当たっては、科研費基盤研究(A)「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」（研究代表者：野田尚史）と連携して効率的に研究を行う体制を作った。

(3) 共同利用の推進

- ①異なる12言語の母語話者に日本語で半構造化インタビューを行ったりロールプレイやストーリーテリングをしてもらったり、メールやエッセイを書いてもらったデータを集めた日本語学習者コーパス（「多言語母語の日本語学習者横断コーパス, International Corpus of Japanese As a Second Language: I-JAS」）を作成するためのデータ収集調査を終了した。平成27年度はコーパス構築のためのアノテーション・ルールの検討を経て、アノテーションを開始し、日本語母語話者も含め、225名分のデータに検索システムを付与し、音声データと共に公開する準備を整えた。このデータは平成28年5月に公開される予定である。
 - i) 12言語(20地域)の母語話者の日本語学習者の発話・作文データ
 - ii) 国内の教室環境の学習者および自然環境の学習者の発話・作文データ
 - iii) 同じタスクを行った日本語母語話者の発話・作文データ
- ②日本語学習者の読解に関しては、日本語学習者に日本語を読んでもらいながら、その日本語をどう解釈したか、どう推測したかといったことを自分の母語で語ってもらい、そのときの学習者の解釈やその日本語訳などのデータを集めた「日本語非母語話者の読解コーパス」を作成するためのデータ収集を継続して行った。読解に関する調査方法をマニュアルにまとめ、主に中国語話者に対する調査を約50件行った。今後も、随時、データを増やしていく計画である。その結果をもとに、平成27年3月に開設した「日本語非母語話者の読解コーパス」のウェブページで、新たに「調査方法」の「サンプルビデオ」を公開し、「サンプルデータ」を追加した。日本語学習者の聴解に関する調査でも、調査方法を検討した上で、英語話者、ドイツ話者、フランス話者、イタリア話者、中国語話者、ベトナム話者などに対する調査を約70件行った。
- ③日本語教育研究・情報センターでは、2016年1月23日に国立国語研究所でNINJAL国際シンポジウム「現場を支える日本語教育研究—学ぶ・教える・評価する—」を開催した。カナダ、米国、韓国、台湾、インドネシアなどからも教授法、習得、評価の専門家を招聘し、分科会の討議やポスター発表を通して研究成果を発信した。この国際シンポジウムには、国内および海外からの181名が参加した。
- ④共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」では、2015年9月3日に国立国語研究所で共同研究プロジェクト「危機方言」「通時コーパス」「大規模日常会話コーパス」と合同で「『正しい日本語』って何？—コーパスに見る日本語のバリエーション—」という研究発表会を開催し、研究成果を発表した（参加者数約100名）。
- ⑤共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」では、2016年2月27日に、福岡市で研究発表会を開催し、日本語学習者の聴解と聴解教育に関する研究成果を発表した（参加者約50名）。

(4) 国際化

- ①北京日本学研究中心と国立国語研究所の学術交流協定に基づき、両機関に北京師範大学を加えて、日本語専攻の中国人大学生の4年間の日本語学習の縦断コーパス構築と共同研究のプロジェクトを開始した。
- ②日本語学習者に対する読解と聴解の調査を、国内だけでなく、ヨーロッパや北アメリカでも実施した。
- ③迫田久美子がベトナム・ホーチミンの国際シンポジウムで招待講演を行い、野田尚史が中国の北京と

広州の国際シンポジウムで招待講演を、インド・プネーで講演を行い、石黒圭がスペイン日本語教師会で招待講演を行い、野山広がドイツとベルギーの研修会等で招待講演を行い、福永由佳がオーストラリアの複数の大学で講演を行ったほか、それぞれがヨーロッパ日本語教育シンポジウムや国際シンポジウム Castel/J 2015 をはじめ、海外のさまざまな学会等でパネルや口頭発表を行うなど、海外で研究成果の発信を行った。

- ④博報財団日本研究フェローシップにより、サイバー韓外国語大学の尹鎬淑教授を外来研究員として受け入れ、共同研究を行った。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ①次の論文をはじめとして、所内メンバーだけで13本の研究論文を発表した。

李在鎬, 小林典子, 今井新悟, 酒井たか子, 迫田久美子 (2015) 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18号, pp.53-69.

Kumiko Sakoda (2016) "Errors and learning strategies by learners of Japanese as a second language". In M. Minami (Ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*. pp.129-150, Mouton 社.

野田尚史・阪上彩子・中山英治 (2015) 「中級日本語学習者が雑談に参加するときの聴解の問題点」*The 22st Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings*, pp.142-152, Princeton, NJ: Department of East Asian Studies, Princeton University.

野田尚史 (2015) 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』15巻2号, pp.82-98.

石黒圭 (2015) 「大学講義の文末表現の機能—引用助詞『と』で終わる文を例に一」『一橋大学国際教育センター紀要』6, pp.17-29.

野山広 (2015) 「地域における日本語教育支援と多文化共生—ローカルな視点から捉えるグローバル・シティズンシップ—」『異文化間教育』42号, pp.45-58.

福永由佳 (2015) 「日本で生活する外国人の言語能力に関する考察」*Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, Vol. 21, The JALT Bilingualism SIG.

- ②次の講演・発表をはじめとして、所内メンバーだけで48本の講演・発表等を行った。

Kumiko Sakoda, 招待講演 "Corpus of learners of Japanese as a L2 among 16 countries", International Workshop on Advanced Learning Sciences (The 3rd IWALS), 東京外国語大学, 2015年8月1日.

迫田久美子, 招待講演「日本語指導に生かす学習者コーパス研究」, 2015年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム, ベトナム・ホーチミン市統一会堂, 2015年9月7日.

迫田久美子, 招待講演「日本語教育のための学習者コーパス研究—学習者の文法・教師の文法—」, 創価大学日本語日本文化学会大会, 創価大学, 2015年11月13日.

田中真理・迫田久美子・野田尚史, パネル発表「日本語学習者コーパスにおける対話: ロールプレイ, メール, エッセイの分析をとおして」, 第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ボルドーモンテール大学 (フランス), 2015年8月28日.

野田尚史, 基調講演「日本語教育学の理論と実践をつなぐ方法」, 国際シンポジウム「日本語教育学の理論と実践をつなぐ」, 高等教育出版社 (中国・北京), 2016年3月26日.

野田尚史, 基調講演「日本語教育における文法の役割」, 国際シンポジウム「グローバル化時代に求め

られる日本語教育・日本学研究」, 暨南大学 (中国・広州), 2015年12月26日.

野田尚史, 講演「日本語教科書の過去・現在・未来」, プネー市日本語教育開始50周年記念セミナー, Maharashtra Chamber of Commerce, Industries, & Agriculture (インド), 2015年12月19日.

石黒圭, 基調講演「コミュニケーションの考え方」, スペイン日本語教師会第7回研修会, Residencia de Estudiantes (スペイン・マドリッド), 2016年2月6日.

石黒圭, 基調講演「日本語教育の世界を表す語彙と表現—日本語教育学専攻の修士論文データベースからわかること—」, データに基づいた日本語教育のための語彙・文法研究会公開シンポジウム, 聖心女子大学, 2016年3月21日.

石黒圭, 招待講演「話し言葉と書き言葉」, 第12回話しことばの言語学ワークショップ, 東京外国語大学, 2016年3月18日.

野山広ほか, ワークショップ「ウェルフェア・リングイスティクスと調査研究—現場性・実践性という観点から—」, 第36回社会言語科学会研究大会, 京都教育大学, 2015年9月.

Yuka Fukunaga, Public Lecture “Multilingual landscape of ‘Pakistan Street’: Language use in societal and political context in a Pakistani community”, University of Technology Sydney, Australia, 2016.2.15.

③社会貢献として, 次のセミナー・研修をはじめ, 所内メンバーだけ15回のセミナーや研修等を行った。

迫田久美子, 「日本語の習得研究は教師にとってなぜ必要か」, 日本語教育冬期集中セミナー, 長沼スクール東京日本語学校, 2015年12月23日.

迫田久美子, 「日本語教師という仕事」, 国立国語研究所職業発見プログラム, 国立国語研究所, 2015年11月19日.

野田尚史, 「外国の人たちにもわかりやすい日本語」, ふくおか地域日本語の会 日本語ボランティア研修, 福岡市立中央市民センター, 2016年3月12日.

野田尚史, 「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」, 兵庫日本語ボランティアネットワーク研修会, 兵庫県立のじぎく会館, 2015年10月25日.

野山広, 「外国人児童生徒に対する日本語教育」, 2015年度東京都教育委員会夏季教員研修, 東京都教職員研修センター, 2015年8月.

(6) 若手研究者育成

①学習者コーパス研究では, アノテーションの作業のために, 日本語教育専攻の院生や日本語教師経験者を技術補佐員(スクリプト・アシスタント)として23名雇用し, 事前研修および準備作業の工程を経て, アノテーションを開始した。また, 作業の重要性和プロジェクトの理解を深めるために, 技術補佐員を対象として, 5回の特別講義(13:00~15:00)を開催した。講義日程と講師は以下のとおりである。

7月11日 迫田久美子(国語研)「第二言語習得研究の観点からのコーパスの重要性について」

8月22日 南雅彦(オランダ国立大学)「基礎から学べる第一言語と第二言語の習得研究の流れについて」

10月18日 李ジェホ(筑波大学)「コーパス言語学の観点からのコーパス利用について」

11月14日 小林典子(筑波大学)「苦手な文法を上手に理解させる日本語指導について」

12月12日 松見法男（広島大学）「体験をとおして学ぶコーパス関連の統計分析について」

②プロジェクト PD フェローと共同でヨーロッパ日本語教育シンポジウムの口頭発表や、日本語教育学会のパネルセッションおよび口頭発表を行い、『ヨーロッパ日本語教育』掲載予定の論文を共著で執筆した。また、PD フェローの科研費申請に研究分担者として加わるなどして、PD フェローの育成を行った。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

平成 27 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

「多文化共生」プロジェクトが日本語学習者コーパスにおける大規模なデータ収集を量・質ともに中期計画通りに達成した点と、そのデータを利用した研究のための研修会を精力的に実施してきている点が特に高く評価される。また、「多文化共生」プロジェクトが地域日本語教育への地道な貢献を継続している点、「コミュニケーション」プロジェクトが3年間という中期計画の半分の期間で、相応の進展を示し、今後の読解・聴解データ収集の方向性を打ち出している点は評価できる。所内メンバーだけで年間48本の講演・発表を行い、国内外の日本語教育関係者に精力的に発信した点も評価に値する。本センターについては、自己点検評価は「計画どおりに実施した」であったが、以上述べた理由により、外部評価委員会としては「計画を上回って実施した」と評価する。

日本語学習者コーパスは、全体の1/5にあたる225人分の公開を予定できるまで進んでおり、このデータを利用しての今後の研究の進展が期待される。センター全体のまとめた国際シンポジウムのタイトルにあるように、「(国内外での)現場を支える日本語教育研究」という点において、「多文化共生」プロジェクト、「コミュニケーション」プロジェクト双方とも十分な成果をあげており、今後もこの方向性のもとでの研究のさらなる深まりを期待したい。

《評価項目》

(1) 共同研究の推進

- ・日本語学習者コーパスのデータ収集が同時に海外の日本語教育研究者との共同研究であった面もあり、その点も評価できる。その共同研究的性格を、今後の、このデータを利用した研究の促進の海外ネットワークとして生かすことを期待したい。
- ・本共同研究プロジェクトが「危機言語」「通時コーパス」「大規模日常会話コーパス」と合同で研究発表会を行ったことは、研究方法と内容面での情報共有に非常に有益であるとともに、参加者に対しても広域な言語現象を示したことで刺激的な企画であったと評価できる。
- ・この合同発表会の収穫の報告（ウェブサイトでのニュースレターのような形式でもよい：この点は他のシンポジウムについても言える）もほしいところである。

(2) 研究実施体制

- ・「多文化共生」プロジェクト、「コミュニケーション」プロジェクトの双方が、海外の日本語教育研究者を多数共同研究メンバー（「多文化共生」については（1）で述べた意味も込めて）としている点は、海外の日本語教育研究との連携促進という点で評価できる。

- ・両プロジェクトとも、科学研究費補助金基盤研究（A）を獲得して効率的な研究連携を行った点も評価できる。
- ・「多文化共生」のプロジェクトは、I-JASの大規模調査とともに、国内の日本語自然習得者の研究も進めてきた。
- ・「コミュニケーションのための言語と教育の研究」は中期計画の中途から開始されたプロジェクトでありながら、多数の共同研究者の協力を得て、実質的な研究成果を挙げはじめた。

（3）共同利用の推進

- ・日本語学習者コーパスのウェブでの公開準備が進んだことは評価できる。公開されたコーパスの有効な利用を促進するための方策（「利用の手引き」「利用のための研修」「コーパスを利用したモデル的研究の公開」等）をいっそう推進してほしい。この点は、今後、「コミュニケーション」プロジェクトの収集データのウェブ公開においても、同様の作業を期待したい。
- ・国際シンポジウム等の成果発表的研究会については、事後報告も公開することを要望する。

（4）国際化

- ・北京日本学研究中心との学术交流が「現場を支える日本語教育研究」という点で、いっそうの進展を見せることを期待したい。
- ・研究代表者等が、きわめて精力的に国際シンポジウムの招待講演等を実施してきた点は高く評価できる。今後も、海外の日本語教育研究との連携に注力していただきたい。
- ・外来研究員の受入についても、より積極的な姿勢を望む。

（5）研究成果の発信と社会貢献

- ・所内メンバーだけで年間48本の講演・発表を行った点は評価に値する。
- ・日本語学校や地域日本語教育、年少者日本語教育への貢献も重要であり、評価できる。
- ・「日本語教育」の存在感をアピールするような、日本社会への発信をさらに期待する。
- ・社会貢献としては、地方自治体の要請で、外国人にとっての「やさしい日本語」、「外国人児童生徒に対する日本語教育」など一般市民に対する講演をしたことは高く評価できる。

（6）若手研究者育成

- ・日本語学習者コーパスを利用した研究ができる若手研究者の育成は特に重要である。
- ・国内だけでなく海外の優秀な若手研究者も育成するような可能性を探究してほしい。
- ・学習者コーパス研究では、アノテーション作業に携わる若手研究者に対して、事前研修をし、作業開始後も定期的な研究会で啓蒙的な特別講義を行って、コーパス・分析方法・評価法に関する知識を深めさせた点が評価できる。
- ・プロジェクトPDフェローに対して、論文発表のための支援をした。

コーパス開発センター

センター長：前川 喜久雄

平成 27 年度の計画

「日本語話し言葉コーパス」, 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」, 「日本語歴史コーパス 平安時代編」等の一般公開を継続するとともに, 新規に「日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言」, 形態論情報付き「太陽コーパス」, 「日本語話し言葉コーパス」形態論情報 (いずれも仮称) を公開する。

平成 27 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

- ①『国語研日本語ウェブコーパス (NINJAL Web Japanese Corpus)』(従来「超大規模コーパス」と呼称していたものの正式名称) の構築を完了した。(詳細は下記(3)に記述。以下同様)
- ②『国語研日本語ウェブコーパス』の検索環境『梵天』を開発した。
- ③通時コーパスプロジェクトの成果を『中納言』で公開した。
- ④『日本語話し言葉コーパス』への短単位形態論情報を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』用の短単位情報の仕様と統一する作業を完了した。
- ⑤日本語教育研究・情報センターが開発した『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)の『中納言』による公開準備を進めた。
- ⑥次期中期計画期間での開発が予定されているコーパス(方言コーパス, 学習者コーパス等)について, どのような技術的支援が必要かを検討する研究会(SMOKKA 研究会)を開催した。
- ⑦『中納言』の検索機能について種々の改善を図った。
- ⑧『中納言』のユーザー増加に伴う利用申請受付業務の煩雑化を軽減するために, 利用申請の電子化作業を進めた。

(2) 研究実施体制

言語資源研究系の教授 2 名, 准教授 4 名, 理論・構造研究系准教授 1 名がセンターに併任しており, 他にポスドク 1 名を雇用した。さらに実務担当者として派遣社員 1 名(DB 開発担当) プロジェクト非常勤研究員 10 名, 技術補佐員 7 名を雇用して業務にあたった。雇用経費については, 当センターの予算以外に「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの開発」等の 3 基幹型プロジェクトの予算と種々の科学研究費からの支援を受けた。

(3) 共同利用の推進

- ①『国語研日本語ウェブコーパス』の構築を終了した。規模は短単位で 253 億語であり, 目標としていた「百億語規模」を余裕をもって達成した。
- ②『国語研日本語ウェブコーパス』の検索環境『梵天』を開発した。百億語規模のデータの検索速度は開発開始時からの懸念であったが, ㈱PFI の技術協力により, 文字列検索・形態論情報検索とも, 既存の『中納言』による 1 億語規模のデータに対する検索と同等のスピードを実現できた。『梵天』では, 文字列検索, 形態論情報検索にくわえて, 文節係り受け情報の検索も可能である。『梵天』は平成 28

年度秋から、講習会受講者を対象に順次公開範囲を拡大する予定である。

- ③通時コーパスプロジェクトの成果を『中納言』で公開した。「室町時代編 I 狂言」の長単位データと、「鎌倉時代編 I 説話・随筆」および「明治・大正時代編 I 雑誌」（従来、「太陽コーパス」「明六雑誌コーパス」など個別のコーパスとして公開されていたコーパス群に短単位形態論情報を付与して統合したもの）を平成 28 年 3 月に公開した。「太陽」はコアデータのみでの公開である。
- ④『日本語話し言葉コーパス』への短単位形態論情報を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』用の短単位情報の仕様と統一する作業を完了した。『日本語話し言葉コーパス』のライセンス保有者を対象にオンライン公開を実施する。
- ⑤次期中期計画期間での開発が予定されているコーパス（方言コーパス、学習者コーパス等）について、どのような技術的支援が必要かを検討する研究会（SMOKKA 研究会）を 6 回開催した。テーマとして、非標準的音声の転記基準、形態素解析方針、音声・テキストの自動時間アラインメントの可能性、公開に際しての法的問題などをとりあげた。
- ⑥『中納言』の検索機能について種々の改善を図った。主要な改善点としては、『日本語歴史コーパス』における画像リンク機能の実装およびジャパンナレッジへのリンクの実装、「アノテーション」プロジェクトで整備した各種アノテーションデータのダウンロード認証機能（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 版ライセンス保有者にのみアノテーションデータのダウンロードを許可する）などがある。また I-JAS の『中納言』による検索環境構築に関する技術的支援も実施した。
- ⑦『中納言』のユーザー増加に伴う利用申請受付業務の煩雑化を軽減するために、利用申請の電子化作業を進めた。具体的にはウェブでの申し込みに対してスマホ・携帯電話のショートメッセージサービスを利用して本人確認を行うシステムを構築した。これにあわせて、電子契約を前提とした契約書も新たに作成し、平成 28 年上半期における電子受付開始の準備を終えた。日本語教育研究・情報センターが開発した『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）の『中納言』による公開も、電子化システムで実施する予定である。
- ⑧『日本語話し言葉コーパス』および CSJ-RDB 版の公開を継続した。平成 27 年度中の新規契約は 50 件、そのうち 2 件が商業利用契約であった。通算契約数は 830 件。
- ⑨『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（DVD 版）の公開を継続した。平成 27 年度中の新規契約数は 56 件、そのうち 10 件が商業利用契約であった。通算契約数は 327 件。
- ⑩『中納言』の新規利用申込みは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』が約 800 件、『日本語歴史コーパス』は約 200 件であった。通算ではそれぞれ約 3400 件と 680 件である。
- ⑪『少納言』には年間で約 80 万件の検索要求があった。前年度より 5%ほど増加している。

（４）国際化

平成 26 年度の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に続いて、平成 27 年度は『日本語話し言葉コーパス』ホームページを英文化した。

（５）研究成果の発信と社会貢献

- ①以下の研究発表・講演を行った。

浅原正幸「日本語 Web コーパスの構築—利活用—」国語研プロジェクトレビュー 6(1),

pp. 1-10, 2015:06.

浅原正幸・河原一哉・武井裕也・舛岡英人・大場寧子・鳥井雪・森井亨・前川喜久雄・加藤祥・小西光『『国語研日本語ウェブコーパス』の検索系』言語処理学会第22回年次大会発表論文集, P17-7, 2016:03.

浅原正幸「言語研究のための言語資源整備～凸最適化からの脱却～」言語処理学会第22回年次大会(NLP2016)チュートリアル, 2016:03.

前川喜久雄「総評と今後のコーパス研究の展望」コーパス合同シンポジウム「正しい日本語ってなに？ーコーパスに見る日本語のバリエーションー」, 2015:09.

前川喜久雄「日本語の全体像を知るためにー国立国語研究所による言語資源整備ー」第7回産業日本語シンポジウム基調講演, 2016:02.

前川喜久雄「文法性判断の確率論的な扱いに関する覚え書き」一橋日本語教育研究, 4, pp. 1-10, 2016:03.

- ②『日本語学』(明治書院)に2年にわたって連載してきた「コーパス活用の勘所」(全24回)が完結した。執筆者はすべてコーパス開発センターの関係者である。
- ③『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を引用した研究論文のリストを2015年分まで拡張した。『日本語話し言葉コーパス』の場合、通算853論文のうち65件が2015年に公開されており、そのうち56件が英文論文である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の場合、通算635論文のうち82論文が2015年に公開されており、そのうち25件が英文論文である。
- ④『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD版)の頒布による収益が約1120万円あった。
- ⑤『日本語話し言葉コーパス』の商業利用契約が2件、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の商業利用契約が10件あった。

(6) 若手研究者育成

コーパス開発センター所属のプロジェクト非常勤研究員等で大学の常勤研究職に採用された者が3名あった(同志社大学, 常葉大学, 埼玉大学)。

自己点検評価	計画を上回って実施した。
--------	--------------

平成27年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

「日本語歴史コーパス」および「国語研日本語ウェブコーパス」の構築及び利用環境の整備が計画を上回った成果を上げている。共同研究としては、次期の研究計画に関わる話し言葉、日本語教育、方言のコーパスを統一する書式に向けての研究会を立ち上げた点は、現在と将来の共同研究の基盤作りとして重要である。収集予定の規模を超えるデータに対して「梵天」検索システムを構築したことも高く評価できる。「中納言」の利用者が増加していることは共同利用が成功していることを示している。国際化については、オックスフォード大学との共同研究による研究交流、英文でのWebサイト作成により、海外の利用者にも使用可能な機会を与えたことで、評価される。質の高い著作物、研究論文の発表と、若

手研究者の育成も評価に値する。ただし、成果については、リーダーが「言語資源研究系」と同一であることもあり、組織間の境界が明瞭ではない点が気になる。

既公開の他のコーパスについても、維持するだけにとどまらず、高度な利用に向けての改善が行われている。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

- ・「国語研日本語ウェブコーパス」の構築が完了したことは高く評価できる。さらにこの検索環境として「梵天」を開発したことは、今後のコーパス開発の基盤を強化したことになり、将来を見据えた計画が進められていることが評価できる。
- ・SMOKKA 研究会の開催は、現状の周辺のプロジェクトのみならず、国語研の将来のコーパス体系の統括に備えて、有益な方法である。

（２）研究実施体制

- ・言語資源研究系の教員の併任により同研究系との連携が図られており、さらにそれを補う形で、多くの非常勤研究員・技術補佐員等を雇用するための経費上の工夫がなされている。
- ・コーパス開発の実務にあたっては、大量のデータのタグ付けなどに多くの役務がかかるため、専門化した人材の確保が重要であるが、その目的を遂げた。

（３）共同利用の推進

- ・「国語研日本語ウェブコーパス」を、計画を大きく上回る規模で構築し、高機能な検索環境「梵天」も開発したことは、特筆に値する成果である。さらに利用許可の手続きを電子化したことで、今後利用者が一層増加することが期待できる。
- ・歴史コーパスの進行も計画を上回る目覚ましきである。次期に予定されているコーパス開発の準備や既公開のコーパスの維持も適切に行われている。

（４）国際化

ホームページの英文化を進めたことは評価できる。海外からのコーパス利用の促進にさらに意を用いてほしい。

（５）研究成果の発信と社会貢献

- ・講座『日本語コーパス』の刊行、コーパス利用に関する記事の『日本語学』での連載はコーパス利用の啓蒙的な効果を果たしたと認められる。
- ・実務的な性格の強いセンターであるから研究成果の発信は多くはないが、コーパスを引用した研究文献のリストを拡張したことは大きな貢献であり、このリストを継続して拡張することが望ましい。

（６）若手研究者育成

- ・多くの非常勤研究員・技術補佐員等を雇用して作業に当たらせることによりこの分野の若手研究者を

育成している。3名の非常勤研究員等が大学の常勤研究職に採用されたことは、それが効果的に機能していることを示すものである。

平成 27 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果

【組織・運営】

I. 教育研究等の質の向上の状況に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 研究に関する目標を達成するための措置

(1) 共同研究の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

4つの研究系と日本語教育研究・情報センターにおいてそれぞれの総合研究テーマに則り、基幹型共同研究プロジェクトを実施する。また、第2期中期目標期間の成果を取りまとめて発信するとともに、第3期中期目標期間への継続性の観点から、フィージビリティスタディ型共同研究など準備的研究を実施する。

【実績】

4つの研究系及び日本語教育研究・情報センターにおいて総合研究テーマに基づく基幹型共同研究 16 件(継続)を実施するとともに、成果の取りまとめを行い、国際シンポジウム(6件)、研究者・一般向けフォーラム(一橋講堂, 参加者 351 名)、地方セミナー(2件)等の各種集会の開催、論文集(16冊)、データベース(3件)、『国語研プロジェクトレビュー』(3冊)、『国立国語研究所論集』(2冊)の刊行・公開により国内外に研究成果を積極的に発信した。

平成 27 年度前半に第3期中期目標期間を見据えたフィージビリティスタディ型共同研究 5 件、平成 27 年度後半には第3期中期目標期間準備プロジェクトを実施した。

(2) 研究実施体制に関する目標を達成するための措置

【計画】

平成26年度に外部有識者の意見を取り入れて決定した第3期中期目標期間の主要な共同研究プロジェクトに多方面からの参画を得るため、実施体制を検討・整備する。

【実績】

第3期中期計画期間の核となる機関拠点型基幹研究として「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の全体計画及び年度計画を策定し、実施体制として「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、「統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究」、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」、「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」、「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の6つの班を設けるとともに、国内外の大学・研究機関及び研究者と連携するための研究ネットワークを構築した。

(3) 共同利用の基盤整備等共同利用の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

1) 日本語研究・日本語教育文献データベースを定期的に更新する。

- 2) 「日本語話し言葉コーパス」, 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」, 「日本語歴史コーパス平安時代編」等の一般公開を継続するとともに, 新規に「日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言」, 形態論情報付き「太陽コーパス」, 「日本語話し言葉コーパス」形態論情報(いずれも仮称)を公開する。
- 3) 12 の異なる言語を母語とする国内外の日本語学習者の大規模なデータ収集を完了し, 学習者コーパスの一次データ公開に向けた準備を行う。
- 4) 平成 22~26 年度に収録した奄美, 沖縄, 八丈の方言の音声データ及び 30 年前に収録された奄美, 沖縄方言の談話資料, 甌島方言アクセントデータベースを公開する。また, 25 年度に開始した方言談話データの整理を全国の大学等の研究者と共同でさらに進め, 共同利用に供する。
- 5) 機関リポジトリの構築に着手する。平成27年度は既存の刊行物データベースからの移行を図り, 可能な範囲で英語版も作成する。

【実績】

- 1) 日本語研究・日本語教育文献データベースを四半期毎に更新(約3,000件のデータを追加)したほか, これまで「文字列一致」のみの検索であった著者名については, ひらがな・ローマ字でも検索できるように機能を追加した。
- 2) コーパスの契約数は, 「日本語話し言葉コーパス」53件(含商業利用3件), 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(DVD版)48件(含商業利用10件), 同(オンライン版)776件, 「日本語歴史コーパス」(オンライン版)277件である。
 - ・文末認定基準を修正した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(DVD版) Version 1.1を公開した。
 - ・「日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言」をオンライン公開した。
 - ・「太陽コーパス」形態論情報(コア22万語分)をオンライン公開した。
 - ・「日本語話し言葉コーパス」形態論情報(短単位)を限定オンライン公開した。
- 3) 12 の異なる言語を母語とする国内外の日本語学習者約 1,000 名の大規模なデータ収集を完了した。その発話データの文字化を進め, 約 200 名分のコーパスデータを「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」として公開した。
- 4) すでに公開している鹿児島県喜界島方言音声データベースのデータ量を増やすとともに, 24年度に収録した東京都八丈島方言, 鹿児島県与論島方言の音声データを整備し, 基礎語彙音声データベースを構築し, 公開した。また, 鹿児島県甌島方言アクセントデータベース(8集落話者16名)を構築し, 公開した。方言談話データについては, 地点数を6から27に増やし, 「方言コーパス試作版」を内部公開した(<http://hougen-corpus.ninjal.ac.jp/search/>)。
- 5) 機関リポジトリ構築に着手し, 刊行物データ 213 件(英語論文を含む)を初期公開コンテンツとして作成し, 公開した。

(4) 国際化に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 国内外の研究者を招へいし, 音声及び文法に関する国際シンポジウムを開催する。
- 2) 北京日本学研究中心との国際学術協定に基づき, 北京師範大学で中国語を母語とする日本語学習者の調査を行う。
- 3) 博報財団「国際日本研究フェロシップ」招へい研究者を始め, 外来研究員の受入を積極的に行う。

- 4) サクラメント歴史センター、ハワイ日本文化センター等に所蔵される在外資料の調査を継続する。
- 5) 日本語研究の英文ハンドブックシリーズ（全 11 巻、Mouton 社）にアイヌ語の巻を加えた全 12 巻を編集し、順次刊行する。

【実績】

- 1) NINJAL 国際シンポジウム「文文化：日本語研究と類型論的研究」（平成 27 年 7 月 3 日～5 日、参加者延べ 300 名）、同「現場を支える日本語教育研究 一学ぶ・教える・評価する一」（平成 28 年 1 月 23 日、参加者 181 名）に加え、国際シンポジウム「Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area」（平成 27 年 8 月 20 日～21 日、参加者延べ 46 名）、同「比較的観点から見た係り結び」（平成 27 年 9 月 5 日～6 日、参加者延べ 91 名）、同「ICPP 2015」（平成 27 年 9 月 25 日～27 日、参加者延べ 185 名）、同「通時コーパス」（平成 27 年 10 月 4 日、参加者 81 名）、国際ワークショップ GemCon 2015（平成 27 年 8 月 12 日、参加者 76 名）を開催した。
- 2) 北京日本学研究中心との国際学術協定に基づき、北京師範大学で中国語を母語とする日本語学習者約 20 名の調査を行った。これは、今後、同じ学習者に継続して年 2 回の対面調査及び作文調査を行う縦断調査の第 1 回に当たるものである。また、ドイツ、フランス、カナダで、現地の日本語教育研究者と協力して日本語学習者の聴解に関する調査を行い、その調査結果をもとに共同でヨーロッパや米国の学会等で研究発表を行い、論文を発表した。
- 3) 海外の研究者との人的な交流を促進するため、博報財団「国際日本研究フェローシップ」招へい研究者 3 名を含む外来研究員 6 名を受け入れた。
- 4) 本年度において、平成 27 年 8 月にサクラメント歴史センター、平成 27 年 12 月にハワイ日本文化センターで在外資料の調査を継続した。平成 26 年度中に新たに発掘した資料（ハワイ大学西オアフ校）について資料利用をめぐる協議を平成 27 年 5 月及び 12 月に行った。
- 5) Mouton 社の日本語研究英文ハンドブックシリーズの最初の 3 巻を平成 26 年度末から平成 27 年度初めにかけて刊行したのに引き続き、平成 28 年 1～2 月に新たに 2 巻（レキシコン・語形成、応用言語学）を刊行した。残りの巻についても執筆・編集を進めた。

（5）研究成果の発信と社会貢献に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 第 2 期中期目標期間の総まとめとして、主要な成果を一般向けに発信する公開フォーラムを開催する。
- 2) 広報機能強化のため、「広報室」の設置準備を進める。
- 3) 英語版ウェブサイトの内容充実に向けた改修を行う。
- 4) これまでに収集した方言調査記録等について、第 3 期中期目標期間以降に学術研究資料として公開するため整理を行う。

【実績】

- 1) 第 2 期中期目標・中期計画期間における研究成果を広範囲に発信するため、研究者と一般市民が共に参加できる公開講演会（第 9 回 NINJAL フォーラム、平成 28 年 3 月 5 日、参加者 351 名）を開催した。
- 2) 一般社会への広報・連携にかかる業務を集約・強化するため、広報室を設置し、職員を配置するとともに、広報担当研究者として、学術研究に専門的な知見を持つ非常勤研究員を 1 名新規採用した。

- 3) ウェブサイト上で研究成果を発信するコーパス・データベースの改修を行うとともに、英語版を設ける等の英語サイトの充実を図ることによって国内外の利用者の利便性を高めた。
- 4) 第3期中期目標期間以降での公開に向けて、経年劣化等により共同利用に供しにくい方言調査・社会調査の音源資料をデジタル (WAV 形式) へ複製して保存するとともに、共同研究のためのアクセス環境を構築するために、専用配信装置を設置して基盤強化を行った。

自己点検評価

計画をどおりに実施した。

《評価結果》

計画を上回って実施した。

(1) ～ (5) すべての項目において、当初の目標どおり計画が実施され、一部には、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の公開、ドイツ・フランス・カナダにおける日本語学習者の聴解に関する調査および成果発表、広報室の設置と職員の配置など、計画を上回る成果も認められる。特に、NINJAL 国際シンポジウム及び4回にわたる国際シンポジウム(ワークショップ)は、延べ900名を超える参加者をえて、国際的な訴求力を発揮した。また第9回NINJALフォーラムも参加者351名をもって開催され、研究者と一般市民に向けて研究実績を発信した。これらのことは、グローバル時代におけるパフォーマンスとして高く評価される。

2. 教育に関する目標を達成するための措置

(1) 大学院教育への協力に関する目標を達成するための措置

【計画】

一橋大学大学院言語社会研究科との協定に基づき、連携大学院方式による研究指導を行う。これに加え、第3期中期目標期間から新たに開始する東京外国語大学との連携大学院の準備に着手する。

【実績】

一橋大学との連携大学院プログラムを継続するとともに、新たな連携大学院プログラムを28年度から開始するために東京外国語大学と連携大学院協定を結んだ。連携大学院の開始に先立ち、東京外国語大学と国際シンポジウム(平成28年1月29～31日、参加者延べ229人)を共催した。

(2) 若手研究者育成に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 若手研究者に最前線の研究的知見を教授するためのNINJALチュートリアルを開催する。
- 2) 若手研究者を危機方言のフィールド調査に参加させ、調査・分析方法を学ばせる指導プログラムを実施する。
- 3) PDフェローに対して、共同研究プロジェクトへの参加や国際シンポジウムの運営などを通じて研究の方法や国際会議の企画・運営などについて指導を行う。
- 4) 日本語教育研究の若手研究者を学習者コーパス構築のための調査研究に参加させ、調査・分析方法を指導する。

【実績】

- 1) 大学院生を中心とした若手研究者に日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を教授する制度であるNINJALチュートリアルを2回(平成27年9月1日「言語生

<p>活のロジスティック回帰分析入門」, 千代田区, 参加者 9 名, 平成 28 年 2 月 19 日～20 日「言語類型論の最新の動向 - 理論研究と応用研究の接点」, 那覇市, 参加者 7 名) 開催した。</p> <p>2) 若手研究者とベテラン研究者がチームを組んで調査・分析・報告を行うことにより, 若手研究者にフィールド調査の方法を指導するプログラムを, 27 年 11 月 8～11 日に島根県隠岐の島で実施し, PD・大学院生 6 名, ベテラン研究者 12 名が参加した。</p> <p>3) 若手研究者育成を図るため, 博士の学位を取得した者をプロジェクト PD フェローとして 8 名雇用し (新規採用 2 名), また日本学術振興会特別研究員を 5 名 (新規 3 名) 受け入れた。共同研究プロジェクトやフィールド調査に参加させて研究手法を教授し, 国際シンポジウム開催の実務を担当させるなど研究者として独り立ちできるような指導体制を整えた。この結果, 大学教員として 1 名採用されることが内定した。また, 海外の大学から 2 名の大学院生を特別共同利用研究員として受入れ, 研究指導を行った。</p> <p>4) 日本語教育研究の若手研究者約 20 名を学習者コーパス構築のための調査研究に参加させた。調査研究参加者に調査・研究に対する理解を深めてもらうために共同研究員等を講師とした 5 回の特別講義を開催するなど, 調査・分析方法を指導した。</p>	
自己点検評価	計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した。

国立国語研究所という「研究」組織にとって, 教育への関与は副次的なものと思われがちであり, また現実にもいくらかの困難があることも, 十分に理解できる。しかしながら, 他大学等との連携大学院プログラムを共有することで, 十分の可能性が開かれるであろうし, ことにそのことが研究の側面にたいして有効なインパクトともなりうるはずである。このための準備は着実に進行しているように見えるので, 所員一同が認識を新たにしつつ, 今後の展開を図っていただきたい。将来にわたって, 「計画を上回って実施した。」という高い評価を下しうるような状況が来ることを切望する。

【総合評価】

国立国語研究所は人間文化研究機構内に改編されたのち, 第 2 期中期計画の 6 年間にわたって, 所長以下, 所員・職員が協調して, 所期の目的を達成すべく努力を重ねてきた。このことを, まず高く評価しておきたい。なかでも指摘したいのは, アカデミーの国際化の進行に呼応して, 国立国語研究所の諸業務が急速に国際化の度合いを強めていることである。国外研究者の招聘や, 在外機関との連携, さらに研究成果の対外発信が高度化し, これまで当該分野の研究者が, えてして「国語」へのこだわりのため陥りがちであった内向き姿勢に, 大きな変更が加えられている。未だ十分に達成できていない分野や方向も少なくないと思われるので, 今後ますますの努力を要請するものである。

【管理業務】

II. 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

運営会議（内部委員6名、外部委員8名）、外部評価委員会（外部委員8名）からの意見を反映させて平成26年度に決定した6件の第3期共同研究計画案に基づき、機関拠点型基幹研究プロジェクト全体の計画・実施体制を策定し、それに伴う研究組織の改編を決定した。

外部評価委員、運営会議委員を含む外部有識者（計24名）により平成26年度に実施した第3期共同研究計画案に対する審査のコメントに基づいて当初計画の改良を行い、第3期機関拠点型基幹研究を構成する6件のプロジェクトを確定した。とりわけ文法解析コーパスについては有識者からのコメントが契機となり、英語コーパスについて先導的研究を行っている米国及び英国の大学と連携協定（28年度締結予定）を結ぶ運びとなった。

【計画】

所長のリーダーシップのもと、戦略的・重点的に取り組むべき事業等について資源配分を行う。

【実績】

所長裁量経費を、研究所予算全体の3.3%を確保し、戦略的・重点的に取り組むべき事業として、フュージビリティスタディ型共同研究5件（6,692千円）及び研究成果の刊行助成2件（3,975千円）を配分した（合計7件10,667千円）。

【計画】

事務職員・技術職員の採用は、競争試験または選考試験により実施する。競争試験については、意欲・能力のある職員を雇用するため、国立大学法人等職員統一採用試験を活用し計画的に実施し、選考試験については、競争試験採用者の観点に加え、さらに適正や専門性を問う試験を設け、厳正かつ公平な選考に基づく採用を実施する。

また、機構本部、各機関及び国立大学法人等と積極的に人事交流を行う。

人材育成においては、機構職員の養成と資質向上を主眼とし、研修プログラムの充実を図りながら法人主催の研修を計画的に実施する。

また、新規採用研修など他法人と共通した研修については、連携して実施する。

【実績】

採用：2015年度新規1名、2016年度新規2名を決定。

国立大学法人との人事交流：東京大学から1名を受入。

研修：業務遂行能力向上に資する45件の研修に職員を参加させた。

2. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

効率的なサービス提供が見込まれる業務について外部委託を行うなど、事務の合理化を図るとともに、共同研究支援体制を整備する。

【実績】

施設管理業務、ネットワーク管理業務について引き続き専門業者に外部委託を行うとともに、新たに研究図書室所蔵の図書原簿情報のデータ化について外部委託を行い、事務の合理化を図った。また、研究所の一般社会への広報・連携にかかる業務を集約・強化すべく広報室を設置するとともに、国際連携室及びIR推進室の設置準備を行った。さらに、第3期中期目標期間において共同研究プロジェクトを効率的・効果的に実施するための基本的事項を協議するため、第3期中期目標期間プロジェクト準備会議を設置した。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した。

組織運営の改善に関しては、外部有識者等の意見を聴いて機関拠点型基幹研究プロジェクトの実施体制を確立するとともに、文法解析コーパスについて米国・英国の大学との連携協定の締結準備を進めた点に、当初計画を上回る成果が認められる。さらに、所長裁量経費として相当額の予算を計上し、フィージビリティスタディ型共同研究と研究成果刊行を助成したのも、トップのリーダーシップによる業務運営の改善として、好ましい成果である。

事務等の効率化・合理化に関しては、広報室を設置したこと、国際連携室およびIR推進室の設置準備を行ったことが、当初計画を越える具体的成果と認められる。

Ⅲ. 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部研究資金の募集状況等をウェブサイトや電子メールなど複数の方法により周知するとともに、科学研究費助成事業への申請、各種ルール等についての説明会の実施等により競争的研究資金の積極的獲得に努める。

【実績】

継続して外部研究資金の公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、電子メールで周知している。また、科学研究費助成事業については、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う科研費申請準備会議(平成27年10月20日、21日)の実施し、科学研究費の獲得に努め、平成26年度比で新規申請件数が7件、新規採択件数が5件増加した。

2. 経費の抑制に関する目標

【計画】

(1) 人件費の抑制：

教育研究の質の維持・向上に配慮しつつ、適切な人員配置等により、人件費の抑制を図る。

【実績】

職員の勤務時間の把握・管理及び定時退勤日の周知の徹底によって超過勤務の削減を図り、人件費の抑制につとめた。

【計画】

(2) 管理的経費の抑制：

中期計画に掲げる管理的経費の抑制を着実に推進するため、一般管理費については、21年度決算額を基準として、特殊な要因を除き概ね6%の経費を抑制する。このため、以下に掲げる取組等を進める。

- 1) 支出契約については、費用対効果の見極めや必要に応じた仕様書内容の見直しを行う。
- 2) 教職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図り、省エネ機器の導入などによる経費の抑制に努める。
- 3) 施設・設備の運転状況・点検結果などから、老朽化状況を的確に把握し、プリメンテナンスや老朽化した設備の更新など、整備計画を見直し、最適な維持管理を行い修繕経費の抑制に努める。

【実績】

- 1) 複数年契約を実施している契約（警備、清掃、設備管理等）について、仕様等の見直しを行った。
- 2) 研究所内各所（事務室内、廊下やエレベータ前、トイレ）に、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図り、所内のテラスにグリーンカーテンを設置等した結果、電気料金が対前年度 1,556 千円削減した。（電気代：26年度 21,099 千円、27年度 19,543 千円）
- 3) 定期的な施設・設備の点検結果報及び日常的な研究所内外の施設点検等により、計画的な維持管理を行い、適切な予防保全に努めた。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画を上回って実施した。

科学研究費申請のための準備会議を設定し、計画的に科学研究費の獲得に努めた結果、申請件数が 7 件、新規採択件数が 5 件増加した。このことは計画的活動の成果であり、高く評価したい。

IV. 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

平成26年度に運営会議（内部委員6名、外部委員8名）、外部評価委員会（外部委員8名）からの意見を反映させて決定した6件の第3期共同研究計画案に基づき、機関拠点型基幹研究プロジェクト全体の計画・実施体制を策定し、それに伴う研究組織の改編を決定した。また、第2期中期目標・中期計画期間及び平成27年度の実績について、各プロジェクトリーダーが作成した自己点検報告書をもとに、所内の自己点検・評価委員会において自己点検・評価を行った。さらに、外部評価委員会において、所内の自己点検・評価の妥当性について審議した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、年度毎にウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究成果等を発信する刊行物として『国立国語研究所論集』（年2回）『国語研プロジェクトレビュー』（年3回）を定期的に発行するとともに、一般公開イベント「ニホンゴ探検 2015」（平成27年7月18日、国立国語研究所）や講演会「第9回 NINJAL フォーラム ここまで進んだ！ここまで分かった！国立国語研究所の日本語研究」（平成28年3月5日、一橋大学一橋講堂）等を開催し、研究成果を発信した。また、上記「ニホンゴ探検 2015」で行われたミニ講義を撮影・編集した動画や、危機方言・言語研究をテーマとした動画を新たにウェブで公開した。
- ・メールマガジン（月2回）を配信し、国語研が開催するシンポジウム、講演会や講習会、データベース公開等の情報について発信した。また、Youtubeに開設した研究所のチャンネルを通じた動画配信も行った。
- ・日本語研究英文ハンドブックシリーズを3巻刊行するとともに、国語研日本語ウェブコーパスを完成させた。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した。

概ね、所期の目標を達成するための措置が取られている。

V. その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 施設整備計画に基づき、研究施設等の適切な維持・管理に努める。
- 2) 日常管理の基となる管理標準を整備し効率的な運用を行うとともに、省エネ機器等の整備を行い省エネを推進する。
- 3) 施設設備の使用状況の点検評価を行い、施設の有効活用に努める。

【実績】

- 1) 各設備等について、法令等に基づく点検等を行うと共に設備保全業務、警備業務、昇降機保守点検業務等を外部委託し、施設の適正な維持・管理に努めた。
- 2) 省エネの意識啓発のため、事務室内、廊下やエレベータ前、トイレ等に掲示物を貼付した。
また、省エネのため人感センサーを設置した。
- 3) 第3期中期目標期間における共同研究プロジェクトを効果的に推進するために、既存研究室等の見直しを実施した。また、引き続き、グループウェアから施設予約を活用し、共同利用スペースの有効活用を図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 「機構における危機管理体制」に基づき、安全で快適な職場環境の維持・確保に努める。
また、本機構及び外部機関の主催する危機管理に関する研修会等へ職員を参加させる。
- 2) 労働安全衛生法等を踏まえ、安全衛生環境整備及び防災対策等の対応を実施する。
また、職員等の安全確保や防災意識の向上のため、防災訓練等を実施する。
定期健康診断やストレスチェックの実施及び産業医等の協力を得て、職員の安全と健康の確保に努める。
- 3) 職員に対し、情報セキュリティに関する講習会を開催し、職員の情報セキュリティに対する知識向上を図る。

【実績】

- 1) 所内でハラスメント研修を開催し、職員の意識啓発を促した（平成28年3月9日、参加者42名）。また、国立大学協会主催の関東・甲信越地区国立大学法人等安全管理協議会に職員を参加させた（平成27年10月2日、参加者1名）。
- 2) 産業医と衛生管理者による巡視を定期的実施し、安全衛生環境整備に努めた。また、「東京都・立川市合同総合防災訓練」（平成27年9月1日、参加者4名）に職員を参加させたほか、職員の防災意識の向上を図るため、「立川防災館」において火災や地震発生時に取るべき行動や人命救助の方法について学ぶ体験学習に職員を参加させた（平成27年12月1日,2日、参加者68名）。さらに、職員の健康診断受診を職員に促し、診断結果の写を提出させ職員の健康確保に努める他、教職員の健康管理に資するため、料金の一部を機関が負担し、インフルエンザ予防接種の実施とストレスチェックの実施に向けて「ストレスチェック実施規程」を整備した。

3) 職員の情報セキュリティに対する基本的な知識の習得を目的とした情報セキュリティ講習会を開催した(平成27年12月15日, 参加者79名)。

3. 適正な法人運営に関する目標

【計画】

国立大学法人法その他関係法令及び本機構の諸規程に基づき, 適正な業務運営を行うため, 法令遵守等に関する研修を実施し意識啓発を行う。

また, 科研費説明会等を開催し, 各種ルールの周知徹底を日常的に実施する。

特に研究活動及び科研費に係るコンプライアンス研修を開催し, 不正行為の防止に努める。

【実績】

不正行為の防止のため, 公的研究費の不正防止に関わるコンプライアンス研修会(平成28年3月1日, 94名参加を開催するとともに, 研究倫理教育(86名受講)を実施した。さらに, 平成27年度から新たに「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を実施し, 倫理的・社会的観点から研究活動の適正化を図った。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した。

施設の活用や安全の確保は, 一事業所の努力のみでは達成できない部分が多い。近年, 自然災害が頻発するなかで, このことが痛感されている。その際, 施設が立地する地域全体における総合的な対策, 対応が訴求されるようになった。このことから, 国立国語研究所にあっては是非とも, 立川地区の多様な機関・施設に呼びかけて, 防災, 緊急対応, 備蓄などの対策に積極的に乗りだしていただきたい。このためには, 地元自治体や地域コミュニティとの連携を図ることが必要であろう。

【総合評価】

本年度の「外部委員評価」は, 結果として「自己点検評価」よりも高い評価を与えている。しかしながら, 業務運営についての更なる改善を求めていることには変わらない。一般的にはわが国にあって, 研究機関の外部からの評価結果が十分の緊張感をもって受けとられないことが多いのに鑑み, そうした組織風土の是正に向けて舵を切っていただくことを切望する。

なお, 大学共同利用機関法人としての性格に鑑みると, 共同研究の推進とともに, 共同利用の基盤整備等共同利用の推進が大きな課題になる。この点に関するこれまでの意欲的な取り組みと成果は高く評価されるが, 今後も継続して, 関係機関の反応・評価・意見を徴することに努め, 確信を持ってこの事業が進められるよう図ってほしい。

取りまとめ担当: 樺山 紘一
林 史典

第二期中期目標期間（最終年度）の評価を終えて

外部評価委員会委員長 樺山紘一

国立国語研究所が、人間文化研究機構の一員として、今回その中期計画の第二期を終了するにあたり、外部評価委員会の委員長を務めた者として、感慨深いものがあります。というのも、かつて文化庁に直属する国立研究機関であった同研究所が、装いも新たに現在のステータスに転換するにあたっては、組織の内外における多様な問題を解決する必要がありました。そのプロセスをふくめてお手伝いをさせていただいて以来、関係者の皆さんの筆舌に尽くしがたいご苦勞を目撃してきたからです。誰もが善意であったことは否定できないにしても、経緯や背景の異なる諸部署が、体制の方向転換をなしとげる際の軋みは、想像を超えるものがあつたように見受けられました。

幸いにも、影山所長をはじめとする所員・職員の皆さんの努力によって、困難は克服され、ここに中期計画の第二期が無事に終了をむかえました。その成果についての評価は、当報告が詳細に語る所です。

私事を語って甚だ恐縮ですが、わたしは国語・日本語研究に関してはまったくの素人で門外漢にすぎません。ヨーロッパ史を専門とする歴史家なのですが、かねて人文科学研究者として、言語研究に関心を怠いてきました。ことにヨーロッパでその地の研究者と対話するときに、それぞれの言語・国語に関する研究と組織についての関与のさまに、強い感動を受けました。言語が国民文化の根底にあることは、いまさら強調するまでもないでしょう。わが国にあつても、今後の言語研究の深化によって、人間文化研究一般のよりいっそうの展開と、国民文化の豊かさの実現が進むことを願ってやみません。それを推進する主体のひとつとして、必ずや国立国語研究所が大きな貢献をはたすであろうと確信しています。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 樺山 紘一 印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長
専門：フランス中世史
- 林 史典 聖徳大学言語文化研究所長，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長
専門：日本語史
- 仁科 喜久子 東京工業大学名誉教授
専門：日本語教育，コーパス言語学
- 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授，日本語教育学会副会長
専門：日本語教育
- 後藤 斉 東北大学大学院文学研究科教授
専門：コーパス言語学
- 渋谷 勝己 大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員
専門：日本語方言
- 早津 恵美子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授
専門：日本語文法，意味論
- 峰岸 真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
専門：東南アジア言語学

任期：平成26年10月1日～平成28年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所平成 27 年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成 27 年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成 27 年度の計画及びその実施状況が記入された「27 年度業務の実績報告書」（「研究系・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証した。

「研究系・センターの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

	点検項目	観 点
研究	共同研究の推進	・当該年度の目標はどの程度達成されたか。
	研究実施体制	・共同研究員の適切な配置など、研究組織が工夫されているか。 ・プロジェクトリーダーのリーダーシップのもとに研究が実施されているか。 ・経費が適切かつ有効に活用されているか。
	共同利用の推進	・研究データの整理・蓄積・公開が適切に行われているか。 ・研究会等が適切に開催されているか。また、共同研究員以外の研究者へ研究参加の機会が開かれているか。
	国際化	・海外の研究者や研究機関との連携が行われているか。 ・海外への研究成果の公表が行われているか。
	研究成果の発信と社会貢献	・プロジェクトの HP を開設するなど、研究成果の発信を積極的に行っているか。 ・研究成果が学術雑誌、学界等に公開され、研究水準が国内外において評価されているか。 ・研究成果を社会貢献に結びつけているか。
教育	大学院教育への協力	
	若手研究者育成	・若手研究者のプロジェクトへの参加など、若手研究者の育成に工夫がなされているか。

※「点検項目」は、第Ⅱ期中期目標・中期計画の「研究機構の教育研究等の質の向上に関する目標」に基づく。「観点」は、それを実施するために必要と思われる事項を自己点検・評価委員会が検討し、定めたものである。

基幹型共同研究プロジェクト一覧

研究系 センター	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・構造	日本語レキシコンの音韻特性	語彙の音韻特性	窪菌晴夫
	日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	日本語レキシコン	影山太郎
	文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	文字と社会言語学	横山詔一
	日本語レキシコン—連濁事典の編纂	連濁事典	Timothy J. VANCE
時空間変異	消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	危機方言	木部暢子
	方言の形成過程解明のための全国方言調査	方言分布	大西拓一郎
	多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	現代日本語の動態	相澤正夫
	日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	大規模経年調査	井上史雄
	日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	日本語疑問文	金水 敏
言語資源	コーパスアノテーションの基礎研究	アノテーション	前川喜久雄
	通時コーパスの設計	通時コーパス	田中牧郎
	コーパス日本語学の創成	コーパス日本語学	前川喜久雄
言語対照	日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史学的研究	東北アジア言語地域	John B. WHITMAN
	述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	述語構造	Prashant PARDESHI
日本語教育	多文化共生社会における日本語教育研究	多文化共生	迫田久美子
	コミュニケーションのための言語と教育の研究	コミュニケーション	野田尚史

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日
国語研規程第7号
改正 平成28年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程(国語研規程第1号)第15条の規定に基づき、国立国語研究所(以下「研究所」という。)外部評価委員会(以下「委員会」という。)の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うも

のとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

国立国語研究所 平成 27 年度外部評価委員会（第 2 回）

日 時：平成 28 年 1 月 14 日（金）10：00～12：00

場 所：FUKURACIA 東京ステーション

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 第二期中期目標・中期計画期間の研究業績について
3. その他（報告）

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員会名簿
2. 前回議事概要（案）
3. 第二期基幹型共同研究プロジェクト評価書
4. 国立国語研究所自己点検評価委員会評価集計表等

国立国語研究所 平成 28 年度外部評価委員会（第 1 回）

日 時：平成 28 年 7 月 21 日（木）15:00～17:00

場 所：ステーションコンファレンス東京 会議室 602-C

議 事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 27 年度業務の実績に関する評価結果の確認について
3. その他

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿
2. 前回議事概要（案）
3. 第 2 期中期計画期間基幹型共同研究プロジェクト評価結果一覧
4. 国立国語研究所平成 27 年度業務の実績に関する評価の実施について
5. 平成 27 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果（案）
6. 平成 27 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果（案）
7. 第 2 期中期計画期間評価シート
8. 外部評価委員間の議論及びコメント

国立国語研究所 年報 2015年度

2016年12月20日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

TEL：042-540-4300 FAX：042-540-4333

<http://www.ninjal.ac.jp/>

